

家の長生

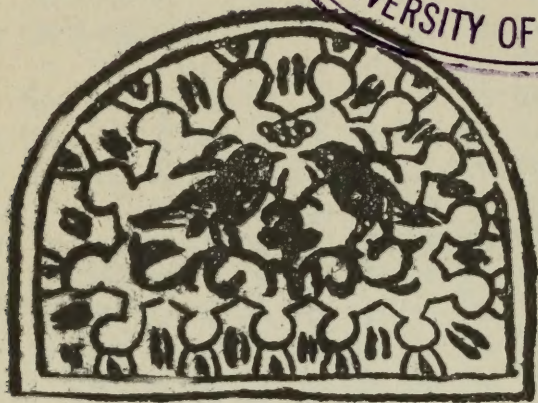




Presented to the
LIBRARY *of the*
UNIVERSITY OF TORONTO

by
Mr. E. Tamaki

CHENG YU TUNG
EAST ASIAN LIBRARY
UNIVERSITY OF TORONTO LIBRARY
130 St. George Street
3th FLOOR
TORONTO, CANADA M5S 1A5



集全典聖家の長生

相實の命生

卷二第

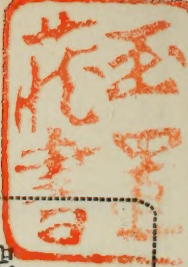
篇命生・篇明光

行發會及普想思明光京東

一人の生命が全體の生命のために生命を投げ出したとき、その生命は、全體の生命と一つになる。ひとりの生命がはなれ離れに動き出さうとするときには、色いろの衝突や摩擦が起るが、全體の生命とひとつになつて、宇宙と一しよに動き出すならどこにも吾々の活動に無理はおこらない。

吾々が各個人離ればなれに動き出すのは、たとへば、時計の針が針の力ばかりで動き出さうとするにも等しい。そこには無理があり摩擦があり、ひよつとすればその時計の針が折れるかも知れないのである。

しかし時計が全體の力で動いてゐるときは實に小さなバネの力で長時間滑かにそれは運轉をつゞけるのである。全體と一緒に動く生活、全體の力で生きる生活、自分だけの力で生きない生活、「我」で生きない生活、捨てたときおのづから生きてくる生活、これならいつまでたつても行きつまる氣遣ひはない。これが「生長の家」の生活である。(月刊「生長の家」第一輯第四號の巻頭言より)



「生命の實相」第二卷 目次

聖典讀誦の功德(はしがき).....四

『七つの燈臺の點燈者』の神示.....一

光明篇 生命に到る道.....一

第一章 一切の宗教を生かす「生長の家」三 第三章 生長の家とは何であるか.....七

第二章 「生長の家」は日本精神の源泉.....三 第四章 「生長の家」は何を信ずるか.....六

生命篇 生命圓相の眞理.....一

第一章 果して物質的治療は病氣を征服し得たか.....八

第二章 生きる力の神祕.....一三 第八章 祖國愛は神の道.....三三

第三章 心の平和に到達する眞理.....一七 第九章 愛の神による運命の修正.....三五

第四章 「生命」は愛と智慧とによつて生く.....一三 第十章 生命磁氣を語る.....三七

第五章 思念の力.....一七 第十一章 現代醫學を語る.....三一

第六章 人間は「肉體」でない話.....一七 第十二章 死線を越えた實話.....三六

第十三章 「無」の經濟と「無」の醫學.....四〇

聖典讀誦の功德(はしがき)

阿含經に「世尊問うて曰く「諸々の比丘、さきに何等を説き、何事を以ての故に集坐して此處に在るや」。時に諸々の比丘答へて曰く「世尊、さきには説法せり、此の法事を以て集坐して此處に在るなり」。世尊歎じてのたまはく「善い哉、善い哉、比丘よ。集坐には二事を行ずべし。一に曰く説法、二に曰く默然なり……」と書いてある。

「法事をする」と云へば僧侶を招んで御經を捧讀みにあげて貰ふことだと思つてゐる人があるが、此の阿含經で見ると、集坐して「法」即ち眞理を語り合ふことを法事と云ふのである。御經をあげるものが何故「法事」であるかと云ふと、御經とは釋迦とその弟子たちが集坐して「法」即ち眞理を語つた問答の記録であるからである。眞理の問答の記録を祖先靈の前で讀み上げれば、その聽者たる祖靈は坐ながらにして釋迦在世中の集坐の中にある思ひがして、眞理を一層深く悟ることが出来るから功德になるのである。だから御經は聽者に意味の判らないやうな漢譯の棒讀では功德も淡い。御經の訓讀みでも普通程度の學力では意味不明の點が多く功德も從つて少いのである。だから現代人に功德最も大いなる御經は、梵文や漢譯のお經の棒讀みや翻譯ではなく、現代に現れた世尊が現代人に直接説かれた説法の記録でなければならぬのである。此の意味に於て「生命の實相」の讀誦が不思議な功德をあらはすのは當然であらう。

集坐とは今で云へば座談會のことである。一つに説法、二に默然と釋迦は云つた。默然とは靜

座して神想觀して默想する事である。生長の家本部及び支部の座談會はこの二つを兼ねてゐる。聖典讀誦の功德はたゞに病氣治癒ばかりではないらしい。講演旅行中各地の誌友に外傷的災害が起るべくして起らずに濟んだ實例が實に夥しいのに感心した。盛岡では誌友細川氏令息が自動車で疾走中汽車と衝突して自動車諸共ハネ飛ばされ、運轉手は惨死したが細川氏子息は微傷だも負はなかつた。東京では誌友谷水正己氏が東京市郊外を時速廿五哩で自動車疾走中、突然横合から飛び出して來た四歳位の小兒を撥ね飛ばしたが、小兒を抱き起して見ると身に微傷だも負つてゐなかつた。又五十嵐千年氏は自轉車で通行中自動車で追突されてタイヤがパンクしたがこれ又微傷も負はなかつた。七尾では七尾セメント工場長が自動車で疾走中汽車と衝突し、運轉手は即死したが、工場長は無事であつた。同氏は生長の家誌友でないのにこの奇蹟があつたのは不思議だと抗辯する人があつたが「イヤ誌友です」と駁論する人があり、調べて見ると聖典「生命の實相」の講讀者であることが判明したのである。また七尾町の生長の家誌友木下氏の子息は二階よりコンクリートの土間に墜落したが身に微傷もなく、神様の御手で受け支へられたとしか考へられないとは七尾町民一般の評判であつた。近頃また東京にて數人自動車に觸れても傷付かなかつた。眞理に觸れ正しく神に結び付くものは、生命が本當の自由を得て如何なる災難も道を開いて避け得られるのではなからうか。

七つの燈臺の點燈者の神示

わが第一の神殿は既に成れり。名付けて「生命の實相」と云ふ。完成の年になりてわが第一の神殿が完成するの生命の顯現には周期的波動があるからである。七つが事物の顯現の周期律になつてゐる。われに神殿は不要であると嘗て示したことがあらう。われは道であるから、わが道を語るところに吾が神殿は築かれる、わが道を載せた「生命の實相」こそわが神殿である。「生命の實相」はわが本體であり、無形の「生命の實相」を形にあらはしたのが「生命の實相」の本體である。「言葉」を載せた書物を「本」と云ふのも、「言葉」こそ事物の本であり、本質であり、本體であり、本物であるからである。「言葉の宇宙」が先づ出來て、「形の宇宙」がその映像としてあらはれるのである。今迄の宇宙は「言葉」が實相を語らず、不調和で濁つてゐたから、宇宙の萬物の運行が亂れて生活苦や病氣や、天災や戦争など色いろ不調和なことばかり起つたのである。「生命の實相」の本が出た以上は、言葉が實相を語り、善き圓滿な調和した言葉の「本」が調うたのであるから今後何事も急轉直下する。「生命の實相」を開くだけで病念は去り、煩悶は解決し、人々各自の生命の實相を知り、歡喜踴躍して手の舞ひ足の踏む所を知らないに至る位はその三番叟に過ぎない。その歡びの相こそ人間の生命の實相である。吾が道を「生命の實相」と呼ばしめ、それを本の形にして、披いて讀むものにさせたのも象徴的因縁あることである。

「生命の實相」が展開けば形の理想世界が成就するのである。今は過渡時代であるから、假相の自壊作用として色々の出来事が突發する。日支の戦ひはその序幕である。神が戦ひをさせてゐるのではない。迷ひと迷ひと相搏つて自壊するのだ。まだ、烈しいことが今後起るであらう共それは迷ひのケミカライゼーションであるから生命の實相をしつかり握つて神に委せてゐるものは何も恐るゝ所はない。(昭和七年一月十一日神示)

○

われに姿かたちあるやうに云ふものあれどわれは姿なきものである。われは道である、われは靈性である、智慧である、愛である、生命である、われは如來である、われは一つにして多である。信仰深き諸方の靈覺者にわが神姿を示したることあれども、それはわが眞の姿に非ず、見えたる神姿は靈覺者の心識の所現にも非ず。それは、われ神通力によつて、疑ふ者の蒙を啓かんがために、異なる場所と異なる人と同じき一定の神姿を示して、神の客觀的存在を實證したに過ぎない。されど、本來われに一定の神姿はない。如何なる姿も欲ひのまゝに現することが自由である。されば、嘗てわれ汝に告げたのである「われに神殿は不要である」と。われは神殿がないとて身の入れ場所に困るやうな神ではない。供へ物も要らぬ。わが姿を見んと欲ふものは「生長の家」を讀め。われは言葉である。わが言葉を盛る雜誌こそわが神殿である。この雜誌がひろがるのこそわが神殿の大きくなることである。

われにすがた形はない。われは靈の海である。大海原である。すべての宗教流れ來りて吾れに入らん。吾れは完成する者である。われは「七つの燈臺」に燈を點する者である。古道も、佛教も、キリスト教も、天理教も、金光教も、黒住教も、大本教も、すべての教へ我に流れ入りて生命を得ん。われは大なるものなるかな。すべての教へを吞吐してこれに生命を與へ、すべての相争ふ教へをその眞髓に於て握手せしめる。吾れはすべてを包容し、すべてに光を與へ、すべてに榮養を與へ、すべてを生かす地下水である。他の如何なる宗教をも誹らず批たず常に讃頌と、善き言葉とを雨らして、それを淨めその眞髓に燈を點する、あらゆる宗教がその眞髓を禮拜して手をつなぐやうにならねば此の現實世界の改造は完成せぬ。精神界が先きで現實界はその影である。元亂れて影完たからず、宗教家よ、宗派争ひをしてゐる時ではない。(昭和六年四月五日、神示)

吾が臨れるは物のためではない、生命のためである。肉のためではない、靈のためである。これを覺るものは少い。物の生滅に心を捉へられ、物が殖えたときに信仰を高め、物が減つたときに信仰を失ひ、身體が健康になつたときに神を讚へ、家族の誰かに病氣が起つたと云つては信仰を失ふが如きは、神を信じてゐるのではなく物を信じてゐるのである。物は結局移り變るものであるから、物の御利益の上に建てられた信仰は、物の移り變りによつて壞れるのである。神が病氣を治して見せるのは、肉體は心でどうにでも移り變らせることが出來ると云ふ事實を見せて、

「體」は念の影だと云ふ眞理をさとらせるためである。念の影だと云ふ「體」とは肉體ばかりのことではない。幽體も靈體もすべて念の影である。「死は無い」と云ふのは肉體のことではない。現に肉體細胞は刻々死滅し流轉してゐる。生き通しであるのは、斯くならしめてゐる「生命」のみである。「生命」のみが吾れであり汝であり、そのほかに吾れも汝もないのである。此の「生命」をみたると云ふ。みたまの形は珠のやうに眞ん圓いからみたまと云ふやうに解するものもあれども、眞ん圓いのは形のことではない。神は本來形無く、空のうちに圓滿具足して自由自在であるから假りに稱して圓相と云ふのである。自由自在なるが故に或時は龍神の姿を現じ、また或時は衣冠束帶の姿を現じ、或る時は天使天童の姿を現ずる。いづれの姿も權化であつて偽ではない。しかし一つの形に執して、そのみを吾れであると思ふものは、吾が眞實を知らざるものである。吾が全相を知らざるものである。汝ら心して眞を知れ。汝たちも神の子であるから我れと同じきものである。肉體は汝の一つの現れであつて汝の全相ではないのである。(昭和七年四月十日、神示)

○
汝の肉體は汝の念絃の彈奏する曲譜である。生命が肉體に宿ると云ふのは二元的な考へ方であつて眞理ではない。正しく言へば生命はその念絃の彈ずる曲譜に従つて肉體を現はすのである。肉體と云ひ、複體と云ひ、幽體と云ひ、靈體と云ふはこれ悉く念の映像に過ぎない、汝の念譜の種類に従つて或は肉體を現じ、或は複體を現じ、或は幽體を現じ、或は靈體を現ずる。すべての

人はいつかは肉體を失ふであらうが死ぬのではない。人は神の子であるから不死である。念譜の形式が變るに従つて汝の假有の形式が變るのである。すべての人の假有は念の異なるに従つて、その顯現を異にする。念の形式に大變動を生ずれば、汝の假有は他界に顯現し、今迄の念の顯現た肉體は速かに自壞自消する。これを人々は死と呼ぶが死ではない。それは「生命」が念の絃をもつて一曲を弾じ終つてそれを止め、他の奏曲に移らんとするにも等しい。「生命」の弾ずる念の曲譜の形式に大變動を生ぜず、その念絃の律動にたゞ調和を缺きたるのみなるを病ひと云ふ、かくの如き病は、念絃の律動の調子を直せば治るのである。併し如何にその念絃の律動正しくとも初歩の一曲は必ず終つて一層高き形式の曲譜を學ばねばならない。吾が云ふ意味は、地上の生活は必ず終らねばならないと云ふことである。地上の生活は汝の初歩の一曲である。速かにこれを終るものは、初歩の教本を速かに終へたものである。一曲が終らんとするを悲むな。それはなほ高き一曲に進まんがためである。その前に調律者が來て汝の念絃の調子を正すであらう。この調律のために一時汝の假有は調子ならぬ調子を奏するであらう。此の世の一曲が終る前に肉體の調子が亂れたやうに見えるのは此の調律のためであつて眞に調子が亂れたのではない。汝がかくの如くして次第に高き曲譜に進み行け、一曲は終るとも弾き手は終るのではない、弾き手は神の子であつて不死であるぞ。(昭和六年六月二十六日、神示)

信仰生活とは無用意の生活ではない。すべてに於て完全に用意されてゐる生活である。凡そ信仰生活ほど完全に用意されてゐる生活はない。それは心が完全に用意されてゐるだけではなく、物質にも完全に用意されてゐる生活である。物質は心の影であるから心が完全に用意されてゐるとき物質も必要に応じて完全に與へられるのである。家庭は一つの有機體であるから、良人が明日の用意をしないときには妻が明日の用意をするやうになる。妻が明日の用意をしないときには良人が明日の用意をする。右の手が利かなくなつたら左の手が利くやうに成るのも同じことだ。それは自然の代償作用でさう成るやうに計らひがあるのである。それは有り難い自然の計らひであるから、夫婦互ひに感謝するが好い。信仰生活とは明日の用意をしない生活だと思つて、明日の用意をする配偶を信仰がないと思つて夫婦で争つてゐる信仰深い家庭があればともみんな誤つた信仰である。「明日のことを思ひ煩ふな」と云ふ意味は「明日の用意をするな」と云ふことではない。信仰生活とは冬が來てから綿入を縫へと云ふやうな生活ではない。秋から冬に要る綿入を縫うて置いて、それは「取越し苦勞」ではない。心が整へば秋から冬に要るものがちやんと判つて、自然法爾に其の要る物を用意したくなるのである。自然法爾と云ふものは外から自然に與へられることばかりではない、内から自然に催して來ることゝるの中にも自然法爾がある。心が亂れて病氣になつたとき心が調へばその病氣を治すに適當な食物が欲しくなるのも自然法爾である。野の鳥も卵を産む前に自然に巢を造りたくなる。卵を産む前に巢を造つても小鳥は取越し苦

勞をしてゐるのではない。「生長の家」の生活は物質に捉はれない生活だと云つても物質をきたながる生活ではない。金錢を穢いものゝやうに思つてそれを捨てねば氣が安まらぬやうな心も物質に捉はれてゐるのである。物質は影であるから綺麗も穢いもない。卵を産む前に小鳥が巢を造りたくなるやうに自然に用意したくなる時には内からの騒ぎに導かれて好い、心が調へばその心の展開として用意すべきものは適當の時に用意したくなる。すべて用意するものを信仰淺きものと思ふな。用意しないで取越し苦勞をしてゐる生活もあれば、取越し苦勞をしないで自然に用意してゐる生活もある。(昭和六年十二月五日、神示)

汝らのうち病める者あらば、吾が教への先達の許に來りて祈りを乞ひ神想觀の指導を頼め。吾が教への先達は吾がことばを受けたるものなれば、彼の言葉汝を癒やさん。心に省みて罪ありと思ふものは、教への先達に包むところなく懺悔すべし。吾が教へは「罪」の無を説く。本來「罪」なければ、懺悔も不要なりと思ふは過れり。「罪」は本來「暗」にして光にあふとき自滅すれども、包みて光に會はしめざるときは、暗はそのまゝ暗にして滅ぶるものには非ざるなり。罪の價は死なり。罪を包みて光に會はしめざる結果は死なり。世の人々よ、惡を包み隠すことなかれ。惡を包み隠すは、なほ惡に執着せるがためなり。罪の暴露を恐るゝはなほその罪に執着せるがためなり。「本來罪無し」の吾が教へを聽きて増上慢に陥ることなかれ。本來罪なしの眞理を知

るものが、何ぞ罪の暴露を恐れてそれを蔽ふことを敢てせんや。「罪は本来ないからこれで好い」と自らを偽ることなかれ。みづからを偽ることは罪の第一なり。それは、みづからを包み隠し、その本来相の顯現をさまたぐるが故なり。されどまた罪を一旦懺悔したる以上は、再びその罪に心を捉へられて、神の分心なる自己の心を苦しむることなかれ。罪は懺悔と共に消ゆるなり。暗は光の前に暴露さるゝと同時に消ゆるならずや、懺悔せざるものゝ罪は消えず、暴露されざる暗の消えざるは當然にあらずや、懺悔は密室にて行ふか、手紙に書いて教の先達に送りても宜し。されど暗の前に、いたづらに悪評する民衆の前に、罪を暴露しても何の効なし。暗に暗を照さしむるとも何の甲斐かあらん。人は一たび眞に懺悔するとき、その刹那よりその全存在は洗ひ浄められたると等しく、本来の神の子たる圓相をあらはす。眞に懺悔せる後は汝ら心安かれ。汝らは吾が眞子なればなり。吾れ汝らと一體なり。聖靈汝らに交通し、汝らの靈殖えて汝ら無限生命を得ん。

汝らのうち病める者あらば互ひに祈り合ふべし互ひに祈り合ふとき、吾が力汝らの上に来たらん。自己が癒やさるゝことを祈るはなほ自己の利害にとらはれてゐることあり、互ひに祈り合ふとき愛の心あらはれ、神の靈波そのまゝに汝らの上に感ずべし。病める人のために、その人を訪れて、祈り、且つ神想觀をなすべし、祈るとき、金を惜しむ心、金を欲しがらる心、いづれも神の靈波に波長の合はぬ迷ひの波動なりと知れ。

地方の信者たち互ひに團結して祈り合へ、家族同士互ひに祈り合ふべし。祈りて癒ゆるとも自己の力にあらず、神の力なり。本を忘るべからず、愛をつくし合ひ、敬虔を竭し合ひ、誠を竭し合ひ、神を敬すべし。この世界は光と迷ひの反影が交錯してあらはれてゐる映畫なれば、迷ひを一日も早く消すが世の苦難を濟ふ唯一の道なり。(昭和七年八月十二日、神示)

○

病んでゐると云ふ病は本來ない、苦しんでゐると云ふ苦しみは本來ない。「これだけ自分は苦しんでゐる」と、その苦しみを自慢にするやうな心は、却つて病氣を招く心である。キリストの受難に倣つて自分も亦苦しむなど云ふ心も愚な心である。キリストは神性であるから未だ嘗て一度も受難はない。十字架も受難ではなく受苦ではなく法樂である。神の子には「難」の受けやうがなく、「苦」の受けやうがなく任運無作、法爾自然、水の流るゝが如く、すべてが惟神の法樂である。斯くの如く悟るとき苦しみを自慢にする心も苦しみを厭ふ心もおのづから消え去つてしまひ、苦もなく、艱難もなく、苦樂を超越した本當の樂想を生じ、吾れが一變し、天地が一變し、人生はたゞ歡びの讚歌に満たされるのである。實相は苦樂を超越する法樂であつて、實相をもつて苦もなく樂もないと云ふのは謬見である。汝らが「樂」と稱する「樂」は本當の「樂」ではないから、「樂」を求むれば必ず苦を生ずるのである。五官のうち、感覺の惑はしのうちに「樂」があるとするのは謬見である。五官の「樂しみ」はその本性決して「樂」に非ざるが故に

「苦」に變ずるのである。實相はかくの如き假相の苦樂を超越すれども、眞相の「樂」そのものである。法悅そのものであり法樂そのものである。その「樂そのもの」が「常住の我」であつて、これが「神の子」である。「神の子」が「人間そのもの」であつて、その外に「人間」はない。人間とは常樂を云ひ、無病を云ひ、不苦を云ひ、不惱を云ひ、不壞を云ふ。肉體は「人間」ではない、人間の心の痕跡であり、足跡である。破壊すべきものは人間ではない。汝らよ、汝ら自身の不苦不惱不壞無病の實相を見よ。(昭和七年十一月十日、神示)

○
「生長の家」は奇蹟を見せるところではない。「生長の家」は奇蹟を無くするところである。人間が健康になるのが何が奇蹟であるか。人間は本來健康なのであるから、健康になるのは自然であつて奇蹟ではない。「生長の家」はすべての者に眞理を悟らしめ、異常現象を無くし、當り前の人間に人類を歸らしめ、當り前のまゝで其の儘で喜べる人間にならしめる處である。あらゆる人間の不幸は、當り前で喜べない爲めに起るものであることを知れ。當り前で喜べるやうになつたとき、その人の一切の不幸は拭いとられる。病氣もなければ、貧乏もない、また搾取された富もなければ、搾取した富もない。蹂躪られた弱者もなければ蹂躪つた强者もない。唯、一切が渾然として一切の者が富んでゐる。これが實相である。大いなる生命の流れが一切者に貫流し、とゞまらず、堰くところなく、豊かに流れて、ものゝ供給もおのづから無限である。一切のもの必

要に應じて流れ入ること、一つの大河の流れより水を汲みとれば、隣の水來りて其の虚を埋めるのと同じさまである。流通無限、貧に執せざるが故に貧とならず、富に執せざるが故に他を搾取せず、流通せざる固定の富なきが故に、みづから豊富なる供給の流れを受くれどもそれを占據せず、執着せず、來るに従つて拒まず、受けて更に價値を増して他を露ほす。自給自足など、は自他に捉はれた狭い考へである。自他は一つである。「生長の家」は自給他足、他給自足、循環してとゞまらず、大實在の無限流通の有様を見て、その有様の如く現實世界を生きるのが現實界の「生長の家」である。貧に執する聖者も、富に執する富者も「生長の家」人ではない。當り前の人間を自覺し、當り前に生きるのが「生長の家」の人である。「當り前の人間」が神の子である。皆な此の眞理を悟つた人が少い。「當り前の人間」のほかに「神の子」があるやうに思つて異常なものを感じるのは、太陽に背を向けて光を求めて走るに等しい。

皆の者よ、人間の生命の實相を悟つて病が治るのは、病念と云ふ異常現象が止んで、人間が本来の自然に歸るからである。異常現象はすべて病氣の一種である。貧しさも異常現象であるから、人間の心が自然に還ればなほるのである。異常現象のなかに神があると思ふな。そこには好奇を喜ぶ不自然な心があるばかりである。怒り、憎み、恐れ、嫉み、他を蹂躪つて打ち勝ちたい心——すべて是等は異常な心であるから病氣の因である。異常な心を去れば病氣も貧しさも治る、當り前の人間になることが大切である。當り前の人間のほかに神の子はない。

(昭和八年一月二十五日、神示より)

光
明
篇

生せい
命めい
に
到いた
る
道どう

生長の家七つの光明宣言

- 吾等は宗派を超越し、生命を禮拜し生命の法則に隨順して生活せんことを期す。
- 吾等は生命顯現の法則を無限生長の道なりと信じ個人に宿る生命も不死なりと信ず。
- 吾等は人類が無限生長の眞道を歩まんがために生命の創化の法則を研究發表す。
- 吾等は生命の糧は愛にして祈りと愛語と讚嘆とは愛を實現する言葉の創化力なりと信ず。
- 吾等は神の子として無限の可能性を内に包有し言葉の創化力を驅使して大自在の境に達し得ることを信ず。
- 吾等は善き言葉の創化力にて人類の運命を改善せんがために善き言葉の雑誌「生長の家」を發行す。
- 吾等は正しき人生觀と正しき生活法と正しき教育法と正しき社會改造とにより病苦その他的人生苦を克服すべき實際方法を指導し相愛協力の天國を地上に建設せんことを期す。

第一章 一切の宗教を生かす「生長の家」

會社へ行きながら「生長の家」誌を執筆せし頃の生長の家の出版部機上に於ける講演

今迄、宗教と云ふものは吾々の死んでから後のことを取扱ふものであつて若くて健康な状態である吾人には用のないものだと言ふ風に考へられ勝ちでありましたが、本當の宗教と云ふものは死んでからは用事のないものでありまして、死骸にお經をあげるなど、云ふことは本當の宗教家のすることではないのであります。親鸞聖人も「わしが死んだら川へ捨て、流してくれ」と云はれましたし、イエス・キリストも「死せる者に死せるものを葬らせよ」と斷乎として云はれたのであります。宗教家でも本當の悟りに達した人は、このやうに、宗教と云ふものは「死」を取扱ふものではない、「生」を取扱ふものだと言ふことをハッキリ云つてゐられるのであります。此の席にはお醫者さまもゐられますが、普通お醫者さまは吾々の「生命」を取扱ふものだと言ふことに公けに認められてゐるのであります。また本當のお醫者さまなら、吾々の「生命」を取扱はねばならないのであります。併し本當に吾々の「生命」を取扱つてくれるお醫者さまは名醫であります。その名醫が甚だ少いので困るのであります。第一、人間は醫專や醫科大學などを出たところが本當のお醫者さまになられるものではない。何故かと云ふと醫專や醫大では「生命」を直

接研究しないからであります。「生命とは何ぞや」とか「生命」が何處より來り、何處に到るか
 を研究するところまで現代の醫學は發達してゐないからであります。現代の醫學と云ふものは
 「生命」そのものを研究する處まで發達してゐないで、「生命とは何ぞや」を考へることは哲學の
 仕事になつてゐるのであります。哲學と云ふものは「生命とは何ぞや。それは、いづこより來り、
 何處へ到るか」と云ふ問題を思索によつて知らうとするのであります。これは頭の仕事、吾々の
 智性の仕事であります。宗教と云ふものは、頭だけでなしに、自分の生命そのものをもつて、直
 感によつて「生命」そのもの、本體を把握しようとするのであります。人間には「生命」が宿つ
 てゐる、人間は生きてゐる、この生きる力全體が吾々自分である。頭だけ、智慧だけ、智性だけ
 が人間ではない。哲學的に思索だけによつて「生命とは何ぞや」と云ふことを知らうとするのも
 結構ではあります。それだけでは知らうとする力そのものが人間の生命力の一部分にすぎない
 ので、本當に、否、百パーセント「生命」を知ることが出來ない。そこで、生命とは何ぞやと云
 ふことを百パーセントまで、その全體を知らうとするには、人間の一部分的な力「頭と云ふ力」
 でなしに、人間の全體をもつて「生命」を知らなければならぬのであります。

「生命」「生命」と云ひますと、何だか難かしい問題に聞えますが、「生命」とは「自分」のこと

であります。皆さんは生きてゐられる、生きてゐられるから「生命」と云ふのであります。「壽命」と云ふのは別であります。壽命と云ふのは「生命」が此の地上にあらはれてゐる期間の長さのことであります。そこで吾々は生きてゐるから吾々自身が「生命」であるのですから、「生命」のことは吾々自身が一番よく知つてゐる筈なのであります。

ところが、人間自身が生命でありながら、生命とは何だと云ふことが判らないのは一寸滑稽なのであります。そこで現代の多くの人は生命のことだとお醫者さまに駄げこんでみて貰ひ、死のことだと葬式屋と宗敎家に来て貰ふと云ふやうな習慣になつてゐるのであります。ところで醫者さんは生命を知つてゐるかと云ひますと、それはお醫者さんが何んなことをして人間を診るかと云ふことを調べればお醫者さんが「生命」を知つてゐるかどうかと云ふことが判るのであります。お醫者さんは人間をどうして診るかと言へば、脈搏を數へて見たり、聽診器で内臓の音を聽いて見たり、檢温器で體温を計つて見たりするのであります。またあるときにはレントゲンで透して見たり、解剖して見たりもする。さうすると、生命と云ふものは判るかと言ひますと一向判らないのであります。それは生命と云ふものが顯はしてゐる働きが、どんな形にあらはれてゐるかと言ふことを知るだけのものであつて、「何が、そんな形をあらはしてゐるか」と云ふことは判

らないのであります。一粒の朝顔の種子をとつて考へてみましても、その種子を割つて見ましても、顕微鏡で覗いて見ましても、その種子の中の細胞がどんなになつてゐるか云ふ構造はわかつても、どこに美しい赤や紫の花を開かす生命力があるかと云ふことは判らないのであります。それはその筈でありまして、肉體や種子の構造と云ふものは、生命そのものではなくて、生命すなはち生きる力が顯はした影なのであります。

形あるものはすべて、「生命」そのものが表はした影でありますから、形は調べて見ても「生命」そのものが判る筈はないのであります。舞臺に映つてゐる活動寫眞をいくら解剖して見ましても、誰が活動寫眞を映してゐるか云ふことは判らないのであります。誰が、何が、活動寫眞を映してゐるか云ふことを知るには、外に舞臺にあらはれてゐる影を追はずに、ぐるりとアベコペの方角を向くと、そこに活動寫眞の映寫技師が活動寫眞機械を装置してフィルムをクルクル廻してゐる。そこで「何ぢや、活動寫眞を映し出してゐたのはお前か」と云ふことになるのであります。樂屋にかくれて見えない所にゐて吾々の肉體と云ふ活動寫眞を映出してゐる目に見えない活動寫眞技師——これが吾々の「生命」でありまして、吾々の肉體と云ふものは、此の「生命」と云ふ活動寫眞技師が此の世に映し出した影の一つなのであります。この肉體が影だと云ふことが、ど

うも解りにくいと云ふ人が多いのでありますが、目に見える物はすべて、目に見えない力(即ち生命)があらはした影なのであります。朝顔の美しい花は、朝顔の種子の中にある「生命」と云ふ無形の活動寫眞技師が映し出した影なのであります。この無形の寫眞技師がなければ何も映らない。無形の寫眞技師さへあれば、形の世界にある一切のものを焼き盡してもまた此の世界には色々の生物が生れ出てくるのであります。ズツと以前には色々生物は自然の生命力で自然にわいて來るものだと思はれてゐた。所が、或る西洋の學者が、密閉した試験管内の液體を熱氣消毒して完全に試験管内の生物を殺してしまつた後、そこにはどんな生物も發生しなかつたと云つて、生物と云ふものは決して自然に湧いて出るものではない、必ず胞子とか種子とか、卵とか、目には見えなくとも、そのタネになるものがあつてこそ生物は生れてくるのだと云ふことを結論するに到つたのであります。かう云ふやうにして、生物學は「生命」のみ「生命」を産む、「生物」のみ「生物」を産むと云ふ結論を下したのであります。それは至極結構なことでありましたが、生物學者たちは「生命」とか「生物」とか云ふものは試験管内へ入れて熱氣消毒すれば破壊するところの一種特殊の物質であると考へてゐたのであります。生命とは物質だから高熱を加へれば破壊する、これが生物學者の結論であつたのであります。ところが天文學者の研究によりますと、

この地球と云ふものは嘗ては攝氏何千度何萬度と云ふ高熱の瓦斯體時代があつたので、それは試験管の中で熱氣消毒するほどの僅かの熱ではないから、あらゆる生物、あらゆる生命は完全に熱氣消毒されて無の状態になつてゐた時代があります。

しかし、このやうに完全に高熱度で生物全部を破壊してあつた時代、即ち、生物の無の時代を通過しましても、生物が依然として生れて今日の如き状態が現出して、生物がありすぎて就職難で困ると云ふやうな時代が到達したのでありますから、「生命は熱度で殺し得る一種特殊の物質であつて、その物質からのみ生物が生れて来る」と云ふ生物學者の結論は至極疑はしい自己撞着のものとなつて來たのであります。

攝氏何千度、何十萬度の高熱状態を通過しましても生命は依然として破壊しない。熱と云ふものは分子の激しい振動であつて、このやうな高熱に晒されたら、どんな物質でも、その分子の特殊の結合状態が破れて了ふのでありますから、生命と云ふものが、物質の特殊な結合状態から來るものだと云ふのならば、この高熱状態を通過した此の地上には生物はゐない筈でありますのに依然として生物はこの地上にゐるのであります。さうすると、どうしても生命と云ふものは物質の特殊な結合状態から來るのではなくて、生命は物質がどんな状態にあらうとも生きてゐるもの

だと云ふことが判るのであります。

かう云ふやうに肉體と云ふ特殊な物質の塊りがあつて生命と云ふ作用が發現したのではなく、「生命」と云ふ目に見えない不思議な實在があつて、その「生命」の産物として肉體が發生したと云ふことになるのであります。「生命」が元であつて肉體はその所造である。「生命」と云ふ活動寫眞技師があつて、肉體はその活動寫眞技師が寫し出した影だと云ふことになるのであります。今迄肉體があつての生命だと思ひ、肉體に物質的故障があつては生命が充分發現しないやうに思はれて、身體が病氣にでもなれば、肉體を物質的に外から藥を飲ませるとか手術するとか繕うはねばならぬやうに吾々は思つてゐたのであります。此の肉體と云ふものが、自分の生命と云ふ活動寫眞技師が内から寫し出してゐる活動寫眞だと云ふことが判れば、肉體が病氣になつたらとて、外から物質で修繕せねばならぬと云ふことはない。内をとゝのへる、肉體と云ふ活動寫眞を映し出すところの「内」の映畫技師がシツカリ落付いて、善い上等のフィルムを掛けることにすれば肉體と云ふ映畫は屹度立派な健康なものになるのであります。活動寫眞でも舞臺に映つてゐる病人の繪を直さうと思つてスクリーンを切つたり、スクリーンに膏藥を貼つたりしても治らないが、樂屋の方から健康の繪のあるフィルムを出してやれば治るのであります。この健康の

繪のあるフィルムを出すにはどうしたら好いかと云ひますと、正しい信仰を有つと云ふことであります。

信仰と云ふものと、身體の病氣と云ふものとは別物であるとも云はれてゐます。随分立派な信仰を有つてゐられる高德の宗教家が多病であつたりすることがあるからであります。現にこの御影の金光教會所の先生は長い間病氣であるさうであります。ある基督教會の先生の家庭では家族に病氣が絶えない。キリスト教でも有名な伊太利アツシジの聖者フランシスでも始終病氣をしてゐた。先日大雨の降り續いた時には、神戸夢野の大師へ詣つて祈願を籠めてゐる婆さんが山崩れがした爲にその下敷になつて死んだ。ずっと以前にも夢野の氷室稻荷で祈願を籠めてゐる最中に、入江三郎と云ふ精神病者がとび出して来て、その人を背後からバツサリ斬り殺してその人の肉の一部を牛乳につけてたべたなどと云ふことがあります。

かう云ふ實例を見ますと、信仰をしたとて、現世に利益のあるものではない、信仰と云ふものは死んでから救つて頂くためのものだと思ふ來世教の出現する根拠があるのですが、それは吾々が神さまなり、佛さまなりを信ずる、その信仰が、片寄つてゐるからなのであります。本當の神様が、本當の佛様と云ふものは、來世だけしか能う救はぬとか、肉體はよう救はぬ、魂だけしか

よう救はぬと云ふやうな制限のないものであります。また神様と云ふ方はゐられるにしても、途方もない高いところゐられて、とても吾々罪穢れの多いものを救つて頂けるものではないなどと思つてゐる。一寸かう云ふ考へは非常に神さまを尊んでゐるやうでありますが、本當には尊んではゐないのであります。第一此の世の中に神の救ひをさまたげるやうな罪穢と云ふやうなものが存在すると云ふ考へが神様に對する不敬なのであります。かう云ふ條件でなければ人間を救ふことが出来ない、あゝ云ふ條件でなければ人間を救ふことが出来ないなど、勝手に失禮にも神様なり佛様なりの力に制限をつけてゐる。それだから、さう云ふ信仰を有つてゐられる人は、自分の心が安心出来ない、これで神様は御立腹にはなつてゐないだらうか、この位の行で自分の罪穢は淨まつたであらうか、と云ふやうに不安である。不安であるからその不安が肉體と云ふ活動寫眞に映つて病氣やら色々の不幸になつて出るのであります。

私自身の體験から云ひましても、私も最初は神を信じてゐましても、本當の信仰ではなかつたのであります。神と云ふものは、兎もすれば人間に罰をあてるものだと思つて戦々兢兢としてゐた時代がありました。今に神の最後の審判の日が來ると思つて恐れ戦いてゐたのであります。その時代のあひだぢゆう私は不健康でありました。斷食をしたこともあれば百日の水行をしたこと

もありません。雨がふつても風が吹いても、或る河へ身體を淨めに行つたものであります。百日の水行を朝晩行つてゐると、もう風呂へ入る必要がなかつたので風呂へ行かずにゐましたが、百日の水行が済んで、百ヶ日目に珍らしく風呂に這入つて石鹼を使つたら、何だか寒気がして風邪をひいて了つた。神さまに喜ばれようと思つて行をしてその揚句の果に病氣になつて、こんな詰らないことではないのであります。

元來、人間は行をしなければ、水で身體を洗はなければ、淨まらないと云ふ風な窮屈な不完全なものに造られてはゐないのであります。また人間は神様がお造りになつたものでありますから、病氣になるやうに不完全には造られてゐないのであります。それから神は人間を罪を犯すやうに造つておき、その人間を罰すると云ふやうな矛盾はされないのであります。神さまのお造りになつた此の世界には罪もなければ、病氣もない。さう云ふ不完全な人間を神さまがお造りになつてゐると思ふのが迷ひであつたと云ふことがわかつて来て、今迄の信仰に革命が出来、この新しい信仰を發表するために生れましたのが、「生長の家」であります。この信仰に入るまでは随分家族中弱い身體でありまして、家内なども心臟膜病だと云つて醫者から不治の宣告を受けてゐたのであります。丁度それは一切の罪をなくすると云ふ見地からの無一物生活の時代でしたが、どこ

からともなく、毎晝食に料理屋から煮魚と刺身とを持って寄越して呉れる人があるのであります。料理屋で聞いてみましても誰だかわからないが、お金を拂つて持つて行つてあげて呉れと云ふ人があつたと云ふのであります。「それはどんな人だ」と訊くと、「よく肥えた人だ」と云ふ。どうも永く誰だかわからなかつたのであります。それは先刻御講話になつた今井先生が、江上と云ふ人にお金をことづけて吾々に榮養料理をひそかにお送りになつてゐられたのであります。以前かう云ふ不治症だつた家内が現在には正しい信仰に入つて元氣である。又十年ばかり前に、私が住吉の梅の木にゐましたときには生命保険に入れと云つて保険會社の勧誘員が勧めるから入らうと思つて診査醫に見て貰つたら保險會社の方で入れてやらんと云つて斷はられた。ところが、この「生長の家」の信仰に入りましてからは、その保險會社もとつて呉れないところの私の弱い身體から、不思議に精力が湧いて來て、隨分會社で長時間激務に服してゐて、自宅へ歸れば訪問者ともう待つてゐて十一時頃まで話して歸る、そして毎朝、會社へ出勤する迄に毎月「生長の家」と云ふ雑誌を一冊宛書くだけの餘裕が出來て來たのであります。

何故さう云ふやうに正しい信仰に入りましたならば肉體も健康になるかと云ひますと、此の現實世界と云ふものは吾々の信念のフィルムが造り出す活動寫眞でありますから、信念がかはれば、

肉體がかはるのであります。今迄、神と云ふものを信じてゐても、神と云ふものは怒るものだから、罰を當てるものであるとか思つてゐましたので、神の怒り、即ち神罰と云ふものが来るであらうと思ふから神罰はあると云ふ念がフィルムとなつて映る人生の活動寫眞が明るい健康なものになれないのであつたのであります。

「生長の家」の發見しました縦を貫く眞理は「人間は神の子である、神そのものである」と云ふ眞理であると好い具合に解説して下さつた誌友があります。これは佛教的に云へば人間は皆佛子であると云ふことであります。併し、佛子と云はうと、神の子と云はうと、佛とは何であるか、神とは何であるかと云ふ、その神なり佛なりの實相が判らなければ、神を信仰しながらも本當の幸福が得られないで、神さまを拜みながら崖がくづれて壓死したり以前の私自身のやうに、神さまを信じながら、家中に病氣が絶えないと云ふやうな現象を呈するのであります。昔、多勢の盲人が象を批評したと云ふ話があります。一人の盲人が象の耳に觸つて見て、象と云ふものは風呂敷のやうなものであると云つた。もう一人の盲人は象の脚にさはつて見て象と云ふものは四斗櫂のやうなものであつて決して風呂敷のやうなものではないと云つて争つた。どちらも間違ひではないが、象の全體を知るものではないのであります。神さまは象よりもまだく、大きいものであ

りますから兎角これを観るものは一面觀に陥りやすく、神さまと云ふものは風呂敷のやうなものだ、いや四斗樽のやうなものだと云つて争ひ勝ちになるのであります。いや、風呂敷だとか四斗樽だとかは云はないのでありますが、それに似た事を云つて争つてゐる。例へて云つて見れば阿彌陀さんと云ふ佛は空間的には十萬億土の彼方にゐるものであつて、時間的には吾々が死んでからでないで吾々を救ふ力がない、現世のことを願ふのは間違ひであると云ふ風に考へてゐる。これは人間的考へで、佛と云ふものを空間的に十萬億土の彼方へ、時間的には死後の世界へ押し込めてゐるのであります。ところが本當の佛と云ふものはそんなに時間にも空間にも限定されたものではない、佛とは「解ける」ことであつて、如何なる束縛をもホドいて了つて空間にも時間にも縛られないで自由自在であるからであります。基督教で説く神にしましても、普通のキリスト教では、人間はイエスを通じてのみ神の子となり、イエスを通じてのみ救はれると云ふやうに説くのであります、非常に結構な教のやうでありますが、これではイエスを通さなければ神は人間を救ふ力がないと云ふことになつて、神の救ひの力と云ふものに限定をおくことになるのであります。イエスを通さなければ神は人間を救ふ力がないやうであればイエスが此の世に生れ出たのは約二千年前でありますから、それ以前何十萬年何百萬年の間は神は人間を救ふことが出来な

つたと云ふ風に、神様の力に限定を置くことになるのであります。だいたい、本源の神様と云ふものは、かうでなければ救はれないとか、あゝでなければ救はれないとか、そのお力に或る制限のある筈はないのであります。本源の神様、佛さまにはお力に何らの制限がない、制限がないから神様、佛様と云へるのであります。菅原道真公の靈魂とか、伏見の末社に祀つてある何々明神とか云ふのは神として祀つてありましてこれは靈魂なのであつて、こゝに云ふ本源の神ではないのであります。そこで、本源の神様なり佛様なりにはお力に何らの制限がないのに制限があるやうに思つてゐる、それは、神様を知つたつもりの人が、神様の全面に觸れないで一面にだけ觸れてゐるからであります。それは丁度多勢の盲が象を評して、象とは風呂敷のやうなものだと云ひ、象とは四斗樽のやうなものだと云つてゐるのと同じことでもあります。象はその耳に觸れる人には風呂敷のやうでもあり、脚に觸れる人には四斗樽のやうでもあり、そしてこのいづれもが本當であります、その奥に風呂敷以上の四斗樽以上の無限の働きをする生きた全體の象のあることを知らねばなりません。さうでないとな象が浮ばれないのであります。それと同じく、本源の神さまは死後の救ひだけの一面に觸れる人には阿彌陀佛のやうでもあり、肉體基督を仲だちにして神に救はれる人には二千年以前イエス出現以前の人間は救はずに放つておいた杜漏な神様の様で

もありますが、その奥に何ら少しもそのやうな制限を附せられてゐない生きた全體の神様のあることを認めなければ神様全體を生かすことにはならないのであります。「生長の家」では神様の此の全體を認め、全體を生かすのであります。阿彌陀佛の奥に、キリストの神の奥に、今迄解されてゐたやうな一切の束縛限定のない一つの神、高天原神即ち生長の家の神を認めるのであります。「生長の家」は最初人間を生かす積りで出現したのであります。つひに、神様全體を生かすことになつたのであります。それは、その筈でありまして、人間は神の子であるからであります。神様全體を生きたその全相において觸れないでゐて神様の子である吾々自身が生きて來る筈はないのです。だから、私でも、長い間神さまを信じながら不健康であつた。不幸福であつた。神信心をしてゐるが、不幸である、病氣に始終罹つてゐると云ふやうな私の信仰は屹度、神さまの一面だけを認めてゐて、神さまの無限自由な全相に觸れてゐない——信仰が片寄つてゐたのであります。此の私の女の兒も家の主人たる私が不完全な片寄つた信仰を持つてゐる間は常に不健康で、始終醫者にかけたり、太陽燈にかけたりしてゐましたが「生長の家」を始めるやうになつてからは醫者が病人を診る醫者としては一步も私の門内に入らなくなつたのであります。今こゝにお醫者様が二人お見えになつてゐられましても、それは病人を見る爲に來てゐられたのではなく

て、生命を見るために来てをられるのであります。かう云ふお医者さんは非常に結構でありまして、生命を見る医者だけが、生命を生かし、病氣を見る医者は病氣を生かすことになるのであります。病氣を見て、一言お前は不治症だと云へば、病氣が生きて人間が死んでしまふのであります。言葉の力によつて認めるものだけが存在に入ると云ふのが「生長の家」の發見した眞理なのであります。近頃次第にお医者さままで「生長の家」に入つてこの眞理に目醒めた方が出來て來たことは非常に人類にとつて幸福なことだと存じてゐます。東京澁谷の鹽谷信男博士は生長の家の説の眞理に共鳴して無藥療法を施してゐられる。随分治るので受診者が餘り多いので往診を大抵斷つて自宅でのみ診療に従事してゐられる。廣島縣糸崎の赤十字病院の院長高龜博士は全然無藥ではないが人間の病氣は藥三分精神七分で治るので云ふので、更生週間と云ふものを定めて入院患者に或る一定の週間、宗教家を招いて精神修養の話をきかせることによつて、その治療の成績を擧げてゐられる。「生長の家」の所説に九分まで共鳴せられてあと一分の疑義をもつてゐられて自分の機關雜誌で反駁文を書かれたが、私がお答へする一文を書くと、謙遜に「貴方の御發しになつた巨彈はたしかに私に命中しました」と書いた手紙を送つて來られたので、さすがに高龜博士は偉い方だと思つてゐるのであります。普通の御医者さんならば、職業意識と云ふも

のに捉はれ、自分の職業を擁護しなければならぬので「生長の家」の説く所が眞理だと思つてもなか／＼さう正直に眞理を公認することが出来ないものですが、流石高總博士ほどの方になられると心が開いてゐて正直に眞理を受け入れられるのであります。正しい説に従つたならば自分が負けたやうに思ふ。かう云ふ考へ方をせられる人は、自分と云ふものゝ生命の實相が何か餘計な非眞理で追加してやらなければ價値が保てないやうに思ふ迷ひから來るのであります。ところが、吾々の生命の實相と云ふものは「眞理」そのものと同體でありますから、眞理に従順であつて、謙遜に自分の非眞理を捨てたときには、その人の生命の實相が輝き出るものでありますから、正直にあやまれる人ほど偉く立派に見え、瘦せ我慢を張つてゐる人ほど小さく醜く見えるのであります。正直にあやまれる人が却つて吾々に立派に見えるのはこのためであります。

「生長の家」の眞理を體得するには、神聖觀や「生長の家」の讀誦などゝ云ふ靜的の工夫のほかに、動的の工夫が要るのであります。眞理は生命そのものでありますから、そして生命は「動」が本態でありますから、動的の工夫に移つて、眞理と云ふものは、はじめてその潜在してゐた生命の正體——生かす力の正體をあらはすのであります。動に入るまでの眞理と云ふものは、まだ潜在してゐるのみであつて顯在に入つてゐないのであります。それにはこの「生長の家」そのもの

の出現が好適例であります。本来私は此の「生長の家」と云ふ雑誌をたゞ自分が今迄體得して來た眞理を發表して、それによつて人間の家庭生活を光明化するにしたいと云ふ程度の修養雑誌を出したいと思つて始めたのであります。しかし中々それも始められなかつた、と云ふのは私は會社で毎日八時間乃至十時間の勤務についてゐる、そして先刻申しましたやうに私の身體は保險會社がとつて呉れないで、人から結核二期生などと云はれたやうな虚弱な身體である。會社の勤務を終つて歸つて來ると、もうフラ／＼にくたびれてゐて、會社へ行きながら雑誌を毎月一冊書くなどと云ふ餘裕が肉體的にない、ところで雑誌を出すことを專業と云ふことに致しますと、臭いものに蠅がたかり、清らかな水には魚が棲まないと云ふやうに、さう云ふ本當に良い雑誌をひろめることにするには普通なかく／＼經費が要つて收支がつぐなふものではない。カーライルも二版以上を重ねる書は愚書であると云つた位で、良書は最後迄維持すれば勝利を得るが、急には弘まらないから、發行費を一方でどこからか得つゝでない雑誌を出す事が出來ない。結局、私は會社へ行つて、一方でその出版費を得つゝ、その費用で雑誌を出すと云ふ二重生活をしなければならぬ、しかしさう云ふ二重生活は自分の體力が許さない。それでは出版費を月給の中から少しづつ積みたてゝ行つて、經濟的に餘裕が出來たときに雑誌を出すことにしようなどと、頗る

月並的なことを考へてゐたのであります。ところが、私は關東の大震災に遇つて無一物になつてこちらへ來たのであります。それから二三年して、やつと一通り位、着物も買ひ整へたと思つた頃になつて、泥棒に這入られてすつかりまたスツカラカンの無一物になつてしまつたのであります。それをまた二三年して少しづつ買ひ整へてまたやつと一通り位出來たかと思ふと、また幸ひにして泥棒が這入つてすつかり持つて往つて了つたのであります。何故幸ひであるかと云ふとその時私の心の眼がひらけたからであります。その時、私の經濟的餘裕が出來たら人類のためになるやうな雑誌を出さう。體力の餘裕が出來たら人類のためになるやうな雑誌を出さうと考へてゐたその月並な考が破れたのであります。此々が出來たらあれをしようと思ふ人がありますが、それが普通であります。そんな根性では逆も何事も出來るものではないのであります。「出來たら、しよう」と云ふのではなく、意を決してすれば出來るのであります。「餘裕があつたら、しよう」と云ふのではなく、斷じて行へば、必ず餘裕が出來て來るのであります。實際斷じて行つたときに、私の弱い身體から體力の餘裕が出來て來たのであります。一日十時間の會社の激務に従ひながらも、毎月雑誌を一冊宛書くことが出來るやうになり、その合間に遠隔治療や、來訪者の指導や三人前位働くと云ふことが出來るやうになつたのであります。この時に私ははじ

めて靜的修養によつて獲得した眞理を動的工夫に移したのであります。この時まで潜在的でしか
 なかつた人間の「生命の實相」が動的相をもつてあらはれて來たのであります。すると私の書く
 筆にも「生命の實相」が生きてあらはれて來たのであります。各地に私の書いたものを讀んで病
 氣が治つたと云ふ人が出來て來ましたり、誌友で、生長の家の神様の神姿を拜んだと云ふ人があ
 らはれて來た。最初私は「生長の家」と云ふ雜誌を私と云ふ人間が出すつもりをしてゐたのであ
 りましたが、それが、神の出し給ふ教誌になつて了つたのであります。「何人でも生命の實相を
 説くものがあれば、我れはその人に顯れて一體とならん」と云ふ最近の神示によつて明瞭となつ
 たことでありますが、私の書くところ私の生き方が生命の實相そのものになつて來たので神がそ
 こに顯れ給うたのであります。その「生命」の實相と云ふものは何んなものであるかと云ふと、
 何物にも縛られない自由自在なものである。かう云ふとその束縛を破つて了はなければ自由自在
 になれないかと云ふとさうではない、何々しなければ自由自在になれないと云ふのでは、その自
 由自在さは條件付の自由自在さである。吾々の生命の實相の自由自在さは、そんな條件付の自由
 自在さではない。「縛られてゐても自由自在」と云ふことが「智慧の言葉」に書いてありますが、
 縛られてゐても自由自在なのが生命の實相なのであります。生命を縛ると云ふ物質的條件の縛

りは眞に實在するものではないのでありますから、實在しないものに縛られてゐても、何ら吾々の本當の生命は束縛せられるものではないのであります。これが解らないと、自分は境遇に縛られてゐるから自由自在になれないなどと月並なことを考へるやうになるのであります。人間は本來神の子であるから救はれてゐる、即ち本來自由自在である、束縛を脱して後始めて自由になると云ふやうなものではない。本來神の子なる人間は縛られてゐても縛られてゐないでもどちらでも自由自在なのであります。この眞理はたゞさう思つてゐるだけでは「實」にならないのであります。ましてそれを動的工夫に移し、その眞理を實際に移して實行するとき、いくら餘裕がないやうに見えても餘裕が出来て來、弱いやうに見えてゐる身體から無限の力が湧き出て來るので、始めて我即ち神の子なる生命の實相が如實に悟られて來るのであります。

日の子と日の子

吾らは古來、神の子であり、何某の尊であり、日子(彦)であり、日女(姫)であるとの自覺をもつた。今も吾らはその一人々々が、日子であり、日女であり、尊き神の子であり、何某の尊であると云ふことを知らねばならぬ。須らく吾らは輝く太陽神の子孫であると云ふことを自覺しなければならぬ。これは古代日本人の原始的迷信などと思つてはならない。一切の生命は太陽を源として生れて來るものであることを近代の科學は證明してゐる。

第二章 「生長の家」は日本精神の源泉

皆さんは聖典「生長の實相」や毎月の神誌「生長の家」のことを「讀めば病氣の治る本であつて、達者な人には用はない。」と思つてゐられるかも知れませぬが、それは大變な間違ひであります。さう云ふ誤解を招くと云ふことは、此の「生長の家」には眞理が書いてある、その眞理を讀めば自分の「生命」の實相がさとられ、悟りに従つて自分の「生命」の自由自在さを押へてゐた「迷ひ」がなくなり、「生命」が伸び伸びと解放されて來ますので、私の體驗と同様、病氣も自然に治つて來るからであります。が、「生長の家」出現の使命を病氣治しだと思つてはなりません。眞理をさとの功德と云ふものは、決して唯肉體の病氣が治ると云ふだけのやうなチツぽけなものではないのであります。吾々の「生命」と云ふものは肉體の健康を單に維持するだけのハタラキしかないものではない。吾々の「本質」は無限の智慧であり、無限の愛であり、無限の生命であつて色々多方面のハタラキをするものであつて、その完全な發現を日本精神と云ふのであります。完全に吾々が自己「生命」の實相を自覺し、日本精神が發揮されますと、色々多方面に於て自分の生活が自由自在になつて來るのであります。病氣が治るのは無論のこと、經濟的にも不

如意が如意になつて來ます。子供がなくて子供の欲しい人には子供が授かります。砲烟彈雨の下
 にゐても妙に彈丸がそれて當らなくなりませう。人間の運命と云ふものは、自分の放散する心的
 團氣が磁石となり、受信装置となつて、それと同様なものを引きつけるのですから、自分が不幸
 の波長を受信するやうな受信機となれば感受した不幸を形に眼に見える状態に再現するのであり
 ますから、自分から放散する心のリズムが、愛と光明に満ちたものであり、彈丸を引寄せるに
 不適當なものであれば、彈丸は決して吾々の方へ飛んで來ないのであります。彈丸は外部からや
 つて來て吾々に衝き當るやうに思はれるかも知れませぬが、どんな運命も、自分から引寄せない
 のに、外から來て吾々にブツ突かるものではないのであります。暗は光明に來てブツ突かれば、
 ブツ突かつた刹那光明に化して了つてゐる。云ひかへると、暗は決して光明に打突かれるもので
 はない、光明の靈波には不幸は決して近付けない。だから不幸になりたくない人は光明の靈波を
 自分から出すやうにするが好い、さうすると、暗黒な運命は波長が合はないから自分の方へや
 つて來ない。若しやつて來るなれば、自分に近づいて來たときには既に光明の姿に化して近づいて
 來るのですから世話はないのであります。で、この「生長の家」の精神主義運動と云ふものは全
 世界の人類を光明化するために出現したのであります、全世界の人類が「生長の家」の所説

を覆んで、みんな光明の雰圍氣を出す——まあ謂はゞ自分の身體から、否、心から後光を出すやうになれる。さうすると全世界の人間に光明が内から照り輝いて、外からどんな不幸も近づけなくなる。全世界の人間に内から光明が照り輝いて来て外からどんな不幸も近づけなかつたならば、全世界は此の儘で地上天國になつて了ふのであります。全世界の人間がさう云ふやうに皆「生長の家」を知つて内から光明が照り輝いて来るやうになれば、そんな結構なことはないが、全世界の人類がそこまで達するのはなかくの事でありました。それまでの過渡時代には、周圍が暗であり混亂状態であるなかに、自分だけが先づ光明であるほかに仕方がない。自分だけが光明であるときにはどうなるかと云ひますと、周圍が不幸であつても、自分には不幸が近づかないと云ふ過渡時代を現出し、その次には自身が光明であるために周圍が次第に照らされて明るくなるよりほかに仕方がないのであります。人間の不幸——色々の混亂状態のうちにも戰亂ほどの不幸——混亂状態は他にないのであります。彈丸がヒュー／＼音をたて耳を掠めて飛ぶ。爆彈が目の前で炸裂する。諸方に火災が起る。着弾距離にあるすべての非戦闘員は右往右往に逃げまどふ。その混亂状態の中にあて心の平静を保ち、自分の心のうちに神の光明を輝かして、自分ばかりが光明であるばかりでなく周圍までもその光明で輝かし自己の放散する平和の精神的リズム

で、周圍までも平和な無恐怖の状態にし、その無恐怖の状態に於て、生命の自由自在なハタラクキを發揮する。周圍を助け周圍を生かす働きをする。かうなれば誠に「生長の家」で説く生命の實相を悟つたのでありましてもう占めたものでありますが、凡ての人間がその境地に達すると云ふことは逆も一朝一夕には出来ないであります。併し其處に私は便法をつくつたのであります。即ち眞理を書いた書物を配布し其れを常に讀み且つ携帶せしめることによつて「聲字」にあらはれた眞理の波動——即ち言葉の光明靈波を利用して、それを携帶する人がまだ眞理を本當に理解してゐなくとも、書物から發する光明靈波が「類は類をよぶ」と云ふ法則によつて、その人自身に光明を招び寄せる、即ち彈丸雨飛の中にあつてもその人には光明だけが感受され、暗黒や不幸がやうて來られないやうにしたい。此れは佛教で云ふ「聲字即實相」の祕義から云つても、日本古來の言靈の祕義から云つても、「萬物一切コトバにて造らる」と云ふ基督教の奧義から云つても出來得ることなのであります。かう云ふ念願によつて、私は毎月發行の「生長の家」のほかにも、昭和六年末になつて、どんな貧しい人にも讀め、又携帶出来る五錢の小冊子を發行したのであります。此の小冊子をお讀みになると病氣で苦しんでゐられる方が突然心の平和を得て、なか／＼治らなかつた病氣がずん／＼快癒した實例があつたことは毎月の誌上にたび／＼發表さ

せて頂いてゐるのであります。

ところが此の五錢の小冊子の配布先と云ふものが後で考へて見ますと、すべて神縁によつて配布せられるべき所へ配布せられてゐるのであります。小冊子の發行も、その配布も、神が發行させて、神が配布してゐると云ふことが分るのであります。

其實例を茲に申述べたいのでありますが、此小冊子が昭和六年末何處へ一等多く發送されたかと云ひますと上海であります。上海はどちらかと云ふと、つい最近「生長の家」が讀まれることになつたのであります。それなのに一等多く此の小冊子がバラ播かれた。それは上海が一等多く「生長の家」の光明靈波を必要としたからに相違ありません。上海に「生長の家」支部が設けられたのは、上海に於ける日支衝突が起る約一ヶ月ばかり前に過ぎませんでした。その間に「生長の家」支部を造つて下さつた鈴木友二郎氏の活躍はまことに目覚ましきものがありました。上海日々新聞に十數回にわたつて「生長の家」を紹介するところの「心靈座談會」なる記事を掲載せられました。其中間と最後に小冊子を無代進呈するとの廣告を載せられました。かうして先づ小冊子四種（各百五十部）小計六百部、なほ後に三百部合計九百部がこの短時日中に上海ぢうにバラ播かれることになつたのであります。これだけの短時日に、一地域に九百冊の小冊子が普

及したことは、まことにもそれは神がこの混亂に先んじて、神縁ある人々に特殊の守護（光明靈波）を授けて置き給うべく仕組まれた神策神謀であると拜察するほかはないのであります。内地に於て二年間たつても一ヶ所に五百の「生長の家」の發行書が弘がつたところは當時一ヶ所もなかつた事を考へ合せば上海のやうな特殊の地にこれだけの普及を見たとき云ふ事は必ずやそこに何か神祕な理由がなければならぬのであります。果然間もなく上海は砲彈雨注の巷と化し、信仰なき人にとつては一日も恐怖なくして住まへない戰亂の渦中に巻き込まれたのであります。

日支事件發生以來上海は、勞役に、通譯に、その他ゼネラル・リリーフ・サーヴィスに多數の邦人若者を要求してゐるのに、この人手不足な最中に上海〇〇書院の生徒らは婦女子と先を争つてこの戰禍に惱める在留民の災難をよそに日本に引揚げた、生命を捨てよと云はぬが今少し奉仕的精神があつて欲しいと昭和七年二月二十四日の大阪朝日新聞は信仰なき人たちの不甲斐なさを慷慨的語調で書いてゐます。此の様な時變に際して「生命の實相」を少しでも自覺してゐる生長の家誌友はどんな活躍振りを見せてゐるだらうか、それは知りたい處でありました。「生長の家」發行の小冊子は果して有効であつたか？ 聖典「生命の實相」は如何に「生長の家」誌友に生命を吹き込んだか？……ところが二月二十五日、上海の一誌友より次の如き興味深き長文の手紙が

届いて、「生長の家」發行の聖典と小冊子との価値が實證されたのでありました。その誌友と云ふのは當時上海狄思威路福智里十二號にゐられた嘉眞洋行主久保田儀藏氏であります。氏は細々と自己の過去の生活を講述したのち次のやうに述べてゐられます。

「……先年煩ひし胃潰瘍再發致し、又折角友人及び親友の支那人連が不相當に盡力しくれし事業も盡く成立せず、それも恰も十中八九分まで纏りて不思議と成就せざる事昨年八月までに二十幾件も有之等全く氣を腐らすと同時に殆ど胃痛に苦しみ通しの日を送り申候。愚妻も心配の餘り九月中旬長崎を引上げ介抱に參り候て幾分の安心を得し矢先、例の滿洲事件突發致しそれよりと云ふものは新聞紙にて御承知の通り猛烈なる排日貨と相成り對支那人關係は全く斷たれ候て誠に困却致候……色々の醫藥を飲み又家傳の胃痛藥も調合して服藥致候へども却つて病勢昂進の傾きあり……病勢は益々昂進するのみにて誠に困しみ申候。恰も支部鈴木友二郎様の「本を讀んで病氣が癒ゆる」と云ふ新聞廣告を拜見、早速申込候處、快く寄贈を受け、又御深切にも御來訪下され、種々御道の話やら御指導を受けて「生長の家」を熱讀致候。然るに、急に今迄の精神内の苦勞、取越苦勞、及び愚子一家に對する不快が自然に雲煙霧消し生れし義理の孫に對しても無限の愛を投ずる事を得て、今迄に暗かりし環境も自然々々と明

るく又肩の重荷も段々軽く感ぜられ同時に病氣も何となく根本的に恢復致し來る様に存候ため一心に「生長の家」を熱讀致し居候。鈴木様の御好意にて熱望せる聖典も入手、日々多大の勇氣と希望を以て愛誦致し居候。

「正月二十九日の曉、一發の砲聲を相圖に茲に日支戰端を開く事と相成り、激戦又激戦東洋文明の都として魔の窟と云はれし上海も戰雲漠々として血なまぐさく、百五十萬の人間は茲に全く空前の大混亂に陥り申候。既に佛租界内へ避難せし支那人、外人約三十萬と稱せられ、又日本に避難せし邦人婦女子一萬を數へて、居留民は半滅の状態に有之候。小生も避難勸告を友人等より受けしも、何故にや自己の感念以外に強く指示せらるゝ力を感じ、斷乎として踏み止まる可く決心致候。附近隣接の百軒程の日支外人全部避難致候。残るは只一軒の小生宅のみ日の丸の旗を翻して斷乎として止まり申候。

「愈々開戦に相成り申候へば、最近は隔夜毎に敵砲彈の飛過彈數十を數へ、低きはヒューと音して附近を爆發致候。町内會長も海軍の手薄を心配致候て、當地町内全部避難したる方よからんと飛んで参り申候ひしも小生は斷乎としてことほり候ため町内會長も意を翻して、皆々と踏み止る事と相成り皆々小生と同じく踏み止まる事を得申候。

「小生は夜、大概九時より神想觀の實修を致候。丁度數日間續いて實修最中、敵の大砲撃あり敵砲彈すれ〜に屋根を飛過ることとて時には窓ガラスがガタ〜鳴るやら爆發のために地響きするやら、小心者ならずと雖も相當恐怖を感じる筈と存じ候。小生も生れて初めて砲彈下に生活致候て、爆彈の命中せし家屋等も一見し、その猛烈なる力によく承知致居候。然るに「生長の家」の信仰に入りしよりは這般の恐怖更に生ぜず、愚妻の如きは餘りに小生の平然たるに心配も致し驚きも致し候が、小生はその都度「見よ信仰に入つてからの自分の今度の考へ通りにやつた事は皆不思議に的中してゐる。人は周章家財を棄て、避難せるも吾人一家は全く常よりも平然としてゐる、然も丸で百軒ばかりの家屋を借り切りしたやうなものでないか。生長の家人には斷じて敵斷は命中せぬ故安心せよ」と皆々にも申候。そのため一家も皆小生の言を確信して平氣に敵彈下に生活を閑し居候。「生長の家」の聖典を熟讀々々さして頂くと同時に胃腸病は漸次に快方に赴き、目下は食うて食うて腹一杯食しても別に胃痛を感じることもなく、それに一番小生の快心なることは、一種云ふべからざる勇氣の發生と元氣の潑刺たる事と相成りし次第にて、過般鈴木友二郎氏に面會致したる當時と比して見違へる様に肥え太り申候。朝も毎朝未明に起床し室内掃除炊事の手傳ひ等致し、時變以來自警團

にも手傳ひ申候が、妙な事には極めて小さな事ながら萬事物質上にも頗る好都合に運び、愚妻の如きは戰時となりて却つて樂をさして貰ふなどと歡びをり候。何れ鈴木さんにも兩三日中に御拜眉致候て萬々御禮申上るつもりに候。

「但し、小生は永らく天理教、基督等を信仰致候て教理そのものは兎に角、所謂の教師連に一種の愛想をつかして、一時は無信仰生活を送り、又種々なる書籍亂讀の結果、非常に根強き懷疑の念をさしはさむ癖有之候へども今回は始めより何らの懷疑心も起らず、春風一路、光を仰ぎつゝ愉快に悦び勇んで「生長の家」の信仰に入るを得しことを實に衷心より感謝致し居り候。これ皆聖典の偉大なる御力と、眞理の致さるゝ所と、日々感謝致居候。この上は各友人にも進んで勧誘致し上海支部の盛大を期すべく決意致し居候。

「夜は電燈なく（吾軍が破壊せしため）又瓦斯も消えしたため、蠟燭ランプを點じて夜を過ごし居り木炭をたいて炊事し又温をとり居候。愈々今二十日夕刻まで、支那軍に發せられし最後通牒の回答來らざれば、海陸軍の猛攻撃開始せられ申すべく昨日午後は小生宅より約十丁先の平野に野砲十五門八門を据ゑ申候。敵も餘程防備充實せしよし故定めて大激戦を演ずるなるべし、過る夜の砲撃にて雨の如く敵陣の見舞ひを受すし約五丁先の北四路方面五百人の即入は

全部租界内に避難致候て、昨日小生にも避難勧告ありしも小生は又々断はり、飽くまで砲彈下の神想觀實修を試むべく決意致し候、茲に家内始め皆たゞ小生の言動を飽くまで信じ、殊に愚兒の女房たる十八歳になる支那少女すらも附近の支那人皆避難せしにも拘らず、最近は平氣に相成り安心して踏み止まり居候。まことに偉大なる「生長の家神」の與へ給ふお力の幾部なりと受けし事を得し心持致し候て、益々信仰の念を堅めて堂に入るべく期し居候。砲彈下の神想觀の實修の如き、砲彈も砲聲も耳に入り候も何らの不安なく、何らの苦痛なく寧る常よりも一種の快感を得て實修する事を得る等、自分ながら多少不思議に存せられ、信仰の力の偉大なるを感じ謝し居候。只今午前六時半、夜は薄光に明け申候。ランプの下に感謝の餘りにペンを採りたる次第に有之候。曉の戰既に開始せられしか遠く近く機關銃及小銃の響致候。本夕よりは定めて飛行機火砲爆彈の轟音に接すべく存じ候。先は右まで感激の餘りにペンを馳せ申候ため亂筆亂文御判讀下され候はゞ幸甚の至りに候。」

私は久保田儀藏氏からの此の手紙を読み去り読み來たつて眞理の力——神の力——を身を以て實證しつゝある久保田氏に對して感激と感謝の涙が浮ぶのであります。「生長の家の神」の顯現はただ病氣治しのためばかりではなかつたのであります。此の實例を以つてもそれを知つて頂けま

せう。病氣が治るのはたゞ眞理の一面のハタラキに過ぎない。「神想觀」はたゞ靜座して無爲であることではなかつたのであります。「生長の家」第三輯三號所載の一月五日の神示に「生命の實相を握るものは焰の中にあつて焼けず、死を超えて永遠に生きん」とありますが、此の死生を超越して生きることが大切なのであります。大乘の禪の極致が何時でも自由に死ねると云ふ悟りを得ることではなく、どんな場合にも顛倒妄想に陥らず、恐怖に捉へられず生命の本當のすがたを自由自在に活かして行く事にあると同様に、「生長の家の神」の垂示し給へる眞理も、「神想觀」も、神の子なる人間が影なる肉體の死生を超越して、本當の自分の相、本當の自己生命の自由自在さを自覺し、そこから生命本然の不思議な生かす力——自分を生しか、他人を生かす力——を湧き出させて來ることにあります。激しい十字砲火に晒されつゝある上海狄思威路にゐて、附近の人が悉く避難したときにも久保田氏は平然として避難勧告にも應ぜず、自警團に加はつて上海の治安に貢献し、死生を超越して少しも恐怖を感じない。そのために避難立退きを勧告しに來た町内會長もその他の數氏も一緒にその町内に踏みとまることゝなり一町全體の秩序と警固とが完全に保たれることになり、一家の支那少女までが久保田氏の無恐怖の状態に感染して砲彈が流星の如く亂れ飛ぶ中に平然としてゐられるやうになつた。一人が眞理を知れば其の人

一人が光明に照り輝くばかりではなく周圍までも其の光明に化せられる。光明は感染する。では出来るだけ此の光明を人に傳へようではありませんか。一日早く此の光明の眞理をさとられた方は、後より來る人類を光明化すべく神から使命づけられた人であります。一時鎮まつたやうに見えても時期は移る！特に日本人が吾が光明の眞理によつて死生超越日本精神を發揮して奉仕せねばならぬ重大時期は來る！では、今より神想觀の實修を！今より「生長の家」の垂示し給へる光明の眞理を知人より知人へと知らしてあげて下さい。私は今、聲を擧げて死生超脱の眞人を養成すべく「生長の家」に來れと人類に呼びかける。全ての日本人よ、一度は「生長の家」に來つて久保田氏のやうに神に結ばれて神の力を身に受け、それから、その持場々々で活動して下さい。時は今、常に時は今である。

天祖の御詔勅

豐葦原の千五百秋の瑞穂國はこれ吾が子孫の主と在すべき國なり。聖皇孫就て治らせ。とごきくませ。寶祚の隆えまさむこと天壤と共に窮まりなかるべし。

(こゝに示し給へる豐葦原の千五百秋の瑞穂國とは全世界の事である。本全集「宗教篇」参照)

第三章 「生長の家」とは何であるか

では、「生長の家」とは何であるか、人に簡単に説明出来るやうに掻いつまんで話して欲しいと云はれる方がありますから、唯今それを各方面から説明して見たいと思ひます。

「生長の家」所説の眞理は、神が、至上の愛が、萬物を生かすところの眞理を人間に吹き込んで、その人間の筆により假りに書かせたものであります。だからこの眞理によつて生かされないものは何物もないのであります。讀んで病氣が治るばかりでなく、家が「生長の家」となり、國が「生長の國」となります。そこが「生長の家」の偉いところであります、所謂民間治療や靈術に過ぎないものでありますと、病氣は治ることもありませうが、それによつて一家が生きて來たり一國が生きてきたり敵彈下に悠々日本精神を發揮したりすることは難かしいのであります。その實例の一つとしては前章にその一端を紹介せる上海狄思威路の久保田儀藏氏の如く醫藥を廢して胃潰瘍が治り、剩へ敵彈の炸裂する下に悠々自適して少しも恐怖を生ぜず、それが唯の瘦せ我慢ではなく、單なる盲目的な盲人蛇に怖ぢず式の妄動ではなく、不可思議な叡智に支配せられて、敵彈が雨と降る中を、その不可思議に受けた神力の爲に、附近一帶被害夥しき家の中に

混りながら自分の家は硝子一枚だに碎けないと云ふ客觀的事實をも生じたのであります。何故そんな神秘的奇蹟を生じたかと云ひますと、「眞理」の力——人格的にあらはれては「生長の家の神様」の御力——が働いたのであつて私も襟を正して久保田氏の通信を讀ませて頂いたのであります。その後の久保田氏からの通信は光景手にとるやうに書かれてをり興味深いものがありますので、左にその一節を抜萃して俱にそれを味はせて頂きます。前章の久保田氏の手紙は總攻撃開始までの通信でしたが、本章に掲ぐるは、總攻撃當時の通信であります。

「扱てその翌日、二十一日の夜七時より閘北戦線全帯に亘りて敵の大猛撃大逆襲が始りました。閘北戦線一帯は海軍陸戦隊のみにて防護し、上海の租界線を多少進出した處に陣を敷いてをる吾軍に對する總攻撃で支那側としては、此の一戦で租界に亂入し、日本人の居留地たる虹口方面を占領焼打ちし、租界外の失地を恢復し、吾軍のために殆ど灰燼に歸せしめられたる閘北一帯の復讐をしようとして云ふ計畫の爲に全線に亘つてその大猛撃を開始した譯なのであります。そのため敵軍の決意も頗る強く、平常の小競合と異り、支那常勝軍の名にし負ふ十九路軍が決死の覺悟での大攻撃として、その猛烈さは全く戦闘開始以來初めて見る戦闘振りて愈々夜の七時より恐ろしき勢を以て砲撃が開始されました。

「今迄は多くは吾が陣地を砲撃するための飛過弾が多く拙宅を飛過するにしても、慣れて見れば、謂はば慣れ易いものでありましたが、今回は北四路、狄思威路の吾々の住宅街が目標で、この中には陸戦隊本部、二三の大隊本部、及び味方十五珊砲兵陣地も含まれてをり、それに多數の邦人が矢張りまだ居残り居るためこれ等を目標としての砲撃で、この砲撃で後方を攪亂、全線逆襲に移る策戦の下に總攻撃が實現せられたのでありました……」

「殆ど間斷なき猛撃にて殊に今回使用の〇〇製十五珊八珊砲弾は全く猛烈なる爆發力を有し、完全に彈丸が粉碎して破片は一丁も先に飛び散ります。二十一日の夜はこの邊一帶所きは敵弾の散布を受けたと申してよい程で、恰も落雷の如く、ドガンと落ちてバラ／＼ザーと無數の破片土砂を吹き上げます。八時頃でしたが皆々就床前の用事をなしてをつた時、猛烈なる勢を以て殆ど隣家に正に當つたやうな大爆音が致しました。地響と同時に恰も水をかぶつた様なジーンと云ふ音が致しました。これには皆々驚き、取敢ず支那人の女房やら家族赤坊は蒲團の中へ入れる。すると同時に、又々同程度の大爆音が響いて、家中が震動致しました。續いて、前面の方にも直前一彈爆發して土砂を吹き上げ、その破片が表の窓ガラスに當つて破つたと見えて大きなパチツーンと云ふ音が致しました。表は行通遮斷、それに燈火一つない暗の夜、殊に

こんな節は便衣隊の活躍あるため歩哨は非常な警戒を致しゐるため、たとひ敵弾命中しても外へ出ることは却て危険のため一步も踏み出す事は出来ず、どうしても夜の明けるを待たねばならぬ次第です。遠く近く落ちて全く間断なき爆發、謂はゞ砲弾の雨下とでも申しませうか、ドガンパーンと云ふ怪音は所きらはず轟き渡つて實際決してよい氣持ではありませんでした。然し、余は「断じて吾人には彈丸があたりらん」と云ふ強い堅い信念を保持する事が出来て家族のものは一時皆蒲團をかぶつたが小生は只たんぜんを着て感想録を平然として書いてをりました。約三時間でこの砲撃は幾分間遠くなりました故物干臺に上つて見ると附近は大火災で火焰天に炷して物凄く、今迄は家の中のため少しも聞えなかつた戦線の逆撃邀へ撃の音が手にとる様に聞えます。長い戦線一面に亘つて小銃機關銃、それに敵味方の砲聲、雷を連続させた様で、誠に激戦の程が察せられます。

「その中又々附近の猛射が始まりました、二三十間先に落下するのが手にとるやうで、勿論家の上は怪音が唸りを立て、飛過するもの無数なのであります。茲に於て、毎日の御務の神想觀の實修を平然として致しました。合掌して招神歌を聲高く朗誦する時、既に吾人の耳には爆弾も地震も不安も心配も生も死も何物もない。只「生長の家の神様」の命

ぜられる儘に行動すればよい。弾丸の如きは断じて當らん。「生長の家の神様」が全てを支配して下さると云ふ、或は強い一種の依頼心かも知れませんが、全く生死を度外視して神様に近づくと云ふ念に燃えて誠に快く、勇んで神想觀の實修を終りました。誠に吾れ乍ら招神歌のお力づよい、何とも云へぬ威力と安心とに抱合する事が出来て、この落弾下の中に實に平然たるを得た事を衷心から感謝致してをります。恐らくこの招神歌の朗誦がなく、又これを眞に信ぜぬ者であつたならばやはりこの落弾には魂も消える様な周章と驚駭を感じたであらうと存じます。

「敵彈落下は依然として断續するため寢床の中に入つてはゐましたが、火災その他の懸念もあり起きてをりました。その時二階で(皆々階下に居住)確かに人の足音が致し、ミシツ／＼と云ふ音が致しました。神經の狂ひでないかと、確かに人が歩いてをる氣配が致します。近頃盛んに支那人貧民が避難後の空巢をねらふため多分二階より忍び入つたのだらうと思ひて用意をなし、日本刀を提げて二階に上りました。家内も目がさめて後から續いて上りましたが、二階は何事もなく些の異状もなかつたのであります。随分不思議な事もあるものと思つて、その夜はそのまゝ寝に就きました。熟睡五時間、この間はやはり戦闘中なりしも餘程落弾が遠方にありました。翌日は早朝から敵の亂撃です。朝食後自警團詰所に行つて見れば人々集つて昨夜の

噂うわさとりくくです。その中うちすぐ二十間にんばかりさきの西洋館せいやうくわん三階建さんがいけんに引續ひきつづいて命中四彈めいちゆうしだん、濛々もうくたる
 鷲色烟とびいろけむりが立ち騰のぼり、落雷らくらいの大音だいなが耳みみをつんざく様に約五六分やくごふぶん置きに一二發いちふ宛見づみてをる前まへで爆發ばくはつ
 致いたしました。路傍ろぼうで立たつて見てをると、怪音くわいおんが空そらに響ひびいたかと思おもふとドガンと命中めいちゆうして爆發ばくはつ
 する。之これを哨兵せうへいやら自警團員じけいだんめんらが立たつて眺ながめてゐる。然しかし考かんがへれば何日何時いつなんどき自分等ぶんらの立たつてを
 る處ところに爆發ばくはつするやも計はかられざる次第しだい、これを平然へいぜんとして立見たちみするも又戰時中またせんじちゆうの一快事くわいじでせうと。
 砲擊ぱうげきの結果けつぐわは日本人にほんじんばかりの住宅ちゆうたく、阿端里あたんり、麥掌里ばくしやうり、長安里ちやうあんりはいづれも全燒ぜんせう、慘憺さんたんたる損害そんがいを
 蒙かうむつたのであります。ところが私は歸宅きたくして昨夜さくやの硝子がらすに當あたつた邊へんを調しらべて見みましたが、これ
 は又不思議またふしぎ、泥どろが少すこしく、しかし爪先つまさきで突ついた様な泥どろが一二點てんある外ほか些さの異狀いじやうな
 く、隣家りんかから始はじまり五六軒けんの窓まどガラスは皆みな昨夜さくやの爆發ばくはつで破壞はくわい致いたしましたが、拙宅せつたく
 は一枚まいも破損はそんもせず、實じつに皆々みな全く不思議ふしぎに感かんじ合あつたのであります……。

「二十三日にちしやうごひさ正午せいん久ひさし振ふりにて支部長鈴木友二郎しぶちやうすずきゆうじろう様さまを訪問はうもん致いたし逐し一狀況じやうきやうをお談けなし致いたしました。前
 回御面會くわいごめんくわいした時は衰おとろへ瘦やせてをりましたが今回こんかいお目めにかゝつた時は見違みちがへるやうに肥こえ太おとつ
 てをつたゝめ、大變驚たいへんおどろかれ又お悦よろこび下くださいまして、誌友しゆうで連絡れんらくのとれなかつたのは二人ふたりだけで
 あつたが、あと一人ひとりとなつたとの事こと。種々結構しゆくくけつかうな御話おはなしを承うけたまはり「神様かみさまが楯たてとなつて防まもいで下

さるから弾丸は當らん」と強いお言葉を頂きました。さては一昨夜の二階で人の足音が頻りにしたのには……と思ひ當る所がありました。御馳走を受けて歸宅しました。昨夜は又すぐ前の支那人住宅六七軒の長屋の二階建てで火災が起り一時は危険を感じましたが晝間の強風は夜に入りてハタと止み、陸戦隊のすぐ背後の火災とて陸戦隊から消防が出て直ちに消して終ひました。落弾した處は家より約十間先の隣家の露路内で何れも猛烈に爆發致してをりますが、何分この邊一帶無人の境で残るは吾人一家のみで死傷もこれによつては生じませんでした……」

皆さんは舊約聖書に出てゐるやうな吾等の現實の櫓となり、砦となり、楯となつて、吾等を護つて下さる神を想像なさつた事がありますか。そんな馬鹿らしいことは迷信だと被仰いますか。神は愛であり眞理であり無形である。けれども神は神通自在である。今此の非常時に生長の家の神として人類光明化運動のために顯現せられたのでありますから、各地の誌友に具體的な神姿を示し給うたことは既に度々「生長の家」誌上で報道したところであります。眼に「生長の家の神」が視えるとするならば耳に聞えても不思議はない。岩手支部で毎土曜日の生長の家朗讀會にいつも「生長の家」の読み手となる本田と云ふ青年がある。此人には「生長の家の神様」の聲が聞えた。それならば神様の足音がしても不思議はない。神徳を受け、視る力、聞く力が出來た人に

だけそれは見え聞える事が出来るのでありますから、自身にそれが見えない聞えないとしてその存在を否定する事は没常識と云はねばならないのであります。神姿が見えない人にも、神の聲音が聞えない人にも、併し實際起つた結果だけは否定することが出来ないではありませんか。専門家にその後聞きましたら空弾を射つだけでも附近の硝子は大抵破れて了ふさうであります。それに一町四方に破片が飛ぶほどの爆弾の烈しい炸烈が、そんなに附近でしながら、硝子一つ破れないのは實に奇蹟だと云つてみました。而も隣家の家の硝子は皆破れてゐるのですから。神は、神を信じ、本當に深い平和の心境に到達した久保田氏一家の楯となつて防護されたと考へても差支はないと思ふのであります。妙法蓮華經の中に觀世音の力を念ずればその人を斬らうとする刀が段段に折れると云ふことが出てゐますが「生長の家の神」を念ずる者も此の奇蹟を演ずるのであります。神と云ふものは「眞理」であり、「普遍的原理」であるだけではなく、同時に斯う云ふ具體的な人格的な顯はれ方もして下さる。單にエネルギーと云ふやうに、在るやら無いやら形の無いフワ／＼してゐる存在であるだけではなしに、形にもあらはれて、「此處にわしはゐるぞ」と云つて示される。單に法則とか原理とか云ふ冷たい存在ではなしに生々とした人格である。そこに吾々の眞に緝り得る親しみもあり、懐かしみもある愛の神、親の神を見ることが出来るのであつてこ

れが「生長の家の神様」なのであります。

此の「生長の家の神様」が人類救済の運動をお起しになることになり私と云ふ人間を通して人類生活光明化の思想を傳へしめるべく私と云ふ人間を通して神誌を發行せられる事になつたのが此の「生長の家」であります。だから私が此の「生長の家」を執筆してゐる光景を鑣眼で遠方から透視せられた人の話によりますと、私の姿が朦朧と消えてしまつて、生長の家の神様の姿がハツキリとあらはれ、その生長の家の神様の姿の中に私の姿は溶け込んで了つてゐるのであります。そんなことを云つたとて、それは精神病者か神経病者の幻視か幻覺であらうと反對せられる方があるかも知れませんが、さう思ふ方はさう思つても宜しい。數人の靈視能力者に同時に同じ神姿をあらはし給うたこともあるのですから、數人が同時に同じ幻覺に襲はれると云ふことは殆どあり得ないことでありますし、またそんなことが假令ひあり得るとしましても、それは強烈な信仰家の集つた群衆心理かなんぞでなければなりません。に「生長の家」の誌友がまだ一二名しか混つてゐない某心靈學徒の會合の席でさへも數人同時に同一神姿を拜したと云ふ事實もあるのですから、この神のお姿を幻覺だとか群衆心理だとか云ふことは出來ないのであります。幻覺や群衆心理と云ふやうな唯の主觀の產物では到底敵彈をわが家にだけ蒙らないと云ふやうな具體

的な奇蹟は生じ得ないのであります。

古諺に「果實を見てその樹を知れ」と云ふ言があります。神の姿などは、神の念波を吾人の靈眼と云ふテレヴィジョン装置で再現したものでありますから此の靈眼と云ふテレヴィジョン装置のない方には見えないし、見えなくとも大して日常生活には關係がないのであります。さう云ふ神が私と云ふ人間をして書かせられた人類光明化の思想と云ふものが實際どんな果を結びつゝあるか、その果實の良否によつて、果實を生ずる原因たる其の樹の良否がわかるのであります。神が私を通して「生長の家」に書いてぬられる思想は實に破天荒なものであつて夫をお讀みになつたゝめに、突然その人の心から怒が消えたり煩悶が消えたり、今まで「人間に病氣がある」と云ふ思想から出發して、吾れと吾が心で病氣になつてゐた人が「神の子たる人間本來無病」の眞理をさとつて忽然とその病氣が消え去つた實例が澤山あります。さうした實例は毎號の「生長の家」の「誌友雜信欄」に於てその實際の感謝狀を發表して（御差支へがあつてはなりません）から名前は匿名にしてあります。皆様と一緒に喜んで頂いてゐるのであります。次には此の「生長の家」の合本聖典「生命の實相」に接するに及んで、人相忽ち明るくなり、死より救はれた或る方の感謝狀を一例として原文のまゝ掲げさせて頂くことにします。

「實は小生昨年末まで横濱正金銀行上海支店に勤務して居りました。丁度昨年十一月二十五日夜の事で御座いました。何となく熱っぽい様な感じがしましたので試みに検温して見ましたところ三十七度五分ありました。軽い風邪だから一日位缺勤すれば全快するだらうと、その夜は直ちに床に入りましたが、二三日しても熱が下りませんので、始めて醫師の來診を乞ひました。診察の結果、別には肺には故障がないから風邪だらうとの事で、確たる判断はつかない様でした。二三日後まだ熱が下りませんので更に診察を乞ひましたところ肺尖が少々悪いかも知れないとの事、併しラツセルは聞えないから極めて初期であらう若しラツセルが聞える様なれば既に第二期に入つてゐるから癒り難いといふ様な醫師の言葉に肺病と云ふものゝ恐ろしさを感じて、何となく不安になつてまゐりました。その時醫師が體温表を置いて行きましたので、毎日四回検温しましたが、午後は必ず三十七度五分前後に上つてゐます。肺病の初期は熱が出るといふ事を聞かされてゐるので、それから體温に對してとても敏感になりまして、體温計を脇にはさむと動悸がする様になり夜も安眠が出来なくなつて参りました。第三回目の診察の時は、醫師はラツセルが聞えると申しましたので、急に不安となり、それから容體が益々悪くなる様に思はれ、醫師の言葉も思ひ出され日夜煩悶して居りました。この時「上海日々新聞」

紙上にて、「生長の家」上海支部鈴木友二郎氏が、病者の爲「生きとほし」「生命の神祕」「光の新生活へ」の三冊の書物を無代御頒布下さるとの事として何心なく頂戴致しまして病床にて拜讀しましたところ、一々我が胸にこたへ、まるで、小生の爲にこれらの書物が書かれてゐるかの様に感じ、あまりの有難さに思はず感泣致しました。思へばそれまでの小生は人間は物質に依つて生かされてゐるものだと信じ、肝油を飲みあらゆる健康法を試みひたすら自己の健康を損ぜぬ様、細心の注意を拂ひ、夜は早く就床し、健康に關する雑誌を好んで讀み、あらゆる病氣の徴候に關する知識を得んと努めて居りました。且、常々小生は他人より顔色が悪いとか、瘦せた様だとか云はれ、内心それを氣にして居りました。今度の病氣に對する堆肥は既に充分に施され、只、その發芽を待つ様な状態だつた事は、今考へればあまりにも明らかな事でありました。又醫者は病氣の名付け親である事も始めて悟らせて頂きました。それといひこれといひ、今までの迷ひをはつきりと自覺させて頂きましたこの有難さよろこばしきは誠に筆紙の盡し難いところで御座います。其後、心に不安を覺える度毎に幾度この三冊の靈書をひもといたかわかりませぬ。併し、未だ信仰の至らぬ悲しさには、迷と自覺してゐながら、數度繰返しこの三冊の書物を讀む中に、その中の御言葉に慣れ、何となく物足らぬ様な不安に陥りました。

で、聖典「生命の實相」を拜讀したいと存じ、鈴木氏に御照會したところ手許にないとの事で急
 に間に合はず、その中に醫師より一先づ歸國養生したらと勸告されましたので、昨年十二月二
 十五日上海出發、本年一月二日横濱入港のプレシデント・ジエフアーンソン號にて歸宅致しま
 した。で早速、誌友の一人の中に御加へ願つて「生命の實相」を送附して頂く様に御願ひしま
 した次第です。併し「生命の實相」竝に「生長の家」を入手致します迄は未だ醫師を棄て兼ね
 て居りました。現に東京へ歸りましたも醫師の診察を受け、その際彼より彼の經營する某療養
 院に入院せよと勸告されました時など、危ふく心が傾くところで御座いました。併し「背水の
 陣をしけ」との「生長の家」の御言葉により思ひ切つて七日夜の汽船で、豫定の靜養地伊豆下
 田に出發する事に致しました。その出發日の午後、豫想よりも早く「生命の實相」竝に「生長
 の家」を拜受致しまして、百萬の味方を得たよりも頼もしく、急に元氣が出て來まして、拜讀
 しながら、あまりの嬉しさに涙が止め度もなく出て參りました。母が小生の顔を見て、「お前の
 顔の相が良くなつた」と申しましたが、この靈書を手にしましたばかりで、且母はこの靈書が
 配達された事は知りませんにも拘らず、小生の人相が、他人に判然とその變化を認めさすとい
 ふのは誠に驚異に値すべきことだと思ひます。翌八日朝當地に無事到着、爾來醫師と藥は棄て

去り専念神の道を求めて療養致しました甲斐あつて、只今では、すっかり健康となりまして四五日中には歸京、再び行務に勵むつもりで居ります。多分東京在勤になると存じますが、近い將來に先生に拜顔の榮を得て御禮申上ぐる機會のある事を確信して居ります。

「今必々と考へて見ますのにあまりに物質文明に走り過ぎた小生、神の存在をうたがつた小生、隣人を憎しみ怒るが如き振舞の多かつた小生に神のお氣付けがあつた事は當然と思ひますが、かくまで速に「生長の家」に依り救はれました事は今更ながら神の御ゆるしの寛大さに只々有難く涙の出る思ひで御座います。實は發病一ヶ月前より「上海日々」を購讀したのでして、それ以前は「上海日報」を讀んで居りました。もし「上海日報」を續いて購讀して居りましたらば、或は三冊の靈書も頂けず、救はれなかつたのかも知れませんが、「上海日々」が讀みたくなつたといふのは、あらかじめ神様が救ひの御手を伸ばして居られながらの御氣付けとしか考へられませんか。

「當地は米艦の來朝を機として日米通商條約が始めて締結され、新興日本に陽々たる曙の光さし初めた誠に意義深い土地で御座います。この土地に於て「生長の家」の御蔭により、自分も生れ更らせて頂いたと考へてはあまりに僭越でせうか。兎に角、日々を明るく朗らかな神の

子として送らして頂いて居ります。しかも沖の彼方には神子元島が浮び、燈臺が島の中央に吃立して居り、更に遙か洋上に目を放てば、伊豆七島が大島をその盟主として浮んでゐます。神子元島といひ、燈臺といひ、伊豆七島といひ、何かしら、「生命の實相」中の「完成(七つ)の燈臺」を思ひ出さずには居られません。この忘れ難い土地にやがて別れを告げるのかと思ひますと何となく惜しい氣もしますが、今小生の心の全部を占めて居りますのは、再び自己の仕事に全生命を捧げ切ることの出来るよるこびです。何卒今後共、新生の私を御指導下さいませ様伏して御願ひ申上げます。右不取敢御禮旁々御挨拶申上げます。

敬 具

この手紙の價値は、醫師が文章で云ふ漸層法——即ち次第に恐怖を強める暗示を累加してゐる點であります。(一)肺には故障がない風邪だらうと始めは言葉を濁し、(二)次に肺炎が少々悪いかも知れないと、不安を更に誘發し、(三)併しラツセルは聞えないから極めて初期であらうと、一見深切に患者を安心せしむる傍ら、(四)ラツセルが聞えるやうになれば既に第二期に入つてゐるから癒り難いと、次の恐ろしい暗示に入るための豫備暗示を行ひ、最後に、(五)ラツセルが聞えたと斷定して了つてゐるのであります。斯う云ふやうに醫者は巧みに患者の心に恐怖の暗示を與へて行き、言葉の力によつてそれを實現して行くのであります。幸ひにして此の人は「生長の家」

聖典を手にして醫者に頼つてゐることの愚をさとられたから、速かにその病氣が癒えたのでありますが、醫者に頼つてゐる以上、「ラツセルが聞え出したら第二期で治り難い」と云ふ此の醫者の言葉が患者の心の中に潜在する種子となり、芽を吹き、花をひらいて實際治り難くなり、定命も來ないのに、醫者の言葉の用品にかゝつて次第々に迷ひの深みへ陥り死地に赴くやうな氣の毒な運命に陥ることにもなつてくるのであります。實際醫者が病氣を治すものなら醫師にかゝつてゐながら、風邪引きから、肺炎へ、肺炎から第二期へと病氣を進行させる筈がない、この時もう人間は悟つても好いのであります。併し、この時「真理の光」がないと人間はどうも悟れない。そこで此の人間自身を束縛してゐる一切の迷ひ、誤れる醫學や生理學が蜘蛛の巢のやうに吾々に絲をかけて、本來の吾々の生命の自由自在さを束縛してゐる——その束縛を解いて、何物にも縛られない完全圓滿無病なる神の子たる人間、本來の「生命の實相」を表に出すために真理の炬火を人々の前に振りかざす——これが「生長の家」出現の使命の一つなのであります。

此の人の病氣は斯うして美事に醫藥を廢し、生長の家の神さまの啓示された真理に従はれたから治つたのであります、それは偶然ではないかと疑へば疑ふ方が出來て來るかも知れませぬ。しかし偶然と云ふものは、さう度々一致して出て來るものではありません。さきの久保田氏は胃

潰瘍を醫藥を廢して治した、此の人も肺病を醫藥を廢して治した、そのほか毎號癒つた實例が澤山出てゐる、それらも果して偶然でありませうか。そんなに偶然が度々一致する筈はないのであります。神誌収録の「誌友雜信」中の大川ふぢ枝さんの手紙を對照して御覽になつても、如何に醫者が病氣を造り、神の啓示された眞理が病氣を癒すかゞ明かになりませう。

生長の家の神さまの啓示——眞理の力——はよく人の心を平和に置き病氣のみならず能く人類一切の苦惱を除いて下さるのであります。東北凶作地の方で斯う云ふ方があります。五六年前から胃病にかゝつて常に胃痛に苦しめられて醫者にかゝつても藥を飲んでも治らぬ。これは持病であると想つてゐられた。その方が「生長の家」を手にし聖典「生命の實相」をお讀みになると同時にどんなことが起つたかと云ひますと……いや、私自身の説明よりも、その人自身の手紙を次に再録しよう。此の方が眞實味があつて好いと思ふ——。

「其後先生の御教を信頼し、毎月御發行の生長の家を拜見いたし、また安藤てる叔母に願ひ「生命の實相」を分けていただき、毎日一生懸命拜讀いたしてをります。わからぬながらいくらか心安らかになつた様に御座います。持病と思ひ五六年前から苦しみました胃病、おかげ様で忘れたやうによくなりました。今では胃痛もなくなり全快いたしました。これもみな先生のおか

げと感謝いたして居ります。病はなくなりましたが、いつか御話しいたしました借財に毎日苦しめられて居ります。全財産をなげうつても清算つかず足が出る状態に御座います。財産などには一もみれんがありませんが、今後の生活が案じられます。村でも一二の地主で御座いますので今迄は小作米で生活いたしてをりました。ゆめ、主人始め誰一人職業につき別な収入をとる者があります。収入の道とて一つもない私共一家(主人に子供十三歳女兒)は明日から路頭に迷はねばならぬかと思ふと堪へられません。餘りに無理なわからぬ御願ひでは御座いますが私共の生活の道を開きこの生活苦からのがれます様御導き下さいませ。(安藤かよ子氏よりの來信、原文の儘)

五六年來の病氣は本を讀むだけで治つたけれども治らぬのは經濟難生活難だと云はれるのであります。上海で經濟難を嘗めてゐられた久保田氏は「生長の家」の神の神威に觸れて無薬で胃潰瘍を治し、爾來靈感的に心にきざすことが悉くトク／＼拍子に行つて、戦亂の中にも、却つて戦亂前よりも經濟的に恵まれ、今や洋々たる希望の光の中に新しい活路をひらくべく邁進してゐられるのであります。「生命」は邁進のうちにこそ生き甲斐があるのであります。成敗は問ふところにあらねども、物質界は「生命」が投じたる影なるが故に、「生命」が光のうちに邁進すれ

ば必ずや好い結果を生ずるに相違ないのであります。久保田儀藏氏の三月十日附通信には、
「小生等一家は相變らず無人に近き殆ど空虚と化した住宅地に旭旗を門口に立て、居据つてゐます……神様の御指示により行動すると云ふ觀念のもとに一切の危害を度外視して平和裡に暮してをります。昨年春は一度でよいから何とかして御茶漬で御飯を頂きたいと思つた程の胃潰瘍が、今日では鹽魚でもあるときは三杯半も食べて家族のものを驚かしてをります。事件中は避難もせず敵弾も恐れず掠奪も放火も受けず、然も悲觀の絶底にあつた病氣が約一ヶ月で重湯より粥へ粥より米飯へ變つて食事は全く普通になり、身體もめき／＼肥え太つて參つた事を思つて誠に生長の家の神様の御蔭を感謝感激せずには居られません。勿論毎月幾圓と支拂つた薬も一口も飲む事もなく……尤も最近全く甘黨と化し、過日も餅菓子十五個一度に食して人に驚かれ家族のものに叱られた次第ですが、そんな時には誠に勝手なもの更に痛みは生じませぬ様な次第で、友人も家内も小生の健康體になつた事には全く驚き悦んでをります……身體をなほして頂いたこの勢で一つ事件後の活動に處しても物質にも恵まれ、必ず運命を開拓して行く、否必ず目的が貫徹されると云ふ確信をもつて意氣軒昂事に處して參るつもりであります。」

眞理の力で病氣が治る、病氣が治つたならば、同じ眞理が經濟難、生活難をも治して行くのであります。此の眞理が愛の神、智慧の神、救済の神として人格化して現はれ給うたのが「生長の家の神さま」なのであります。この眞理を生きて行くところに神の守りが生きて来て病氣もなければ經濟難もないのであります。さきの久保田氏は此處に目覚めようとしてゐられる。安藤かよ子さんは目覚める前に、暫し恐怖のために、本當に明るい前途を見る目を閉ぢてゐられただけの相違はあります。どちらも眞理の悟りで肉體の病氣が治つたのでありますから此の悟を突き抜いて行くことによつて經濟難を突破するのも今一息の所なのであります。私から安藤さんへたゞ眞理を開眼するだけの何の奇もない一通の手紙を差上げましたところが既に光の前にゐながら、光の眩しさを恐れて眼を閉ぢてゐられた安藤さんの心の眼がひらいたのであります。三月二十六日附の禮狀には次のやうなことが認めてあります。

「御親切なありがたい御手紙嬉しく〜繰り返しく〜拜見いたしました。聖典「生命の實相」をよむ様になつてからおぼるげながらも眞理がわかり光明を見る事が出来る様に覺えますが心の内から内からとまたしても暗い影迷ひの心におそはれ苦しみ通して心の結ばれのとける暇も御座いませんでした。先日先生からの御手紙一字一句と讀んで参りますうちに自分なが不思議な程頭から胸と體全體が清水にきよめられた様な云ふに云はれぬすが〜しい感じに打た

れました。其利那思はず心の中でごゝだと叫びました。今迄何年となく苦にした財政整理も矢張りみれん執着、餘りにも他に頼り過ぎた爲でした。やらなければならぬものはやり、當然奪らる可き物は何によらずとらしてやりませう。今はもう何もおそろしい事がありませぬ。この四五日本當に朗らかな気分になりました。これも偏へに生長の家の先生のお蔭と心から深謝いたします。財政整理斷行いたします。そして無盡無限の自己の力を信頼して更生の道へと進み、凡て神にゆだね如何なる苦勞もよろこんでうけませう。何卒今後とも宜敷御指導下さいまし。主人も誌友の一人になつて居ります。先生からの御手紙拜見いたし大變よろこび以前と變つた別人になりました。生來短氣な人で少しの事でもおこり時々家庭をくらくして居つたので御座いますが。私共もきつと眞の幸福を得られると信じます。先は亂筆にて失禮ながら御禮迄申上げます。

かしこ

斯う云ふ風に「生長の家」は經濟的に惱んでゐる者にも、本當に其の人が生きて行くべき眞理の道を示し、その正しい活路を拓いて人間を經濟的悩みから救うて逆も朗らかな明るい人間として更生させるのであります。生來短氣な人も短氣でなくなる。人間自身の「生命の實相」を自覺するからであります。此の吾が「生命」の神から造られたまゝの完全圓滿な實相を自覺する

ことが、大覺を開くと云ふことであつて何より尊いことであります。「生長の家」をたゞ病氣を治す治療所のやうに思つてゐられると間違ひであつて、此の大覺をひらかせることが目的なのであります。病氣を癒したいだけで、治つたら「生長の家」所説の眞理を離れて、また病氣になつたら直接治療なり、遠隔治療なりを頼む、治れば又去る。さう云ふ風に「生長の家」所説の眞理を醫者や按摩や、空き腹の飯のやうに思つてゐられる方は大變な見當違ひをしてゐられるのであります。そんな人は空腹時に「生長の家」の神様の啓示し給へる眞理を読んで見ても腹が脹れなかつたのに、今度は飯を食つて見たら實際に腹が膨れたなど云つて、「眞理」よりも飯の方がよく効くと思つたり、働いて汗が出たから「生長の家」所説の眞理を読んだら汗がなくなるかと思つて腹んで見たが一向汗がとれなかつた。で今度は風呂へ這入つて石鹼を使つて見たら却つて汗がきれいにながれて氣持がよかつた、だから「眞理」なんてもものよりも「石鹼」の方がよく効くなど、云つて見當違ひをせられたりするのであります。「眞理」と云ふものは米や、石鹼のやうに物質ではないのであつて大生命の根本智でありますから、異常の時には神姿とも顯はれ、敵彈をも近づけない楯となり砦ともなつては下さいますが、そんなことが「眞理」の本體ではない、それは假現であり、神縁ある人の信仰を高める非常手段として神の方便智が神通現象として現はれるので

あります。が、「眞理」と云ふものが本當に尊いのは、そんな所にあるのではない。吾々自身が「眞理」(神の子)であることが尊いのである。これを自覺したときに吾々は自由自在境に達し得るので何れも眞理を米の代りにたべなくとも米が欲しかったら米が集つて來、石鹼が欲しかったら石鹼が集つて來、健康が欲しかったら自分に適する健康法が自分の生活の中に自然に織込まれるやうになつて來、又或る時には求めるものが與へられないで、求めた以上に自分に必要だつたと後からわかるやうな結構なものが與へられて來るのであります。宇宙は全體で渾然とした一つでありますから、さう云ふ必要なものを何でも與へられることが神の攝理の絲にあやつられて自由自在に出て來るので、此處に個の力の我儘と云ふやうな自由自在ではなく。「全體の我」としての自由自在が體驗されて、そこに無限の安心立命を得、成る程「眞理の力は有難い」と解るのであります。此の「全體の我」としての自由自在」と云ふことが解らなければ一時は景氣がよくとも結局は行き詰つて了ふのであります。次章には「生長の家は何を信ずるか」と題して一層深く此の問題を説明しようと思ひます。

○生命の實相を信ぜよ。實相の神を信ぜよ。實相の神に結付く時、一切の罪は消える。實相の世界に罪は存在しないからである。(「智慧の言葉」より)

第四章 「生長の家」は何を信ずるか

「生長の家」の生き方とは、個々人のうちに、無限を意識し、日常の生活が無限の生命のうちに融かされ生かされ、無限の智慧に導かれ、少しの恐怖も、不安も、悲しみも、憎みも、嫉みもなしに生活する生き方であります。すべての心の不安、恐怖、憂鬱、取越し苦勞と云ふやうな精神的な苦痛は勿論、現實の病氣災難と云ふものも、吾々が神から離れることによつて起るのであります。神はすべてを支配し給ふのでありますから、吾々は如何にしても本當に實在せる世界即ち「實相世界」に於ては神から離れることは出来ないであります。併し、此の現實世界と云ふものは日本では古來から「映し世」と云ふ、吾々の「念」が影を投じて映してある影の世界佛敎で云へば念の假作せる化城の世界でありますから、吾々が神の創造と調和しない不完全な「念」を描きますと、現實世界即ち、吾々の「念」の假作せる化城界には不完全な状態があらはれるのであります。別の言葉で云ひますと、つまり吾々は何でも空想できる、神の造り給はないうやうな不完全な状態でも何でも空想できる、その空想が影を映してある空想の世界の幻が現實世界の病氣とか災難とか云ふものであります。此の、吾々の想念が、神の創造し給へるそのまゝ

の状態を念じますことを「正念」と云ひまして、その正念の影が映れば現實世界は完全な病氣も災難もない状態を現出するのであります。つまり「正念」とはあらゆる事物を神の造り給へる儘の状態その儘に念ずることで、さう云ふ正念をもつて生活することを神に結ばれた生活と云ふのであります。「正念」の反對に神の造り給はない事物——病氣、災難等、一切の不完全を、完全なる愛の神は決して造り給はないのであります。このやうな神の造り給はない事物を吾々が念ふことは、神の眞創造を「離れて」空想をありもしない事物に自由に飛ばすことでありますからさう云ふ念を「妄念」とか顛倒の念とか云ひ、そのやうな「顛倒の念」を以て生活することを神から離れて生活すると假りに云ふのであります。

現實世界は吾々の「念」の合作によつて成る一大化城（幻の世界）であつて、「念」と云ふものを活動寫眞のフィルムにたとへますと、現實世界はスクリーンに映つてゐる映畫の世界であります。普通の人は、此の現實世界を影繪の世界であるとは思はず、實在の世界に不幸や病氣が起つて來ると思ひ、影繪に膏藥を當てるやうな治療したり、改造したり、不幸から逃げ出したりしようとするのであります。これは本末を顛倒した話なのであります。

神と神の創造せる世界（本當に實在せる世界）の完全さを信じない人程氣の毒な人はありませ

ん。また、どんなに神を信じて、神を其の本當の相に於て知らず、現實世界が不完全なことの責任をば、神に負はせて、神が殘忍であるのだと思つたり、神は愛であるけれども力が足りないのだと思つたり、吾々が悪いから神が鞭打ち給ふのだと思つたり、神はまだ完成してゐないのであつて今後永遠の後に完成するのが神であると思つたり、神と云ふものが澤山あつて互ひに戰つてゐるのだと思つてゐるやうな人は、たとひ神を信じて本當の相に於て神を知らないのですから氣の毒な人だと云はねばなりません。

本當の神と云ふものはたゞ一つ——それは力が足りないこともない、愛が足りないこともない、吾々が悪いからとて神罰をあてると云ふこともない、と云つて吾々を悪いやうにも造つてゐ給はない(吾々が罪を犯すやうに見えるのは本當の相ではないのであつて、念の假作せる影であります)。**無限の力で、吾々と此の世界とを實に圓滿完全に神そのままの相に造つて下さつた神が本當の神であります。**これが、「生長の家」の大信仰でありまして、そのほか不完全な神や、力の足りない神や、日本の神や、外國の神があつて戰つてゐるなどと思ふのは皆な迷信に過ぎません。

しかし今迄、神は色々の相をもつて顯れ給うたのであります。時には色々の名稱を以て呼び奉

る日本の神々として、時には舊約のエホバ神のやうに怒りの神、嫉みの神の相をもつて、時には又、一旦萬人の罪の實在を肯定しておいて、萬人の罪にかはつて十字架にかゝると云ふやうな愛の相に於て、時には阿彌陀如來のやうに肉體死後の世界に於て靈魂をお淨土に救ひとつて下さると云うやうな相に於て、併し、今、神は「生長の家」に於てその全相が實に圓滿完全な其儘の相で顯はれ給ふたのであります。

まことに神は全實在の根元であり、全實在は神の展開創造でありますから、神を如何なる相に於て観るかと云ふことは、非常に大切なことであります。それは實に全實在を如何に観るかと云ふことになるのであります。創造の神を不完全だと観るものはその創造になる全實在を不完全に観ることにならざるを得ないのであります。そして此の現象世界は、吾々の心の觀念の投影せる影でありますから、神を不完全だと観る者の現實人生は不完全となるのであります。完全なる神が實在し給ふにも拘らず、完全なる神を離れて自由に空想を馳せて不完全なる神と、その世界とを想像する——これを神を離れると云ふのであります。

では、神から離れない人の人生はどうなるのであるかと申しますと、神の創造り給ひし完全の世界、調和の世界が「顛倒の念」と云ふレンズがないために、屈折せずに、眞直ぐにこの現象世界にあらはれることになり、この世界が、神の造りたまへるまゝに完全な調和した世界となるの

であります。

併しこの現實世界は、多數の生物の「念」の合作せる映畫でありますから、自分一個の「念」だけが「正念」を把持し、正しく完全の神をあがめ、自分と世界を、神との正しき關係に於て觀じるやうになりますと、此の現實世界はどうなりますかと云ひますと、「顛倒の念」の映つたところは、不完全の状態をあらはし、「正念」の映つたところは、周圍が如何に混亂状態を呈してゐるやうにも、その部分だけは、混亂の這入る餘地のない調和ある状態を現することになるのです。

このやうな事は事實の上に於て實證されなければ、單なる空論に過ぎないのでありますが、事實の上に於て實證される時は反駁の餘地がないのであります。本書の前數章に於て紹介しました上海嘉眞洋行主、久保田儀藏氏が、附近一帶砲彈の損害を受けない家屋は無い中に、たゞ氏の一家のみ硝子一枚すら破れなかつた奇蹟の如きは、實にこの眞理を實證してゐるのであります。

或る人が本當の神を完全なる其の全相に於て認め、その神に一致しますときは、神の造り給へる世界そのまゝの調和ある状態が其の人の關する限りに於て實現し、其の人がたとひ戰亂の巷、砲彈雨注の下にあつても、砲彈の方から避けてとぶのであります。前章久保田儀藏氏の奇蹟の如きが久保田氏のみに於て起つたのであつたならば、或はこれは偶然かも知れないが、さうでない。

久保田儀藏氏に起つたと同じ奇蹟が他にも戦亂の巷に於ける「生長の家」誌友に起つてゐるのでありますから、本當の神をその完全なる全相に於て崇め、本當の神に結ばるゝものは火も又これを焼くこと能はず、彈丸もこれを貫くこと能はずと云ふ眞理が更に重ねて實證された譯であります。私はその事實を茲に書くよりも、昭和七年四月十三日上海支部鈴木友二郎氏より來つた實物の手紙をその儘再録することにする方が現實味があつて好いと思ふので次にその原文を掲げるところに致します。

「拜啓、今日久保田(儀藏)君來訪、大層お喜びで、御會心のおはなしを伺ひました。信仰と體験とを結びつけて、實生活が裕かに恵まれつゝある靈肉向上の有様を拜見しました。

「今宵は雁金君が御來訪せられた。「生長の家第五號を讀んでたまらなくなつて會ひたくなつたゆゑ、昨日から來たくつて、來た。」と云はれる。

「雁金君は上海郊外、陸戰隊本部所在地點を距る僅かに一丁餘の日本郵船會社々宅大建築の二階に住居せられてゐます。舊臘、陽光さす東南の室より、中央部北向の室に移られた節は日光が乏しいと不満足之感があられましたが、室の便利や、厨房や厠房や家族室の配置が好いので移られる氣になられたのです。が、私が被ひ淨めをしてあげる迄は一沫の不安を覺えられてゐ

たらしかつた。

「ところが日支戦闘開始と成り、二月二十八日御家族五名は社命により長崎へ引揚げられました、家財は全部そのまゝに室に置据ゑにして、そして御主人(註、雁金君)は會社の樓上に團體生活をなしつつ、社務に執掌せられてゐたのです。やがて十九路軍の巨弾は飛んで来る。陸戦隊本部に二百餘數も落弾する。陸戦隊本部から僅かに一丁餘の日本郵船社宅にも無論落弾する。交通は鐵條網にて遮斷。着た切り雀の洋服だけで不自由なる日常の俄やもめの連中……ピアノだけは安全地帯に移搬したい。が、それも叶はぬ、まゝよ成行か。

「舊臘まで(雁金君が陽光を樂しんでゐた郵船社宅)の二階と、三階の隅々に巨弾が命中した。大きな穴が明いた。扉は壞たれた。もしそれが現在の雁金君の部屋に命中したのであつたら雁金君の大部分の財器も喪失したのであつたらう。

「一日、陸戦隊の司令部から交渉があつた。雁金君よ、君のお部屋は數學的に一番敵の彈丸が落下せぬ位置にある事を發見した。君の室が一番安全な地點である。どうぞ、そこに觀的所を拵へて敵砲の所在を測定することにしたのだ。機密書類をその室に保留して置くことにしよう……と云ふのだ。何たる不思議な事よ。斯くして雁金君の家財は一品をも損傷せずして終末

まで保全せられてあつたのであつた。

「今宵この事を兩人と重ねて咄合つて神の配慮の測り知れざる周到なる恩頼に感激しました。

「雁金君と云ひ、久保田君と云ひ、生長の家の神様に新しい因縁と深い感激を結びつけられて

ゐられる。正金銀行の太期君は斷然醫藥を廢して「生命の實相」で病氣が治る。太期君の友人

酒井清君とは同窓の先輩であられる雁金君は深い思ひやりを以て太期君の幸運を歡ばれてゐま

す。東京電氣の川上範一君はまた久保田君の「日本精神の發揮」に拍手づけられて、歸國中の

令聞に「生命の實相」を更に一部購買して日々夜々讀誦すべき旨を申送られたとあります。一

波動いて萬波搖ぐの趣があります。

「三十五日間、上海の租界内に蟄居して毎日毎晩、砲彈の洗禮を受けた。初めには思はず知ら

ず頸を縮めたものでした。終りには砲聲のきこえぬ日は寂しくて物足らぬ心地がした。信仰に

安住した人達は平氣で大砲や小銃彈の飛來する地域の街路を歩行するが、結局砲彈が一發も當

らなかつた。近隣に落下しても不發であつたり、向ふ側に轉々して行く。科學的に砲彈の威力

を計算する人達は砲彈に見舞はれて甲地より乙地へ、丙家より丁家へと移轉避難する。滑稽に

も運悪く砲彈はその人の行く先き々に炸裂してゐる。自家の扉を閉ぢずに衣服だけで船に飛

乗つた人がある。親鸞上人ならぬとも死生の一大事に遭遇して始めて平生の覺悟がその効果を現はす。

「生長の家誌友たちは近々に會合して戰時回顧談を催したいと期してゐます。郵便取扱が支那側で放擲してあり、日本人の有志の臨時扱ひである折ゆる聯絡が取兼ねるので全部の集合が難かしい。取敢ず十數名で神樂觀をして現地に直面せる靈的の猛將雄士の心境を交互に披露したいと思ふ。誌友、森本宏君がパイロットとして暗夜の激流中に靈眼をもつてパイを認め劉河上陸して敵の背面を衝いた事などは戰記に特記せられてゐます……。」

鈴木友二郎氏からの此の手紙は、神に結ばれてゐる人たちが、唯、久保田氏のみに限らず、如何なる戰爭の混亂状態の中にも、如何なる彈丸雨注の下にも、自分の生活だけは彈丸をも災厄をも受けないことを立證してゐるのであります。その後の鈴木氏からの通信によりますと、尙一層興味深いのがあります。

「今日、久保田君宅を訪問したら隈元君が、第五號に感激して久保田君を尋ね初対面の挨拶と相互の信仰體驗談をかはしてゐた最中でした。隈元君も同じく誌友で久保田君と同様、砲彈は我が住む家に落下せずとの強い信仰の反映を一區域の住民に實證したことを話しました。信念なしに

避難から避難を重複してゐた〇〇〇學校の××教諭は實に久保君田の隣人として大した實物教訓をさすけられた一人でした。××氏が吳淞路に假寓するとそこに落弾、高女校に避難した晩、學校は三發の巨彈をくらひました。……云々」

不幸は神の創造でありませんが、それが如何なる種類の不幸にせよ假想の影である。人を傷ける彈丸も影であれば、病氣も影である。影は如何に濃くとも幾十億劫前からの影であらうともそれはたゞ光が空しいと云ふだけであるから、其處に一條の光が來れば、その光線の通る一條のところだけが、必ず明るくならざるを得ないのであります。吾々はたゞ、心を本當の神に結びつけ、本當の神からくる光の射し込む窓孔を自分の心のうちに造るだけで良いのであります。あとは自然に動きたいまゝに動く。部屋が變りたくなれば變るが好い。その部屋には彈丸が落下しないで、陸戰隊から機密書類の保管室としたいと申込んで來るほどになるのであります。道を歩きたくなれば歩くが好い。その道には彈丸が落ちて來ないのであります。脚下寸尺のところへ落下した彈丸でも不發のまゝで、反對側に轉けて行く。周圍が如何に暗くとも、光の行くところに暗はない、神に結ばれた人の行くところには不幸はないのであります。不幸を恐れる人たちは前途が如何に展開するかと云ふことが心配であつて豫言者の許に走り、

靈媒の許に走り、力の有限な靈魂が靈媒にかゝつて好い加減な自分考へを神託めかしく喋るのを、
 神様のお告げのやうに思つて、そのお示しによつて行動しながら依然として失敗を繰返し、不幸
 を繰返し、病氣を繰返してゐるのであります。本當の神は靈媒にかゝらない、本當の神は各人と
 全存在との内面にある内在的實在ですから眞信仰ある人の攝理の中に最も自然な姿に於て出て來
 るのだとは「生長の家」の説くところでありました。日本一の審神者だとある人が評した今井楳軒
 氏は、或る時、私に「靈媒に靈魂を呼び出して、色々の人間界の問題をきくのは邪道である、皆
 邪靈のすることだ——と斯う憑つて來た靈魂自身が靈媒の口で云ふものだから、靈媒に氣の毒だ
 った。併し實際こんなことは邪道だ。」と云はれたことがあります。鈴木氏の手紙に報道されてゐ
 る雁金君にしたところが、別に靈媒に何かの靈を呼んでその豫言を聞かれて、十二月迄住んでゐ
 られた東南向きの日當りの好い部屋から、わざと北向きの冷たい部屋に移つた爲に彈丸が當らな
 かつた譯ではない、たゞ自然に催して來る事情と、自然に催して來る氣分とにお委せになつたの
 である。その結果、不思議にも他の部屋には落弾しても、その部屋だけは砲彈が落下しなかつた
 のであつて、その部屋が數理上に砲彈が落下しない最も安全な部屋だと云ふことになつてゐるの
 であります。

私は靈媒を使つて或る「有限力の靈」を招靈して貰つて、その指示を仰いで、自己の前途にとるべき道を定めようとしてゐる人たちに、常に云ふことでありますが、「貴方は、その靈媒から、明日どの道のどの側を、家から何寸の位置を、何時何十分に通るべきか詳しく御きよになつたことがありますか？ そんな詳しい小さな點まで聞けないと被仰るならば貴方の運命は稻荷下げや、巫子や、色々の靈媒からの指示を仰いで見ても何にもならないではありませんか。道を歩いてゐても砲弾は落下する。自動車で走つてゐても其自動車が衝突して重傷を負つた醫學博士もありません。或る問題だけの指示を仰いで、本當に君達の運命を左右するものは日常の些細な萬般の事件から起るのです。その萬般の事件をことごとくそんなに一件一圓の鑑定料を支拂つて指示を仰いでゐられたら、毎日千圓の鑑定料を支拂つても尙安心出来る境地に達しないでせう。それよりも、貴方は萬事萬般どんな些細なことで自己の内からの催して導いて下さる本當の神にお頼りになりたくはありませんか。

此の「自己の内」と云ひましても、「肉體の内」のことではありません。肉體は本來「影」なのでありますから「影」のうちに「光」がある筈はない。「自己の内」と云ふのは自己の眞存在の奥底のことです。で、さう云ふやうに萬事萬般どんな些細なことをでも自己の内からの催し

て来る叡智で導いて下さる神——そんな結構な神があるなら、一つ靈媒に招んで見てその指示を仰ぎたいものだと言はれる方があるかも知れませぬが、靈媒にかゝるのは或る階級以下の靈であつて、本當の神は靈媒にはかゝらないのであります。本當の神は其の人が實相世界の造り主なる「本當の神」を知り、つくられたる儘の實相の「本當の自分」を知り、「本當の神」と「本當の自分」との間が完全な愛と智慧とによつて結ばれてゐることを悟り得た時にのみ、「内から」催して来る叡智となり、「内から」催して来る慈愛深き保護となつてあらはれ給ふのであります。それは實に、的と鐵砲とを正しく規ひ合はす如く、本當の神と、自分の心とを正しく照準するときに自然に「内から」射し込んで来る神の叡智の光であります。この光が正しく射し込めばそれが神の導きでありまして現象世界は「映し世」であり「影の世界」でありますから、自然に現象世界の吾々の一舉手一投足に調和ある状態が現ずる、これを一舉手一投足日常生活ごとごとくが神に導かれると云ふのであります。此の「本當の神」と「自分の心」とを正しく照準する——この事を本當の神を祭る(眞釣る)と云ふのであります。個々の靈界の靈魂たちを慰めるために供へ物をしたり、又その悟りのために經典を讀むのは是は慰靈でありまして又別のことであります。慰靈と云ふことは又別に意義があるので、生長の家でも皇室の祖先をお祭りし、又各自の祖靈

等の供養も怠らないのでありますが、本當の唯一眞神と自分の心との釣り合ひを眞直にして神の「叡智」と「生命」と「愛の光」を眞直に受ける——此の眞釣りとは別の事なのであります。祭壇や、お宮などを作つてそれを神との交通の座として拜む——かうして拜みますときには心が清まつて神と眞直に心が釣り合ふやうになり易いのであります、それは非常に結構なことであります、その拜むにしましても、本當の神と云ふものは如何なるものであるかと云ふことを、神を十全の相に於て理解して拜まなければ、神と自分とを完全に照準することが出来ない、神からの十全の神徳を此の現象世界にお受けすることが出来ないであります。神を祭つてもおかげがなかつたとか、神を拜んでもおかげがなかつたとか云ふ方は斯う云ふ方であります。

此の、神からの十全の神徳を眞直に射し込まして頂くに必要な條件であるところの、神を完全の相に於て理解した上で神を信ずると云ふのが「生長の家」の信仰なのであります。唯、何でも彼でも怪力だから信ずる、御利益があるから信ずる、靈力があるから信ずると云ふのでは生長の家の信仰ではないのであります。それで、神を其の十全の神徳に於て理解し、同時に神の創造り給へる「實在世界」の實相を理解して本當のおかげを得て頂くために、私は聖典「生命の實相」を世に贈り出したのであり、また毎月の「生長の家」誌を書いてあるのであります。吾々は「存在

の「實相」を知る心の眼を開くために聖典「生命の實相」や神誌「生長の家」のやうに眞理を書いた書物を、毎日數頁は讀まなければならぬ。普段は吾々の心は五官の世界の營みに忙がはしい、五官の世界の營みに忙がはしいければ「存在の實相」は五官では感じられないのでありますから、兎もすれば「存在の實相」を忘れがちになる、「存在の實相」——吾々の「生命」の實相——が魂の底に忘れられて了ふと、その「重大な忘却」が現實世界に影をうつして吾々の實生活が不幸なものになつて來るのであります。先日にも尼崎の尾長初枝さんが來られての話に、此の長尾さんが紹介せられた誌友で東京にゐられる方がある。夫婦とも生長の家の誌友で結婚された程の人であります。つい日常の生活が忙がしいものでありますから「生長の家」をお讀みになることを忘れられた。その内に心が退轉して、つひに昨年暮頃に肋膜炎にかゝられて病院に一ヶ月も入院されたのであります。一ヶ月も入院してゐてもまだ「生長の家」をお讀みになることを忘れてゐられたのでありますから、随分徹底した忘れやうであります。此の方が一ヶ月間入院して片側の肋膜に溜る水を一升位も醫者にとつて貰つてやつと其側の肋膜が治つたと云ふので退院されたのであります。暫くするとその反對の側の肋膜に水が溜つて來たのであります。毎度私が「生長の家」で説明してゐますやうに、物質的治療と云ふものは一つの症候を見えない世界へ押し込

んで、別のところで又或る症候を出さしめるものなのであります。病氣の轉位及び變形は丁度トコロテンを押出す機械でぎゆつとトコロテンを押すと、機械の入口にはトコロテンは無い代りに出口の所でトコロテンが色々の形に分れて出て来る——押し込んで別の出口で出す——これが物質的治療なのであります。此の誌友の肋膜炎も片側の肋膜から押し込んで、一時症状が見えなくなり、再び反對の側の肋膜へ出て来たのであります。併し此の時、此の誌友は幸ひにも「イヤ——私は此の頃「生長の家」を讀まなかつた。實際「生長の家」に病氣を治す力があるかどうか今こそ讀んでためして見よう」と思はれたのであります。それで「生長の家」を熱心にお讀みになられますと、今迄家業が忙がしいので、五官の世界に齟齬してゐて自分の「生命」の實相が忘れられてゐたのが、解つて來ましたので、今度は以前とは違つて短時日で急角度をもつて全快されたのであります。それで、その方は「これは「生長の家」と云ふものは實に有りがたい雜誌である」と始めて體驗を得られました。近隣の知人に腹膜炎で困つてゐる方があるので、「生長の家」を貸して讀ましておあげになつた。すると其のかたも數日のうちに快方に赴いて自分で錢湯へ入浴に行き得るやうになられた、それで自分の治つたのも偶然でないと解つた。こんな事情を詳しく書いて、此の誌友は「生長の家」を紹介して下さつた長尾さんに感謝の手紙を送つて來ら

れ、出版部の方へは聖典「生命の實相」を二冊一度に申込んで來られたのでありました。

此のやうに吾々は一旦、眞理を知り、生命の實相を知りましても、悟後の修養と云ふことが大切でありまして、そいつを怠れば退轉して來ることがあるのであります。そのために吾々は常に一方には眞理の書を読み、他方には「神樂觀」による體驗的自證によつて自己の生命の實相を忘れぬやうにする必要があるであります。其れは何も病氣直しばかりに必要なのではない、戦亂の巷にゐて彈丸に當らぬためにも必要である。戦亂と云つても上海のやうに本當の戦亂ばかりではない、人生は一つの戦亂の巷であるとも云へる。吾々は現實の世界に於ては常に戦つてゐるとも云へる、その戦亂の巷にゐて或人は傷付き、或人は傷付かないのは、上海の戦場に於けると同様、正しき信仰の有無によるのであります。誌友の中には一冊の「生長の家」一冊の「生命の實相」を二十數回も繰返し讀んで、讀む度毎に新しき眞理を悟ると云はれた方もありますが、文章と云ふものは餘り度々繰返し讀んでゐますと、兎もすればその印象に馴れて來て讀んでも感銘が薄れて來ることがあります。其のために同じ「生命」の實相が説いてあつても、信仰を深め、信念を高めるためにまた別の方面から新しい書き方で説いて欲しいと云はれる。生命の實相全集が全十巻もあるのはそのためであつて、熱心な誌友からは機關雜誌も毎月數回、或は毎週一冊づ

出して欲しいと云ふ要求すらあります。が、色々時間の都合もあり、現在は毎月一回「生長の家」と「生命の藝術」の二誌を發行してゐるのです。兎も角、唯物的、物理的、數學的に飛んで來る彈丸ですらも、信念によつて中らないと云ふことを「生長の家」は前述の通り實證したのでありますから、何らの情誼も假借もなく唯物的に容赦もなく吾々の生活に押し迫つて來る經濟組織の缺陷と云ふ彈丸でさへも、吾々は吾々の心の力で避けられる筈であります。同じ彈丸雨飛の中にゐても傷く人と傷かぬ人と出來る。脚下寸尺の所まで彈丸が幾度も落下しながら至て不發で傷かなかつたと云ふ誌友菱沼青年の如きもあれば、未炸裂の落彈が土に埋まつてゐるのを、塹壕を築くためにわざ／＼自分の鶴嘴の先でコツ／＼叩いて爆發して死んだ人もある。これで見ると彈丸と云ふものは向ふから飛んで來て吾々に當るのかと思ふと、土に埋つてゐる彈丸をわざ／＼掘起して當りに行く人もあることになつてゐます。戰爭もなく彈丸もなければ人間は死なぬかと思つてゐると、平和でも、一年に日本中で肺病で死ぬ人の數は上海や滿洲の戰亂で死んだ人の數よりも多い。それと同じ様に經濟組織が改つて「資本家の搾取」と云ふ毒彈をさへ人間が飛ばさなくなれば、人間は恐らく傷つかないであらうと思つてゐると、豈にはからんや、戦場の死者數よりも、平和で肺病で死ぬ人の數の方が多いやうに、經濟組織が變つて資本家の專制がなくなつ

ても、人間の心が變らない限りは、資本家に代る如何なる階級かど(或は如何なる個人かど)出現して、他の人間を壓迫し搾取し苦しめるに相違ないのであります。だから「生長の家」ではさうお目出度く外形の改造による救済力を信じないのであります。外形はどうでもよいとか外形を治さないといふのではない、心が治らなければ外形が治る道理がないと云ふのであります。心が治れば善い外形が思ひ付き、善い外形が、制度でも健康でも出て來るのであります。金さへあれば人間が幸福になれるものならば寫眞王イーストマン氏は數億の巨財を擁して自殺しなかつたでありませう。皆さんは逃げてても逃げてても其の行く先、行く先で、砲彈の洗禮を受けた前掲××氏の體験をお讀みになつたでありませうが人間の心が變らなければ一つの經濟組織から、他の經濟組織へと逃げ出して行つても、その行く先行く先で、また別の毒彈を、食ふのであります。心が變らなければ一つの病氣が治つても又別の病氣が出るのと同じことでもあります。形の毒彈!——それは人間の心が作つたものでありますから人間の心が改まらぬ限りはどの制度組織になりまして人も人間を傷ける巨彈の絶え間はないのであります。だから「生長の家」では一歩々々、一人々々の人間の心を改造して行くことを第一の念願とする。同志よ、同志を作れ、そしてこの人類光明化運動を燎原の火の如く野火の如く擴がらしめよ。社會は、日本は、いま、一歩々々絶大の危機

を孕みつゝ墜落して行く。社會は何處まで墜落し行くか、日本は何處まで墜落するか。盲目的に墜落するも改造するも危険である！ 茲に神の攝理として人生の燈臺が出現した！ それが神教「生長の家」であります。平和の中で病氣に罹らず、戦亂の巷にゐて砲彈に當らず、斯くしてみづから傷かず同時に周圍を光明化する道を「生長の家」は指示してゐるのであります。現在の經濟組織が如何にともあれ、また來らんとする經濟組織が如何にともあれ、現實世界は心の世界の顯現でありますから、人間が生命の實相を悟らず、人間の征服慾が、人間の我慾が、人間の復讐慾が、現實世界を操つてゐる以上は、其處に人間にとつての地上天國が實現すべき必然的理由がないのであります。では世界の改造運動に内より燈を照らすものは「生長の家」でなければならぬ。だから世界の改造家が若し切實に人類を愛し、本當に地上天國を此の世に招来しようと思ふならば、先づ生長の家に來り地上天國の雛型たるべき各自の生命の實相を「見眞」しなければならぬのであります。神の造りたまへる存在の實相に透徹し、その實相を雛型としてそれを現實世界に現はしてのみ此の世界は本當に地上天國となるのであります。我慾や見當違ひで改造々々と力んで見ても、各自の心に神の子としての生命の實相が見眞されてゐなければ、盲人の手引で多數の盲人を河中へ突落すやうにエツサ〜と改造の掛聲を掛けながら現在の人類を又別

の地上地獄へ突き落すに違ひないのであります。心が形の雛型となる！では先づ心に自己の生命の圓相を自證せよ、組織は自然に淨まるであらう。組織が淨まらなければ、心が淨まらないと云ふのは「戰場にあつて砲彈に當らないことは難かしい」と云ふに等しい。それは實例でも解る通り難かしいと思ふ者にだけ難かしいのである。心を淨めて地上天國の根本基礎を築き直しそこからこそ社會改造にも出發しなければ徒らに犠牲者ばかり多くして効果は少いのであります。戰場に出ても彈丸に當らないで敵を克服し得て根本平和を招來し得るに越したことはない。地上天國の建設にも出来るだけ敵彈の犠牲者にならない方が好いのであります。そのために先づ、神の子たる自己の心の力を信ずる——そしてこれを實證しつゝあるのが「生長の家」であります。既に病氣を征服し、戰爭には砲彈雨注の中にあつて當らぬことを實證し、經濟組織の缺陷の眞つただ中にあつてもその缺陷の彈丸を濳りぬけ得ることを立證した。すべての人間が此の「生長の家」の信仰に入るとき、人生には、誰も人生の彈丸に當る者がなくなる、即ち少しも犠牲なしに地上天國になるのであります。が、皆が「生長の家」の信仰に入ることが至難であれば一人でも「生長の家」の信仰に入ること多からんことを私は祈る。その一人は如何なる混亂の巷にあつても地上天國建設途上の人生の敵彈に倒された犠牲者とはならないのであります。

生
命
篇

生^{せい}
命^{めい}
圓^{えん}
相^{さう}
の
眞^{しん}
理^り

何故吾々が「生長の家」の扉をひらく時、醫術などでは到底及ばない驚くべき自然癒能が發揮されるかと申しますと、人間は本来、神の子としてつくられてゐると云ふ眞理を見出すからであります。人間の本質は神であり靈的存在である。「神なる人」こそ人間自身の實相であります。自由自在の靈性こそ人間自身の本来の面目であります。吾等の本来の面目は神本来の面目にひとしいのでありますから、吾等は自己の全存在の隅々までも完全であり、萬徳圓滿であり、自由自在で不惱不苦である筈であります。此の眞理を知ることには、人をして、あらゆる束縛から解放せしむることになりますのであります。而も此の眞理は、人の生命の實相に穿ち入る者には何人も知ることが出来るのであります。人の生命の實相に穿ち入るには之を靈的に理會する事が必要であります。頭で眞理を理會すると云ふことは眞理の周圍をどうどう廻りして眞理の外的なすがたを知るに過ぎませんが、靈的に眞理を理會すると云ふことは「生命」の實相そのものに全身全靈をもつて貫き入り力の本源をつかむことになります。全身全靈をもつて、生命の實相に貫き入りには、此書を頭で讀まうとせず、全身全靈で讀む、默讀する、朗讀する。目で讀み、聲で讀み、聲のリズムの中に自分を溶かし込んで讀む、そして靜かに端座して「神想觀」を行じ、行じ終つて動き出すとき神(愛)の生活を活きる、斯くする時、智慧と愛との揃つた生活が實現するのであります。

第一章 果して物質的治療は病氣を征服し得たか

あらゆる病氣と不幸とは、「心の迷ひ」の別名——否寧ろ「心の迷ひ」が形にあらはれたものでありますから、「心の迷ひ」を消滅させずにゐて、一つの病氣を、對症療法的に、その症候に對して施術なり藥物なりで攻撃して行きますと、一時その症候は消えて癒つてしまつたかの如き外觀を呈しますけれども、それは眞に治つたのではなく、暫く「心の迷ひ」が姿をくらましたのでありますから、やがてまた同じ病氣が再發して來るか、異なる病氣(大抵、一層重大なる病氣)に姿をかへて現はれて來るのであります。一般周知の實例をあげますと、痔瘻を手術すると、肺結核が急に進行して往々死期を早める事實があり、皮膚病を治すと、内攻すると云つて腎臟病を起す事實もあります。私の知つてゐる例にも胃病が治ると痔を起し、痔が輕快すると胃が悪くなる人があります。病氣と云ふものは護謨の袋に水を入れておいて、一方を押すと、そこは凹むかほりに他のところが膨れるのと同じで、吾々の心の袋の中に「迷ひ」の水を入れて置くかぎり、押へて凹ましておいても、必ずどこかで、その「迷ひ」が頭をもたげて來て病氣となり不幸となるのであります。

近頃、佛蘭西の大醫ルネ・アランデイ博士は、天然痘を豫防するために種痘を行ふと、天然痘には罹り難くなるけれどもその代りに、結核には却つて罹りやすくなると云ふ事實を指摘し「結核が奇妙にある一定の時期以來——天然痘の豫防法として種痘が一般に普及し、強制的に實施される様になつて以來、増加して來たと云ふ事實は疑ひの餘地なき事實である」と云つてゐます。

種痘による病氣の轉位は、必ずしも天然痘を防いで結核を起すと云ふだけには限つてをらず、眞理の悟りによつて病ひの根元なる「迷ひ」を脱する事をせず、藥劑又は注射又は種痘によつて一つの病氣を押へるときは、形をかへて結核その他種々の病ひとなつて其の迷ひが發現して來るのであります。

このことは既に十九世紀末から問題になつてゐまして一八八五年埃太利では其のウインナー醫學協會や報に千人中十四人の兒童の種痘のために腺病質となつた實例をあげてゐます。ついで佛蘭西ポルドーの醫師ピエロン氏は成人になつて人々が結核に犯され易くなるのは、幼時の種痘の結果であるとの論文を發表してゐます。さらに、これを和蘭に於て見ますと、最近勞働大臣ドクトル・スレトマケール氏は種痘の弊害を知つて、種痘の施術を全國的に中止せんことを會議に提出してゐるのであります。即ち一九二七年和蘭ヘーグに於て開かれた會議の席上、ホフマン博士

は兒童が種痘のために重大なる神經系統の疾患を起した實例百十八件を擧げてゐます。

最近もつとも問題になつたのは種痘は癌腫、心臟瓣膜病、嗜眠性腦炎の素質をつくり、或はそれらを續發せしめると云ふことであります。

英國政府ではこの問題について各所の委員會に諮問し終にその國際委員會がゼネバの國際聯盟の衛生部に開かれた結果、嗜眠性腦炎が種痘の結果であることが確認されたのであります。これは確認されましたけれどもその實例のパーセンテージが少いと云ふので、種痘を廢棄すると云ふ決定には遺憾ながら立到らなかつたのであります。

兎も角物質治療醫學は病ひを征服したかと云ひますと、醫學が病ひを征服してゐない證據に、醫學愈々旺んにして色々の治療法や醫藥が發見又は創製せられるのに正比例して病氣が益々旺んになつてゐるのであります。若し物質治療醫學が眞に病氣を根治し得るならば、醫學の旺んになるにつれて、病氣が漸次減つて行くべきものでありますのに、病氣は減るところか寧ろ殖えてゐるのであります。それなら物質醫學は全然病氣を癒し得ないかと云ひますと、さうではない。實際個々の病氣そのものは物質醫學の治療法で癒し得てゐるのであります。この事實を否定するのは、公平ではありません。そこで私は公平に事實を見詰めて、斯う云ふことを發見するのであり

ます。——物質醫學は個々の病氣は治し得るが、癒したと思ふ病氣は却つて罹病者の合計數又は、健康者に對するパーセンテージに於て殖えてゐる。此の「個々の病氣は治つても、却つて全體に於て病人は殖えてゐる」と云ふ事實は何がために起るのであるかと云ひますと、(一)は近代生活が物質偏重になり、人類の自然的な生活から遠ざかつた爲めであり、(二)は人間が靈なる生命であること云ふ信念——人間が神の子であると云ふ信念が失せてしまつて、たゞたゞ人間をば物質で組立てられた機械だと信ずるやうになつたためであり、(三)は藥物治療が、個々の病氣を一時は治す(本當は症狀を一時、不可視の世界へ押しやる)けれども、本當は治したのでないために又同じ顔を出して來る(再發)、或は別の數個の姿を裝うて顔をあらはして來る(病氣の分裂、増殖、轉位)からであります。

「生長の家」では藥物治療法を「迷ひ」をもつて「迷ひ」を制する治療法だと云ふのであります。病ひは神が創造らないから本來無い。無いものを在ると思ふのが「迷ひ」である。物質は生命でないから治す力が無い、治す力のない物質たる醫藥に治す力があるやうに思ふ、だから「迷ひ」である。この二つの「迷ひ」は、根本は一つの迷ひ——「物質に生命あり」との迷ひから出發したのであります。此の一つの「元の迷ひ」から、人間は肉體と稱する物質だと思ふ「迷ひ」が

出來たり、治す力は物質にあると思ふ「迷ひ」が出來たりしたのであつて、この二つの迷ひの力が互ひに衝突して中和したやうな状態になる、これが藥物治療その他の物質治療によつて病氣が一時消滅したやうに見える理由なのであります。しかし、これでは甲の迷ひが乙の迷ひによつて中和したわけであつて、「元の迷ひ」が眞に消滅したのではない。だから中和してゐた二つの迷ひの釣合状態が破れると、すぐ元の病氣が再發して來るか、別の他の病氣に姿をかへて現はれて來るかするのであります。

泰西の名醫の諺に「藥物は一つの病氣を治すためにまた別の病氣を作る」(Medicine cures disease by producing another)と云ふ言葉があります。今日人間の病氣を治すと稱されてゐる化學的藥劑は無慮數千に達するでありませうが、その殆ど凡てが毒物であつて、それを少しく濃厚にして生活體に觸れさせれば、その生活體に病的現象を起すものばかりであります。何故、毒物が藥になるかと云ふと、毒は要するに毒であつて、少しも生活體に好影響を與へないけれども、治す藥を與へられたと云ふ安心によつて、自然の生命力が順潮に喚び起されるのであります。即ち「藥物に治す力あり」との迷ひによつて、病氣を恐怖する「迷ひの心」を鎮めるからであります。だから心を平和にしさへすれば藥物を與へない方が毒を與へないだけ一層効果が多い

のであります。ルネ・アラン・ド・カステラ博士も「疾病を自然の成行に放任して置いたら其の爲め藥物治療法を施したやうにはズン／＼治らなかつたゞらうと斷言出来る場合は殆どない」と云つてゐるのであります。これでも判る通り、病氣と云ふものは治る病氣なら、ほつて置いても必ず治る、否却つてほつて置いた方が早く治る位で、藥を飲んだために、却つて藥毒に打ち勝つために人間の生命力が分散されて治りが遅くなる位のものであります。

現に紐育衛生病院院長チャールス・タイアール教授は服藥無用論をとなへて、たゞ物理的療法によつて人體の新陳代謝を促進することによつて多くの病氣を治してゐる人でありますが、「藥は病氣を治さない。それは自然の治療機能を補助しないばかりか、それを遅らせるのである。藥はあらゆる病氣にとつて治癒的効力をもつてゐないばかりか、増悪的影響をもたらすものである」と極言してゐるのであります。

その他にも無藥の方が生命自然の治癒力を一層完全に發現させると云ふことに賛同してゐる醫學者も多いのであります。紐育メデイカル・カリチの教授ピ・エフ・パーカー教授も自分は最近、猩紅熱と麻疹とを無藥で治したと醫科の學生に對して其の實例をあげて講義したと報告されてゐるのであります。

無藥却つて肺炎に有効

嘗て米國アラバマ州の名醫エームズ博士はニュー・オルレアンの「内外科醫學雜誌」に己の臨床上の經驗と觀察とを公表して「肺炎の治療に於て普通の藥物治療を用ひた場合は、却つて患者は苦痛を訴へ、病氣を増悪し、治癒を完全にすることを遅らせた。かゝる患者は突如衰弱したり、餘病を併發したり、快方に赴いたやうな徴候を見せつゝ、突然死の轉歸を見た」と云ひ、肺炎の治療に甘汞、アンチモニー劑等を用ひて死せるものにつきその死體を解剖せる所見によれば胃及び小腸に致命的な炎症を起して、藥物中毒の徴候歴然たるものがあつた。で、かくの如き劇烈な藥物を排して、單に自然療能を喚起するだけの溫和な治療法を行ふやうになつてから患者は決して餘病を併發しなくなり、死の轉機を見るもの一人もなかつた」と告白してゐるのであります。

醫療却つて自然療能を攪亂した實例

エール大學醫學部教授のウイリアム・チューリー博士の講演筆記によりますと、嘗てコネチカット河附近の部落にチブス性肺炎が流行して醫者にかゝつた患者はすべて死亡し、醫者は患者を治してゐるよりも殺してゐるに相違ないと思はれるやうな外觀を呈したことがありました。實

際その部落の住民は醫者こそ吾々の病氣を悪くするものであると云つて擧つて醫者の治療に反對し州の法規にも拘らず醫療を拒絶するに到つたのであります。「ところが、その部落の住民が斷然醫療を受けないに到つて以來」とチューリー教授は云つてゐます——「患者にして死の轉機を見るものは全然無くなつた」と。實際醫者にかゝるがために自然の治療能力を極きみだして、全快の時期を遅らせる實例は實に多數あるのであります。

安靜二ヶ月を宣告されし肋膜炎患者三日目に入浴す

先日も私の勤めてゐた會社の女事務員が魚崎の岡田博士にかゝつて「肋膜炎で三ヶ月間の安靜加療を要す」と云ふ診斷を受けたのであります。その診斷を受けるまでは其の方は自宅から醫院まで十數町の道を平氣で歩いて行つたのであります。その診斷を受けると、もう歸り途には歩けない程の疲労を感じて乗り物に乗つてお歸りになつた。三ヶ月も會社を休むと會社は解雇になる、その上それほどの治療期間を要する程の病氣ならば餘程の重症に相違なからうと云ふ氣になる、心が暗くなり前途が暗澹として悲しくなる。それで其の方は其の醫師の診斷を受けて以來、私が見舞に行くまで一日半ほどの間泣いて、唯さへ肋膜炎だと診斷された其の胸をキューと引縮める思ひをしてゐられたのであります。ところが私が其の病人を見舞に往つて、心の法則を

語り、人間の生きる力の神祕を語り、どうせすとも病氣は治らざるを得ない眞理を語り、話だけで病氣の治つた實話などをしてゐますと、その方は、次第に心が明るくなり、朗かな笑が心から出るやうになつた。私は物質的薬は與へないが、心に薬を與へる、だから醫者が三ヶ月で治ると云つた病氣なら一ヶ月で治ると約束して歸つた譯でありました。この患者は三日目に入浴して疲勞せず、一週間後には醫師が病患のあつた肋膜炎は左側であるか右側であるか、判断に苦しむほど治つてゐられたのであります。

私は敢て此の種の診断を下して患者を意氣沮喪させる醫者に問ひたい。その患者は肋膜炎であつたかも知れない、あなたの與へる薬は肋膜炎を治すと認められる薬かも知れない、併しあなたが患者に與へた精神的打撃は、その投薬の治す力の数十倍も病氣を増悪する効力を有つてゐるものなのである。心で病人を殺しつゝ、薬で病氣を治すと稱しつゝ、多額の薬代や治療費を徴收して儲けてゐるのが心の法則を知らない庸醫の常套手段なのですから、米國コネチカツト州の住民と同様に、斷然醫療に反對して立つたときの方が、却つて病氣が長びかず、死亡することが少くなるのであります。併し心の法則を知る名醫は既に其の間の眞理を知つてゐて、心にも精神的光明の藥劑をのましてくれるので、斯かる名醫にかゝるのは其の限りではありませぬ。

人 工 難 産

醫學博士柏原長弘氏は昭和七年一月二十七日JOBKから「人工難産」と題して「醫者や産婦が、産婦や家人の意をむかへんがために、しなくても好い處置をするために難産を起すことがある。少し自然にまかせて待つてゐれば易々と生れるであらうお産を、注射薬や機械の使用で、却つて恐ろしい結果を招くこともある。これらはまさに人工難産であると云つてよい、現代文明の進歩はあらゆる方面に人工又は人造が自然の力に代りつゝある。人絹、人造肥料、人造ダイヤ、人工太陽燈、人造人間等々まことに人智の進歩は驚く可きものがある、醫學に於ても勿論、科學知識の極致をつくして人類の病苦を除くことにつとめてゐるが、決して自然の力、微妙なる自然の力を無視してはならない。素人も醫者もまだく自然の力に及ばぬ人工を濫用して、かへつて不幸をまねくことのないやうに心掛くべきであらう。」と警告してゐられるのであります。「自然の力」とは取りも直さず「生命」それ自身の生きる力であります。内部に存在して、最も吾々の病氣の症状をよく知つてをり、どんな人工も及ばぬ自然力で適當の處置をとらうとしてゐる生命自然の力があるのに、外部から辛うじて、聴診器やレントゲンで覗いて見て病氣を推断する不確かな醫者により、多くの場合に於て必ず治すときまつてゐない特效薬でない薬を處方され、その

薬の作用を、生命の自然の自療力に干渉せしめますから、自然療能は攪亂され、生命力それ自身の最初の計畫に従つて療能をつゞけることが出来ず、治癒の経過は長びき、人工難産は勿論、人工難病、人工慢性病、人工死亡等を起すに到るのであります。

早期破水者の自然安産

先日も、若し其人が「生長の家」の誌友でなければ危く人工難産を起すところでありましたが「生長の家」所説の眞理を知つてゐられたが爲に、自然安産せられた例があります。その方は私が二三回無痛分娩の暗示をしてあげた方でありましたが、不幸にして早期破水をせられて、出産の時に胎児が迂り出るための潤ひがなくなつたのであります。そして早期破水をしてゐられながら、無痛分娩の暗示がきいてゐるので、破水後約一晝夜にわたつて何らの痛みも起さないうで、破水したゝめに、却つてお腹がラクになつたと本人は云はれる程であります。醫者は破水後長く産氣を催さないのでは陣痛を促進する注射をしなければ胎児が弱ると云つたさうであります。併し、私は注射などと云ふ不自然なことをして出産を早める必要はない、破水してゐても、自然のハタラキで必要なだけの羊水は残つてゐる、自然は醫者よりも取るべき處置を一層よく知つてゐると云つて注射に反對して置いたのであります。ところが此の方は逆産をせられたのであります。

産口の潤ひとなる羊水が乏しい、それに逆産であるから、非常な難産であると豫想されてゐたのであります。眞に産氣づくど僅か三分間にして安産されたのであります。その逆産が、逆産と云ふと頭から産れ出ないで逆に出るのであります。足から出て、片足などが出ると危いところ。自然の働きは微妙なもので、臀部から産兒が二つ折になつて生れたのであります。此れは海老兒と云つて伊勢蝦のやうに二つ折であるから、胎兒の太さが普通の二倍になる、それに羊水の潤ひがないのであるから普通の逆産よりも難産だとせられてゐるのですけれども、本人はそんなに苦しめないで僅か三分間に生れ出た。たゞその時少し産口が開きすぎて少しばかり産口に傷が出来たに過ぎなかつた。醫者はその傷を縫ふ時には分娩時に痛さを怯へてゐたほどの勇敢な婦人でも泣いて苦しむほど痛い急所ださうであります。醫者が針を通してウンとシヤクルやうにして糸を絞めても本人は少しも痛さうな顔をしなさい。これは辛抱強い婦人もあるものだ」と醫者は驚いたのであります。産婦は「辛抱も何もしてゐない、ちよつとも痛くないのです」とケロリとしてゐられた。無痛暗示で痛覺がとつてあつたからであります。假りに此の時、醫者の勧めに従つて陣痛促進の注射をして不自然に早期に陣痛を起してありましたならば、それは不自然であるから自然ほどには息みが足りないで産氣づいても分娩に暇どつたでもありません。分娩に暇

どれば逆産だからと云ふ恐怖も焦りも伴うて来て、終に機械で引張り出さねばならぬやうにもなつたのでありませう。殊に重大なのは胎児の分娩時の體位でありまして、それを自然の時期に放任したからこそ逆産では最も適當な位置臀部から出たのでありまして、自然の時期が來ぬ中に注射で人工陣痛を起して産期を早めてゐたならば、その時の胎児の位置は必ずしも同じ位置にゐないので、胎児は時々手足を伸ばして體位を換へますから産期によつては或は片足などが先に飛出して來て、眞に人工難産を起したかも知れなかつたのであります。慎むべきは不自然な注射で産期を早めることであつて、どこまでも自然は醫者よりも名醫なりと云ふことを知らねばなりません。

フランス
 佛蘭西アカデミーの生理學及び病理學部長として長期間令名を馳せてゐたマゼンデイ (Magendie) 博士の經驗こそは實に興味あるものであります。博士は巴里病院の入院患者を三分してその甲クラスの患者には、現代醫學の發見せる普通の醫藥を服用せしめ、乙のクラスの患者には、普通の溫和な民間藥を處方し、丙のクラスの患者には全然藥劑を處方せず、藥と見せかけた澱物その他の無害無効の普通食品を處方したのであつたが、その結果はどうであつたらう、藥物を全然使用しなかつた丙クラスの入院患者は最も治癒の經過が速かで、溫和な民間藥を服用した乙クラス患者はこれに次ぎ、現代醫學界の公認せる醫藥を用ひた甲のクラスの患者ほど、その治癒が長

びいたのであつた。醫藥は自然の治癒機能を速めるか、妨げるかは、この實例によつて推斷すべきであります。

チブスの無藥治療に一人の死亡者なし

マゼンデー博士はまた或る時チブス病患者を二組に分けて、甲のクラスの患者には普通に醫藥を與へ、乙のクラスの患者には全然藥物を與へず、本能と常識との指示するたゞの衛生法を守らしめましたところが、醫藥を用ひたクラスの患者は普通チブス患者の死亡率即ち四分の一は死亡し、醫藥なしに單に衛生法を守らせたクラスの患者は一名の死亡者もなく快癒したのであります。此の實驗により、マゼンデー博士は、アカデミーの醫學生たちに講義して「諸君、醫藥と云ふ物は醫學にとつての一大矛盾的存在であります。」と云つたので、これは非常に面白い言葉であります。

大醫になるに従ひ藥の効力を信ぜぬ

また紐育醫學専門學校のアレキサンダー・エチ・ステイヴンス教授はかう云つてゐるのであります——「若き開業醫は社會に於ける最も前途有望な人達である。彼らは開業する當時は一つの病氣に對してゞも、二十種類位も新藥を備へて意氣揚々と出發する。ところが、三十年近くも

開業すると、二十種類位の病氣に對して、同様に一種の藥を投じて平然としてゐるやうになれるのである。臨床の經驗の深い醫者ほど、藥の効驗と云ふものに對して信賴しなくなつて、自然の力、生命の力に信賴出来るやうになるのである。」

自然の力——生命の神祕な力——これに信賴出来る人ほど幸福な人はないのであります。病氣と云ふものは、結局、自然をおろそかにしたことから起る不調和でありますから、人間が自然に歸れば治るのであります。それなのに、そこへ不自然な藥と云ふ便衣隊が潜入する、そして、あそここの領事館構内にも、こちらの共同租界にも狙撃が始まると云ふやうなことになりますと、自然の働きで不調和が治らうとしてゐるのが、却つて治り難くなると云ふやうな状態になります。

生命を病氣と藥とで夾撃するな

誰でも前後に二つの敵をもつて夾み撃ちにされたら、よほどの力強い「生命」でない限りはやられて了ふのであります。病人は一方に病氣と云ふ敵に受けてゐる、その敵に對して、好い具合に自然力で對峙して打勝たうとしてゐるのに、突然背後から生命にとつての異物（注射藥や普通の食用に供せられない藥劑はすべて生命にとつての異物であります）が、丁度、支那の便衣隊の

やうに侵入して来て、思ひがけない時に爆弾を投じたり、米國や英國と云ふ注射がやつてきて横合から干渉する、かう云ふことになりますと、却つて上海租界が混亂状態に陥つたやうに、人間の租界(即ち肉體)も混亂状態に陥つて來ざるを得ないのであります。そこで戦ひが紛糾してくる、ほつて置いたら一時は混亂状態に陥りましたが、早く平和に復するのであります。要らぬ國が干渉して來るとそれだけその混亂は長びくのであります、藥をいろ／＼取りかへ引換へ飲むと云ふことは此の外國の干渉が激しくなると同じことであります、吾々の「生命力」と云ふ味方の軍勢が「病氣」と云ふ敵に對して全力をあげて攻撃をすることが出來なくなり、そのために「病氣」と云ふ敵軍が増上慢を起して、結局治癒がおけると云ふことになるのであります。だから藥を飲む位ならば萬病一藥式な緩慢な皇漢醫方の藥の方がまさつてゐるのであります。洋藥をとらせるならば、肺病の初期から第三期まで重曹一方で押通す位ゐるの勇氣のある醫者の方が名醫である譯であります。だから新しいお醫者さんは學校を出た當座は一つの病氣に二十種位の新藥をたづさへて開業するのであります、長期間の臨床上の體験によりますと、心の作用で病氣と云ふものは重くも軽くもどうにでもなり、結局與へる藥は何を處方しても好いと云ふことになり、多種類の病氣に一藥を投じて悠然と構へてゐながら、その表情態度、又は話し

て聞かせる言葉で患者に安心を與へさへすれば好いと云ふことになつて來るのであります。それでステイヴンス教授が「醫者は學校を出た當座は一病に對して二十種の新藥を備へて開業するが、開業三十年になると、二十種の病氣に一藥で突き通すやうになる」と云つた言葉は眞理を穿つてゐるのであります。

紐育醫學專門學校のアロンザ・クラーク教授は、「凡ゆる藥劑はすべて毒性を有するものであるから、飲めば飲むだけ、患者自身の活力を減ずる」と申してをりますが、同校のジヨセフ・エム・スミス教授も「大抵の藥が血液中に吸收されて循環すると其の藥毒は、毒藥を服用したと同様の結果を來して、血球の活力を弱めるものである」と斷言してゐます。

このやうに目覺めた醫學の大家は醫藥が却つて病氣の治療を遅らせるものである事を口を揃へて言明してゐるのであります。それにも拘らず現代ほど醫藥の盛んに用ひられてゐる時代は人類の歷史上未だ會て見ない程に藥劑は濫用されてゐるのであります。製藥のために使はれる費用の莫大なのは云ふまでもありませんが、それを廣告する費用の莫大なことに至つては驚くべきものがあります。新聞の廣告面の大半は藥劑と化粧品化粧品の宣傳で埋まつてゐるのであります。都會では人家十戸位毎に醫院がある、これだけの國の富が効力不確かな藥劑の製造と宣傳とに費されてゐ

ると云ふことは貧乏な日本の國富を少しでも増加したい愛國心の上から云つても輕々に看過すべからざる問題なのであります。この點から觀ても、吾が神誌「生長の家」の普及は勿論現在着々計畫が進行中である「生長の家眞道場」の使命が如何ばかり大なるかは推察されるのであります。それは國富の生産力を有たない病者虚弱者を一變して、國富の生産軍の一員として動員することに於ける。それは病院醫院等の不快な建築に費される莫大な費用がもつと有用な費用に轉換出来ることになる。日本全國の醫院病院の數を半減して國民が一層健康になることを得るならば、その經費を振り向けるだけで、吾らは此の國家多事の時に際して數百臺の飛行機隊を作ることが出来るのであります。更に「生長の家」の説く人間無病の眞理が普及して藥劑の製造費廣告費等を不要に歸せしめることが出来るならば實に驚くべき國富の増進を得るに到るのであります。何事も元が肝腎でありまして、病的思想を振りまいて歩いて病人を製造しながら、その病氣を治すと稱する醫院、病院、醫師、藥劑の製造に多額の國富を費してゐるやうな事では何にもならないのであります。病的思想が無くなれば病氣が無くなる。病氣が無くなれば病氣の治療に要する一切の費用がなくなる。これは病氣を作つて置いて治す機關を建設するよりも一層根本的な働きであつて、病的思想を撲滅し病氣をつくらぬ神誌「生長の家」の普及や「生長の家眞道場」

の設立に、國家も、人類も、個人も、もつともつと全力を盡せば盡すだけ人類は一層幸福になり、そのために費した費用の數萬倍も人類を富ますことになるのであります。

薬を止めて治つた實話

こんな實話があります。先日、或る御婦人が、九州から神戸の方に嫁入つてゐる長女が妊娠せられてそのお産が間もなくあると云ふので態々當地へ來られたのであります。五ヶ月計り前に下痢した。それで醫者に診察してもらつて下痢どめを貰つて飲んだが少しも下痢がとまらないのであります。それで其のことを醫者に言つて一層強い下痢どめを貰つて飲まれた。すると、下痢は止まつたが、止まつたと同時にお腹が急に痛み出してたまらない、それで醫者はまた蓖麻子油をかけて、すつかり腹の内容を掃除して了つたのであります。ところがそのあとの下痢がなかなか好い具合に止らない。それから其の病氣が悪化したと云ひませうか、醫者が悪化させたと云ひませうか、下痢する——止める、止める——痛む、柔かい食物ばかりたべて、食前食後に消化劑を飲むと云ふやうなことを繰返してゐるうちに、貴女の胃腸は大變たゞれてゐるから重湯ばかり何週間も続けねばならぬと醫者が云ふ。やつと快方に向つてお粥位はたべられるやうになられたが、それからもう宜からうと思つて一度井御飯をたべたらまた大變病氣が悪くなつて、また重

湯とお粥ばかり食べながら消化劑を常に飲んでゐて、お腹が減ると痛む、食べるとゲツプばかり出てゐて下痢と便秘とが交代する。斯う云ふ病狀になつてゐられる方が、今度お産をせられる長女のところへ来て見ると、自分の娘は脊髄カリエスを煩つて妊娠したら危険だと醫者から宣告せられて、半年ばかり前娘を見たときには可哀相なほど衰弱してゐたので、その後娘からの手紙で娘が「生長の家」の眞理によつて非常に健康になつたと聞いてはゐたが、實際を見るまでは「それは嘘であらう、娘が親を心配させまいと思つて嘘を云つて來てゐるのであらう」と思つてゐられた。ところが會つて見ると見ちがへるやうに血色がよくなつて丸々肥つて來てゐる。一緒に風呂へ這入つて見られたときには、「マアお前こんなに肉がついて！」と云つて、思はず娘の背中の肉づきの好いのをたゞいて見られた位であつた。醫者に云はせれば「妊娠したら危い」と云つた病氣が妊娠して却つて健康になつてゐる、衰弱するどころか却つて肥えてゐる。「これは實に奇蹟だ！」自分の胃腸病も「生長の家」の眞理によつて癒やされるに違ひないと思はれた。私に會つて娘の健康になつたお禮を述べ、自分の病氣も治して頂きたいと思つて私のところへ尋ねて來られたのであります。丁度私は留守でありましたので、家内がその方にお目にかゝつて、藥劑の無用のことや、人間の生きる力が神から來ることや色々實例をあげて健康の眞理をお話し申上げた

のであります。ところが、その方は素直に家内の話す眞理を受け入れられて、それ切り、澤山お國から携帶して來られ、あつた藥劑を捨て、物質的根據による一切の養生法を拋棄せられて、與へられる一切の食物を喜んで感謝して受ける氣になられた。と娘が赤飯を食べたいと云つて拵へたので何の恐怖もなしにそれを茶碗にたつぷり二杯たべて見られたが、「生長の家」の説く健康の眞理を知られた其の方は、前の食事の時間までは、お粥ばかり食べてそれを消化劑で消化してゐながら、腹の具合が悪くて間斷なくゲツプが出て、毎日下痢して困つてゐたものが、ゲツプも出なければ下痢もしない、それ切り此の方の病氣は治つて了つたのであります。

私は此の話をあとで其の方自身から聞いたのであります。五ヶ月間醫師が凡ゆる藥を投じても癒えないでゐたのが一回家内がした話で、藥を廢して癒えた事實は、此の醫師と藥とが病氣を治すよりも悪くしてゐたと云ふ證據になるのであります。此の醫師は此の患者に對してどう云つてゐたかと云ふと「三年も氣長く服藥して治つた患者もあるのですから、半年位治らないからとて失望しては不可ません。」かう云はれて、當地へ來るときにも斯う云ふ病狀になつた時には此の藥を飲め、あゝ云ふ病狀になつた時には此の藥を飲めと深切にも澤山の藥を調合してくれられ攝生法を詳しく教へてくれましたので、この攝生法を忘れては可けないと深切な良人の方が毎日

一回はこれを讀めと云つて「十二ヶ條の攝生法」を寫して書いてくれた。それだのにたゞ一回の眞理の話を聞いただけでもうそんな攝生法が不要になつて了つたと云はれましたので、「もう其の十二ヶ條は改訂せねばなりませんね。それは健康になる十二ヶ條ではなくて病氣になる十二ヶ條だつたのでせう。」と云つて私も笑つたことであります。

心的要素を無視せる醫學は科學に非ず

これは實に醫學と藥劑と衛生法とに委せるよりも、一切そのやうな人工的非自然的な方法を廢して、ひたすら自己の神祕な生きる力に委せる方が一層速かに病氣を快癒せしめ得ると云ふ眞理の實例なのであります。此例は勿論ですが、前節に擧げた女事務員の例に於けるやうに醫師が三ヶ月安靜治療を要すと宣告し、その宣告によつて意氣沮喪して動けなくなつてゐる患者に一時間ばかり眞理を話したら急に解熱して元氣が出、三日目にはもう自由に錢湯で入浴し、三十町を徒歩で往復して疲労せず、一週間目に肋膜炎の痕跡を殆どとゞめない位になるのであつたならば、果して現代醫學と云ふものは一つの「科學」である事を當然の權利として主張する事が出来るでありませんか。私に云はせればこれらの患者は、醫師が最初診察したときに患者の病的訴へをそのまゝ肯定して、それに大袈裟な取扱ひをし、大袈裟な病名をつけ、大袈裟に投藥したゝめに、

患者の恐怖心を刺戟し、その心理的影響によつて病氣を擴大し、恐怖させずに自然的経過に委せて放置せしめたならば數日にして自然に消滅する症狀だのに肉體に藥と云ふ不自然なものを服用せしめ、心に恐怖と云ふ病的原因を注射しつゝ、單に物質的服藥と症狀との相互關係のみを記録にとつて、自分が患者に示した態度及び言葉の影響を考察せず、即ち有力なる原因となるべき一要素を閑却しこの藥はこの病氣に對してこのやうな結果をもたらすと發表するが如きは、これ果して科學的な醫學と云ふことが出来ませうか。科學と云ふものは全ての要素を考慮に入れねばならない。一回の對話だけで三ヶ月の病の経過を一週間に縮め、五ヶ月の病氣を一日に縮めることが出来ると云ふ實例がある以上、醫者が患者を診察するときに如何なる言葉を發したか、如何なる表情態度で患者を恐怖させたか、或は安心させたかと云ふことこそ、治病の原因的要素として記録にとり、それが如何に病氣の経過に影響するかを統計にとり、もつて如何なる言葉を如何なる病氣に用ひるが最も適藥であるかを決定する事こそ一層科學的な醫學と云ふべきであります。かくの如き科學的醫學を創始したのが「生長の家」でありまして、その出版部の發行してゐる聖典「生命の實相」や月刊雜誌「生長の家」や諸種の小冊子を読んで、それに書いてある眞理を心の中に飲んだ患者は、物質的醫學で治らなかつた難病が斷然物質的治療法を無視して治つてゐる

のであります。そしてまた、それに書いてある眞理をよく理解した人が他の人に傳へてあげれば、それだけで、物質的醫學の持て餘ました病氣が治つてゐるのであります。話をするには遠い所にゐられるために不便であれば手紙で其の「眞理」を書いて送つてあげても、それでも有効にそれは効くのであります。文字(又は言葉)にあらはした「眞理」の力と云ふものは實に不思議なものであります、其の言葉の調劑には一寸も祕密がないので、手紙で送つても、本に書いても、言葉で話しても、受ける方さへ反抗しなければ同じやうに効くのでありますから非常に科學的なのであります。

結核患者の妊娠の實例

先日も×市の或る所の御婦人から御手紙を頂いた。その人は肺結核を患つてゐられたが、大阪に非常に上手な心靈治療家があると云ふことを知人から知らされたので、上阪して一週間ばかり滞在してその心靈治療家から治療を受けられた。一週間後にその心靈治療家から「治つた」と云ふ宣告を受けて歸國せられた。一時は非常に元氣になられたけれども、暫らくすると、全快してゐなかつたと見えて痰に血がまじつて出るやうになつた。其の方は妊娠すると悪性の悪阻で、ご飯粒一つ咽喉を通らなくなるやうな常習のある方であつたが、それが生憎結核發病中に妊娠せ

られたのでありますから、醫師に相談すると、これは是非とも妊娠を中斷しなければ母體がもたぬと云ふ。唯さへ結核患者が妊娠しますと、體内の骨成分を胎兒に奪はれて結核に對する抵抗力が減ずるので病狀が悪化するのが一般の學說であります。その上に、惡阻で飯粒一つ食べられないとすると、榮養がちつとも採れないのでありますから、その患者の結核が増悪するのは當然のことである——これは人間と云ふものを或る種の物質的成分と物質的成分とで合成された物質的存在だと説明する唯物的醫學から觀れば當然歸趨する結論なのであります。だから醫者が妊娠の中絶を勧めたのも無理はありません。併し「生長の家」では人間を物質的存在だとは觀ないのであります。人間は神の子であつて靈的存在である。肉體は心の念のフイルムに従つて絶えず新陳代謝し動いてゐる影である。だから肉體の原型なる心の念さへ平和な調和したものになつたら、肉體は調和した相を現出すると云ふ見地に立つのでありますから、現在は結核でも妊娠を中絶しないで心の念さへ眞理を知つた平和な調和を得たものとするならば、結核であつても妊娠したままでその結核が治つて了ひ、却つて母體の榮養が妊娠の爲めに一層よくなつたと云ふやうな實例も「生長の家」誌友にはあるのであります。醫學博士柏原長弘氏の云はれたやうに「素人も醫者もまだまだ自然の力に及ばないので人工を濫用して却つて不幸を招く」ことが往々あり、結核で

人工流産をした、め却つて母體が衰弱して死を速めた例もあります。大體、母胎に胎兒即ち生命が宿ると云ふことは人工では到底出来ないこと——到底人間の計らひでは出来ることではないのでありまして、「生命」のみ「生命」を生み、「生命」のみ「生命」を養ひ育てることが出来るのであります。神が母の胎内に「生命」の種子を宿し給うたならば、神がそれを養ひ育て給ふのは必然であります。榮養が必要ならば神が母の口より入る食物を通じて必ずそれを與へ給ふ。榮養が胎兒にとつて必要なきに於て、その母親の口より食物の入らないやうにするやうな悪阻などを、神が創造り給ふ筈はないのであります。それなのに茲に、人間に此の不自然な悪阻と云ふものがあるのは、それは人間が、自己の生命が調和の神より來れることを自覺せず、一切のものが一つの神（全體を一つの調和ある状態に支配する力）によつて支配されてゐることを自覺せず、個々の生命は別々に勝手に相食み胎兒は母の肉體を食し、黴菌も母の肉體を食し、其處に自己の肉體を、恰も「生命」と「生命」とが相食み相戦ふ戰場であるかのやうな迷へる人間觀を抱いてゐるから、その迷ひの人間觀が客觀化して悪阻ともなり母體の衰弱ともなつて來るのであります。だから私はその御婦人に此の迷ひを破るために神想觀をなし、「胎内に宿つてゐる胎兒は神が宿し給うたものであるから、此の胎兒の生命は神が必ず養ひ給ふのである。だから神は必ず此の胎兒の

生命の生長に必要な榮養は母體の口を通じて與へたまふのである。母體が衰弱して了つたならば折角この胎内に宿つてゐる生命も生長の機會を失つて了ふのであるから、神は決してそんな不合理なことを爲し給ふ筈はない。そんな不合理は神から來たのでない、自分の「迷ひ」が映象を映してゐたのである。自分は今「迷ひ」の念を去り、生命は神が養ひたまふものであつて自分の身を削つて養ふのでないと云ふ眞理を知つたから、もう自分の胎内に子供が宿つたと云ふことにいつて何の恐怖も感じない。母體も胎兒も神の愛深き無限の養ひ給ふ力に抱かれて何の恐れもなく平和である」と心の中に數回繰返して默念して神想觀をなさるやうになさいと云ふ事を手紙で返事を書いてあげたのであります。すると、その御婦人からは、私の手紙が到着した日から不思議に吐き氣がとまつて食物がたべられるやうになり、其の附隨的功德としては今迄熱を出してゐた別の幼兒が、それと同時に解熱したので實に驚いてゐる——と云ふ意味の感謝狀を送つて來られたのであります。

愛の念波、手紙を媒體として届く

この話を今井樑軒先生にしますと、「それは手紙の内容をなしてゐる眞理の力もさる事だが治してあげたいと云ふ愛の靈波、眞理を書くときの平和な念波が手紙を媒體として其誌友のところへ

往つたからでもある」と云はれて、嘗て臺灣から送つて來た蜜柑に惡靈波が宿つてゐて、その蜜柑がつくと同時に今井先生夫婦が急にぞくぞく惡寒がしてマラリヤのやうな症状を呈したのを、その原因を觀破し、蜜柑に憑る惡靈を祓はれたら忽ち治つたと云ふ實例を話された。此の解釋にも無論眞理はあるのであります。類似の例を挙げれば、サイコメトリ (Psychometry) と稱する心靈術があります。これは特異の人にのみ出來る心靈術であります。此の心靈術を行ふ靈能者のところへ假りに一片の銀貨をもつて行きますと、先づ其の銀貨の最近の持主を言ひ當て、次第に逆に過去に遡つて、その持主の前の持主、その前の持主と云ふ風に次第々に銀貨自身の生活して來た周圍の狀態經歷を詳しく述べ、更に遡つては自己(銀)が鑛山に於て鑛石であつた時の周圍の狀態さへも述べるのであります。この事實は何を語るかと云ひますと、その一片の銀は過去からその銀が通過して來た周圍から受ける波動は一つ残さずその小い銀貨の幽質の上へ順次に鏡に映るやうに印象されてゐて其の靈能者は、その印象を最も最近のものから順次に讀んで行くことが出來るからであります。そのやうに人が或物品を取扱つた時には、其れを取扱つたときの其人の精神波動がその物體(これも波動的在存である)に印象されてゐて、其物體が單なる物理化學的性質以上の力をあらはすのであります。神社から下げて頂く護符やお劍尖もその

通りで眞に神官が淨まつた心を籠めて祈願した後お下げて頂いたものであれば、一見たゞの物質に過ぎない護符やお劍尖にも物質ならぬ神祕な神力の靈波が籠つてゐるものでありまして、護符を飲んで病氣が治り、彈丸が當つても守り札が身代りに割れてゐて本人の身は傷付かないやうな事もあり得るのは當然のことで、これは決して迷信ではないのであります。昭和七年二月の「生長の家」誌友の集りで聞いたことでありますが、名古屋の高等商業に平田と云ふ先生がある。その先生に十一二歳の坊ちやんがあるのでありますが、或る特定の毛糸のジャケツを着ると必ず轉んだり怪我をしたりするのであります。それで或る靈能者に毛糸のジャケツを持つて往つて鑑定を願つた。ところが其の靈能者が云ふには「このジャケツには此れを編んだ人の怒りの念が憑いてゐる、その怒りの念が障りをするのである」と云ふことであつた。よく調べて見ると、そのジャケツを編んだのは其の平田家の下女であつて今は大阪に往つてゐるのであるが、大阪の本人に問ひ合せた結果「あのジャケツは奥さんから幾度も叱られて急がせられたので、非常に腹を立てながら編んだのでした」とその下女が告白したのであります。つまり怒りの念靈がそのジャケツに憑依してゐて、怒つた本人はそんなことをもう忘れてしまつてゐるのに、本人とは獨立して色々の障りをしてゐるのだと云ふことが判つたのであります。

かう云ふ譯でありまして、一つの物質は、單にその物質としての物理的ハタラキ又は化學的ハタラキの他に、その物質を縁として吾々に波及して來る不思議な救ひの力(或は禍を起す力)を有つてゐるのであります。斯うなつて來ると、一服の散藥、一杯の水藥も、その物質的性質そのものよりもこれを調合する人の愛の念波、眞理の念波によつて、その藥が効いたり効かなくなつたりして來るのであります。調劑生が院長に非常に叱られて憤慨しながら調劑したやうな藥ならば如何に名醫の處方した藥でも、効かない所か却つて害を與へると云ふことになるのであります。此の點から云へば、調劑の仕事は、その物質的の見の如何に拘らず、愛と眞理と、物質とを縁として調合する最も神聖なる仕事なのでありますから、藥を調合するには愛と眞理とを知る醫師が「この藥を機縁として患者の迷ひが消えて、彼の健全なる神の子としての生命の實相が顯現しますやうに」と誠心から祈つて調劑してこそ、その祈りの靈波を飲んで一層よく効くのであります。

○憎みを放下せよ、病氣は治る。憎みを放下しても治らないのは過去の憎みの波動が残つてゐるからである。過去の憎みの波動を消すにはその反對の波動を心に起せ。

愛は憎みの精神波動を中和する。(智慧の言葉より)

第二章 生きる力の神祕

中畑——私は最近實に興味のある體験をしたのであります。私の知人に生氣術をやる先生がある。いつも生氣々々と口癖のやうに云つて家族ぜんたいに生氣術を實行させて家族ぢゆう無病であることを誇りとしてゐられた方ですが、この先生が最近病氣にかゝつたのであります。どうもその熱型が腸チブスらしいと云ふので、醫者も固型物を食べさせないやうにして、解熱劑も呉れない。さすがの生氣術の先生も熱と斷食とで弱つてゐる。私が此の先生を見舞ひに往きますと、先生が云ふのに「中畑君、君は色々健康法を研究してゐると云ふことだが、何か熱の下がる藥はないものかな。醫者が解熱劑を呉れないで弱つてゐる。漢法のよくきく解熱劑と云ふやうなものはないだらうかね。」かう云ふもんですから、私は「生氣術をやつたらどうだね、君はその先生ぢやないか」と云ふと、「ところが醫者から生氣術のやうな運動を差し止められて了つたのだ。生氣術は知つてゐても生氣術を行ふことが出来ないで弱つてゐる」と云ふのです。で、私は云つたんです。「生氣と云ふものは何も靈動とか運動とか云ふものばかりが生氣ぢやありませんまい。生氣と云ふものは生きる力だ。その自分に宿つてゐる生きる力にひたすら頼ると

云ふことが本當の生氣術だ。君は解熱劑がほしいとか漢法の藥が欲しいとか云ふが夫は自分の生氣をおろそかにした話ぢやないか。熱が上がるのは君の生氣が強い證據ぢやないか。敵軍が攻めて来る、それを防ぐためにこちらからも大砲を射つ、そこに砲煙彈雨の巷が出来る。それが身體にたとへて見れば熱ではないか、こちらの生氣がなくなつて、無條件で敵軍に降伏してしまつたら防戦の大砲も射たないし、熱も上がらない、熱が上がるのは君の生氣が強い證據でそれは結構なことぢやないか。寝ながらも、身體一つ動かさないでも、其のまゝで生氣術が出来る譯だよ。」かう私は冗談半分に云つたのですが、先生は非常に感じたらしく、「成る程君の云ふ通りそれこそ生氣だな」と云つて、その時から藥に頼ると云ふ心を捨てて了つたのです。ところが、どうでせう。其の晩それから間もなく何の解熱劑も用ひないで、寝巻を三度着かへた程發汗して、そのまゝ平熱になつて、腸チブスの疑ひもどこかへ飛んで了つたのです。これには醫者も吃驚して、「もう暫くこの熱は續く筈であつたが、君は一體どうして急にこんなに善くなつたんだ」と訊いたさうです。それで「實は昨日中畑と云ふ友達が来て、斯う云ふ話をしたから、成る程さうだと思つたら急に發汗して解熱して了つた」と云つた。「そんな事もあるものかなあ」と云つて醫者もしきりに感心してゐたさうです。これなどは確かに悟りで治るメタフ

イジカル・ヒーリングで、療法も何もなしに、話だけで治つた實例です。あの玉置さんなども矢張り十年來の便秘の痼疾が私が話をしただけで治つた一例です。

B ————どんな話をなさつたのです。

中畑——つまり「生長の家」にある通り、肉體は存在しない、肉體は心の影であつて、肉體それ自身が何らか自發的に一定の傾向を備へたものではない、肉體の傾向を指導してあるものは心であるから、夜眠りしなにでも心が亂れてゐたならば便秘することがあるのは當然である。眠りしなの心持を平和なものにして御覽なさい。屹度、好い鹽梅に便通があるやうになりませう。ただこれだけの眞理を私は一回玉置さんに話しただけです。すると玉置さんは今迄色々の宗教を求められて、あれでもない、これでもない、苦しまれた方だけにハツと悟られた。十年間、一週間目位に一度位しか便通のなかつた方が、それ以來毎日快便が出るやうになられたのです。

谷口——唯一回の話で病氣が治つたと云ふのではこんな實例もあります。P先生の孫に宮夫さんと云ふ幼稚園へ行つてゐられるお子さんがある。その方が二ヶ月前から咳が出てどうしてもその咳が止まらない。醫者に見せると氣管枝加答兒だと云ふ、その子供のお父さんは肺結核でなくなられたのだから、かう咳が長びいて、おまけに氣管枝加答兒だと云ふ恐ろしい病名を附せ

られたのだから恐怖心が起らざるを得ない。ある日、そのお子さんのお母さんが私の家内に途
 で遇つた。その時、その子供の話をして何とか治らぬものかなあと相談せられた。それで私が
 その晩その子供さんを見舞つてあげたのです。すると子供のお母さんは色々心配してゐること
 や、醫者が有名な大橋液の注射をしてくれたが、きかないことや、そこから三軒目に、神憑り
 になる人があつて、その人に、その土地の地主の神と稱する神が憑つて「自分はこの土地の地
 主の神の龍神だが、自分を祭つてくれたら、この邊一帶をよく守護して、子供に風邪一つひか
 せないやうにする」と云つたのださうです。神憑りと云ふと、すぐ有り難がる人達によくある
 ことでこれは是非近所で共同でお祭りせねばならぬと云ふので、近所三軒でP先生宅の横手の
 小路に半間四方位のお宮を建て、お祭りすることになつたのです。P先生とこでも、近所から
 神様のお宮を建て、爲に寄進をして呉れと云はれると、無下に反對する譯にも行かないので、
 いくらかの共同寄進をさせられた上に、一週間交替にそのお宮にお供への當番をすることに
 られたのださうです。ところがP先生は、御承知の通り靈眼のよくお見えになる方ですから、
 お祭りしたお宮の中を靈眼で御覧になると、地主の神と云ふ龍神はその宮に納まつてゐないで、
 三軒目に神憑りがあると云ふ人の憑靈——神憑りと云つても神様がお憑りになるのではなく或

る動物靈が憑つてゐるのださうですが、その動物靈の姿がP先生の靈眼に見えたのださうであります。神さまかと思つてお祭りして毎日の神饌などの當番までしてゐるのに、それが動物の靈魂であると云ふことになる、どうも神饌のお供へなどをする當番の役目にも誠が出ない——自分に誠が出ないと、誠なしに神さまのお供へなどの當番をしてゐると神罰が當りはしないだらうかと云ふやうな恐怖心が湧いて来る。それで、その御子さんが病氣などになると一層さう云ふことが氣がよりになつて来る。尤も、その神憑りになつて、地主の神を祭れと云つた人うちの子供が、妙なことには却つて第一番に激しい風邪をひいて咳がいつまでも止まらないで弱つてゐられるので、何が御利益だか判らないので、P先生にお伺ひすると「地主の神」を祭ると云つて其の實「地主の神」でもない下らない低級靈を祭つてゐるものだから、守護の力が無いのだと云はれましたが、そんなことがあるものでせうかと云ふやうなお尋ねなのです。そこで私は申しました。本當の神様と云ふものはお祭りやお供へ物を丁寧にするから守護するが、お祭りやお供へを丁寧にしないから守護しないと云ふやうな、そんな商賣取引のやうなものではない、神様と云ふものはお宮を拵へて貰つてその中に納つて、誰かゞ給仕をしてくれねばお腹が空いて苦しいと云ふ風な不如意不自由なものではない、お宮の中へ入れて、毎日の給

仕をしてくれるからその御禮に守護すると云ふやうなのは、或る種の「靈魂」であつて本當の神ではない。「靈魂」を祭ると云ふことゝ、本當の神を祭ると云ふことゝは異ふ。或る種の「靈魂」がお宮に祭つて貰ひ毎日のお供へをして貰ふためにその家や家族を或る程度まで守護することがあるのは、吾々が犬に棲む處を與へてやり、毎日の食事を與へてやれば、その犬がその家を守護し、家族を守護するのと同じことである。「靈魂」と云ふものは肉眼に見えないけれども、靈眼その他の方法では吾々個人々々と同じやうに個別的な姿をもつて存在してをり、各々我執をもつて存在し、喜ぶ場合もあれば、腹の立つ場合もある。喜ばれば守護もし、謝恩的に吾々をも助けてくれるが、腹を立たせたり、怨みに思はせれば逆に復讐的に吾々に害を與へることもあり得る。だと云つて、その害を恐ろしいと云つて、萬物の靈長たる人間がその他の靈魂に媚びる必要もない。と云つてもまた折角祭つてある靈魂を輕蔑する必要もない。それは隣りの家で犬を飼つてゐるからと云つて、その犬を輕蔑して足で蹴とばす必要がないのと同じことである。祭られてゐる靈魂は祭られてゐる靈魂として其れが動物靈であらうが其儘尊敬して丁寧に取り扱つてあげるのが好い。それは祀られてゐる靈を生かし、同時に隣りの人の氣持を生かすことであつて、そこに吾々の心の中に愛が生きて来る。この「愛」が神であつて、そこ

に本當の神が自分の心の中に祭られたことになる。神と云ふものは、此處に見よ、彼處に見よと云ふやうに肉眼でも鑿眼でも見えるものではない。見えるのは一個の差別的存在であるが差別と差別とが一緒に溶け込む愛と云ふ連結の中に神はゐますのである。本當の神と云ふものは差別を絶した全體であるから、吾々の行ひや心持が差別的な境涯を脱したら、その程度に従つて神がハツキリとあらはれるのである。そこに本當の神が生きてくれば、もう吾々は恐れする必要はない。どんな悪靈が崇つてやらうと思つても、自分自身が其の崇りの怨念の波長を受けるラヂオの受信機にならないからもう恐れる必要がない。何かを恐れると、その何かを受信しやすい精神波動を自分自身の中に作ることになるから恐れないうるしい。色々の靈魂を祭つてもあながち悪いことはない、たゞそれは本當の信仰の對象とすべきものではない、こちらの遣り方によつて怒つたり罰をあてたり復讐したりするやうなものを信仰の對象としてゐると、相手は肉眼で見えない「靈魂」のことであり、こちらから斯うして祭つてゐるのが氣に入つてゐるのか氣に入つてをらぬのか判らぬから常に神罰を受けるかと思つて戦々兢兢々としてゐなければならぬ。それでは信仰と云ふものが心の平和の礎とはならないで、心の不安の原因になつてしまふ。私も以前には〇〇教を信じて常に神のみ心に逆ひはしなうかと思つて戦々兢兢

競としてゐた時代があつた。一本の繩の帶、一枚の着物のほかに殆ど何一つ持たないほど物質を捨て、みづから稱して〇〇教のフランススだと言つてゐたが、それでも神が自分を赦してくれたと言ふ確信が有てなくて戦々競々として神の怒りの前にふるへてゐました。その頃私は身體は不健康、顔色常に蒼白で第二期結核にでもかゝつてゐるやうな調子で、家内も始終病氣であつた。それは今から考へて見ると、自分の恐怖心が自分及び家族の肉體にあらはれてゐたのでした。ところが、神と云ふものはそんなに自分の外にあるのではない、そんなに移り氣で怒つたり愛したりしてゐるものではない、自分と云ふものが神の子である、神の子であるから自分そのものがまた神である。他に神を求めるに及ばない、自分の内の神様を生かすやうにすれば好いものだと言ふ眞理を悟るやうになつてからと云ふものは、頼りにならぬ外の神様を頼りにしてその機嫌の善し悪しに從つて自分の運命がフラ／＼變化すると云ふやうなものではないと云ふことが解つたからソトの神さまを恐れる必要がなくなつた。自分の内の神様を生かすやうにするだけで好い、此の自分のうちの神様と云ふものはお供へのしやうが悪いとか、お經や宣詞のあげやうが悪いとかで腹を立てたり復讐をしたりする我執をもつた神ではない、どこまでも眞ん圓い圓滿完全な朗らかな神性であつて、それはその神性をみとめさへすれば、其の認

めることによつて、どれだけでも圓滿完全に顯れ出るものであることが確實であつて、時々御機嫌によつて御利益を興へたり神罰を興へたり色々變るやうな不確かなものでないと云ふことが明瞭になつて來た。この不確かなものを信じてゐると心が動搖し恐怖するから、私でも恐怖心で病氣になつてゐたが、確實な不動な正しいものを信ずるやうになると病氣が自然になつた。だから貴方でも近所のお堂に祭つてあると云ふやうな不確かな何靈か判らぬやうな頼りないものから御利益が來るとか來ぬとか信ぜずに、自分のうちに宿つてゐる本當の神様を信じてそれを伸びく／＼顯すやうにする、つまり自分のうちに宿つてゐる神性を信じてそれを出すやうにすれば病氣は治る。子供の病氣でも同じことである。子供に病氣が出るのは親の念の波動を子供が感受してゐるからである。親の神性を顯すやうにすれば子供の病氣は治る、神と云ふものは調和であり愛であるから、家の中に不調和な精神的争ひがあつては神と云ふものは顯れぬ——私はその奥さんの家にお姑と嫁との精神的争ひがあると云ふことを知つてゐましたから自分と精神的争ひのある養母にお腹を擦つて貰つた爲に盲腸炎になつた奥さんが養母と精神的に和解することによつて即座に治つた實例などを話しました。すると二ヶ月間氣管枝加答兒だと云つて惱まれ、さすがの大橋液でも治らなかつた咳がその夜のうちにピタリと治つたと云

つてお禮に來られたのであります。これなども一回の話で氣管枝加答兒が治つた例であります。それから暫くのちにまたそのお子さんが四十度からの高熱を出したので、その奥さんから、そちらから祈つて下さいと云つて使を遣こされた。私はその晩寸暇があつたので、早速見舞つてあげましたところが、奥さんは例の氣管枝加答兒が子供に再發したのだらうと云つて心配してゐられる、咽喉が大變悪いと云つてお醫者さんがお藥を塗つて下さつたが、それ以來咽喉が却つて痛いと云つて苦しむ、それでまたお姑さんがオキシフルの普通より濃いのを咽喉へ塗つて下さつたら一層悪いやうで今朝から食慾がなくてほんの少し、か食べないなど、云はれるのです。私が靈的に診斷して見ると氣管枝や氣管は少しも悪くない、たゞ鼻と咽喉だけが悪い、所謂鼻感冒と咽喉感冒とを引いてゐるだけであるから、何でもないすぐ治る、と話してから暫く祈つて平和の思念をしてゐますと、そのお子さんが突然大變氣むづかしくなつて泣き出されたのであります。何故泣くのだと云ふと「お腹が減つた。御飯が食べたい。」と云ふのです。今迄大病だと思つてゐた念が感應して熱を高め食慾を減じてゐたが、大病でも何でもないと云ふ私の言葉によつて熱が下がり、食慾が急に出て快へられないほど物がたばたくなつて泣けて來たのです。それ以來そのお子さんの病氣は治つたと云つて禮に來られました。親の念、醫者の

念、周囲の人の念——子供の心は念の波動を非常に感じやすいものですから子供を健康にするには周囲の人々の心が本當の神性を出すやうにすると云ふことが必要なのです。親や家人が神性を出して神性の波動を常に放散するやうにすると、その家の子供が自然に健康化されて来るが、神性で治つたのではない薬で治つたと思つてゐると又再發します。

B——中畑先生、先日「本當の信仰に入る座談會」席でお伺ひした御説の中の念の波長の感應の事でありますが、先生は人を知るのは決して目と耳とを通すのでない、相手の心の動き即ち念のヴァイブレーションを、こちらの心が感ずるのであると云はれましたが、その時は、さう云ふやうな氣になつて承つてゐましたが、あとで考へて見ますと、人を心で知るのは目と耳とに全然無關係とはどうしても考へられないやうになつて來ました。勿論目耳の感ずるところを、心が其の儘受入れるものでない、醜い容貌の人でも好い感じがもてたり美しい容貌の人でも悪い感じがもてると云ふやうな實例ではつきりして來たのでありますが、美しい容貌で良い感じの有てる人もある——これは目耳の感ずるところと心の感ずるところと一致せる場合には、共に之を自分の心が受入れ、目耳の感ずるところと、心の感ずるところが一致せぬ場合は、心は目耳の感ずるところに捉はれず己の心に映ずる所を探る働きのあるものであらうと心付きました

た。さう考へまして差支へありませんか。

中畑——あなたは實相と妄念との交錯する影に過ぎない所の此の肉體を、一つのどうしても必要

な機關だとお考へになるので、左様に思はれて来るのであります。今のお問ひは強ひて目耳も必

要であらうと云ふ考へに當飯めようとなさる結果、出て来る問ひであります。勿論目耳の感ず

るところと、心の感ずるところと一致せる場合には、併せて之を採るのだと云はれても間違の

ないところであります。而し一致せぬ場合には、心は目耳の感ずるところに捉はれないことが

お判りになつて居れば、結局心と心とが相照應するものである事は明白であります。併し

肉體の習慣の濃厚なため我々は被仰る通りの心の感ずるところと、目耳の感ずるところと一致

せる場合の確信の度は、たしかに心に感ずるところを採り、目耳の感ずるところを斥ける場合

より、高いところにあるのは事實であります。併し、眞理を申せば、全く私共の心は、相手の

心と直接感應し、其の間に何物をも容れないのであります。これは先刻谷口先生のお話になつ

た親の念の波動で子供が病氣にもなれば治りもすることでも判ります。貴方も又その心掛で御

注意になつてをれば體驗で自然御自得出来る時がまゐりませう。

B——病氣のお話の序でにお伺ひしたいのは、私共が外へ出て寒いと感じた時「風邪を引きはし

ないか」と思つたら、「風邪を引く」と云ふ潜在意識に集積した過去の念の「集積」を流動せしめて遂に風邪を引く、又靈的に云へば此の際「風邪の神」即ち悪靈波の感慥を招く。だから此の際反對に光明思念を起して「人間は神の子であるから、物質に害されるものではない。だから冷たい風に當つても風邪を引かない」と斷乎として思へば風邪を引かない。この「生長の家」所説の理論はよく解るのでありますが、私共は何にも感じもしない、何も思はない、即ち何の「念の集積」の流動も起さないのに、突然夜半に腹痛を起して下痢を催したり、又夜半苦しくて目醒めると、意外に大熱を發して居る様な事が時には大人にもあり、殊に子供などには頻りにあります。こんな時には豫め光明思念を起して病氣の發生を止めることが出来ない。これを念の集積の流動とか、靈の感慥とかで説明すれば、如何やうに解釋すべきものでせうか。中畑——風邪引きの例を挙げましたのは宿念の集積と、その「集積」の流動と、迷と、其の淨化との關係がよく判る様に例をあげたのであります。宿念の「集積」が流動するのは必ずしもいつも此の風邪の例の様に、はつきりと寒いと感じたから風邪を引くと云ふ様に、其の病氣まで判る様には來るものではありません。併し、人間本然の生命に正順な念は、飽く迄高朗明快なものでありますから、少しでも不快な様な、はつきりしない氣分が起る時には既に宿念の集積

の流動を起して居るのであります。大人に於ては複雑な念の交錯がありますから、病氣以外の原因でも不愉快な時、はつきりせぬ時は澤山ありますが、其の代り、大人は自分で反省してどんな宿念の集積が流動してゐるかを悟り、之を眞理の思念にて訂正する事を得るのであります。小兒の病氣も小兒自身又は周圍の人たち殊に密接な關係ある親達の宿念の流動で起りますから、突然下痢したり發熱したりする前夜は、必ずそれを氣分にあらはして居るものです。だから注意深い、經驗ある母親は、大抵これを氣付くものでありますから、子供に代つて親が其の念の集積を淨化するがよいのです。即ち先刻谷口先生の云はれたやうに精神的葛藤があれば、反省して和解するとか、病氣に對する恐怖があれば、自分の生命が自由自在な神性であつて病氣に負けるやうなものでない事を自己暗示的に自分の心に囁きかけます。「生長の家」や「生命の實相」をお讀みになるのも一方法です。それは必ず子供に感應します。それからこゝに一つお知りになつて置かねばならぬ大事な事は、下痢をしたり、熱が出たりした時に、病氣に罹つたとお考へになり、お騒ぎになるのは輕卒であります。下痢を起したとき又は熱が出た時は、其の人の「生命」が迷を外に驅逐し始めた證據であります。即ち迷に對する眞生命の勝利しつつあるシンボルであります。更に是を第二義的に申しますと、人間の健康が病氣又は病菌に打

ち勝ちそれを驅逐し始めた實證であります。その時に病氣になつたのではない、それ以前の病
 念の集積が流動して迷が起され、以前には潜在し潜伏してゐた病氣が其の時逐出され始めたの
 であります。即ち、人間の眞生命と云ふものは根柢に於て健全でありますから、迷を外に逐出
 したので、これが影に映つてあなたの健康が病氣に打ち勝ち、病菌や病毒の存在を許さず、下
 痢と云ふ現象と共に之を排泄し、又その戰に於て、皮膚の外に發熱と云ふ現象によつて生命
 力の健康さを示してゐるのです。私共はかゝるときこそ自己の「生命」の實相の圓滿完全さ、
 更に云へば、自己の健康の勝利を自覺して、益々元氣にその悟りを助勢する念を起せば忽ち病
 氣は去るのです。かうすると既に逐出され始めた者を追撃するのですから譯はないのです。潜
 在してゐた病念が、癒える前に顯在状態になる——これはクリスチャンサイエンスに於てはケ
 ミカライゼーションと名付けられてゐるもので、谷口先生が病念の自壊作用と名付けて居られ
 るところのものであります。然るにこんな状態になるや始めて病氣に罹つたと考へ、直に病氣
 の觀念を起し、元氣阻喪し、却つて悪集積の流動を頻發せしめ、折角勝利に乗つた生命や、健
 康を萎靡せしめ、反對に迷を強め病氣に盛返しの力を與へ、他方こゝに於て病靈の感憑を招く
 のであります。これが普通病人が出来るとか、病氣にかゝるとか云ふ際大抵の場合やつて居る

實情じつじやうであります。お醫者いしやさんでも、少し判さだつた方かたに此このお話わたりを聽きかせて御覽ごらんなさい、必ず膝ひざを打うつて同感どうかんだと申まをされます。素人しろうとの私共わたくしどもがお腹なまが痛いたいとか、頭あたまが痛いたみ出しただとか熱ねつが出でたとか感かんじる時ときは此この意味いみに於おいては病氣びやうきがいつの間まにかあつたのが、回復くわいふくし出しただと悟さとるが本當ほんたうであります。その時ときには却かへつて間まもなく治なほる事ことを信しんじて、平氣へいきで居まりますれば、直たちに自壞じくわい作用さようを完くわん了れうしますが、そら病氣びやうきになつたとて賣藥ばいやくを呑のんだり、寢込ねこんだりしますと、反對はんたいに今迄いままで病氣びやうきを逐出おひだして居まつた生力せいりき、又はその現あらはれから云いへば健康けんこうが、其その力ちからを殺ころされ、反對はんたいに迷まよひ、す即すなはち病氣びやうきが力ちからを得え、其その上うへ此この病氣びやうきの意識いしきと共に、靈れいの感應かんじやう上の原則げんそくにより、こゝに「病靈びやうれいの憑ひよう依い」を招まねき、遂つひに重病じゆうびやうにも犯まかされる結果けつぐもを來きたす事ことは、恐おそるべき事實じじつでありますから、皆みなさんもどうか、此この點てんをよくお悟さとりになられますと病氣びやうきを超越てうえつなさることが出来るのであります。

谷口たにぐち——こゝに一寸實例じつれいを申まを上げませう。長野縣ながのけんにお醫者いしやさんで金光教こんくわうけうの熱心ねつしんな方かたがあります。

或る機縁きえんで「生長の家せいしやうのいえ」をお讀よみになつたところが、金光教祖こんくわうけうそのみ教きやうへが「生長の家せいしやうのいえ」の教きやうへの中なかに實じつにハツキリ鮮あまやかに出でてゐる。「生長の家せいしやうのいえ」を讀よむと金光教祖こんくわうけうそのみ教きやうへが却かへつて深ふかく理り解かい出来るやうになつたと云いつて、その經營けいえいしてゐられる病院びやういんの入院患者にふいんくわんじやに「生長の家せいしやうのいえ」を多部たふぶ數すうお求めもとになつて配布はいふせられた。その入院患者にふいんくわんじやのなかに〇〇さんと云いつて肋骨ろくこつカリエスをわづ

らつて五年前に肋骨の一部を切断せられたが患部が癒えず毎年悪くなつて最近五度目の手術をせられた方がありました。「生長の家」をお読みになると今迄自分の病氣の回復を遅らせてゐたのは自分の暗い氣持であつたことをお悟りになり、生命の實相をお悟りになつて根本から明るい氣持になられたところが、五年間行き惱んで持てあましてゐられた肋骨カリエスが二三ヶ月のうちに全治して、もうすぐあとから結婚問題まで持ち上つてゐる實例があります。その方の入院中その方をお世話されてゐた看護婦の方もその實例を御覽になつて感心して今では熱心な「生長の家」の誌友になつてをられます。面白いぢやありませんか、生命の實相を話しても病氣が治るならば、その話を文字にあらはした毎月の「生長の家」誌や、更に一層系統だて詳述せる聖典「生命の實相」を讀んで治るのは當然のことですが局外者から見れば奇蹟にも思はれませう。

それから、これは大阪で天理教の熱心な布教師をしてゐられる方の話であります、その方の息子さんが肺結核にかゝつて幾度も咯血せられた。「天理教の教へを信ぜよ、病氣は治る」とお父さんが云はれるけれども、そんな不合理な教へは信ぜられぬと云つてきかない。大阪のやうな都會では空氣が悪いからと云ふので、北陸の海岸の親類の家へ養生に歸つてゐられた。その

時、その息子さんの姉の方が雑誌「生長の家」を持つて往つてあげられた。その方がお讀みになると、人間の身體は神さまからの借り物だなど、云ふ、天理教は信ぜられないが、人間の身體は假りのもの實相ではない假現であると云ふ「生長の家」の教へは合理的だから信ずることが出来る。云はれて、引續き讀んでゐられるうちに次第に自己の生命の實相をお悟りになられて、健康がめき／＼回復して來た。そのお父さんである天理教の先生さんも大學を出られた立派な教育ある方でありますが、天理教を信じないと頑固に言ひ張つた息子が信ずることが出来る。云ふ「生長の家」の教へと云ふものはどんなものかとお知りになりたくなられて、試みに二冊送つてくれと云つて來られた。丁度、手許にあつた第二輯第四號五號を送つてあげると「生長の家」を讀むに従つて、天理教祖の説かれた眞のみ教へ、眞の教祖のみ心と云ふものが一回は一回毎にハツキリ判ると云つて、たて續けに二十數回お讀みになつて、「これは眞に神の言葉である、神が書かせてお出でになる言葉だからこそ、こんなに味ひのつきないものがあるのだ」と云はれた。一方息子さんの方では「生長の家」をお讀みになつてゐるうちに眞理が悟れて、天理教の教へに反抗してゐる必要がなくなつて來た。父が天理教を信じてゐる、息子がどうしてもそれを信じないと頑張る、その頑張りのあつた間は、父と息子との間に精神的の葛藤があ

り、それが病氣の治るのを妨げてゐたのでありますが、その息子さんの心のうちに頑張ること
 も反抗することも要らない、天理教の中にも生きてゐれば他の宗教の教への中にも生きてをり、
 同時にまた自分の生命のうちにも、父親の愛のうちにも生きてゐる完全圓滿玲瓏珠の如き「生
 命の實相」を味はれるやうになつたとき、今迄「天理教を信ぜよ」「信ぜぬ」で互ひに和解が
 出来てゐなかつた父と子との間に和解が出来るやうになられた。病氣がずん／＼よくなる、病
 氣などは何でもありませんが、病氣の治ることなどよりも大切な家庭の中の和解が其處に成立
 した。神の教へと云ふものは愛の教へ和合の教へであるべきですから、家族の一人が何教を信
 じたがために、父子互ひに相争ふやうなことになる教へは、その教へそのものが本来如何によ
 くて、その教へを信ずる人各々の理解に偏寄りがあるからである、この偏寄りがとれて、本
 當の神がわかり、自分の生命の本當の相と云ふものが解つて來ると、人間はその生命の實相
 に於て一體であるからひとりでに和合せねばならなくなる。父に負けるものかと云ふ潜在意識
 的な反抗や、子を服従させねば親の體面が保てぬなど云ふ力みがなくなる。人間の尊さは、そ
 んな小細工によるのではない。人間の尊さはその本性が神の子であるところにある、そしてみ
 んな神の子であると云ふ眞理に於て和合して了ふ。こゝに天理教の教へに反抗してゐられた息

子さんは「生長の家」によつて再び天理教の父の許に歸つて和解して手をつなぐことが出来た、
 そして病氣もすつかり治り、先日は父と一緒に五六里の道を大和天理教本部まで徒歩で参拜す
 ることが出来るほどの元氣になられたさうであります。生長の家の神さまの神示に、「われは大
 いなるものなるかな、すべての教へわれに流れ入りて生命を得ん」とありますが、このやうに
 金光教の方がお讀みになれば金光教祖のみ心、み教へが一層よくわかり、天理教の方がお讀み
 になれば天理教のみ教へが生きてくる、またあの××さんのやうに佛教の名僧知識の方であつ
 て「生長の家」を讀んで、その教への中に溶け込んでみると云はれる方も出来て来る、そのほ
 かどんな宗教であつても「生長の家」で生きた力を得て来ると云ふのは「生長の家」は種々に
 分れてゐる教へを、その根元から「生命の實相」から拜ませてくれるからであります。

A——或る宗教では宗教を信じたがために家族仲たがひをさせたりすることがありますが、「生長
 の家」の教へは家族を互に和合さす働きをするのが尊いことだと拜ませて頂いてをります。
 「生命の實相」と云ふ合本聖典の書名も實に内容にふさはしい名前でございますねえ。

谷口——合本の書名は誌友から公募し、應募された中から神示に従つて定めたのですが、あれは
 北海道の青木應諭氏の命名です。

A — 下痢は病菌を排泄する作用であり、發熱は己の健康が病氣に對する抵抗であると、常に醫者からも聞いて居ります。これを病氣が驅逐され始めたものと悟る本當の悟りであつてこそ、病氣も治り、病體の憑依もない譯で御座いませう。これは誰にも聞かしてあげたい福音でございますわ。先程の仰せによりますと、子供が突然、下痢や、發熱を起す時の前夜には大抵注意深い母親には其の様子が判るものだと仰せも、幼い子供を持つてゐる私にはよく合點が參ります。

中畑——頑是ない子供は、美食を貪り、相當腹が大きくて無暗に食べ、又は相當疲れて居るのに、遊び相手に引かれて、尙無理に遊ぶなど、これは矢張り其の食べた、遊びたいの元始的の業が流轉して、度を越えるので、子供自身にも確かに感じて居るのですが、尙幼稚な現世の意識が之を抑制しないのです。母親は子供の様子により、必ず其の變異を悟るのですから、其の時に子供に代つて宿念の淨化をすればよろしい。それは矢張り迷ひを否定する言葉で、「元氣な發育盛の子供である、少々食べ過ぎたとて必ず故障は起らぬ。明日になれば元氣よくなる」「今晩はちと遊び過ぎたかも知れぬが、遊び過ぎたとて故障が起ると云ふ事はない、元氣旺盛の神の子だから明日になれば恢復する。」と自分の場合と同じ様に、眞理を言葉に出して又は無言で

も自己暗示的に念ずるのであります。さうすると必ず子供に感應します。

B——話が遡る様ですが大人が何にも氣付かぬのに突然腹痛を起したり、發熱をしたり、又知らぬ間に膽石病を起したりすることがあります。これは私の知つてゐる實例があるのです。其の他知らぬ間に重い内臓の病を起して居り、醫者に診て貰ふと、非常の重態であつたり、又手遅れであると云ふ様な場合は、知らぬ間に宿念の集積が流動するのですから、その宿念を眞理の言葉で淨化する機會も捉へる事が出来ない様に思ひますが。

中畑——大人が知らぬ中にかう云ふ病氣と起すと云ふ事ですが、病氣にかゝると云ふ意識を有たぬ場合はありましてもよく觀察致しますと必ず其處に良くない宿念が流動を起してゐるものです。或は相當満腹であるのに味がよい爲に少しく喰ひ過ぎたり、相當酔ひながらもまだ少しはよいだらうと思つて飲む、又夜晩く冷を感じながらも、少し位は構はぬだらうとして更に夜更しをして飲食する、或は何事か懸念しながら食事をしたり、仕事をする、皆此何事かを聊か心の底に持ちながらやる。これが即ち宿念の集積が流動を起して居るのです。「知らぬ間に」と云はれますが、あなた方始め、かゝる經驗をお持ちの方を調べて御覽なさい。必ず此の性の良くない宿念の流動があるものです。此の心の底で自分に言ひ譯を微かながらもやつてする事、

それが既に一筋でない。宿念の集積が、其の「飲む」「食ふ」「仕事をする」念によつてその流轉を誘發され、そこで病氣が顯はれて來たのであります。膽石の如き病氣は、一朝にして來るものでない、永い間のよくない習慣即ち宿念の集積の流轉をして居るのであります。膽石にかゝる人は、専門家の説によりますと、肉食、殊に濃厚なる食物が好きで一日として缺かす事が出來ない、恰も喫煙の習慣ある人が、無意味に烟草を止めない様に、他の一般の人が一週間に一度か、二度、攝取するかせぬか判らぬやうな、所謂濃厚な榮養料理を毎日やる、一度でも缺ければ、急に衰弱でもする様に感じる、かう云ふ心持で食事をして居るとか、或は内部的又は仕事の上に云へぬ心配を長日月に亘つてして居るとか、何とか皆是顯著なる集積の連續的流轉を催した結果であります。淨化の方法は此の流轉の機會を捉へ眞理の言を思念するのです前にも一寸申しました様に、平素から愛他の業を作る事は大變結構です。愛他業の集積は内在的の善業の集積として潜む中に、絶えずこれらの病氣を顯す如き惡業の集積と相殺的に中和し、著しく其の力を殺ぐ働をしますから、醫者の方で云ふ殺菌劑の様に、此の病氣を顯す根源を絶滅する力を持つて居ります。心を調へること、兄弟と和合し、家族と和合することによつて病氣が治るのはそのためであります。

谷ロ——愛他の集積を作ると云ふのは一言で言へば善業を積むことでありますが、此の善業を積むと云ふのは私的でない利己的でない行ひをすることであつて、和顔愛語と云ふことも此の善業のうちに遁入るのであります。別に道徳上、刑法上の罪惡を犯さなくとも、この和顔愛語と云ふことがなくては其の家に本當の健康——肉體、境遇、運命の健康と云ふことが得られない。病氣になつたと云つては家族に對して當り散らすやうな事では病氣は治り難いのであります。人間の心と云ふものはラヂオの受信セツトのやうなものであつて、セツトが悪ければ、放送番組がどんなによくとも、好い音楽は聴けないであります。それと同じく個々の生命は大生命からの放送を受けてその生命を各所に再現したものでありますから、念のセツトをよくするほかに自己生命のリズムを良くする根本的方法はないのであります。

○全ての毒物は「生命」そのものに對して無毒である。或る植物より抽出した毒素は、その植物の「生命」自身には有益な成分であつたのである。その有益成分に觸れて害を受けるのは人間自身の心にある。形だけ眞似たものには「生命」がない。「智慧の言葉」より

第三章 心の平和に到達する眞理

自己生命のリズムを良くすれば、その生命の顯れである健康や運命がよくなつて來るのであります。自己の生命のリズムを善くするには念のラヂオ・セツトを善くするほかはない。それで、念のラヂオ・セツトをよくして眞の心の平和に到達するには、それは「神が實在の至である」こと、従つて神のほかに何もないこと、従つて「人間は神の子である」こと——此の眞理を完全に知ることが第一であります。人間自身を「不自由な肉體」だと考へてゐる限りに於て、此の「不自由な肉體」、ちよいと針で突いても傷くやうな不自由な肉體人間を神の子だなどとはどうしても思へないのであります。それで「人間は神の子だ」と云ふ眞理を知り、實在はすべて神の創造せられたものであると云ふ眞理を知るには、肉體は存在しない、それは念の影に過ぎない、眼に見える天地は存在しない、それは本當の實在の天地の映像に過ぎない——と云ふ「生長の家」で説く根本的眞理を理解しなければならぬのであります。どうも此の根本的眞理を充分呑み込む方が少いのであります。佛教では色即是空と云つて、色即ち物質は畢竟空であると云ふ風に説かれてをりますから、佛教に親しみの深い方には「肉體は存在しない、それは念の影である」

と云ふことも理解し易いのであります。ところが普通、基督教では「此の儘の物質宇宙」を神様がお造りになつたと云ふ風に説きますのでどうも此の争ひに充ち惱みに充ちた此の儘の宇宙を、何故、全智全能、至慈至愛の神様ともあらうものがお造りになつたのであらうと云ふやうな疑問や、そこから又無神論なども生じて來るのであります。基督教でも深い眞理へ入つてゐられる方は、神の創造せられた眞實の世界、本當の實在の世界と云ふものは決して此の肉眼に見える世界ではないと云ふことに氣がついてゐられるのであります。先日、一寸、神戸へ出た序でに書店へ寄つて見ましたが、その時トルストイの遺稿の中から發見された「人生の道」と云ふ稿本の翻譯が見つかったので買つて來ました。披いて見ると「生長の家」の説く所と殆ど同じ思想にトルストイが到達してゐたと云ふことは實に驚嘆に價ひすると思ふのであります。一寸御參考にその一節を讀んで見ます。

神が永遠不滅であるやうに、その陰影なる目に見える此の世界も永遠である。が、併し乍ら、目に見える此の世界は要するに彼の陰影にすぎない。眞に存在するのは目に見えぬ悠久の力。即ち神のみである。(同書二十九頁)

吾々はしばしば、吾々が手によつて觸知する事の出来る物のみが存在するのだといふ風に考へ

る。が、その正反對で、吾々の見たり聞いたり、觸れたりする事の出来ないものだけが、即ち吾々が各自の「私」と呼んでゐるもの、自己の靈と呼んでゐるものだけが、眞實に存在するのである。(同書四十八頁)

若しも吾々が自己の周圍に目睹する凡ての物象を、無限無窮の此の世界を、自分が眺めた通りものと思ふなら、吾々は大いに誤つてゐるのである。吾々が形體を有する凡ての物象を知つてゐるのは、さう云ふ認識に到達させる視覚、聴覚、觸覚を持つてゐる結果に他ならない。若しもそれらの感覺が異つたものであつたら、此の世界全體が別箇のものになつたであらう。従つて吾々は、吾々の望んでゐる此の外的世界が如何なるものかをほんとは知つてゐないのだ。知り得ないのだ。吾々の正確に完全に知つてゐるのは、ひとり吾らの靈のみである。(同書四十五頁)

これによつて見ましても教會 宗教に反對して「基督教學批判」を書き教會から破門されながらも「原始基督教に歸れ」と絶叫したトルストイの宇宙觀が如何に「生長の家」の所説と一致してゐるか云ふことが判るのであります。つまり教會基督教(即ち後世、人間が理智で捏ちあげた基督教)でなしに、原始基督教——本當の基督教は、五官に見える世界は存在しないと云ふこ

とを説いてゐたと云ふことになります。何の教へでも眞實の教へ、深い教へは同じ眞理に到達するのであります。トルストイはまた別のところでこんなことを云つてゐます。

鐵は石より固い。石は木より、木は水より、而して水は空氣より固い。併しながら、觸れる事の出来ないもの、見たり聞いたりする事の出来ないものが、何よりも一番固いのである。これのみが過去、現在、未來を通じて儼存し、永遠に滅することが無いのである。ではそれは一體何であるか？ 即ち人間の内なる靈である。(同書四十九頁)

此の「人間の内なる靈」と云ふ一句の「内」と云ふ言葉に吾々は捉はれてはならないのであります。「内」と云つても、肉體は實在しないと云ふ前提がありますので、「肉體の内」と云ふ意味では無論ないのであります。言ひあらはしやうがないので「内」と云つてゐますが、「外」に對する「内」ではない、寧ろ「虚」に對する「實」、「假」に對する「眞」、「現」に對する「實」と云ふやうな意味の「内」であります。この「内なる靈」即ち「本物の自分」こそ一等固いものでありますと云ふのがトルストイの思想であつて「生長の家」の説く所に一致してゐるのであります。「生長の家」では常に「本物の自分」と云ふものは、金剛不壞の實相身であつて、刀仗もなほ之を傷けることが出来ない、全世界の重荷も尙この金剛不壞の實相身を壓重することが出来ない。

云ふ風に説かれてゐるのであります。此の「本當の自分」の金剛不壞の實相が解つて來たら、人間は本當の自由を得るのであります。全世界の如何なる者が自分が害しよう、傷けよう、と思つても害することも傷けることも出来ない、鎖で縛つて自由を奪つてやらうと思つても、縛られ切らない自由自在なものが「本當の自分」であると云ふことが判つて來ると、もう何も恐れるところがなくするのであります。トルストイは此の遺稿に次のやうに書いてあります。

吾人は肉體によつて生くるに非ず、靈によつて生くるのである。若しも吾人が此の事實を知つて、自己の生命を肉體でなく靈に托するならば、吾人は鎖に縛られても、鐵の扉の中にいましめられても、尙且つ儼として自由である。(同書六十七頁)

此のやうに吾々は自分自身と云ふものを物質であると思はず、「本當の自分」と云ふものを「金剛不壞」の靈的實體であると云ふことを自覺することになると、形の上では縛られてゐても、實際に於て縛られてゐない自由自在な状態が實現するのであります。すべての悲しみとか怒りとか云ふものは、自分自身を何か形のあるものであつて、他から縛り得るものだと思つてゐる妄想誤想から出て來るのであります。だから此の妄想誤想を断ち切れれば吾々は悲しみや怒りやその他凡ゆる心の不自由から脱することが出来るのであります。

心靈研究家などや巫女などのかたのうちには靈眼で靈の姿を見て、あの人に憑いてゐる靈は斯う云ふ形をしてゐたとか、中には狸の形をしてゐるとか、狐の形をしてゐるとか云ふ人がありますが、それは、ラヂオの波動やテレビジョンの波動を感受して、それを聲に顯はしたり姿にあらはしたりする受信機が其處に出來てゐると云ふことに過ぎないのであります。ラヂオの受信機が此處にあつて東京にゐる放送者の聲を此處で出したからと云つて、東京にゐる放送者が、現實に此處に來てゐると云へば、それは眞理を知らないものであります。狸の靈姿が靈的受信機に（即ち靈視能力者や靈媒に）顯れたからとて狸の靈そのものが其處に來てゐると云ふ風なものではない。此の世界は波動の世界であるから、その波動を或る形に再現する装置をつくれればその種類に従つて、色々の姿が顯はれ、色々の聲が顯はれるけれども、その姿、その聲が本來そこにあるのだと考へると間違ひなのであります。此の點で、肉眼に見える世界は無論のこと、靈眼に見える世界でも、それが其の儘其處に存在すると考へるものは迷ひに捉はれてゐると云はねばなりません。よく人は、見えるから存在すると云ふ、しかし、肉眼にせよ、靈眼にせよ、見ると云ふことは何等存在すると云ふ證據にはならないのであります。トルストイも云つてゐるやうに見えないものだけが本當の存在である。此の谷口自身にしましても、此の肉體は眼に見えて

如何にも一見確固とした存在であるかのやうに見える。しかしこの肉體は決して確固不壞の存在ではないのでありまして、何人も此の肉體の生活は終らねばならない、言ひ換へると結局肉體は死滅して了はねばならないのであります。吾々は誰でも吾々自身を肉體であると考へる限りに於て、結局「死刑の宣告」を受けた死刑囚同様であつて一歩づつ刑期に近づいて行くのでありますから、常に前途不安で、本當に明るい生活には出られないのが當然であります。本當に明るい生活と云ふものは、「本當の自分」と云ふものが無形のものであると云ふことを悟つたときに始めて到達し得るのであります。

自分と云ふものを形のあるものだと考へてゐますと、形のあるものは縛られる、縛られると思ふから苦しい、逃げ出したいと思ふ、逃げ出さうと思ふから却つて縛つてゐる束縛が眼について苦しくなる、かうして自分自身を形のあるものだと思つてゐる限り吾々は苦しいのであります。また、一寸病氣をしても此處に病氣をしてゐる自分が形のまゝに在ると思ふ、そのためにその病氣と云ふ念に捉へられて、その病氣と云ふ念を常に心に有つてゐるから、念の客観化したものであるところの肉體は「病氣の念」即ち「病氣の精神波動」が客観化していつまでも病氣から免れることが出来なくなりませんが、これが逆に「自分」と云ふものは無形のものである。無形の

ものが有形の病氣に罹る筈はないと云ふ眞理をさとつて、今此處にあらはれてゐる病氣の状態は一種の念波である、念波が形にあらはれたものである。波動と云ふものは「迷ひの世界」のものであるから、ほつて置けば時間のたつうちに消えてしまふものであるのは、風のない湖面の波のやうなものである、心の風さへ騒がせなければそれはやがて自消自滅してしまふものであると觀じて、心の平和にして圓滿完全な「生命」の實相をじつと平靜に眺めるやうにしてゐますと、色色思ひ惑つて手當をするよりも結局病氣は速かに消滅してしまふのであります。これつまり肉體は念の影でありますから、念を平靜に保てば肉體はおのづからその平和の念を映じ出して健康になれるのであります。

靈視能力者は「神を見た」と云ひますけれども、五官は勿論六感でも神を見たものはないのであります。神と云ふものは無形のものでありますから、此處に見よ、彼處に見よと云ふがやうには神は在さないのであります。ヨハネは、第一書に「未だ神を見し者あらず、我らもし互に相愛せば、神われらに在す。」と明かに神と云ふものは見えるものではない、相愛する愛の中にあると明言してゐるのであります。ところが使徒ヨハネは黙示録では自身が神の姿の客觀化したものを靈眼によつて見た體驗を書いてゐるのであります。

我振返りて我に語る聲を見んとし、振返り見れば七つの金の燈臺あり。また燈臺の間に人の子のごとき者ありて足まで垂るゝ衣を着、胸に金の帯を束ね、その頭と頭髪とは白き毛のごとく雪のごとく白く、……その顔は烈しく照る日の如し。我これを見しとき其の足下に倒れて死にたる者の如くなれり。彼その右の手を我に按きて言ひたまふ「懼るゝな、我は最先なり、最後なり、活ける者なり、われ……世々限りなく生く。また死と陰府との鍵を有てり。……」(默示録第一章)

かう云ふ風に使徒ヨハネは恰も諸方の靈覺者が「生長の家」の神の顯現を見られると同じやうな具合に神の姿を靈眼で見えてゐるのであります。而も彼はヨハネ第一書で斷乎として「未だ神を見しものあらず」と宣言してゐるのであります。そこがヨハネの偉いところで、神と云ふものは無形のものであつて、それが形に顯はれて見えたところが神そのものが見えたのではない、それは神の救ひの靈波をたゞ客觀化して感じたゞけである。それを知つてゐたヨハネは偉いのであります。「生長の家」にしましても生長の家の神様の姿は現實にあらはれられる。一人の靈覺だけにはなく、多勢に同一の姿を以てさへも顯はれてゐる。併し神は靈覺には見えぬ、愛の中にあると云はれる、神は宮の中にはをらぬ道の中にあると神は云はれる、神の姿や、神の宮は一種の象

徴に過ぎないのであります。

自他は一體である

神と云ふものは無形のものであり全體であるから「自」と云ひ「他」と云つて區別するのは迷ひであります。神が無形であり、その神より出でたる自分が無形の存在であると云ふことが解つて來ますと、「自他が區別すべからず一體」であると云ふことが解つて來るのであります。「自他一體」であると云ふことが心の底から感じられる——これが即ち「愛」であります。親が子を愛すると云ふ、これは自分の身體から出て現實に親は子供と一體であると云ふ感じを得るのであります。併し、この肉體と云ふものに捉へられてゐる限りは、肉體が隔れてゐては一體でないと言ふやうな感じがする、其處に愛と云ふものが感じられないで、自利的利己的感情のみが感じられて來ることになつて了ふのであります。ところが一たび、靈眼は勿論此の肉眼に見える肉體でさへも本當の實在ではない、本當の自分ではない。「本當の自分」と云ふものは無形のものだと云ふことが解つて來ますと、無形のものなら、此處からは自分、其處からは他人と云ふ區分がつけられない、自他の分離の感じがあるべき筈がない、そこで本當の自他一體(愛)と云ふことがしみじみと感じられて來て、愛の行ひがひとりでに出來る様になつて來るのであります。すると、神は

自他一體即ち「愛」でありますから、自分の内の神が生きて來、神が生きて來ると、神は生命であるから、自分の生命が一層生きくして來まして、その顯現としての肉體も一層生きくして健康になつて來るのであります。

自分は無形の存在だと解れば自由になれる

人間は「肉體」ではない、有形のものではない、無形のものだと云ふことが悟れるまでは、肉體と云ふ物質的な制限に心が捉へられてゐますから、本當に心が自由になれないのであります。心が自由になれないから、本當の伸び伸びした安らかな心境になれないのであります。此れに反して「人間」は無形のもので、「本當の自分」と云ふものは無形のもので、と云ふことが判つて來ますと、心全體が「行雲流水」のやうに自由な境地になれるのであります。行雲流水と云ひますが、まだ雲でも水でも形がありますから、風とか、岸とか云ふものに支配されるのであります。「自分」と云ふものが、本當に無形の存在であると云ふことが判つて來ますと、もう何物にも支配されない自由自在な心境に出られるのであります。この眞理が判つたとき人間は本當に安らかな心境になり、この安らかな心境を實生活に顯はしたときには、それがその儘で「生長の家の生き方」になるのであります。だから「生長の家の生き方」と云ふものは、常に明るい生活であつて、暗

い影をもつてゐない生活であります。普通考へられるこれまでの宗教家らしい生活と云ふものは山へでも籠つて微笑一つだにしないで四角四面な顔をして窮屈そのものゝやうな生活をしてゐるべきだと思はれてゐましたが、これほど本當の宗教的生活から遠ざかつてゐるものはないのであります。本當の宗教的生活と云ふものは、生命の實相を生かす生活でなければならぬのであります。つまり大生命の波長と調子を合はした生活でなければならぬのであります。「大生命」即ち神は自由自在な圓滿具足完全な、無限に生々として安らかな力に満ちた生命的波動とも云ふべきものでありますから、この生命的波動と調子を合はした生活こそ眞の宗教的生活であつて、その生活なら、ひとりでに實に明るい朗らかな生活となつて來るのであります。よく道徳家とか善人とか云ふ人が病氣になると云ふやうな場合には往々その善人の心が暗いと云ふ場合があるのであります。心が暗ければ他の如何なる點で善人であつてもその點で悪人であると云ふことになるのであります。先日雷車に乗つてゐると、私の前に實に見てゐても苦しくて氣の毒なほど眉をひそめ眼を歪にした表情をしてゐる四十五六歳の婦人があるのです。表情と云ふものは實に不思議なものでありまして、かうしてその表情の眞似をして見ますと、その不快さが自分にも何となしに判る。笑つた顔をして見ると何となく嬉しくなる。だから成るべく吾々は無理にでも眉を伸ば

し、にこやかに笑ふやうにするが好いのであります。笑ふだけで老婆の子宮筋腫が治つて來たと云ふ實驗談を中畑さんは發表せられました。これは又別に詳しく述べますが、この表情を明るくし、心を明るくすると云ふことは凡ゆる善行の中で首位に置かるべきものなのでありますから、是非此の本をお讀みになつた方はこれを機會に一層表情を明るくする修行にとりかゝりたいものであります。

愛とか善とか云ふことを人に「物」を與へることばかりだと考へてゐるのは間違ひであります。(缺乏してゐる人に「物」を與へると云ふことは無論善いことでもあります。) それよりも尙一層大切なことがある。それは明るい善い心の波動を人々に與へることであつて、此れはあらゆる善行のうち王者であるときへ云へるのであります。だからキリストは斷食するときにも「苦しさうな表情をするな。顔に紅をぬつて朗らかな顔をしてをれ」と教へてゐるのであります。人に愉快な表情を與へて歩くと云ふことは、物を與へて歩くと云ふことよりも一層結構な愛他的行爲だと云ふことになり、そんな善人でも人々の缺點ばかりが眼についてそれを慨嘆して不愉快な表情や叱聲を人々の前へ振り撒いて歩くと云ふやうなことでは善人の資格のうちで最切な資格が缺けてゐることになり、さう云ふ家庭では家族に始終病氣などの不幸が絶えないやう

なことになるのであります。

同情を求むる心——不幸を招く心

「生長の家」に「ひとから同情せられようと思ふな。實際同情せられねばならぬやうな状態になる」と云ふ「智慧の言葉」があります。これは病氣の治療にも當て欲まるのでありまして、病氣の原因にも色々ありますが、「どうも〇〇は氣の毒な人だ、××さんから苦しめられて、あんな病氣にかゝつたのだ」とひとから同情して貰ひたかつたり、または自己同情したかつたりする氣分が潜在意識の底に潜んでゐるために病氣を我と我が心で起してゐる人も随分この世の中には澤山あるのであります。此の同情されたかつたり、自己同情したりする心は、何處から起るかと思ひますと、人間の實相は神の子であつて、本來無形のものである、無形であるから何物にも縛られない自由自在なものである、金剛不壞の靈的實在であると云ふことを自覺しないからであります。この如何にしても害しようのない金剛不壞の自分自身でありながら、その「本當の實相」と云ふものを悟らず、他とか物とか事件とかで自分を害したと思ふ、害したと思ふと腹が立つ、腹が立つと其處によくない精神波動を起す、類は類を招び、自分のよくない精神波動は、宇宙に漂つてゐるよくない精神波動を招び寄せてつひにその精神波動が形に化して病氣を具體的に起すこ

とになるのであります。

罪を他に歸するは自分を土偶人形にすること

此の「生長の家」の生活を始めない以前の私、つまり金剛不壞の自分の「生命」の實相を自覺しない以前の私は、絶えず此の悪い精神波動を起してゐましたので、不斷に身體も悪く、心も不快だったのであります。今から考へて見ますと、今でもまだ本當に善くなつてはゐませんが、私ほど悪い人間は少なかつたかも知れないのです。一寸胃腸が悪いと、「お晝にあんなお茶を食べさせたからだ」と云つて小言を云ふ。「お茶が半煮であつたから、そのために野菜の纖維素が不消化だつたのだ」など、云ふ。つまり、人間と云ふものを宇宙の主宰者である神の子であるとは考へずに、一片の野菜の纖維よりも弱いものだと考へてゐましたので、戦々兢兢として、自分に對して與へられるものに警戒してゐなければならなかつたのであります。そんな弱い信念しか有つてゐないのでありますから「心」の顯現である身體が善くなる筈がないのであります。インキ壺をひつくり返してでも、これは自分が不注意であつたのだ、自分が自己の圓滿完全な本性の自覺が足りなかつたためにこんな失錯をしたのだとは考へずに、「お前がこんな所へインキ壺を置いておくものだからインキが引つくりかへつたのだ」となどと云ふ。或は「お前が呼んでも返事をしない

ものだから、手を揚げる拍子に袖が引つかゝつて机からインキ壺が落ちたのだ」など、云ふ。終ひにはこれは自分が悪いのではない、親が私の性格をかう云ふ風に生んだのだなどとまで思つたりする、始末に可けない私だつたのです。何事が起つても悪いことはみんな他の所爲にし、皆他に責任を負はして了つて自分だけは責任のがれをしようと思ふ。こんな卑怯な蟲の好い心は、一寸考へると、悪いところを他にばかり擦り付けて自分は善い所ばかり獨占するのだから、大變得になる心の持方であるかのやうに思はれますけれども、決してさうではない。聖典の第一巻で「他を生かせ自分も生きる」と云ふ題で説明したことがありますやうに他を罪する心は自分を罪することになるのであります。他を心で斬るものは自分も他から斬られる——これが心の法則であります。寝られないと他の所爲にする、胃腸が悪いと他の所爲にする、不幸があると他の所爲にする——かう云ふ心は、自分と云ふものが全然他の人又は他の物の傀儡であつて、土偶人形のやうなものだと考へてゐると同様である、土偶人形と云ふものは少しも自主獨立な選擇力がない、右を向かせれば右を向き、左を向かせれば左を向く、手を上げるのもインキを引つくりかへすのも自分の力ではない。だから私がインキを引つくり返しても私が悪いのではないと云ふ辯解も成立つ、この土偶人形と同じやうに自分自身には何の力もないものだ他動的にのみ支配されてゐる

ものだと、私は「生長の家」の心の持方になる迄の永い期間「私自身」を考へてゐたのであります。さう云ふ弱い自覺を持つてゐたから、私は始終「他から害される」と云ふ強迫觀念をもつてゐた。そして毎日「他が斯うだから私はこんな目に會つた」と呟いてゐたものであります。人を恨む、その癖自分は同情されたい。その間ぢう私は神經衰弱で、不眠症になつたり胃が痞へたり、下痢したり、震災に會つたり、泥棒に二度も這入られたりしてゐました。が、人間と云ふものはそんな他から支配されるやうな土偶人形ではない、自主獨立的な神の子である、自分の肉體、自分の運命、自分の境遇は自分で自由自在に變化させ得るものであると云ふ眞理をさとつてからはだんぐ私の呟きも減つて來ました。かうして自己の神性の自覺が出來まして、呟きが減つて來ますと私の身體も健康となり、以前には随分虚弱だつた私が會社生活の片手間にでも雜誌の執筆編輯から、他人の病氣相談に至るまで一重三重の激務に従事出來るやうになつて來ましたし、境遇もだんぐ善くなりつゝあるのであります。

他の陥る陥罪を造つておけば自分も亦陥罪に落ちると云ふ意味で昔から「他を呪はゞ穴二つ」と云ふ諺があります。此の「呪ふ」と云ふことは本當は言葉で悪く云ふことでありますから「呟く」と云ふことも要するに「呪ひ」にほかならないのであります。だから此の「他を呪はゞ

穴二つ」と云ふ諺は「**呷くものには呷くやうな不幸が来る**」と云ふことに言ひ換へることも出来るのであります。

呷く者の戀は成就しない

精神分析の創始者フロイドの協働者であつたフリツク・ウイツテルスはその著述の中で、**呷く人の戀が成就しないと云ふ事を述べてゐます。不健康を呷く人が健康になれないのが眞理であると同様に、戀の不成就を呷く人の戀も成就しないのであります。呷くと云ふことは、自分を苦しめることによつて喜ぶマゾヒスティクな慾望だと精神分析學者は云つてゐるのであります。それは兎に角、呷くと云ふことは他から同情されたいと思ふ病的な惡趣味である。他から同情されると云ふ慾望を成就するためには自分を具體的に不幸に衝き落さなければならぬ。即ち吾々が「呷く」と云ふ目的そのものは、必然自分を具體的に不幸に衝き落すことによつて満足させられるのであります。だから、呷く人の潜在意識は、その呷く動機を満足させるために、その呷くところの不幸を實現するために、隠れたるところから其の魔手を操つてゐるのであります。フリツク・ウイツテルスの擧げた實例によりますと、彼のところへ來た或る男性の患者は、自身が一度も女に對する戀が成功しないので、生活が淋しくて堪へられないことを訴へた。此の患者は誰にでも**

それを訴へ眩き同情を求める習慣を有つてゐる。それでウイツテルスは實際の場合の例を擧げて御覽なさいと云つた。で、その男は答へて「或る時のことでしたが、今度こそは一少女が自分に愛を有つて呉れたと想ひました。彼女は私の家へ一緒に來ようと迄云つてくれたのです。が、自分の部屋へあがる階段を一緒に昇りつゝあるときに、もうその戀は破れたのです。突然その少女は私に云ひました「もうこれ切りあなたにはお目にかゝりません」かう云つてサツサと少女は出て去つて了ひました。私の戀は妙にいつでもこのやうにして呆氣なく終るので」と云ふんです。ウイツテルスが「しかし、さうなるには何か理由がなければなりません」と云ふと、その男は「理由なんかちつともない、私はたゞ、人の家を訪ねる少女は賣春婦のやうなものだと思ひますと云つたのです。するとその少女は「そんな女とお話しになる方が貴郎の性に合つてるわ。私は貴郎のやうな人にはもうこれ以上お目にかゝれません」と云つて去つて了つたのです」とかう云つて答へたのであります。

第三者から見れば、此の男のやうなことを云へば、その少女が耻と怒りで戀が覺めて逃げ去つて了ふにちがひない位のこと、當然のこととしてわかるのであります。當の本人の現在意識は「そんなことを云つたら此の戀を失ふ」と云ふ自覺が、實際戀を失つてからでないかと解らないや

うに潜在意識が仕組んであるのであります。それは失戀によつて他人から同情して欲しいとか、失戀によつて自己憐憫したいとか云ふ潜在意識の慾望があるので、その潜在意識が自分の目的を遂げるために、背後から現在意識の目隠しをし、愈々のドタン場になつて、その戀が失敗するやうな行動を知らず識らずとらすやうにしてあるのであります。

戀愛だけではなく、事業の成功失敗にも、常に泣き言を云つて自己同情に耽つたり、他人同情を乞食してゐるやうな人は、どんな好運が向いて來、どんな好機會がめぐつて來ませうともその愈々の時になつて、その好運をとり落すやうな行動やその好機會を取外すやうな言葉を知らず識らずの間にするやうになるのであります。かう云ふ人は不運を咥いてゐるけれども、その半面に於て、自己同情又は他人同情をたのしむために「不運」を殊更呼びよせつゝ、その「不運」と戯れてゐると云ふことが出来るのであります。人は、自他から自分が同情せられるためには、自身を兎も角も先づ虐待して置かなければならぬのです。同情されたい心と虐待されたい心とは同じ心の半面であります。虐待された人間だけが眞に同情に價ひする。さうすると自己を同情される價値のあるやうにするためには自分で自分を知らぬ間に虐待して不幸や病氣に突き落して置かなければならぬ、それで失戀で同情されたい人間は、愈々の戀愛の場面になつて戀人に愛想

をつかされるやうな事をやる。常に失敗で咳いてゐた人間は愈々のときに失敗するやうな行動をとる、常に自分を病氣だと云つて同情されたい人間は治りかけると殊更に病氣によくない療法や薬にかへたくなる、皆これ、潜在意識がさせるわざであります。眞に其の人が不運と腐れ縁を断ち切りたいと思ふならば、一切不運を吐かず、自己を同情せず、他人からも氣の毒がられようなどとは思はず、自己本然の生命の實相を正しく觀じ、「本當の自分」と云ふものは同情することもせられることも要らぬ、どんなに傷けようとしても傷け得られないそのまゝで圓滿完全なものであると云ふことを自覺して、たゞひたすらに生きて行くやうにしなければならぬのであります。

許さない心では病氣は治らぬ

生長の家十一月例会へ來られた松浦さんのお話しによりますと、先日その方の奥さんがふとしたことから産後に大腸加答兒を起して四十度以上の高熱が続いた。その原因と云ふのが物質的原因も助因とはなつてゐるかも知れぬが、其の松浦さんの精神分析的觀察によると、その奥さんと奥さんの養母との間に産後、心の戦ひがあつたのださうです。お産の時まで家事の手傳ひ旁々來てをられた奥さんの母親は、お産後間もなく歸つてしまはれた。奥さんはそれを非常に恨みに思つてゐられる、猫の仔の手助けさへ欲しいほどの忙がしい時に、養母ともあるものがわざと歸

つて了つて手助けをして呉れないと云ふのは何と云ふ薄情な母親だらう。其處に母親を怒る心、怨む心、許さない心が起る、その心が腹の中に蟠つて腹が塊る、腹が立つとはよく云つたものであります。肉眼には見えないが腹が立つたときには其の不調和な精神波動（即ち人をも殺し自分をも殺すの心的波動）がその人の内部に起つて、その不調和な状態が具體化するべく、具體的な動機を待つてゐるのです。それは丁度、種子が土に埋められたと同じであります。その時何かの動機が與へられる、すると、それは溫度と日光と水分とが適當に與へられたやうなものであつて「心の世界」に無形であつた不調和な精神波動力がこの時はじめて愈々具體的な芽を吹いて肉體的な病氣となつて顯はれるのであります。この奥さんも斯う云ふ風にして、其の後間もなく四十度以上の發熱と惡寒とに見舞はれ、醫者に診斷を受けると大腸加答兒だらうと云ふことであります。で、大腸加答兒の手當を三日ばかりしてゐると熱もさがり症状が非常に輕減して來た。すると、その心の争ひのあつた養母がその日、折悪しく見舞にやつて來て、「病氣なら治した經驗があるからお腹を撫でてあげよう」と云ふのです。此の母親は若い時から大師詣りに熱心になつたりせられて、大師を念しながら人のお腹を撫でて治した經驗を澤山有つてゐる。それをその奥様も知つてゐるから、深切に「撫でて治してあげよう」と云ふものを、「治して要りませぬ」と口に

出して云ふ譯には行かない。しかし心では「産後の世話をすらして呉れずに去つた養母などに泊されて堪るものか」と云ふ氣がムラムラと起つてくる。奥様はこの反抗心を抑へてジツと眼を瞑つて養母がお腹を揉んでくれるのに委せてゐた。養母はそんなことを知らずに、「こゝにお腹にこんな塊がある。この塊を揉みほぐしたら病氣はすぐ治ります」など、云ひながら盲腸のところにある腹の塊をグン／＼押す。奥様はそんなことをされては堪らないと思ひながらジツと休へてゐる。かうして夕方その養母が歸つて往つたあとで、盲腸のところを急に痛み出して熱がまた四十度近く出て來た、奥様はその夜苦しみ通したと云ひます。翌朝醫者が來て診斷すると、もう明瞭に盲腸炎に成つてゐる。醫師の薦めに従つて盲腸部に温罌法して経過を見ましたが、數日経つても熱は引かず容態は刻々悪化する一方である。良人である××さんは「生長の家」の誌友のうちでも敬虔な人であられましたから一伍一什の妻の狀態を見て、此の容態は、妻が自身の養母と心で戦つてゐて和解してゐないから起つた狀態であると悟られた。お腹を揉んで貰つて、そんな薄情な養母に世話になるものかと思つたのであるが、養母に世話になりたくないとはいハツキリ言ひ切ることが出來ないので、揉んで貰ひつゝ、「あなたの世話にはなりません。あなたが要らぬ世話だてをするから却つて私の病氣はこんなに悪くなりました」と心の中で云ひたかつた。奥

様にとつては養母にお腹を揉んで貰つてそれで病氣が治つたら養母に負けたことになる、揉んだ
 ほど却つて病氣が悪くなれば、「あなたの所爲でかうなつた」と養母を心で責めて負かすことが出
 来る。そこで彼女は自身の肉體的苦痛と云ふ大犠牲を拂つて養母を打ちまかすために心で病氣を
 作つてゐるのだと、かう云ふ觀察がハッキリついたのであります。そこで××さんは奥さんに「お
 前の病氣がよくならぬのは養母を責める心があるからだから、病氣が治るためには養母を許さね
 ばならぬ。許すだけではない養母に感謝する位でないと不可ぬ」と懇々諭されましたが、奥さん
 はそれでもなかく許す氣になれないのでした。それで體温は益々昇る、症状は刻々悪化する、
 或る晩來た醫師は、もう溫罨法では到底回復の見込がない、今晚經過を見て、明日は氷で冷罨法
 し、それでも可かねば切開するほかはなからうと宣言しました。で、その晩、××さんは「生命
 の實相」の巻頭に書いてある「天地一切のものと和解せよ」と云ふ神示を奥さんに示されて、再
 び、和解のうちにこそ神が宿り、神の癒す力が作用くものであることを話されました。すると奥
 様の心に養母を全然許して、其迄世話になつた鴻恩を感謝する氣持が始めて起つたのであります。
 ××さんからお願ひがあつて、こちらからお祈り添へしてゐた關係もあつたのでせう。人を許し、
 人と和解した後ほど氣持の好いものはない、その夜、奥さまは安らかに眠られました。翌朝醫

師が心配しながら往診に來られた時には熱が下がつて殆ど症状が消えてゐる。醫者も「昨日まであんなに重態だつた病氣がこんな急によくなつたのは不思議だ、不思議だ」と云つてゐる。うであります。

家族の心病むが故に吾れ病む

此の實例でも解りますやうに、他に難癖をつけて、その人から害されたと強ひて思はうとする。害されたと云ふ事實を肉體にあらはすことによつて相手を打ち負かし、征服しようとする——かう云ふ場合の征服慾は自己虐待慾に轉じて來るものでありますから、その人の潜在意識は自己の肉體に殘酷な傷害を與へるのであります。家庭に精神的争ひがあるとその家に病人が絶えないのもそのためであります。非常に徳の高い方でも、他の家族たちの心が磨けず争ひが家庭に絶えないやうな場合に、口に出して、ソレと露骨に他の家族たちをたしなめることを心なきことにして、そのたしなめる言葉を腹にもつて黙つてゐられるやうな場合には、別にその本人は故意と病氣になつて家族を戒めてやらうと思はなくとも、抑壓されて無意識界に潜んでゐる心がその窺める言葉を肉體の上に病氣としてあらはしめて、家族たちを無言のうちなたしなめてゐるやうなこともあります。維摩經に「衆生病むが故に吾れ病む」と維摩居士が云つてゐますが「家族の心病むが

故に吾れ病む」と云ふやうな病氣もあります。じつと一家の責任者が病氣になつて寢てゐるのは家族全體に對する無言の叱責であることもある。それに氣がついて家族の各自が互ひに反省して心の争ひを解いて了ふと主人なり其家の責任者の病氣も治るのであります。病氣の原因である自分達相互の心の纏れを解かないでゐながら、主人が病氣になつたと云つては、醫者を呼んで來て、藥を強制する、鍼を強制する、罝法を強制する、その他いろいろの物質的治療法で病氣を征服しようとする場合が多いのであります。そんな物質的方法で治つて了つては「無言の叱責」を折角具體化したのが何の役にも立たなくなるので、その病人の潜在意識は斷じてその病氣を治さないであります。このやうな場合、その病人の病氣を救ふ道は、家族全體が心から互に和解することでありませう。だから家族に病人のある場合には病氣に罹つてゐない他の家族たちは醫者を迎へに走るのも悪くはないが、それと同時に、互に心の争ひがないかを反省して見て、互の心の争ひを解くやうにすると、病氣の回復がスラ／＼行くやうになります。

○類は類を呼ぶ。濕地の樹木たる柳の成分から、濕地の病氣リウマチスの藥は造られるのである。不幸の相談相手となり得る人間は不幸に嘗て會つてそれを征服し得た人である。「智

第四章 『生命』は愛と智慧とによつて生く

「生長の家」の説かうとする一大眞理は、「實在する世界」は、實在する宇宙は、完全圓滿、光明無限、生命無限、智慧無限、愛無限、従つてまた調和無限、供給無限、自由無限である所の一大生命力によつて支へられ、その一大生命力の展開として一切の生命は存在に入つたと云ふ事實です。此の一大生命力を「神」と稱するのであります。この一大生命力なくしては一切の生命は存在に入ることが出来ないものでありまして、若し、そこに一個の生命が在ると云ふならば、それは必ずや、その無限生命の泉なる一大生命力がそこに發現してゐると云ふことになります。それで、「生命」と云ふものは、そこに「生命」が本當にあるならば、たゞ生きてゐると云ふだけでは「生命」がないと云ふことになります。「生命」は同時に智慧でありますから、眞理を悟らな

いでは、その「生命」は生きてゐないと云ふことになるのであります。だから、智慧のない生命——と云ふものは本來あり得ないことになる譯であります。智慧は發現すれば、智慧と生命とは一體でありますから、生命が生き生きとして来る、智慧が曇れば生命が曇つて来る、これは眞理を知らないで智慧の目が曇つて病氣になつてゐる人が「生長の家」を讀んで眞理を悟り智慧の眼

が開いてくるに従つて、胃癌でも肺病でも自然に治つてくる事實からでも判るのであります。智慧と生命とは必然的に一體でありますから、智慧があると云ふことはそこに生命があると云ふことでありまして、智慧が生きれば生命が生きてくる、智慧がなければ生命が死んでしまふ。こゝに云ふ智慧と云ふのは眞理を悟る叡智のことでありまして、商賣上の掛引に使ふやうな智慧ではありません。

これと同じことが、愛に就ても云へるのでありまして、愛とは生命の正しい動さ方を云ふのでありますから、愛が発現してゐると云ふことは、そこに生命が発現してゐると云ふことになるのであります。だから愛を発現さし、愛の行ひを常に事實にあらはしてゐる間はその人は病氣にならない、現に病氣になつてゐる人でも、愛を発現させてゐる間は病氣が治つてゐるのであります。先日、生長の家誌友の六月の集りで、大阪から北村勉氏が來られた。この方は神誌の巻頭言に書いたことがあります。が網膜剝離症と云つて、眼科の方では治療の道のない難症の眼病に罹つてゐられる。眼が悪いので聖典「生命の實相」を充分讀み切ることが出来ない、だから眞理を知る智慧の眼を開くと云ふ方面から云ふと、智慧即ち生命を生かすと云ふことが出来ないのであります。そのかたが聖典「生命の實相」を自身のためにお讀みになると、たゞ一頁半を讀んだだけで

眼底が痛み、後頭部が痛んで来て、讀むに耐へなくなるのであります。ところが或る晩、知人の慢性病者を治してあげたいと云ふ愛の念願から聖典「生命の實相」を持つていつて病人の枕元で讀んであげた。病人の枕元には薄暗い電燈がともつてゐて、その光の弱さが到底、この重症の眼病者たる北村勉氏には一頁を讀む力がないと思はれた。併し、不思議！北村氏はズン／＼讀んで往つた。三十頁、四十頁、まだ／＼眼が疲れないで五十頁位も讀んだと自分で云はれた。北村氏個人に宿る力は小さくとも、愛は、自他が一體となるところに、肉體を超越した大生命の力が發現するのでありますから、北村氏自身の肉體を超越した力が發現したのであります。

多くの人は、他に愛を施したら、自分自身が減るやうに思つてゐられるかも知れませんが此實例が語るやうに決してそんなものではありません。愛を與へるとき吾々の個々の生命が大生命と一體となり一層大きく生長してゐるのであります。だから「生長の家」の創刊號の扉には、「まだまだ多く愛を與へよ、愛は與へれば與へる程殖える」と云ふ詩が書いてあつたので、これが「生長の家」の生活のモットーであります。

吾々の生命力が、與へれば却つて殖えると云ふことは、吾々の「生命」と云ふものが、たゞこの自分の肉體の中のみあるのではないと云ふ證據になるのであります。肉體と云ふ有限の物質が

ら出るだけの力であれば無論與へれば與へるだけ減つて來るのであります。鹽の水なら、その鹽の中のみありますからその水を汲み出すだけ減つてくる。ところが豊富な水脈につゞいてゐる井戸の水は汲み出しても汲み出しても減つて來ない。此の汲み出しても汲み出しても減つて來ないのは、井戸の水はその井戸の中にだけあるのではないからであります。それと同じやうに、吾々の生命力と云ふものが與へれば與へる程殖えると云ふ奇現象を呈するのは、吾々の生命力は吾々の肉體の中にだけはない。肉體の境を超えて流れてゐる廣大無邊な生命が吾々の生命であるからであります。吾々の肉體は井戸の框みたひなものである。それは實に廣大無邊な地下水の流れの一個の出口たるに過ぎないのであつて、吾々の生命の本地は目に見える肉體の井戸の中にあるのではなく、寧ろ眼に見えない無邊無限の地下水こそ吾々の生命なのであります。

無限無盡の生命につながる吾等

此の目に見えない無限無盡の生命の地下水——すべての地上の水が、地下水に於て一つに連つてゐるやうに、すべての生命は、目に見えない世界に於て一つにつながつてゐると云ふことは何と云ふ素晴らしい壯嚴なことではありませんか。この素晴らしい壯嚴な偉大な生命の流れが、あらゆる目に見える事物の背後にあつて、心の法則——即ち「念のフィルムを通して、一切は形に

化して顯れると云ふ「法則」に従つて、一切の顯世の事物を此の世界に顯現しつゝあるのであります。光をさへぎる念のフィルムをかけたものには陰多き世界が現はれる、一層透明なフィルムをかけたものには一層光明多き世界があらはれる。この世にはかくの如くして光明と暗黒とがあらはれ、健全があらはれ、幸不幸があらはれる。しかしあらはれたものゝうち、光明と、健康と、幸福とのみが實在であつて、暗黒と、病氣と、不幸とが實在でないのは、後者は、たゞ陰多き念のフィルムに遮られて、光がそこに無い、實在がそこに無い、生命がそこに無いと云ふ消極的狀態に過ぎないのであります。だから無いものは無いと云ふほかはない、暗黒は此の世に無い、病氣は此の世に無い、不幸は此の世に無い。この世に生命の水がないと云つて呷いてゐるのは、みんな本當に生命の水がないのではなく、生命の井戸を掘らないからであります。生命の井戸の水を深く掘れば掘るほど水は無限に湧いてくる。だから、生命が涸渇してゐると云ふ狀態——病氣と云ふ狀態、不幸と云ふ狀態は本來無い、そこには實在が流れ込んで來てゐないと云ふこと、即ち實在がない——非實在だと云ふ消極的狀態にすぎないのであります。

病氣は非實在

神のみ實在であり給ひ、神は生命でありますから生命のみ實在であり、「生命の虚」は換言すれば

非實在でなければならぬ、従つて生命の虚なる處の病氣は非實在でなければならぬのであります。實在すると云ふことは其處に神があると云ふことであります。神がなければ其處に何物も存在し得ない。苟も吾々自身が存在するならば、その存在するものは神である、その存在する吾々は神である、神以外に何物かゞ存在すると云ふ二元論は、神に對する一大不敬の論であります。キリスト教でも神に對立する惡魔の存在をみとめれば、神に對する一大不敬を冒してゐるのであります。本當の正しい信仰は神以外に何物も存在しないと云ふ一大信念でなければならぬのであります。

このやうに吾々は「人間は神である」と云ふ。人間が神であると云つても、心靈學者の云ふやうな明神であるとか、水神であるとかさう云ふ個別的な神靈——従つて相對的な存在であるところの個々別々の靈のことを云ふのではない、神と交通すると云へばさう云ふ個々別々な靈魂を交通することだと思ふやうにして、人間は宇宙最高の神、絶對的な圓滿完全な神とは感應交通出来るものでないと思ふやうにしたのは、靈媒を使つて研究する近代心靈學の一大蹉跌であります。絶對的な、唯一完全なる神は、それが絶對的であるが故に、吾々の内に遍滿し、吾々はその神の内に存在を有し、吾々はこの神に對して心を開くと神の生命の流れが、現實世界に流

れ込んで来る、此の心を開くといふのはどうするかといひますと、念のフィルムを陰のないものにする、明るいフィルムを掛けて活動寫眞機械を回轉すれば舞臺のスクリーンに明るい活動寫眞が映るのと同じやうに、心に思ひ浮べる念を明るいものとすれば、この現實世界が明るくなるのは、前にも述べた通りであります。それでは心が明るくなるにはどうしたら好いか、それはつとめて笑ふやうにするだけでも心が明るくなる。けれども本當に根本的に心が明るくなるには、人間本來、神の子なりといふ眞理を知ること、人間本來「神の子」なる事實を生きる——すなはち愛を實際の生活にあらはすこと、が第一であつて、感覺的方面から心を明るく保つて行かうとする方法は、時には効果を現はすこともあれば、時には失敗することもあります。笑ふといふことでも、踊るといふことでも、心が本當に吾れ神の子なりとの自覺に這入つて笑へて来る、ひとりでに手の舞ひ足の踏むところを知らなくなつて來るといふやうな笑ひであり踊りでなければ本當ではないのであります。しかし、人間本來神の子の眞理をきいたけれども形の世界で、固くしく表情が固まつてゐる習慣がある様な人には先づ笑ふと効果があるのであります。笑つた爲めに病氣の治つたといふ「生長の家」家族は随分多いのであります。前章に述べました大阪支部の中畑さんへ紹介されて來た六十四五歳のお婆さんのことを申しますと、このお婆さんは子宮筋腫

で下腹に塊りが出来てそれが段々大きくなつて来た。醫者に見てもらへば、不治であると云ふのであります。われ／＼に云はせれば不治ではない、腹の中に塊りが出来てゐるのは陰氣が凝つてゐるのであるから笑ふやうにしなさいと云つて、毎日つとめて笑はすやうにしたところが、段々その筋腫が小さくなつて治つて了つたと云ふ話は嘗て書いた通であります。

吾々の本來相と云はうか、實在相と云はうか、それは既に救はれてゐる。既に健康である、既に幸福である——始めから救はれてゐるのですから、救はれるも救はれぬもない始めから圓滿完全自由自在な神の子であり、神そのものである。だから吾々はその本來相をどうするか、どうせぬとか云ふことは問題にはならない。吾々にとつて問題となるのはその本來相が如何にして現象世界に映つてくるかと云ふことであります。併し、それも別に難かしい問題ではない、圓滿完全なる親なる神と自分が繋つてゐる、無限生命なる神と自分が結ばれてゐる、無限智慧なる神と吾々自身が一體である、無限力量の神と吾々自身が一體であると云ふことを自覺した程度に従つて現象世界の吾々に與へられる——即ち顯はれて來る生命と智慧と力量とがいろ／＼相異して來るのであります。

幽界、靈界も現象世界

現象世界と云ひますと、此の眼に見えてゐる現實世界だけを指すのかと思つたら大變見當違ひであります。幽界、靈界も現象世界でありまして、吾々が實相生命のありのまゝ——神からつゞいてゐる本當の相における自己の生命のありのまゝを自覺すると否とによつて、幽界、靈界に於ける吾々の生命の自由さが變つて來るのであります。靈魂の向上とは何を云ひますかと云ひますと實相生命の自由自在完全圓滿さを如何なる程度に發揮するかと云ふことによつてきまるのであります。幽界、靈界においても、苦しんでゐる靈魂や、病氣をあらはしてゐる靈魂や、完全な自由を得てゐない靈魂は澤山あるのであります。幽界、靈界は現世におけるよりも、念のフィルムが現像される速度が早いのでありますから、吾々が正しい念を有つか迷ひの念を有つかによつて、一瞬のうちに、その状態が容觀化されてあらはれて來るのでありますから、生前死後を通じて吾々は自己の生命を神との正しい關係に於いて自覺することが是非とも必要なのであります。それで、生長の家の聖典「生命の實相」は生きてゐる人だけが讀む本、病氣が治るためばかりに讀む本、現世における運命を好轉さすためばかりに讀む本だと思つてゐると間違ひなのであります。これは死んで行く人にはよい一層必要な本である、死ぬと云ひますけれども人間は死ぬのではな

い——循環輪廻して幽界、靈界に姿をあらはす——云ひかへると吾々は幽界、靈界に轉任し

生ずるのでありますから、その新世界に誕生するにはその新生の最初から、神と正しき關係に於て自己の生命の實相を自覺して幽界、靈界に誕生することにすれば、その人は幽界、靈界に於て永遠の自由を得ると云ふことになるのであります。だから人の臨終にのぞんで靜かに念送治療し、聖典「生命の實相」を讀んで聞かせることは非常な功德となるのであります。さうすると、現世に存続する期間に屬してある人なら必ず健康を回復せられますし、既に靈界に席をうつす時期のきてゐられる人ならば、その人の靈界に於ける生活状態が改善されて來るのであります。佛教ではこれを引導を渡すと云ふ、靈界移行の瞬間に生命の實相が神であつて自由自在なものであると云ふ悟りに引き導く、これが引導であります。このやうに自己の生命の實相を悟ると云ふことは生前臨終死後を通じて必要なであります。靈界へ行つて了つた人ならば、こちらから聖典「生命の實相」を讀んできかせてあげても、もう手遅れで達かないだらうと思ふ人があるかも知れません。せんがさうではない。こちらから、その人の靈代として祭つてある位牌なり、墓なり、御厨子などに向つて、その人に「今聖典「生命の實相」を讀んで聞かせてあげることから眞理をさとれ」と云ふ念をハツキ起して、さて讀んであげることになると必ず達するのであります。吾々が毎朝祖先の靈にお供へする御飯でも「どうぞ御先祖さんお褒り下さい」と云ふ念を本當に起してお供へす

るやうにすると、その御飯が靈界に達く。變なことを云ふやうであります。實際達くのであります。現世でも、實際これは誰それに上げたいと思へば必ず達く——吾々はその上げたいものに、その上げたい相手方の名前を書いて郵便局なり鐵道の小荷物係りの所へ持つて行くと必ず達く——これは相手に達けたいと云ふ念が具象化したのであります。この念と云ふものは必ず具象化するものであります。そんなことを云つても、その小包を上げたいと云ふ念を起しても、念を起すだけで郵便局なり、鐵道なりへ持つて行かぬば達かぬではないかと云ふ人があるかも知れませぬが、そんなことはない。實際これを誰かに差上げたいと云ふ念がハツキリと強烈に起つて來ますならば、必ずその念が、自分なり他人なりの手を動かして荷造りをさせ、所書きを書かせてつひにその品物を相手に達けることになるのであります。斯う云ふやうに念と云ふものは形あるものを動かす力をもつてゐる。念が主であつて形は念に従つてどうにでもなるものでありますから、吾々は出来るだけ善い念をハツキリ強烈に有つ必要があるのであります。その出来るだけ善い念のうちで、何が一等善い念であるかと云ひますと、自分は神の無限の生命、無限の智慧、無限の力に連つてをり、神の無限の愛によつて守られてゐると云ふ念をもつことでありますが、その念をもつにしても、その念が漠然として力弱いものであつてはならないのであります。その念が強

くハツキリとしたものでなければならぬ。その念が強^{ねん}くハツキリとしたものとなるためにはどうしてもその念が信念となり確信とならなければならぬのであります。そのために「生長の家」家族はすべて、毎月「神想觀」の修行を勵むことになつてゐるのであります。この修行によつて、吾々の心が神に向つて全開になる、さうすると神の力が滔々として吾々の生命の中へ這入つてくる。そして神の力は無限でありますから、それが這入つて來たときは吾々の生命も智慧も愛も力も無限となる、吾々が色々の點で何ものかを缺乏してゐるならば、誰も自分を缺乏させてゐるのではない、自分自身が心の扉をしめ心に堰をつくつて神の無限力の流入を遮つてゐるのに過ぎないのであります。だから「神想觀」によつて心の扉を開くことをし、神に結ばれてゐる自覺を深めて行きますならば、自然に適當な自分の動き方が出來て來ますと共に、周圍からも自然に自分を働かしてくれる働きをし向けてくれることになりまので、健康の點だけではなく、運命境遇等の一切も、現實的によくなつてくるのであります。

生長の家の全國誌友は神想觀遠隔指導を受ける特權があるのであります。思想の波動はラヂオの波動よりも一層精妙なものでありますから、どんなに遠隔の地にゐても感應するのであります。滿洲にゐて遠隔指導に一回參加して即座に、脚が歩けず坐れなかつた方が坐れ出し歩け出した實

例もあり、ラヂオの波動を受けるにも精妙なラヂオ機が要るやうに、思想の波動を受信するにも一種獨特の形式によつて本部から放送する精神波動を感受するやうにしなければなりません。その坐法形式、觀念の持ち方等は全集版「生命の真相」第四卷に詳記してあります。

心は彫塑家

○細胞は粘土、心は彫塑家、作品は吾らの肉體である。吾らはすべて自己の肉體を如何やうにでも作る權利をもつた全能者であるのである。ウエルスによれば、人體内の細胞の總數は一千兆以上ある。この驚くべき多數の細胞が「一絲亂れない支配」の下に色々の分業に専心してゐる。此の「一絲亂れない支配」は誰がするのであるか、それは吾らの心がするのである。心を切り離すとき、細胞はもう色々の分業をしなくなる。一個の細胞を「人間」から切り離して人工培養をした實驗によれば、心臓の細胞でも、腎臓の細胞でも、その他人體のどこの細胞でも、生きてはゐるけれども、一列一帯に、どれが心臓の細胞だか腎臓の細胞だか一向區別のつかぬ類型的な働きしか營むことは出来ないものである。さうすると心臓の細胞が心臓特有の働きをし、腎臓の細胞が腎臓特有の働きをし、その他、人體各所の細胞が各々特有の働きをしてゐるのは細胞自身の働きではなく、「我れ」の心の支配力を受けてのことであることが判るのである。我が心は全身の肉體細胞に如何なる働きをさせるかに就て絶対の支配權をもつてゐるので

ある。この心が支配權を捨てるとき全身の細胞の働きが亂れる。これを病氣と云ふのである。

言葉の印象力

○言葉と云ふものが如何に吾々に印象力を有つものであるかは驚くべきものがある。有名な美術批評家が或る繪畫展覽會へ這入つて往つたとき、其處にたゞ水だけしか描かれてゐない繪があつた。彼はその繪を平凡な繪だと思つてそのまゝ將に其の繪を素通りしようとした。

その時その繪の題詞が眼に付いた——「地上の萬民を一つに結びつける海」と書いてあつた。その題辭を見たとき其繪の中に作者が創作し込まうとした生命が其の美術批評家の心を射た。

美術批評家はつくづくその繪を凝視した、そして畫廊を出たとき其の繪のみが深く彼の心に刻まれて、他の繪は悉く忘れて了つてゐたのである。これは「倫敦の霧は詩人が言葉に表現し

たとき、始めて存在に入つたのだ」とオスカー・ワイルドが云つたのと好一對で、いづれも言葉の印象力を表はしたものである。病氣が醫師の命名を受けて愈々その實在を確固にして治

り難きものとなるのも言葉の印象力である。言葉の力を無視した醫學は醫學ではない。言葉の力を慎まないうで恐ろしい病名を患者に宣告したゝめに人の全生涯を暗黒に突落した醫者も少

くない。かくして善き言葉は人生を照す光となり、悪しき言葉は人生を暗くする悪魔となるのである。(月刊「生長の家」の巻頭語より)

第五章 思念の力

日本國民は今や永久平和の大大和の國——地上天國建設のために重大使命を果すべき時に直面しつゝあります。××に對して日本より送らるべき兵數には限りがある。形の應援軍には限りがあり、列國の牽制があり、日本は非常なハンチキヤツプを附せられて十數倍、否、時としては數十倍の敵軍に相對せねばならないのであります。かくの如く形の上でハンチキヤツプを附せられた日本軍に對して、銃後の吾らの爲し得る援助は形に見えない援軍を送つて、日本兵が一人にして十人百人の敵軍に相對しても傷つかないやうにすることであります。それが果して出来るか。諸君出来る、必ず出来るぞ。諸君一人々々の精神波動は弱くとも、千人の精神波動が合するときには偉大なる力を發現するのであります。去る昭和七年二月初旬の大阪毎日新聞阪神版にも敵彈を受けながらも千人針の白木綿に支へられ、その敵彈が貫き得ずに終つてゐる靈異が掲載せられてゐたのを御覽になつたでせう。「千人針」とは白木綿に千人の人に一針づゝ一寸位の糸を縫ひ結んで貰つたものです。道を行くとき、「ちよつとこれに一針」といつて糸を通した針と白布とを持つて來て頼む婦人に出遇ふことがあります。その時、それに一針縫つてくれる人の氣持は、大

抵はそんなに緊張した気分ではなく、一寸軽い供養の氣持で送つてくれるのであります。しかし、その軽い氣持でさへも千人の人の愛の精神波動がその白布に籠ればそれを身に纏ふ人々の生命を救ふことが出来るのであります。況んや千人の人が誠心誠意を盡して一つのことにと精神を協同的に集中するとき偉大な効果が實現するのは當然であります。既に「生長の家」家族は滿洲事變に對しては昭和六年十二月より協力一致、一定の時間を期し、北支の光明化に祈念の精神波動を送り、二月よりは上海を始め全支那の光明化祈願を念送したのであります。一人の誠でも天地を貫く。軽い氣持の千人針でも千人の愛念が集つた白布は一人の兵士の生命を救ふのであります。

ますから、「生長の家」誌友全部の光明化祈願念送は確かに効果を奏したのであります。その結果は本書の光明篇に記載されたる久保田儀藏氏や雁金幸壽氏に起つた奇蹟ともなつて現はれ、更に、昭和七年二月廿九日夜に於ては我が陸軍増援軍運送船の水先人たる誌友森本宏氏が、暗夜に楊子江の激流を逆風に抗らひつゝ十哩を遡り、三月一日未明の暗黒中に七了口に在る上陸地點のヅイを瞑目靜座せるまゝ靈眼にて見出し、増援軍を豫定の時に豫定の通り上陸せしめて、日本軍をして大勝に導いた奇蹟ともなつたのであります。併し上海事變の如きは序幕で、本當に人柱の要る非常時はこれから來るのであります。軽い氣持ならぬ誠ある百萬人の精神波動を必要と

するときに來るのであります。當時「生長の家」誌友は尙五百でしたが今は其數千倍に達せんとしてゐます。私は更に日本全國の人たちを「生長の家」誌友に欲しい。そして「生長の家」誌友が同一時間に、同一の光明思念を同一の目的方面に集中する時、それが戦地に派遣されたる皇軍のために、否、世界全體の光明平和促進のために、どれだけの貢獻をするかを實證したい。キリストも「二人心を合せて祈れば何事も成就する」と聖書に云つてゐます。一人の誠でも天地を貫くが、一人より二人が好いのは、誠は數重なるほど有力なる現實的力となることを示してゐるのであります。今は萬人の誠、百萬人の誠、日本人全體の誠の精神波動の協力を要する時である。「生長の家」誌友が協力一致滿洲の平定と上海事變に光明思念の精神的援軍を放送して効果を收めた實證に共鳴せられた方は、なほそれよりも幾層倍重大なる非常時に神威發揚世界光明化運動に加つて頂くやうに「生長の家」の精神運動の誌友に加入すべく紹介せられたいと思ふ。次に精神波動は現實的力であると云ふことを證明する参考として誌友田平義勝氏からの實際の手紙を次に掲げて見ませう。

本月の誌友會に是非もう一度いな毎月お伺ひして御指導を受ける積りで居りましたが、どうやら差支へるらしいので、遺憾ながら不参加いたします不惡。次のお集りには参り度いと祈つて

居ります。當日が参りまして行けるだけの餘裕を見出せばすぐ飛んで参ります。丁度本月参りましてお話ししたい私の實際會つた實驗といへば一寸不適當ですが、靈的波動と申しますか、一念の祈りがどれだけ遠隔地からでもその祈りが波及されるものであることをお話しいたしたいと願つて居りました。これによつて本部より各地に放送さるゝ神想觀實修に就いて先生の云はれることが事實である事を、幸にお集りに御話し下さいますれば満足に存じます。

大正十五年の初秋より私の實父はフトしたことから病床に就き種々方法を講じましたが、癒やされず醫師も老衰とのみ申し、滋養物も何の効なく段々弱りに十一月の初めに到頭他界いたしました。このときです、先にお便りした基督教の私がイエスの福音を述べんとすれど佛に完全に救はれて大安心の境地に居る父の心は、却つて吾々看護するものがさとりや聞かされる位なことで、到頭教師のすゝめも裏切つて福音をのべ傳へることが出来ず煩悶した事があります。

(實は、私の愚兄は日蓮研究もなし眞宗も體得して居りますが、相當宗教的に恵まれて居ります。幸に殆ど二ヶ月職をさつて父の看病につとめてくれました)斯くして日一日と衰へもう死に直面して居ながら息をひきとることが出来ない日が幾日か續きました。潮の満干を見たり種々親戚の者達が考へたりして居りましたが、最後に伯父がひよつとしたら何神様かに願かけて居

るのではないかと云ひだしまして、それでは扇子のかなめをとり屋根棟を越さしたらば好い、その願はきつと解けるといふので、それも實行いたしましたが尙何等効果がないのでした。クリスチャンの私はそれみよそんな迷信がどうなるかと一人心に思つて居りました。所が此度はたつた一人の私の姉が朝鮮の鎮南浦に居ります。こんどは伯父がそれでは兼て病氣を通知し又病態を常に聞いたり知らせたりして通信して居りましたので姉が何か全快の爲め願をかけて居るのでないかとその時愚兄が所思し、成る程父の病氣のいやされん爲めに(姉は金光教の信者でした)神に祈つて居ると常に申してきて居るので、さては姉が願をかけて居るに相違ないと申し、早速私が左の様な電文で打電しました。午後十時位と思ひます「チチクルシムガントケ」翌日になつても父は虫の息で唯苦しむのみ。何等異状がありません。翌日午後〇時すぎ再び局に行き打電しました。「チチクルシムガンカケルナ」。すると、午後二時三時がすぎ午後四時近くに姉から「デンミタガントケタ」と云ふ意味の電報が参りました。朝鮮から電報との事に父は最後の言葉で何を云つて来たかと私等に問ひます。僞りではあつたが慰めるべき言をいひ終るか終らない中に「起こせ、起こせ」と要求され、兄弟二人して起すか起さないかに父は安らかに何の苦しみもなく息もたゞ吐く息のみにて眠るが如く他界したのでした。そのときを思出

しますとき、何時もこの靈異に不審を抱いて居たのでした。後で姉にきゝますと、第一の電報のときは、商家に嫁いで此れまで電報のよく誤ることを知り、電信符號に心得のある姉は「チクルシムガントケ」のトの字は確にカの誤りであると思ひ、且つ電信符號もトとカは誤りやすいのでありますから、この「チクルシム」の次に「ガントケ」とする意味も一寸親子の情としてはいたし難いものだと思ひ、電文の書き方も悪かつたと思ひますが、その電文により頃の信仰に一層よりをかけ一生懸命に祈つたものであります。爲めに病人は多少快方であるかの如く見受けられましたが死ぬべき病人が死にきれず、幸か不幸か一日を生きのびた譯であります。今から考へましても長い月日の間に、極くよい日もあればまた今にもとも思ふ日があります。これ等は凡て姉や私等兄弟の、よくなつて貰ひたいといふ祈りの強い日と弱い日である精神波動の現象であることは事實であります。先生、これが偶然の出来事だと思ふ人は多いだらうと思ひます。併しその當時は私も基教萬能、他家は邪教(偶像崇拜)とのみ信じて居りましたのですが、そのときからの私の信仰に疑雲が漲り始めまして以前の様な信仰で進めなくなつたのであります。何となく足らざる感に打たれたのでせう。それからの私の信仰は却つて消極的であり恐怖的な心理状態でした。併し今度こそ判然と握ることが出来ました。そして一層

基督教に安心して進むことが出来、神とその靈界を充分默示される事が出来たことを「生長の家」を通じて神に感謝して居ります。集りには出席いたしまして此等を充分お話し御参考にしていただき度いと思ひましたが遺憾ながら出られない様子なので大畧を申しました。何卒此の原理を充分お話し置き下さいませれば本部からの神想觀の放送はよりよく誌友に會得されることと信じます。(下略)

人の祈りの精神波動にはこのやうな感應があるのであります。獨逸の藥學博士リエポール氏と著述家ギアタ氏とが親しく立會つた心靈的實驗には次の如きものがあります。

リエポール氏は、無言のまゝ紙の上に「ルイズ嬢は目を醒したとき、彼女の黒い帽子が赤色に變つてゐるのを見出すであらう」と記して、その心靈實驗に立會つてゐる人々に示した。そのあとで、リエポール氏とギアタ氏は紙上の言葉を中心念じて彼女に心的暗示を與へた。體てルイズ嬢は目を醒すと直ぐ自分の帽子を見て笑ひ出した。そして

「私はこのやうな帽子は持つてゐない」と云ふのだ。「帽子の恰好は同じですけども……そんな冗談をしてもよく分つてゐます。」

「何處が違つてゐるのです。」

「貴方は私と同じ眼をもつてゐらつしやるからお分りになる筈ぢやありませんか。」

「併し、違はないと思ひますね。何處が違つてゐるのです」と云はれて、被實驗者のルイズ嬢は翻弄せられてゐるのかと思つて、なか／＼答へなかつたが、遂に、

「だつて、この帽子は赤いではありませんか、私のは黒かつたのですもの」と云つた。そこでリエポール氏は帽子を取つて、フツと吹いて帽子の色を以前通り黒色に戻したと云ふ思念をすると、彼女は始めて安心して自分の帽子を受取つた。

此の實驗は非常に興味深いものであつて、吾等の放送する思念波動の援軍が如何なる作用をなすかと云ふことに就て一つの大なる暗示を與へるものであります。黒い帽子が、思念の力だけで赤く見える。日露戦争當時には、露西亞の多くの捕虜たちの告白によると「日本軍には赤い軍服を着た兵隊があつて、この兵隊があらはれるといくら頑強に彈丸を射つても一人も捲れるものがなく進軍して來るので抵抗の仕様がなかつた」と云つてゐる者があつたとのことであります。日本軍には赤色の軍服を着た兵士は一人もないので、これは明かに護國の神明の精神波動が、假りに客觀化して姿をあらはしたものだと思はれるのであります。

露西亞の話が出たので思出しますが、露西亞の心靈實驗家として有名なオコロウキツ博士の

著書の中には、化學者スウシエル氏がラザリンと呼ぶ田舎娘に心靈術を施し、數人の友人の前で水を飲ませて、(言葉では暗示をかけることなく)唯「思念」でスウシエル氏が心の中で「酒である」と念ずると、彼女は今飲んだのは酒だと云つて酔つた事實を擧げてゐます。この事實でも思念は感應する、精神波動は一種のラヂオ的エネルギーであることが判るであります。併し實驗室での實驗では、短距離に過ぎますので、シペリヤやアメリカの如き遠距離に思念が届くかどうかにかに就いての疑ひが起るかも知れない。遠距離間の思念の送達に就ては、例のオコロウキツ博士は次のやうな實例を擧げてゐる。以下「私」とあるは同博士自身であります。

私は十月二十四日、アーブルに往つて、マイアーズ、マリルラン兩氏等と共に、ダベル氏、ジヤネー氏の心靈術實驗に参加した。私たちは豫め次のやうな實驗條件を定めて置いた。

(1) 思念を放送する時間は籤引にて定める事。

(2) その時間は、吾々が被實驗者の家へ集る前までデベル氏に知らせぬこと。

(3) 被實驗者は勿論、その他何人にも一切、實驗の時間を知らせぬこと。また此の實驗を行ふ

ことに就ては被實驗者には絶對秘密にして知らせぬ事……等。

此の實驗は遠距離より被實驗者に心靈術をかけ、思念を放送して、半哩程距つたデベル氏

の家へ呼び寄せるのである。

思念の放送は夜の九時五分前から、九時四十分まで續けて行ふことに決定した。

私達はヂベル氏を家に残して、實驗されてゐるB夫人の家へ急いだ。B夫人の家では夫人と料理番とだけがゐて、他の家族は悉く不在であつた。私達はひそかに家の近くに忍び寄つて、室内の様子を覗いて見てゐた。夫人がピアノを弾いてゐるのを見届けておいて、私達は二手に分れて速くから家を見張つてゐた。九時五分前から思念の放送は始まつてゐるのである。九時になつた。ピアノの音はハタと止んで、四邊は森閑として了つた。往來には人影一つ見えなかつた。間もなく夫人が門前へ現はれた。

私等は樹蔭に身を潜めて見守つてゐると、彼女はジツと門前に佇んでゐたが、暫時にして庭へ戻つた、此の時、思念の放送者たるヂベル氏は、思念を集中してゐるうちに人事不省に陥り、九時三十五分まで意識を回復しなかつたのである。九時三十分になると、夫人は再び戸口へ現はれ、つかくくと戸外へ出て来て、何か用ありげに急いで歩行し始めた。樹蔭に潜んで彼女を監視してゐた私たちは、彼女の後に従つたが、彼女は私たちの存在には氣を留めてゐないらしかつた。

一息にパール街まで来ると、彼女はちよつと立止つて、前へ倒れさうになつたが、又足を速めて歩き出した。其時は丁度九時三十六分でヂベル氏はもう正氣に返つて再び思念を放送しつゝあつたのである。それから十分後に、私達は彼女の後についてヂベル氏の家に到着した。ところがヂベル氏は、自分の實驗が不成功に終つたと思つたので、私達を迎へにゆかうとして家を出ようとしてゐた。彼女は入口でヂベル氏に出會つたが、氏には全く氣がつかずに家の中へ這入つて行き……「何處へいつたのでせう。ヂベルさんは何處へいつたのでせう」と耐らない悲しいやうな聲で云ふのだ。ヂベル氏は書齋へ歸つて椅子に身を埋めて身動きもしないであつたが、たう／＼彼女はヂベル氏を見付けて「此處にゐらした。たう／＼見付けた」と子供のやうに手を叩いて喜んで叫んだ。かうして、ヂベル氏は思念によつてB夫人を自分の宅へ呼び寄せることに成功したのである。

本書でお馴染の今井樸軒先生の體験として最近私が直接先生自身から聞いた話によりますと、昨年、廉潔一方の同先生は非常に經濟的に困つてゐられたのです。色々富豪の方で先生に教へを乞ふ人はあるけれども、廉潔な先生に金錢的報酬をすると云ふことが失禮に當ると思つて經濟的に贈り物をする人は非常に少いのであります。が先生は實際經濟的に困つてゐられた。「貸

して呉れ」とハツキリ云はれ、ば常に陰徳を積んでゐられる先生の事であるから百や千の金は誰でも喜んで進呈する者があるのだけれども、自分からそんなことを云つては折角隠れたる所に福田を積んだ甲斐がなくなる——さう思はれますものですから、矢張り、金を欲する際には普通の經濟的關係で金の借りられる處から求められた。先生は未だ嘗て自己のために祈つたことのない方でありましたが、その年末ばかりは途方に暮れて神前に靜座し、正しい關係から必要なものが與へられますやうに、と祈られた。すると突然思出されたことには、先生には従前臺灣にゐられた時の持家が少しばかりある。或る銀行の重役にその管理を頼んであるが、前借りにはかりなつてゐて殆ど借り増しの望みはないのでありますが、それを先生は突然思出されたのであります。ところが其家の管理を預つてゐられる某銀行の重役である方は臺灣にゐないで東京にゐると云ふことが靈感的に感じられるのであります。併し、その東京の住所がどうも靈感にはハツキリ出て來ないものですから、今井先生は尙も心を籠めて、神に「なくてはならぬ物が適當の時期に與へられますやうに」と祈られました。ところが、數日後、大晦日も間近に近づいた頃、その某銀行重役から「明日何時三宮驛に着く」と云ふ電報が着いたのであります。今井先生はその時間に三宮驛に出られた。と、その重役が列車から降りて來て「實は東京に銀行の集會があつたので行つて

ゐた。臺灣を出るときには君のことをチツトモ思出さなかつたので、澤山の金は持ち合して來なかつたが、實は數日前から君のことを突然思出して、どうしても君に會つて金を渡さねばならぬやうな氣持がし出した。ところが君の處が判らないので昨日やつと友人に會つて、君のところを聞いて急いで電報を打つた次第だ」と云ふのです。それで今井先生は「實はこの暮には是非君に會ひたいと思つたが、どうも臺灣にはゐないやうだし、東京だとは思ふがハツキリ判らないので君の來て呉れるやうに祈つてゐたのだ。祈りの精神波動は實際感應するものでね」と云はれた。その祈つた時刻と、その重役氏が急に今井氏のことを思出した時刻とはピッタリ一致してゐたので、重役氏奇異の感に打たれて、「成る程精神感應と云ふものは不思議なものだね、しかし今後成るべくさう云ふ精神波動を送らないやうにして貰ひたいものだね。ハ、ハ、」とあとは冗談に紛らして笑つた。此事は今井先生と私とは親子のやうな間柄なので、ふとお洩らしになつた先生自身の述懐であります。

またオコロウキツチ博士の著書の中に次のやうな實驗がある。

千八百八十五年十月十三日、ヂベル氏は自分の家にゐて半哩離れてゐるB夫人に「明日午後、雨傘をさして庭を二回歩くべし」と云ふ思念を放送した。翌日いつて見ると、B夫人は非常に

興奮した様子で庭前を歩いてゐたが、雨傘はさしてゐなかつた。後にチベル氏はB夫人を催眠状態にすると、夫人は「貴方は何だつて私に庭の周囲をぐる／＼歩かせたのです。外聞が悪いぢやありませんか……それも昨日のやうに雨の降つてゐる日は構ひませんけれども、こんな好いお天氣に雨傘をさしたら人が嗤ひますよ」と云つて雨傘をささず歩いた辯解をしたのであつた。

此等の事實は何を示すか。人の精神波動は遠隔の地に達して驚くべき神祕なる力を發現すると云ふことである。「生長の家」に於ても思想觀の遠隔指導の實修時間になると、實修者の手掌や眉間や全身に一種感電するが如き靈感的感應が激しくなるとは、各地の誌友より報じて來られる實際の通信によつても明かであります。特に精神波動の放送者と感受者との間に心の連絡が出來てゐる場合は、この感應現象は最も著しいのであります。毎月「生長の家」誌友に對して行つてゐる思想觀の遠隔指導及び、非常時に於ける「生長の家」誌友協同一致の精神的授軍の放送は此の原理によつて成立つてあります。特に放送者多數が協力一致し、その放送の念力が強烈な場合には念波の放送者と感受者との間に豫め何らの連絡を保つてゐない場合でも、その精神的念力は偉大な現實化の力をもつてゐるのであります。今、世界にみなぎる、日本國に對する不條理

な反感敵意の精神波動の数は實に多數に達してゐるのであるから、それを打ち消し、世界の禍亂
 を出来るだけ少い惨害にて鎮定する爲には全日本の精神主義者が一致して光明精神の一大靈波
 を全世界に放送するために、今こそ「生長の家」の指導を通して團結すべき時であると思ふ
 のであります。私も、在來は會社の片手間で、雑誌を執筆し、神想觀を遠隔指導し、誌友家族の
 病氣治癒等のために祈念し、質問者に親しく返事を書き、面會者に出來る限り會つて來たのであ
 りますが、聖典「生命の實相」が完成し眞理の光が世に出るやうになつてから、世界(迷ひの)は
 將に滅せんとする燈光の一時一層パツと輝くやうに、一時「迷ひ」のケミカライゼーションとし
 て「迷ひ」の力は一層烈しき外觀を呈し、支那問題を序幕として現實世界は各方面に於て異常
 現象を起して來るのでありますから、在來のやうに會社の片手間で執筆し、祈り、治療してゐる
 やうなことでは、その祈りもおろそかになりますので、愈々私は昭和七年八月から背水の陣を布
 いて、神示のまゝに「生長の家」の仕事ひと筋に生き抜き貫くことにしたのであります。爾
 來益々時期は迫り、世界は異常の展開を見せんとしつゝあります。團結は力であり、ますから、全
 世界光明化の此の精神的援軍に何卒一人でも多く加盟せられんことを希望する次第でありま
 す。此光明思念聯盟に御加盟下さる下は連絡を保つために「生長の家」誌友におなり下さい。

第六章

人間は「肉體」でない話

此のやうに「思念」は力であると云ふのは「思念」は「言葉」でありまして、「言葉」は創造主でありますから、精神を統一して思念する時は、善きこと、光明化の目的にかなふ事ならば必ず成就するのであります。これは直接治療や遠隔治療や、それどころか、聖典「生命の真相」を讀んで思想がかはると、忽ち難治の慢性諸病が、癌や結核などまでが治るのは勿論、境遇、運命等も一變すると云ふ事實によつて實證されてゐるのであります。併し、いくら思念は創造者だと云ひましても、遠隔指導で思念を送りましても「生長の家の神様」に祈願して是非この悪いことを實現せしめ給へと思つて思念しましてもそんなことは現實化さないのであります。それは神様の創造力はたゞ善なる方向のみに働くのが本來の性質でありますから、神の創造力と反對の方向にいか力んで思念を凝らして見ましても、それは「虚」の力でありますから思念の浪費となるばかりで、つひには自分自身の心の力が「神」の力と一致しなくなり「生」の力と一致しなくなり、自分の精神の創造力が失はれて、如何に思念しても効かなくなるのであります。だから、神想観によつて他の病氣を治さうとするには、神の心をもつて自分の心とすることが必要であり

まして、自分の心が神のみに近いほど充分靈能を發揮する事が出来るのであります。だから此の人から治療費を儲けたいと云ふ心をもつて、治療してあげても効力は薄いのであります。あまりそのやうな利己心をもつて治療してゐますと、最初は多少その治療が効いてゐましても次第にその治療が効かなくなつて來ます。これはその靈的治療家の精神波動が神の救ひの靈波と波長が合はなくなるからであります。唯いま生長の家熊本支部をお世話して下さつてゐる澤田さんの話に、ずっと以前クリスチャン・サイエンスを日本へ輸入して「健全哲學」と題して日本全國にひろめてゐた人があつて、その人の支部が熊本のおちこちに開かれてゐましたが次第にその支部が自然消滅して了つた、それは治療費を儲けることにその支部の人たちが心の重心をおいてゐましたからでありませうと云はれましたが、さもあるべきことであります。無論世間には随分高價な料金をとつて靈的治療をし、それでゐて相當病氣を治す人があります。それは高價なものも効くに違ひないとの患者自身の信念から治る場合もあり、術者に下級ではあるが相當強力な守護靈が憑いてゐる場合に、その守護靈の力にて病氣を治すのでありまして聖書に「惡魔の領首が惡魔を逐ひ出す」と云ふことが書いてあるのはそれでありませう。

併し、本當の神の力、眞理の力、愛の力で人の病氣を治すにはさう云ふやうに料金を食ふやう

な心では、神癒の靈波の受信機となることが出来ず、従つて治病の成績をあげることが出来ない
のであります。

これを治療を受ける人の側から云ひましても、同様の原理が當籤るのであります、慾張る心
で治療を受けては効果が少いのであります。慾張る心で治療しても、慾張る心で治療を受けても、
どちらも同様で効果が少い。それは何故かと云ひますと、どちらにしても神癒と云ふものは神の
靈波が働くのでありますから、「慾ばる心」で自分自身の心の波動を汚し、神の靈波の不導體にな
ることは、施療者側は勿論、被治療者側に於ても不可ないのであります。

「路加傳」第七章にこんな話があります。或る日イエスがシモンと云ふ清教徒のところへ招かれ
て往つた。この町に一人の墮落した婦人があつた。名はマグダレーナ。恐らく娼婦なんかで、
この町で皆が指弾してゐる女でありましたでせうが、此の女がイエスがパリサイ人の家に饗宴に
招かれて来てゐられることを知つて、香ひの高い白檀油の這入つてゐる石膏製の壺をもつて来て、
懺悔の心に泣き濡れながら、イエスの足下に來つてひれ伏し、涙でイエスのみ足をうるほし、頭
の髪でみ足を拭き、接吻してその香油をみ足に注いだのであります。清教徒のシモンはこれを見
て「汚れたる娼婦よ、何をするか、神はそのやうな汚れた女の獻げるものを受け給ふものではな

い。又、イエスも眞に神から遣はされた人ならば、足に觸つた女がどんな素性の婦人であるかぐらゐは靈感で判りさうなものなのに、そんな汚れた女に甘い態度を示すとは何であるか。」と心の中で思つたのであります。そこでイエスはシモンの心中を見抜いて、「シモンよ、お前に尋ねて見たいことがある。返事をせよ。ある貸主に借金をした二人の人があつて、一人は五十圓を借りてゐる、一人は五百圓を借りてゐる。この二人の借金を許してやるとしたならば、どちらの借主の方が貸主を餘計に有難く思ふだらうか。」と反問せられた。そこでシモンは答へて「それは澤山の借金をしてゐる者の方が貸主の慈悲深い心を難有く思ふに違ひありません」と答へた。「さうだ、餘計借金してゐる者の方が、それを許されたことを難有く思つて貸主を愛するが、自分の借金は少いと思つてゐる者の方は許されたことを餘り難有く思はず貸主を愛しないのだ。お前はわしがお前の家へ入つて來たとき、足を漑ぐ水を呉れなかつたけれども、此の女はわしの足を涙で洗ひ、髪毛で拭いてくれた。お前はわしの足に接吻をしてくれなかつたけれども、此の女はわしの足に接吻して呉れた。お前はわしの頭に香油を漑いでくれなかつたけれども、此の女はわしの足に香油を漑いで赦されんことを願つたのだ。このやうに罪の多いと自覺するものほど感謝の念も深く、神を愛することも深いのだ。」かう云つて女の方を振向き「なんぢの罪は赦された。」と嚴かに云は

れたのであります。

許されると云ふ意味

此の語に就て知るべきことは清教徒のシモンは救世主に對して贅澤な御馳走を提供して、自分は本來そんなに罪深いものではない、これだけ救世主を饗應すれば、その價目として自分の小さな罪位は當然赦さるべきものであると云ふやうな、安價な、多寡を括つた、神の赦しを見くびつたやうな、蟲の好い傲慢な氣持があることであります。眞宗で云へば雜行雜修と云つて嫌つてゐるところの小善に誇る心があるのであります。この傲慢な氣持がある間は赦されぬ——赦されないと云ひましても、神御自身の方から人間の態度が悪いから赦すとか赦さぬとか云ふやうなケチな考へをもつてゐられる譯ではないのであります。人間自身の方から罪の正體を見究めず、自分の「神の子」なる生命の實相を見究めず、好い加減に、小善に誇つて自分の實相はこんなものだ、小善位のことである實相の全體が開顯したと云ふ風に考へて、自己のうちにある立派な神性の全體を認め顯はさうとしない。だから懺悔の心のないものは、本當の「神性」と云ふ無限の尺度を自分の中に握つてゐない、換言すれば自分のうちにある立派な本然の神性があらはれてゐない、この、本然の神性が顯はれることが「赦された」と云ふ状態であります。まことに「赦さ

れた」と申すことは罪の消えた状態を言ふのでありまして、單に「勘辨してあげる」と口先で云つて貰つただけで、本然の神性が顯れてをらず従つて罪が消えてはをらないで再び罪を犯したくなるやうな状態を指すのではないのであります。自己本然の神性があらはれた状態こそ、罪が赦され消去された状態でありまして、單に口先で「あんたの罪を勘辨してあげる」と云つて貰ふことを、罪が赦されたなど考へては大間違ひであります。本當に罪が赦され消去したならば、罪の顯れである病ひは消えて了ふ。それで神癒治療者は罪を消す人とも云へれば、相手の神性を開顯する人とも云へるのでありまして、施法者ばかりが幾ら力んで見ましても相手が懺悔の心を以つて眞理を受け入れてくれる心がなければ効果が少ないのであります。遊女マリア・マグダレーナは自分の罪を悔いた、悔いたと云ふのは、自分の「神性」と云ふ尺度で計つて見て、今迄の行ひはその尺度に足りないものである。今迄は本當の尺よりは短いニセ尺ではかつて「これで普通の人間の寸法だけあります」と云つて世間に賣出してゐたけれどもそれは自他を欺瞞してゐた。本當の「自分の神性」と云ふ尺度で測つて見れば實に、足りない足りない自分であつた、どうもニセ尺で測つて足らぬ寸法のことを世間に賣出して濟まなかつたと判る——この「濟まなかつた」と判るときには、自分の心のうちにチャンと「本當の神性の尺度」が握られてゐる——云ひ換へ

ると自己の本當の神性が開顯してゐる——これ即ち罪が消えた状態、罪が許された状態でありまして、一たび本當に今迄の自分が悪かつたと判つた以上は、もう罪は消えたのでありますから、心を過去の罪に捉へしめず、神らしい自覺で神らしい行ひにズン／＼突進して行けば好いのであります。これ懺悔した遊女マグダレーナがキリストから「汝の罪は赦された」と云はれた所以であります。

ところで、さきほど治療費を慾ばる心で病人を治療しても神癒の効果が少いと同様に、慾張る心で治療を受けても神癒の効果が少いと申しましたが、それはどう云ふことであるかと申しますと、醫者にかゝれば診察料だの薬價だのと多額に金が要るけれども、あの人に祈つて貰へば別金是要らぬからと云ふやうな慾心で治療して貰ひに來られる場合は効果は薄いのであります。遊女マグダレーナは罪の赦し(生命の實相の開顯)を得るためには、恐らく彼女の最も尊い香油の全部をキリスト(眞理)の足下に漑いだに相違ないのであります。形ある實はどんなに尊い實でも、香油でも、自分が神の子であると云ふ根本自覺に入ることにくらべると何でもありません。一切を擲つても眞理を知りたい、一切を擲つても救はれたい、その念願があれば必ずそれが形にあらはれる、その現れ方がマグダレーナでは香油をキリストの足に注ぐと云ふ行爲となつたのであります。何

もその行爲に懺悔の事實を顯はさないで、無代で、安いから治して貰つた方が利益だ——と、か
 う云ふ物質的利益の方が先に立つようでは、その人は神癒の靈波の受信機になれない——従つて
 神癒によつては病氣は治り難いのであります。治す方も治される方も、利害は全然念頭になく、
 神を愛する、神の榮えを顯はすためになら何でもすると云ふところまで達したら、實に素晴らし
 い顯著な治り方をするのであります。また治療費なども施法者の勞力に對する報いなど、云ふや
 うな意味ではなく、神の榮えをあらはすために使つて頂きたいと云ふことになる、それが淨まつ
 たものとなるのであります。病人の心のうちに今迄犯した罪の自覺をかきたて此れを反省し悔悟
 せしめるのは本人を苦しめるためではないのであります。それは却つて靈的甦生を促すためであ
 ります。罪と云ふものが潜在意識の底に沈澱してゐて、表面は罪を忘れて了つてゐて罪なんても
 のは自分には無いものだと思つてゐる、或はこれ位のこととは人間は誰だつてすることゝ罪でも何
 でもないと思つてゐる——さう云ふ罪は表面の心で忘れられてゐましても、本當に消えたのでは
 ない、それは鐵管の中の水垢のやうに、底にくつついてゐて却つて離れにくいのであります。か
 う云ふやうに識域下に隠れてゐる罪と云ふものは、表面に浮き出させてしまつたとき、始めて流
 れ去る準備が出来、始めて自消自滅する前提となるのであります。最近發達せる精神分析學上の

研究によりまして、「これは人に知られては恥かしい觀念である」と思つて故意に忘れて潜在意識の奥底に押込めてゐる觀念が却つて色々の病氣を起してゐるのであります、その忘れてしまつてゐる觀念を思出させ、意識の表面に浮び出させて適當にその觀念を處理したときに速かに治癒する病氣が數々あるのであります。

『懺悔』病ひを癒やす

一例をあげますと某婦人が飲料の飲めない病氣にかゝつたのであります。渴を覺えて飲料を飲みたたくて仕方がない、しかし飲料に唇をつけると咽喉に痙攣が起つてどうしても水を飲むことが出来ないであります。それで果物などによつて辛うじて渴を醫やしてゐると云ふ始末です。凡ゆる物質的醫療を受けても治らないので終にウインナの精神分析醫者ブロイエルのところへ通ふことになつたのであります。精神分析醫がいろいろその患者の潜在意識の奥底を探つて見ました結果かう云ふことが判明したのであります。或る日その婦人がお客様某貴婦人を出迎へて應接室へ案内すると、應接室のテーブルの上にコップが載つてゐて、そのコップの水を、飼犬が飲んでゐるのであります。その婦人はそれを見た刹那實にたまらない不快な感情を催した。その犬に對して出来るだけの悪い言葉を吐きならべて罵つてやりたいと思つたのです。併しそこには

お客様きやくさまの貴婦人きふじんがある。あまりなハシタない罵りののしやうをしてはこの貴婦人きふじんの手前てまへ耻はづかしいことであると思つてその婦人ふじんは罵ののしりたい心こころを押おさへてジツと我慢がまんしてゐたのでした。その時は何なんともなかつたし、やがて犬いぬがテーブルのコップから水みづを飲のんだと云ふことさへも彼女かのぢよは忘れて了わすつたのでした。併ともしそれを忘わすれて了しまつた頃から、此この婦人ふじんの飲料いんれつをのむことが出来できない病氣びやうきは始はじまつたのでした。その精神分析せいしんぶんせき醫いは患者くわんじやの精神せいしんを分析ぶんせきしてつひに彼女かのぢよの潜在意識せんざいしきの中なかに抑壓おさへつけられたる「飲料いんれつを飲のむのを制せい止ししたい感情かんじやう」が存在そんざいし、その感情かんじやうが表面へうめんに姿すがたをあらはさず、全然消滅ぜんぜんしょうめつしたのでもないために、形かたちをかへて、「飲料いんれつを飲のむのを制せい止しする病氣びやうき」となつてゐることを發見はつけんしたのであります。そこで精神分析せいしんぶんせき醫いはその婦人ふじんをして當時たうじその犬いぬがコップの水みづを飲のんでゐたときの狀態じやうたいを詳しく記憶きおくより呼よびおこ起こさしめ、その時とき、犬いぬを罵ののしりたかつた感情かんじやうを出で来るだけ自由じゆうに表出へうしゅつさせて能あたふかぎりその潜ひそんでゐる感情かんじやうを言葉ことばに出ださせたのであります。すると、それ以來いらいその婦人ふじんの「飲料いんれつが飲のめない」不思議ふしぎな病氣びやうきは治なほつて了しまつたのであります。

此この精神分析せいしんぶんせきの結果けつぐわによつて何なにが判わかるかと思おもはれますと、人間にんげんは自己じこの罪つみを押おし隠かくし、罪無つみなきを装よまほひ自分じぶんは犬いぬでも良人まつとでも罵ののしつたことのないやうな上品じやうひんな偽善ぎぜん的な顔かほをして、自分じぶん自身じしんもその罪つみを忘わすれて了しまつて全然罪ぜんぜんつみの無ないものゝやうに思おもひ込こんでゐましてもその罪つみは決けつして消きえてゐないと

云ふことでもあります。その罪をあばかれて、自分は貴婦人の前では慎しみぶかい令夫人のやうな顔をしてゐたけれども實はこんなくだらないことにも腹を立てるやうな人間であると云ふことが明るみに照らし出された。かうして潜在意識の鐵管の底に沈澱してゐた罪の水垢が表面に浮び出たときに、かへつて罪が流れ去つたのであります。宗教ではこれを懺悔と云ひ、精神分析ではこれを觀念泄瀉と云つてゐる、どちらでも同じことであります。

「生長の家」の教へでは罪と暗とは同じもので、本來無いと云ふのであります。暗と云ふものは本來あるのではなく光が無いと云ふ虚の状態である。暗を無くするには、暗を包み隠して置いて消えないと同様に、罪と云ふものも本來無いものでありますから、包まずに明るみに出して丁へば自然に消えるのであります。「罪を隠して置きたい、好い加減にみづから欺いて胡魔化して置きたい」と考へるのは罪もある——罪を犯すやうな自分もある——と考へてゐるからで、心が「罪」を存在するとしてそれに捉へられてゐるからであります。ところが罪は本來無い——罪を犯すやうな自分も本來無い——と云ふことが判りますと、今迄のそんな悪い自分は本來の自分になつた。これは本來有りもしない「ニセ物の自分」が本物の自分のやうな顔をしてウソを告いでゐたのであると云ふことになりまますから、一切の過去の自分を告發して「それは斯う云ふ悪い

ニセ物の自分であつた」とそれを明るみに出して懺悔すると云ふことになるのであります。此の「ニセ物の自分」を蔽ひかくして、抜けくつと罪のないやうな顔をして置くやうなことでは、まだ「ニセ物の自分」と今の「本物の自分」と云ふものとの分離が完全に行はれてゐないのであります。即ち眞の靈的「甦生」が得られてゐない、言ひ換へると人間が治つてゐないのであります。人間と云ふ全體の自分が治らないで病氣だけが治りたいと云ふやうな方が若しあるとしますれば、そのやうな人はこの根本治療法とは何の關係もないのであります。

さう申しましても、病氣を治して貰ひたい人が指導者の前へ出て来て一々その経歴や罪の経過をペラく喋つて懺悔して頂くと云ふことになりますと、中々時間のかゝる問題でありますので、そんなことは不可能なことであります。遊女マгдаレーナも別にキリストの足下にひれ伏して生涯の罪の経歴をペラく喋つた譯ではない、彼女はたゞ泣いた——それは罪を捨てるためにであつたのです。彼女はまたキリストに香油を注いだ——それは「キリスト」即ち「眞理」即ち「本當の人間」の榮えをあらはすためにであつたのです。罪をペラく喋つても、マгдаレーナのやうにひれ伏して慟哭するほどの——別に文字通り慟哭しなくとも宜しいが、其程の悔悟がなければ本當にその罪を厭うてゐるのではありますまい。また本當の罪の赦しを得るためにマгдаレー

ナが貴重な香油をキリストの足下に流したやうに一切を神性開顯のために抛つ程でないと、本當に自分の神性を愛してゐるのでもありません。本當に神を愛するとは別に他所にある偶像を愛するのではない。自分の神性を熱愛し自分の神性が開顯するために一切を抛つても構はない覺悟が要るのであります。

病氣を治して貰ふ方の側から云へば、それほどの覺悟が要る。これは病氣と云ふ物質的存在があるのではなく、病氣は心の罪(包み)——神性隱蔽(かくれ)の客觀化であるとの「生長の家」の理論から行けば當然過ぎる程當然なことであるのであります。併し、それ程でないものも癒やされる。悉くではないが大部分は癒やされる。それは、施法してあげる側の人の愛が一たん患者を包んで、彼を愛の世界——實相の世界——調和の世界へ引上げるからであります。

悪かつたと解つたら罪は消えてゐる

「罪々」と云ひましても、ペラ／＼とその内容を喋べらなければならぬと云ふことはない。前に述べましたが、病氣である人は過去の自分を顧みてそれが決して本當の自分の行ひでなかつたと反省し、この病氣が助かつたら今度こそ世の中の人のためになるために本當の神性ある人間として働かせて貰はうと一大決心すれば好いのであります。此の決心が純粹であれば、その瞬間心

の世界ではもうその病氣が治つて了つてゐるのであります。心が變つて了つてゐる、心が治つて了つてゐるのですから、心が投影して客観化してゐる肉體もその瞬間からめき／＼快方に向ふのであります。一旦、過去の自分の醜くさを知り、「それは悪かつた、改めよう」と大決心した以上は、もう過去の罪はその瞬間に消えて了つてゐるのですから、いつまでもその罪の深さにおのゝいて、「これ位で赦して貰へるかどうかしら」と疑ひの心を起す必要はない。それでは神の赦しの力を疑ふことになる。闇はどれだけ深くとも、灯がついたら必ず消えるのと同じやうに、罪はどれだけ深くとも「悪かつた」と氣がついたらその瞬間に消えて了ふのでありますから、その上いつまでも罪に拘はつてゐる必要はないのであります。かう云ふ眞理を説いて病人を悔悟せしめ神の生命へ新生することを誓はしめ、悔悟せしめたゞけで抛つておかないで、次に「赦された」と云ふ絶對安心の境地に誘導することが必要であります。

自 療 力 誘 導 法

次には、病人は自分は難病であるとか、不治症であるとか云ふ自分自身で造つた觀念の牢獄に閉ぢ籠められてゐるのでありますから、その觀念を破つてあげることが必要であります。それは色々「生長の家」に書いてある眞理の力によつて治つた實例を話してあげるが好い。實例ほど

人の心を打つものはない。「私の病氣も不治症ではない。治る。」と云ふ觀念が起る。生きる力(生命力)の神祕無限の働きを知つて、今迄萎縮し眠つてゐた病人の中にある生命力(自然療能)が働き始める。かうなれば、その病人は半分程度治つたも同じことでありますから、單に嚴めしい法術やお祈りの言葉で、他動的に治されると云ふ感じを與へるよりも、その方が却つて深切な自療法誘導法となるのであります。自療法さへ誘導されたならば、あとは自然に治るのでありますから、さう度々施法して眞理の思念を送つてあげる必要がない、それで指導者としては手数が非常に少くなることになるのであります。何も術を施すと云ふこともなく、藥を與へると云ふこともなく話をするだけで病氣が治ると、何が原因で治つたのかどうも見當がとれない。「妙だなア、不思議だなア。この家へ這入つて來たゞけで長期間の痼疾が治つた。」など云はれる。その代りに料金をとりにくい。明かに、何を與へて、どう云ふ結果で治つたのか見當がとれないからであります。併し料金のためにするのではなく、相手の神性を開顯して本當に其の人間を救ふためにするのでありますから、これが本當の救ひ方なのであります。「眞理の話など聞きたくない、眞理の本など讀みたくない、子供だけ通はせますから治して下さい」など云はれる人は一寸この治療法に對しては苦が手なのであります。子供の病氣は兩親の心の亂れが反映してゐるのでありますか

ら、心の方面から云つては、両親の心を治さないので、子供を治すと云ふことは不可能なのであります。寧ろ子供は來られないでも、両親が來て、その両親が眞理の話をきいて絶対安心の境地に入れば、子供の病氣も自ら治つて了ふのであります。

「生長の家」の治療法は「眞理」をもとめる、云ひ換へると隠れてゐる「本當の自分」を開顯する、肉體を超えて死なゝいところの生き通しの生命を求めのがこの治療法でありまして、肉體の個々の症状に對して一々手當を加へるなど、云ふことは枝葉の問題なのであります。

何故「生長の家」で、治療法と云ふやうな法術も行はず、時には單に本を讀むだけで、時には單に話をするだけで病氣が治るかと思はれますと、病氣と云ふものは本來神が拵へたものではないからであります。神が拵へたものでないものは實在するやうに見えてもそれは本來無いのであります。病氣は吾々の五官を根據とした想像力が作つたお伽話の王子様や王女様のやうなものである。それは無智な幼い子供だけが存在すると思つてゐるのであります。だから、病氣の眞相と云ふものを、本を讀むとか、話して貰ふとかして、眞理の光に照し出して見ると日光にふれた霜のやうにペシャクと融けて了ふのであります。

肉體人間は「生命」の造つた自働人形

吾々は今迄あまりに五官の働きに信頼を置きすぎて、生命の實相を見ることを拒んでゐたのであります。物質を見て靈を見ず、影を見て生命を見ず、肉を見て本當の人間を見なかつた。吾々の生命は肉體から發する化學作用であり、吾々の心は腦髓から發する化學作用かなんそのやうに思つてゐた。ところが豈計らんや、肉體がある前に生命があり腦髓がある前に心があつたのであります。心の根元であると生物學者がみとめてゐる腦髓細胞にしましても、物質分子が偶然に一定の列び方をして腦髓細胞となつたものではありません。生物學者や、醫學者や物理化學者が幾百萬回いかに諸種の物質を配合し調合して見ましても腦髓細胞と云ふものは造れるものではないのであります。物質をいくら外から寄せ合はして見ましても腦髓細胞は出來上らない、けれども眼に見えない不思議な力が内から働くとき、腦髓細胞でも心臓の細胞でも肺臓の細胞でも、其の内から働く無形の力が造り上げるのであります。此の無形の内から働く力は、どの物質分子をどう云ふ風に有機的に化合させて、どう云ふ風に配列したら腦髓細胞に造りあげることが出来るかと云ふことを知つてをり、それをちやんと腦髓細胞に作りあげて、物を考へる物質(腦髓)と云ふものを作りあげたのであります。この「無形の内から働く力」こそ吾々の「生命」であり、吾々の本當の心なのであります。腦髓の作用として出る精神作用などは、この本當の心の幾萬分の一

の反映にしか過ぎないのであります。どんな大醫學者の脳髓から出た精神が刻苦勉強しても一片の脳髓細胞をも作る事は出来ない、これに反して、どんな無學者の胎内にでもその内から働く無形の力が働くとき精妙な脳髓細胞を自由に造り上げることが出来るのであります。醫學者の頭が色々考へて、色々工夫して見ましても、無學者の此の内から働く無形の力の肉體を作る力に及ばないと云ふことを知りましたならば、肉體に故障が假令ひ出來しても此の内から働く無形の力の治す力にたよることは一合理的なことなのであります。本當を云ひますと、此の内から働く無形の力こそ「本當の自分」(生命)なのであります。この「生命」は肉體を超越して存在し吾々の肉體が此の世にあらはれるまでに既に存在してゐて、肉體を設計し創作したところの靈妙不可思議なる存在でありまして、此の靈妙不可思議な生命力こそ「本當の自分」であつて、吾々が今まで「吾々自身」だと思つてゐたところの此の肉體は、此の靈妙不可思議なる「本當の自分」の設計になる自働人形に過ぎないのであります——言ひ換へますと、「本當の自分」が想念を起した——その想念の反影が吾々の肉體なのであります。

吾々の脳髓はその各部の位置に従つてその作用の分擔がちがふと稱せられてゐます。即ち一例をあぐれば物の大小を判断する所や、位置を識別する所やそれ／＼分擔があつて脳髓の灰白質の位置に従つてその作用がちがふと云ふのであります。歐洲大戰當時脳髓の一部に彈丸の破片を受

けて、**脳髓**の或る機能を司る部分を失つた人がありました。一時その人はその部分に當る機能に故障を生じましたが、間もなく**脳髓**の他の部分が、失つた**脳髓細胞**と同一の質に變化し初めまして、失つたその機能が回復して來たのであります。これによつて觀ましても、今迄吾々は**脳髓**に「心」があるとと思つてゐましたが、その**脳髓**を修理するところの、もう一層靈妙な「心」が**脳髓**の背後にある。その「心」は**脳髓**が出来る以前から存し、**脳髓**が出來てから後も常に吾々の背後にあつて、自分の製造した肉體人間を修繕してゐるものだと思ふことが判るのであります。だから、**脳髓**と云ふ肉體人間の頭でどうしたら此の肉體は治るだらうかと思ひ煩ふには及ばないのであります。それは人造人間の頭で人造人間を如何に修繕しようかと思ひ煩ふ必要がないやうなものであります。人造人間に故障が起つたら人造人間を製作した技師が一等その修繕が旨いのでありますから此の技師に修繕のことを委ねるが好いのであります。此の技師が吾々自身の「生命」でありまして、これが「本當の自分」である。「人間考へ」「人間智慧」と云ふものは人造人間の機構から發する作用で、幾分は「本當の自分」の考へを反映してはゐますが實に不完全なものであります。醫學的知識と云ふものは要するに**脳髓**を拵へた吾々の「本當の生命」即ち「本當の自分」から出る神智ではないのでありまして、拵へられた人造人間の**脳髓**から出る不完全な知識でありますから、内部から働く生命の自然療能の神祕的智慧に及ばないこと萬々なのであります。

肉體人間は人間の模型ではありませんが「眞の人間」ではないのであります。吾々は「眞の人間」を視詰めなければならぬ。此の「眞の人間」を見出し、その「眞の人間」の實相を見詰めますとき、それが「神の子」であり、否「神」そのものゝ流れであつて、その中に無限の供給がある、無限の生命の供給もあれば、無限の智慧の供給もある、無限の愛の供給もある——なくてはならぬ一切のものゝ供給がそのうちにあると云ふことが解るのであります。これを患者に解らせてあげるのは神癒醫者のつとめなのであります。即ち神癒醫者と云ふものは、人間を人造人間の境地から眞の人間の境地にまで、高め上げる聖業を営むものでありまして、人造人間の故障の要所を外から繕ふ役目をするのではないのであります。「人造人間 即ち「肉體人間」の故障の要所々々を物質的に繕ふのは、これは普通の御醫者のするところでありまして、全然役目が違ふのであります。だから、神癒醫者は全然役目がちがふのでありますから醫者の領域を冒すものではないのでありますから、醫者から攻撃せられると云ふこともないのであります。普通の醫者の方では主として脳髓が考案した修理法を行ふのであります。生長の家の治療法では人間自身を「人造人間」から「眞の人間」の境地に引上げ、脳髓を拵へ出した製造元の「生命力」にゆだねるのでありますから、薬一服のませないでも、話をしたり本を讀ませたり神想觀を實修したりして「神性」の自覺を強めるだけで治つてゐますが、病氣が治ると云ふことは神性自覺の一つの複作用で、人

間を治して、「肉體人間」の境地から「神の子・人間」の境地にまで引上げるのが主眼でありますから、皆さんが病人に對せられる時には眞理を話して人間を治すことに主眼を置かれたいのです。人造人間は人造人間を完全に修理し得ない、肉體人間は肉體人間を完全に修理し得ない、たゞその創造者のみこれを完全に修理し得るのであります。その創造者は各自の自分の内に宿つてゐるのであります。皆さんが、眞に病人を可哀相であると御同情になりますならば、病人の心眼を、人造人間なる彼の肉體から一轉せしめて「眞の人間」——一切を自己のうちに具足し何物にも害され傷けられることのない不滅の人間を観るやうに話してあげなければならぬのであります。かうして病人の心の眼が一轉して、五官で見える肉體人間を「眞の自分」ではないもつと不滅な完全なものが「自分自身」であると云ふ自覺が出來て來ますと病氣は一轉して快方に赴くのであります。病氣が、それを詳しく話してあげても病氣がよくならないのは、その話が呑み込めないのか、病人がなほ潜在意識の奥底に深い恐怖が有るか治つて了つては困ることが内心に伏在するのです。

* * * * *

「無門關」第三の公案に「俱胝豎指」と云ふ條がある。金華山の住持俱胝和尚は如何なる參門者があつて何事を問はうとも、唯一本の指を立て、示すのであつた。その指を見ても悟るものもあれば悟らずして去るものもあつたであらう。形を見るだけで眞生命を見ない者は悟

ることが出来ないのである。小僧某、一日外にありて人に問はれて答ふるに俱胝和尚を眞似て一本の指を立て、示した。小僧某は此のとき俱胝和尚の形を眞似たに過ぎないのであつて何故俱胝和尚が指を立てるか其の眞生命には觸れてゐないのであつた。和尚これを聞いて小僧の立てた指を切り去つた。小僧は痛いので悲鳴を擧げて逃げようとする。この時俱胝さかず小僧の名を呼んだ。小僧は和尚が何を云ふのかと思つて振向くと俱胝は例によつて指を立て、示した。それを見た瞬間その小僧は大悟つた。何を小僧は悟つたか——それを知るものはその人もまた大悟ることが出来るであらう。小僧は自分に立てるべき指のある間は形にとらはれて眞生命を見なかつた。が、今自分が指を切り去られたとき立てるべき指がない。しかも師の和尚は斯くの如く立てよと指を示してゐるのである。無い指をどうして立てるかこゝに禪の眞生命がある、立てるべき指は形の指ではなかつたのである。指があつて立つやうな指なら指が無くなつたときには立たなくなるであらう。本當に立つ指は指が無くなつても、何が無くなつても立つ指でなければならぬ。和尚が示したのは何が無くとも束縛されない自由自在の「生命の指」であつたのだ。此れが無いと困るとか、彼れが無いと困るとか云ふ者は「生命」の實相を知らない者なのだ。何が無くとも少しも困らないのが、吾らの「生命」の實相であるのだ。

第七章

眞理は爾を自由ならしめん

神誌「生長の家」や聖典「生命の實相」を読んで藥劑や醫療を廢し病氣の治つた例が實に澤山報告せられて來てゐますが、誤解してはなりません。それは藥劑を廢したから病氣が治つたのでなければ、醫療を廢したから病氣が治つたのでもありません。一時的病氣の消滅ではなく、病氣の眞に治るのはたゞ「生命」が自性圓滿なる神の子たる眞實相、本來相を自覺することによつてのみであります。他の方法で治つたやうに見えても眞に治つたのではない、この事は特に明記して置かなければならないことであります。

多くの誌友は藥劑を廢することによつて病氣が治つたと云つて喜ばれますけれども藥劑を廢して病氣が治つたやうに見えるのは、藥劑を飲んで病氣が治つたやうに見えるのと好一對で、それはたゞ外見だけに過ぎません。「生命」と云ふものは、神から出でた「神の子」でありますから、藥劑でプラスすることも出来なければマイナスすることも出来ないのが生命の實相であります。

その生命の實相を悟れば病氣が治る——否、神の子たる人間生命の本來相には病氣が無いのですから、病氣が治るも治らぬもない、たゞ病氣が本來の「無」を暴露するのであります、かうし

て生命の本來相を悟れば同時に藥劑も不要になるのであります。だから、神の子たる人間生命の本來相を悟ることが第一原因で、この第一原因から病氣が治ると云ふ結果も顯れれば、藥を止めると云ふ結果も生ずるので、病氣が治ると云ふことと、藥を止めると云ふこととは共に結果であつて、藥を止めたと云ふことが病氣を治す原因になるのではないのであります。従つてこれを禪家の筆法を以てすれば「藥を飲むと云ふ効果は？」ときかれれば「曰く無所得」であると同時に「藥を止める効果は？」ときかかれても「曰く無所得」と答へるほかはありません。

かう云ふ次第ですから「生命」の本來相を自覺しないで、唯なんでも藥を止めさへしたならば病氣が治るなどと考へて藥を止めるなどは實に迂濶千萬な話でありまして、それでは藥と云ふものを今まで自分の生命を縛つてゐた繩のやうに思ふことになり、藥を止めることを其の繩から解放されるやうに思ふやうでは物質と云ふものに「生命」を縛る力があると云ふことを肯定し「生命」は物質に縛られるものであることを肯定してゐることになり、そのやうな「生命」に對するアヤフヤな信念では藥を止めたとして斷じて効果があるものではないので、その人は心の奥底では、物質の「生命」を縛る力を認めてゐるのですから、それは「生命無力」の自覺が形を變へて現れてゐるに過ぎません。

では、薬は止めないでも好いかと云ふと、廢めた方が自分の生命の實相を悟り易い。二二二頁無指にして立つ指に掲げた通り俱胝和尚は如何なる參問者が悟りをきき、に來ても唯一本の指を立て、示すだけであつた。それを見習つた小僧が同じやうに參問者に指を立て、示した。併し小僧は形だけを眞似てもその堅てた指は悟りのない指である。それで俱胝和尚は其の話を聽いて遂に童子の指を切り去つた。小僧は痛さのために大聲をあげて泣きながら逃げ去らうとした。俱胝は「小僧、待て」と呼ぶ。小僧は振向く。その途端に和尚は指を立て、示した。小僧はもう自分には立てるべき指がない、その時小僧は豁然大悟した。「堅てるべき指は形の指ではなかつた」と。薬を廢めると云ふのは此の俱胝和尚が小僧の指を切去つたと同じ働きをするのであります。偕てさうなると、もう絶對絶命、立てやうにも形の指がない。縋らうにも形の薬がない。そこで自然と自分の生命の實相を悟ることになるのであります。薬劑の効果を信じ過ぎるのも間違ひであります。ますが、薬劑を廢める効果を信じ過ぎるのも間違ひであります。たゞ吾々が信じて好いのは、吾々の生命の實相が神であると云ふ其の「生命の實相」のみであります。生命の實相が自性圓滿なる「神の子」——即ち佛性であると云ふことを自覺しないでは、薬劑を廢めても薬を飲んでも病氣は本當に治るものではない。治つた様に見えても一時病氣が姿を消したに過ぎないのです。

「生長の家」所説の人間無病の眞理を單純に、「藥を廢めれば病氣が治る」と云ふ主張だと受取り
 になるほど間違つた觀察はありません。無論「生長の家」の誌友には色々の段階の人があるので、
 その説き方は千變萬化してゐるのであります。或る時には小乘的に説く事もあれば、或る時には
 大乘的に説く事もあります。釋迦が成道最初にお説きになつた小乗の教へと、その晩年お説きに
 なつた法華經や涅槃經とは一見反對矛盾するやうなことが説いてあつても、それは參聽者の自覺
 の向上に従つて話される所が異つてくるのでいづれも眞實であつてウソではないのであります。
 釋迦は最初の頃の教へでは人間を觀ずるのに皮膚の一枚下には實に穢い血液があり、内臓があり、
 人間と云ふものは美しく見えてゐるけれどもその實決して美しいものではない、かう云つて人間
 を穢いものと見て遠離するやうな説き方をせられてゐるのであります。併し釋迦がかう云つて肉
 體人間を否定せられたのは、さらに不滅なる人間、實相の人間、永遠の人間、不滅なる人間を肯
 定するための方便——つまり俱胝和尚が小僧の指を切つた働きであつたのであります。肉體人間
 の穢なさを説いてそれへの執着を打消し、打消して行くところに、永遠生命の「眞の人間」が
 自覺され顯れて來るのであります。ところが釋迦が肉體人間の穢なさを説かれたから、これは捨
 てなければならぬと思つて、山に入つて人間と交らずに一生活を徒費する人が出來たり、肉體を

遠離せねば「眞の人間」が出て来ないと思つて肉を殺して自殺するとか云ふやうな人が出て来たりしましても、それは釋迦の教が悪いのではなく、その教を本當に理解し得ず取り違ひする人が悪いのであります。如何なる教も本當に理解しない人には害となるので、醫學でも本當に理解すれば醫道となりますが、物質迷信になつて自己を害うてゐる人が多いのであります。

「生長の家」で藥劑無用論を唱へるかの如く藥劑から斷然遠離するやうに説きますのも、釋迦が肉體人間の醜汚を説いたのと同じ筆法であつて、物質に支配されなところの神の子たる「生命の實相」を自覺せしめるためであります。物質にいつまでも頼り、その前に拜跪してゐるのでは、神の子たる自己の靈的生命が自覺出來ないので、私は「物質に頼るな！」と斷乎として云ひ放つ。「藥劑は生命に對する異物だ！ 藥をとらせるなら、結核の初期から第三期まで重曹一點張りで押通す位眞理を知つた醫者が名醫だぞ」と云ひ放つ。これは「喝！」と云つて禪僧に如意棒で擲られたのと同じことでもあります。如意棒で擲られるために、ハツと生命の實相を悟る人もあれば、擲られても本當に悟れない人もあります。如意棒で擲つた後に、某氏が悟らなかつたと云つても、某氏が悟らない原因は如意棒で擲つたからであると結論しましたら寧ろ滑稽であります。「物質に頼るな！ 何を食ひ何を飲まんと思ひ煩ふな、生命はそれ自身で圓滿なものではないか

!」これは迷へる人に對する一喝でありませう。「物質に頼るな」と云ふ言葉に捉はれ形だけを眞似て見て飯と云ふ物質をたべぬことにし、着物と云ふ物質を着ぬことにし、大地と云ふ物質の上を歩まぬことにし、空氣と云ふ物質を吸はぬことにしたところで吾々は生命の圓相が悟れなければ何にもならないのであります。之に反して、自己生命の圓相がさとられて來ますと、肉體を始め一切の自己の環境は自分の心の影像でありますから、自然に必要な養ひになる食物も生活に必要な一切の資料も廻つて來る。その自然に廻つて來た食物を實相世界に於て神から與へられてゐる食物の投影であるとしてその背後に神の無限の生かすクスシキ力をもとめて頂いて食べる事に致しますと、自然に肉體は生命の圓相を表にあらはして健康になるのであります。又眞に自己の生命が圓相なる神の子であると思はれ、物質が眞に「無」であると解り、肉體が眞に非存在であると判りましたならば、それに眞に捉はれることがなくなり、強ひて捨てねばならぬと力むこともなくなり、また強ひて得ねばならぬと力むこともなくなり、人ありて愛の心で藥を飲めと與へてくれるならば藥も飲むであります。また無論のこと藥が得られなければその得られないことに心が捉はれて悲しむこともなくなるのであります。物質は「無」でありますから、飲むも飲まぬもその効

果は「曰く、無所得」なのでありまして、たゞ自己の生命の實相が神の子であると云ふことを悟ると否とが吾々の生死の岐れ目になるのであります。

先日、Xさん、Yさんが修行に來られた。「宇宙の一切のものは神様のお造りになつたものでありますから、薬も神様のお造りになつたものでそれを用ひることは差支はないではありませんか」と云はれた。私はその時言下に「人間は神の子ですから何を以てても差支へありません。何物を用ひようとも吾々を害することはない、本當は毒薬を飲んでも吾々の生命を害することは出来ない。況んや醫薬を呑んだ位で吾々の生命が害されるなど、云ふことは斷じてない、たゞ自己の生命を害するのは、自分の心であります。で、物質に頼る氣持で薬を用ひるならばそれは生命の松葉杖をつくことになり自性玲瓏圓滿な自己の神性を發現する妨げになります。それに薬は神の創造だと被仰いますが、薬は「神」の創造ではありません。薬は「無明」の創造です。神は此の世界に病氣を造らないから、それを治す薬を造る必要はない。病氣を造つたのは「無明」でありますから、その病氣を治さうとしてアセルのも「無明」であり、薬を造つたのも「無明」です。「無明」を以て「無明」を制し、毒をもつて毒を制しようとするのが藥物療法で、人間を靈性なる神の子なりと悟らず、人間を肉體と云ふ物質的存在だと思つてゐるものには物質的藥劑も一時的効果は

あります。人間をば靈性なる神の子なりと信じてゐる人には薬が要らなくなるのです。併しまた薬を要らぬと頑張る必要もなくなる。薬などはその人の生命にプラスもマイナスもし得ないことが判るからです。」と答へたことがあります。

本全集宗教篇に掲載せる「生長の家より觀たる創世記」に書いて置きましたやうに、この現實世界の眼に見えてゐる存在は「朝」もあれば「夕」もある。光もあれば暗もあり「眞理」の投影と「虚」の投影とが相交錯してゐるのが此世界でありますので、薬と云ふものがこの現實世界にあるやうに見えるからとて、その薬が神の創造であるやうに思ふのは、病氣と云ふものが此の現實世界にあるやうに見えるからとて、その病氣を神の創造のやうに思ふのと同様に迷ひであります。神の創造り給へる「實相世界」には病氣はないから従つてそれを治すための薬も存在しない、従つてその「實相の世界」が正しく投影して出現してゐる現界(現實世界)には病もなく薬もない、病があるやうに見えるのは實相を悟らぬ妄念迷想の投影でありまして本來存在しないところの病を治す薬があるやうに見えるのも實相を悟らぬ妄念迷想の投影であります。

私がかうして一切の人間の工夫を否定して了つたところに、果して後に何が残るか。たゞ本然の自由自在な神の子たる生命が残るのであります。「生長の家」の説く眞理は實に驗しき眞理で

ある。一切を捨て、一切を得る道である。薬を捨てると云ふことが出来ても生命の實相が自覺で
 きずほかの事に心が引つかつてゐるやうなことで、脊負投げをくつて了ふのであります。「無
 門關」と云ふ禪宗の本の第八の公案に、月庵和尚が或る僧に、「契仲」と云ふ人が車を一百幅造つ
 たが其の車の兩端を取り、又軸も取去つて了つたが果して何を明かにするつもりであるか」と
 云ふ公案を與へたと云ふことが書いてある。無門はこれを評して、「若し直下に明得せば眼は流星
 に似、機は掣電の如し」と云つてゐる。これは形を悉く奪ひ去つたならば、その人の眼光は流
 星の如く輝きその人の心機は稻妻のやうに「生命の實相」に到達すると云ふことであります。今
 迄は軌道があり、車輪があり、車軸があるので、その車に乗ることが出来、成程交通に便利な
 ものだと思つてゐた。併し汽車が將に衝突せんとして避け得られないのは軌道があつたり、車輪
 があつたり、車軸があつたりするからである。軌道もなく、車輪もなく、車軸もなくし、それを
 悟りの車の上のせれば、もう自由自在なものであります。そこで「無門關」の頌には「機輪の
 轉ずる處、達者も猶ほ迷ふ、四維上下、南北東西」とあるのであつて、吾々が迷ふのは軌道があ
 り、車輪があり、車軸がありその軌道の上を是非通らねばならないと心が捉はれるからである。
 そこで軌道も車輪も車軸も取去つて了つたならば、その時始めて人は自分の「生命の實相」が無

聖礙なる神の子なることを自覺し得、四方上下東南西北自由自在の境地に達し得ると云ふのであります。併し單に軌道や、車輪や、車軸を取去り取壊つてしまつただけで、悟りの車輪の上に乘せることをしなければ、車輪も車軸も取去つたゞけそれだけ不自由になつてしまふのであります。

「一燈園」などでは經濟的自由を得るために、一旦總ての財産を捨て、了へと云ふ——これもただ捨てるのが目的ではなく、俱厩和尚が指を切つたと同じ働きである。限りあるものを捨てたときに、一切の經濟的自由が自分のものとして歸つて來るからであります。そして「我」の所有、迷ひの所有を捨て、了つたあとでひとりで與へられて來る所有がある、必要なものはすべて與へられる、現に一燈園では「我」の所有はひとつもないのであります。その光泉林には廣々とした敷地に立派な殿堂が建つてゐるのであります。

「生長の家」では生命の自由を得るためには、生命が松葉杖として頼つてゐたところのすべての物質的治療法を捨て、了つて、「生命よひとり立て！」と云ふ。頼るべき一切を捨てた時に、神の子である自分の無限生命が生きて來る、一切の「我の所有」を捨てたときに、宇宙の一切が己が持物となるやうに、一切の「迷ひの藥」を捨てたときに、宇宙無限の生命がわがものとなるのであります。

「禪宗では食物を藥石と稱へてゐる」と云つて、藥の必要なことを力説する人がありますが、その言葉の通り食物こそ眞に藥であつて、そのほかに普通食用に供せられない様な種類の不自然な藥劑はすべて生命にとつての異物なのであります。食物と云ふものは神が拵へたものである、これは「創世記」にも書いてある、この神が造つた實相世界の恩頼が現實世界に影として映つて來たのが物質的食物なのであります。實相世界で吾々が恩頼をたべてゐる、その投影が吾々が現にたべてゐる食物でありますからクスシキ生かす力がある。だから食物はクスリと云ふのであります。併し前に述べましたやうに神は病氣をつくらないから、病氣を治す藥も造らない、先刻申しましたやうに病氣を造つたのも「無明」であれば、藥を作つたのも「無明」でありますから、「無明」で「無明」を追ひかけ廻してゐたのでは到底果てしがたい(果しがないから、藥愈々多く、醫者と病院とが喜ぶのであります)それでは「無明」の盡くるところを知らないから、「生長の家」では斷然藥を廢めよと云ふのであります。

私がかう云ふ風に申しますと、「現に私の所の入院患者は斷然藥を廢し、行李早々退院して、醫師にも診せず、醫藥も服せず、勝手に散歩をし大略血をして死んだのがある」などとお書きになつて反駁なさつたお醫者さんがあります。成る程このお醫者さんの所説だけを讀んでみますと、

「退院して醫藥を廢した」から其の人は咯血したのであつて、退院せず醫藥を廢しなかつたならば咯血しなかつたやうに思はれますが、そのお醫者さんの經營してゐられる病院に入院して醫藥を飲みながら咯血して速隔治療を「生長の家」へ電報で頼んで來られた人も現にあるのであります。さうすると、咯血と云ふものは入院してゐても退院しても、藥を飲んででも飲まぬでも起り得るのでありますからその人が咯血したのは退院したからだとも醫藥を廢したからだとも云へないのであります。現に退院して醫藥を廢して治つて喜ばれた人から禮狀も多數來てゐるのですから、退院すると云ふことや醫藥を廢すると云ふことに、その人の病氣の悪化を結びつける必然的理由はないのであります。だから、其の人の病氣が悪化した理由は他に求めねばならないのであります。考へても御覽なさい、退院後藥をとらずに或る人の病氣が悪化したからと云つて、その事件が連続してゐるからと云つて甲の事件を乙の事件の原因であると定めて了ふ根據はどこにもないのであります。もしそのやうな斷定を下し得るとしたならば、世界の幾億萬人の人間は醫者にかかり醫藥を飲んでから後に死んでゐるのでありますから、世界の幾億萬の人類は醫者に罹り醫藥を飲んだ結果死んだと結論されても仕方がないでせう。ところが醫者はさう云はない。それは壽命であつて醫者が殺したのではないと云ふ。私に云はせてもさう云ふべきが當然であつて、甲の

事件の次に乙の事件が起つたからとて必ずしも甲は乙の原因であるなどと私は頭の悪い事は云ひたくないのではありません。現代の醫學が「物質が生命を支配すると云ふ一種の信仰」であつて科學でないといふのは、一つの結果を引起す原因たる要素を自分の都合のよい一つ又は數個に限つて、自分に未知な要素又は自分に都合の悪い要素を無視して了つて、投藥した後に病氣が治つたならば藥と醫療のみが治したやうに云つて功績を吹聴し、投藥した後に死んだならば病人が勝手に死んだやうに云つて責任を逃れてしまふのであります。假りに或る人が退院してから大咯血をしたにしても、その大咯血をした前はどんな精神的衝動をもつてゐたかと云ふことを醫者は考慮に入れないければならないのであります。私に云はせれば、言葉は種子でありますから、退院に臨んで醫者が患者にどんな言葉を投げ與へたか、と云ふことも考慮に入れねばなりません。恐らく自分の病院を退院することに就て、雑誌にまで攻撃文を書かれる位のお醫者さんでありますれば「まだ退院されたら危険ですよ!」と自信にみちた口調で云はれたかも知れない。若しこれに類似の言葉を云はれたとすると、その時は患者は氣にもとめなかつたにしても、その言葉が患者の潜在意識の底に植ゑつけられて次第にその種子が實現の芽を吹いたとも解釋されるのであります。患者が大決心をもつて藥を廢めたときは、俱厖和尚が小僧の指を切つた重大な瞬間である。この時

和尚が「小僧待て！」と呼び止めて、眞實在の人間は靈的存在であつて物質的存在でないから指は無くとも指は立つものだと言ふ眞理を示してやつたからこそ其の小僧は自己の生命の實相を大悟して救はれたのであります。これは指だけの問題ではなく、全身を切つても尚、自分は不滅の存在であると悟れなければ本當に救はれたものではありません。この時、逆に人間は物質的存在であるから指が無くては指は立たぬと和尚が云つたならば、小僧は血を流して痛いばかりで悟れない救はれないのであります。醫者が、大決心をもつて醫藥を止めた患者に對するものも、俱胝和尚が小僧に對したのと同じ心得が要るのであります。それを逆に、人間は物質で出来てゐるから、物質的藥劑を捨てたら癒らないぞなどと下手な事を云ひますと醫者はつひにその患者の肉體を殺すばかりか魂までも殺すことになるのであります。嘗て某博士は自分の雜誌で曰く、快方期の或る結核患者が日光浴をしてゐた、それを見たときまだその患者は日光浴を長くしては不可ないと思はれたので、「あゝそんなに日光浴などをしては不可い」とたしなめられた。たしなめられたのであるからその口調が危険を暗示してゐたのは云ふまでもない。その晩その患者は大咯血して死んだ。それでその博士に云はせれば自分の醫學的知識による判斷が當つたと云ふので自分の先見の明を吹聴して書いてゐられたのであります。私に云はせれば其の博士が、その時發せられ

た言葉が大啖血を起す一つの種子になつてゐると断定はしなくとも推定されても辯解の言葉はないのであります。その患者はその日に限つて始めて日光浴をしてゐたのではないのであつてその日に限つて醫師から日光浴の危険を暗示され、その日に限つて大啖血を起して死んだのであります。そしてその人は人間の生命は日光浴や啖血で滅びるものと暗示されて死んだのですから、死んだ後に救ひがない、誠に氣の毒なことでありませう。醫師は人間の生命を取扱ふものですからそして人間の生命は生きとほしのものですから、そして臨終を取扱ふ唯一の人は醫師ですから本當の醫師は宗教家でなければならぬ、物質に頼らないで生きる道を教へ得る導師でなければならぬのであります。

醫師にとつて最も危険なのは、自分の治療學說と、他の治療學說とを相戦はしてゐる場合、自分の治療學說に相反して藥を廢した患者があつたとき、「あの儘であの患者が治つたら、自分の治療學說が根本から覆る、あの患者が悪くなつたら、自分の學說の方が勝つのになあ」と不純な心が始ることでありませう。患者が無藥を主張して退院しようとする、醫師が「そんなことで治つてたまるものか」と念ずる——この念が實に恐ろしいものでありますから。「彼が治らなければ自分の學說が勝つ——自分が勝つために是非治らぬやうにしてやりたい——治るな！」かうハ

ツキリとは其病院の醫師が現在意識で思はないにしましても、自分が相手の無藥治療説に一撃を加へたい念がある以上は、その逆念の放送が、感じやすい状態の患者の容態に大影響を與へるのであります。私は嘗て、それを編んだ下女の怒りの念が宿つてゐるチャケツを着ると必ず怪我をする名古屋高商の平田教授の令息の實例をあげたことがあります。逆念と云ふものはそのやうな恐ろしい働きをするものであります。次になほ逆念が如何なる作用を及ぼすかの實例として、心靈研究家岡田建文氏が茨城縣の靈能者栗原氏のことについて書いてゐる一節を次に掲げることになります。

會て水戸にあつた時のこと、近所の某中學校の圖畫教師で高本と云ふ人の妻女が難産で悶死した。が四肢を張り擴りげたなりに硬直して居るので納棺が出来ないとて大騒ぎをして居る。彼れは近所のよしみを以て進んで弔詞にゆき、且つ祈禱をして死女の強直を取つてやらうと申込んだ。主人は迷信嫌ひの人間であつたけれど、現在各人が手古摺つてゐる最中とて己むを得ず、彼れの申込みに應じた。

彼れは一室に通つて見た。實に慘狀と狼籍を極めて居る。苦み悶えて這ひ廻つたと見え、手の生爪を皆剥がして居り、四肢を觥乎張らせた屍體が棺の横に臥かしてある。その周圍に汚物

や、血痕が附着した主人やその同僚の許多が戰慄し乍ら坐して居り、死女の顔面には布がかけ
てあつたから判らぬけれど、凄まじい苦悶の死相が見えるやうであつた。

彼は經驗あることとて、先づ死者に合掌して九字を切りソレから般若心經を四回熱唱し
て手をかけて見るのに、異例にも死女の硬直は依然として己まない。彼は心に驚いた。愈々
精神を勵ませ熱汗になつて連續高唱一百回に及んだが、依然として木の如く硬い。自信に充ち
た彼れも遺に頭を撚つた。見るともなしに主人の面を見ると、ソーレ見る馬鹿々々しいと言は
ぬばかりに嘲りの色を見せてゐる。

彼れは頗る愧ぢて困る念ひを發した瞬間。

「祈りは生きた者が奪つたのだ。死者に話せ。」

耳の孔の際にこの言葉が聽えた。聲は平素彼れの聞覚えのある神の聲であつた。彼れは翻然
として悟つた。祈りは生きた者が奪つたとは、主人がそんな馬鹿々々しい讀經などが効くもの
かと最初から逆念を以て排斥して居たから、效驗をそれに奪はれたと云ふ意味である。彼れは
死者に對し、生ける人に物いふ如くにして「斯く手足を硬くされてゐては鋸で骨を切るの
ない、納棺が出来ない。もし左様のことがあつたならば、家の不名譽また佛としての不名譽

である。どうぞ骨を軟くくなされて成佛なされたい」と言つた。

言ひ了つて彼れは一揖して、立ちかゝつて、死女の手に手をかけて曲げると、不思議千萬、餘の如くに軟かに胸元に曲げることが出来た。次に脚を屈して見ると、これ又容易に膝を屈せしめ得た。

主人を始め各人は、大に驚いて、はじめてホツト安堵の色を爲し、口々に彼に感謝の言葉をのべた。彼は、このときほど、人間の逆念の刺戟の強いことを感じたことはなかつたと言つてゐた。靈能者の靈的實驗會などで、反對者の逆念が、實驗を妨げる實例は世に澤山ある。無神無靈論者は、その場合に自己の勝利の誇りを感じるのだけれどもその實、彼等は遂に唯物道の邪路に入迷し濟はるべきに濟はれざる結果となるのだ。

逆念の一例として序でに今一個の彼が近頃東京で遭遇した事實を書かう。書落したが、彼は今、東京郊外の〇〇に住んで居る。

或る師範學校の教諭が、重き病に臥して非常に衰弱をした。主治醫からは、絶對安靜を命ぜられて居るところへ、彼は或る仲介者の言により、病人の懇請を受けて臨床祈禱に行つたのであるが、病人の妻女は、最初から彼が迎へられるのを心に好まなかつた容子であつた。

彼は、病室に通じ、平癒の祈りごとを唱へ出したが、その祈りの前に方り、病人の妻女は體溫計を病夫の腋下に挟ませた。そして祈言の最中に妻女は體溫計を取出して見てから「お蔭さま、モウ澤山、どうぞお止しなさつて……」と言つた。お蔭さま、モウ澤山の語に彼れはムツとした。彼女の手から體溫計を取つて見ると熱が三度ばかり昇つて居る。病熱が下降せずに昇高するのは奇怪である。彼は忽ちこれは妻女の逆念の故だと覺つた。そこで妻女に對ひ「熱の上つたのはあなたの心の持やうの悪いためです。早く神様にお託を爲され」と言つた。病夫も傍らからそれに助言をした。妻女は澁々に起つて床の上に飾られた神符に對ひわびごとを言つて拜禮をした。そのときにまた體溫計が挟まれたのであるが、詫びごとが畢つてから再び體溫計を見ると一度だけ下降してゐた。

そのとき彼は勵聲一番「あなたの詫びやうがまだ足らない、モット心から託をしておいでなさい」ときめつけた。妻女は復も床前に拜跪して懇切に詫びごとを言つた。このたびは體溫が一氣に二度餘り下降をした。妻女も病夫もスツカリ感心をした。その後、日一日と病が輕くなり、遂に全癒をしたのは一に彼れの祈禱の効果と見做され、彼の教諭から「靈驗 忽見」の書類を製つて彼の祈禱所に奉納をされた。(「心靈知識」昭和六年八月號)

このやうに逆念の働きは死後の肉體にさへも感應する程のものでありますから、感受性が病的に鋭敏になつてゐる患者に對し、醫者自身の勝利をその患者で實證しようと思つてゐる場合には、それは強い逆念となつて働くのですから患者に對して一種の暗殺的効果を有するに到るのであります。だから物質萬能の病院の中にあつて遠隔治療などを頼まれても全然かぬとは云はれないが、どちらかと云ひますと、善念の放送が逆念に打消されて効果が薄いのであります。このやうに逆念は暗殺的効果を有するものでありますから、醫者と云ふものは唯虚心坦懷に患者を自己の信念に従つて治療すれば好いので、患者が他の治療法に移らうとする場合、それに對して反對觀念(逆念)を決して抱いてはならないのであります。醫師が患者に對して逆念を起すと云ふことになりますと、「癒す」と云ふ働きの役目の人が殺すと云ふ働きに變つてくるのであります。

○祈れ、祈る通りになる。祈つてから、身體はどうなつてゐるか、熱はないか、痛くはないか、腫れは引いてゐるかなど、五官に於ける證據を求むるな、感覺的徴候を見て祈りの効果を疑ふ者は、神を信ぜずに、五官を信じてゐるのである。汝の祈りし時、既に求むる事物は成就したのである。因縁により形の世界に現はれるのは遅速がある。「智慧の言葉」より」

第八章 祖國愛は神の道

同じ療器でも心で効力を失ふ

或る誌友からの手紙に結核を患つた青年が或る療器を信仰してそれによつて治療し、それによつてメキ／＼健康を増進してゐられたのに、或る日岩手支部の佐藤勝身氏が岩手日報に連載してゐられた「生長の家」所説の無病健康法をお読みになり、ふとその説明の中の物質本來無力の眞理をお読みになるに及んで、さしも今まで著効をあらはしてゐた治療器が全然無効になつたと云ふ實話があります。是は何故か？「治療器と云ふ物質的仕掛」に客觀的な効力があるならば、新聞記事を読んで、その記事に、物質は本來無力であると書いてあるのをお読みになつても、その治療器の効力はなくなつたてでありませう。ところが、その治療器に對して信仰がある間は、それが著効を奏し、治療器に對する信仰が消えるとともにその効力がなくなつたと云ふことは、その効力と云ふものが治療器そのもの、客觀的効力ではない、信念の力によつて効力をあらはしてゐたのだと云ふことが判るのであります。ところがまた其の同じ方が尙一層眞理を佐藤さんから説かれ、自分の生命の實相を尙一層深く理解せられ、自己の生命に對する信仰が出来て來た

ら、また健康が回復し元氣になつて來られたと云ふことがその人の返事に出てゐるのであります。では同じ信仰を有つ位なら携帯に不便な療器や携帯を忘れる藥物などに信仰をもたず、自己自身の内に常に宿つてゐる神の子たる自分の生命の本質に信仰を有つが好いではありませんか。これなら忘れることもなければ、携帯に不便なこともない。いつも携帯してゐて、自由自在な活力を發揮し得るのでこんな結構なことではないのであります。そして此の、生命の自由自在な力を發揮するには唯一つ悟れば好いのであります。

同じ物質でも心で毒物となる

一つの物質(治療器)が、効驗があつたり、効驗がなかつたりするのは、物質そのものに力が無い證據であります。一つの物質が或る人には滋養になつたり、毒になつたりすることがあります。大抵の人は豆腐を食べると滋養になるのであります。家内が以前大阪にゐた時、其の近所にお豆腐を食べると必ずキリ／＼舞ひの腹痛を起すお婆さんがありました。これは豆腐と知つて食べても、知らずに食べても腹痛を起すのでした。これは肉眼で見ると心は豆腐であると云ふことを知らなくとも、その人の潜在意識は豆腐であることを知つてをり、其の潜在意識が豆腐をたべるとキリ／＼舞ひの腹痛を起すと云ふ念に捉はれてゐるからであります。豆腐を食べないで

るか、豆腐を食べれば腹痛が起きると云ふ「迷ひ」の念を捨てるかしますと、もう決して腹痛は起らないのであります。又、同じ物質でも、一定の日に限つてその物質が腹痛を起す例がありま
 す。前大阪工科大学の教授中尾良知氏は「透視と實例」と云ふ自分の靈覺に關する本を著はして
 ゐる人でありますが、この人のお父さんが金比羅さんの熱心な信者であつた。それで中尾氏が精
 神統一をして前途の豫言をしたり、遠方を透視したりせられる時の状態を別の靈覺者が靈視せら
 れての報告によりますと、氏のお父さんらしい人の靈魂が中尾氏の背後に附き添うて中尾氏の靈
 覺に援助を與へてゐる姿が見えるさうであります。それはさて置き、その中尾氏は普段は魚をた
 べても何ともないが、金比羅さんの命日に當る日に魚を食べるときつと腹痛を起す。魚であると
 知つてたべれば無論のこと、知らないで食べても、お汁の中に一片の雑魚があつたのを知らない
 で食べても腹痛を起すのであります。これは氏自身は何とも思はなくとも氏の背後にあつて氏を
 守護してゐられる金比羅さん信者たる父の靈魂が金比羅さんの命日に魚をたべたら罰が當ると
 か、神さんに濟まないと云ふ念を有つてゐるからであります。つまり、魚と云ふ物質そのもの
 が腹痛を起すだけの力があるなら、何も金比羅さんの命日にだけ毒になる譯ではないのであつて、
 常にそれは毒性をあらはさねばならない。ところがさうではないから、此の毒性は魚と云ふ物質

に固^こうしてゐる毒^{どく}性^{せい}ではないことが判^{わか}るのであります。では金比羅^{こんびら}さんの命日^{めいじち}に魚^{さかな}をたべるから神罰^{しんばつ}が當^{あた}るのであるかと云ひますと、本當^{ほんたう}の神^{かみ}と云ふものはそんな偏狹^{へんげふ}なものではない。神^{かみ}と云ふものは眞理^{まこと}である——天^{あま}地^ちを一貫^{いつくわん}した愛^{あい}の理^りである。理^りと云ふものはズツと筋立^{すぢだて}つたものであつて、魚^{さかな}をたべることが理^りにはづれた善^よくないことであれば金比羅^{こんびら}さんの命日^{めいじち}でなくとも、理^りによつて一様^{いちやう}に制裁^{せいざい}をうける筈^{はず}である、所^{ところ}がさうでなくて腹痛^{ふくつう}が金比羅^{こんびら}さんの命日^{めいじち}にだけ起ると云ふのは、其^{その}れは金比羅^{こんびら}さんからの制裁^{せいざい}ではなく「金比羅^{こんびら}さんの命日^{めいじち}に魚^{さかな}をたべたら悪いと云ふ念^{ねん}」が、中尾良知^{なかまよりち}氏の背^{はいご}後^ごにあるからであります。「金比羅^{こんびら}さんの命日^{めいじち}に魚^{さかな}をたべたら悪い」と云ふ念^{ねん}はどう云^いふ人^{ひと}に持^もちやすいかと云ひますと、金比羅^{こんびら}さん信者^{しんじや}の人^{ひと}に多^{おほ}いのであります。ところが中尾良知^{なかまよりち}氏^しのお父^{とう}さん是非^{ひじやう}常^{じょう}に熱心^{ねつしん}な金比羅^{こんびら}さん信者^{しんじや}でありましたから、其^{その}處^{こゝ}で金比羅^{こんびら}さん信者^{しんじや}たる氏^しのお父^{とう}さんの念波^{ねんば}が中尾氏^{なかまし}に感應^{かんのう}して、中尾氏^{なかまし}が知らずに魚^{さかな}をたべてもそれが金比羅^{こんびら}さんの命日^{めいじち}であれば腹痛^{ふくつう}を起^{おこ}すと云ふ理^り由^{ゆう}が判^{わか}るのであります。そんなことを云つても中尾氏^{なかまし}のお父^{とう}さんは死^しんでゐるから此^この世^よに存在^{そんざん}しないではないかと云はれる方^{かた}があるかも知^しれませんが、後^{こう}篇^{へん}「靈界^{れいかい}篇^{へん}」にありますがやうに死^しんでゐると云ふことは存在^{そんざん}しないと云ふことではない、靈視^{れいし}能力^{りきう}者^{しや}が、中尾氏^{なかまし}の精神^{せいしん}統^{とう}一中^{いちちゆう}に靈視^{れいし}したところによりますと、氏^しのお父^{とう}さんらしい人^{ひと}の姿^{すがた}が氏^しの

背後に見えるので、それは理論と實際との交叉證明が得られてゐる譯であります。

左翼思想と祖先の思想

此の實例は何を暗示してゐるかと言ひますと、祖先の靈魂の念波は、現實世界にゐる子孫の運命に影響を及ぼすと云ふことであります。即ち(一)祖先又は自分に關心ある縁者の靈魂の好まな

い處を子孫が行へば、祖先又は縁者の靈魂の反對觀念を受けて、その人の運命が妨げられます。

(二)祖先、又は自分に關心ある縁者の靈魂が迷ひにとらはれ、信ずべからざるを信じ、妄執にとらはれてゐますと現實界の子孫たる吾らがその反對觀念の制肘を受けて、正しいことを行つてゐても、それが面白く行かないことになるから、祖先の靈魂には速かに眞理を悟らしてあげる必要があります。この第一の原理により、吾々は祖先が現世になくなつてゐようとも、祖先の期待に背くと云ふことを行へば、その祖先の靈魂の反對觀念によつて制裁を受けることになるのであります。更に先祖に對して叛逆の念を起し、叛逆の行動をとるやうなことをすれば必ずその子孫の運命はよく行かないのであります。中尾良知氏は、先祖の好まない「金比羅さんの命日に魚をたべる」と云ふ行爲を犯したゞけで腹痛の制裁を受けるのであります。近頃極左翼の第三インターナショナルなどに加はつて祖國に對して叛逆的行動をとらうとするやうな人達の健康をしらべて

見ると肺結核に罹つてゐる人が多いと云ふことでありますが、肺結核の原因は本全集の實相篇にも述べましたやうに色々の原因がありますから一概には云へない、概して申せば、肺病は狹量な極端にサバク心、切る心が自己の肉體にその形をあらはしたのであります。祖國を愛する吾々の祖先の靈魂の反對觀念によつて制裁されてゐる場合の多いことも明かな事實でありまして、かう云ふやうな病氣は、祖國を愛する心に燃えるやうになられれば自然に治つて來るのであります。思ひ出しましたが、昨年の春、嵯峨の天龍寺の某僧が顔面神経痛にかゝつたのであります。顔面神経痛と云ふものは激しいのになると夜も眠れないほどの激痛であります。殊に夜間はその痛みが激しいのであります。天龍寺の和尚さんは、この某僧の顔を見ると先祖の靈魂がわざはひをなしてゐると云ふことを直覺したのであります。併し、それが如何なる靈魂であるかと云ふことまでは判らない、僧の知合に神戸選出の代議士で野田文一郎と云ふ人がある。この人は靈覺者今井棟軒翁と知合である。そこで野田文一郎氏を介して今井棟軒翁に一度どう云ふ靈魂がわざはひしてゐるのであるか靈診して見た上で解決して欲しいと云ふ依頼があつたのであります。依頼によりまして今井翁がその某僧を鎮魂して憑靈をよび出されますと、それは其の某僧の亡父の靈魂であつて、今その某僧には先祖の墓を新たに築造するに就て移轉しようとの問題が起つてゐ

る。そしてその墓は今迄それがあつた郷里には造らないと云ふことになりさうな形勢に傾いてゐる。そこで、故郷の地と云ふものに執着のある亡父の靈魂にとつては氣が氣でない。何とかして墓地移轉の問題を阻止せねばならぬ、それで自分の息子に何とかして欲しい。——斯う云ふ謂は、郷土愛の念がその靈魂の息子たる某僧に感應して來てゐるのであります。そこで今井翁は、その亡父の靈魂に對して、「汝の願ひは聽き置く、いづれ其の問題は汝の息子にも相談して善き處置をとるであらう。併し自分の目的をとげるために息子を病氣にするなど、云ふことは、神の道にかなはないことであるから、今後この息子に念を送らないやうにしなければ可かぬ」と懇々と諭されたのであります。するとその亡父の靈魂はそれを承諾して去つたのであります、その翌日代議士野田文一郎氏から電話があつて、その某僧はその夜久し振りに、顔面神經痛が起らずに安眠出來たことを報じて來られたのであります。

郷土愛と祖國愛

郷土愛、更にそれが大きくなつては祖國愛——それは超越的な汎世界的な立場から觀ますならば、一個の執着の念だとも評されませうが、更にそれを深く考へますと、國民が其の國土に生れて、その國土から恩惠を受け、自分が現在安穩に生活を續け得てゐるのも全て國土のお蔭です

國土の恩と同時に、その國土の開發につぶさに艱苦を嘗めつゝ努力して來られた祖先の賜でもあります。此の恩この賜の一切を否定して了つて、國土位は誰の手に遣入つても好い、祖先の意志などと云ふものはどうでも好いものだと言ふやうに祖國に對して反逆的思想をいだくと云ふことは、恩の否定、賜の否定、感謝の否定と云ふことになつて、これは神の道——人の道ではないのであります。

神の道と人の道

神の道と云ひますが、人間は神の子でありますから、神の道とは人の道のほかにはないのであります。吾々の父祖が遺愛の記念品は、たとひ一個の盃であらうとも一片の手紙であらうとも吾々はそれに愛を感じる。況んや、幾百代父祖が生命をかけた國土に對して愛を感じないことは自然でない。それが人として當然のことであり、人情であるのであります。かくの如き愛もたゞの執着に過ぎないと云つて排斥することになるならば、一切の人間の醜はしき人情を否定して了ふことになり、この世界を織り成してある「人間の心の美術」を無にしてしまふと云ふことになるので、それは人の道ではない——隨つて神の道ではないのであります。

キリストでさへも「隣人を愛せよ」と云つたのでありまして、「先づ遠人を愛せよ」とは云はな

かつたのであります。吾々は、先づ手近のものを愛することから始めなければならぬのであります。隣人と云つたら他人のことであつて、家族のことではないと思つてゐられたら大間違ひであります。吾々にとつて最初の隣人とは家族でありますから、家族を本當に愛しないやうなものは本當に神を愛するものではないのであります。「手近にゐる兄弟を愛しないで、眼に見えない神をどうして愛することが出来よう？」とキリストも反問してゐるのであります。吾々が親子となり、兄弟となり、血縁つながる近親者となつて此の世に生を受けて來てゐると云ふことは、決して偶然ではない。それは深き因縁あることであり、神が先づ最初の隣人として、それらの人々を最も愛し最もよく世話をするやうに、吾らの最も近くにそれらの人々を置き給うたのであります。無論、吾々は距離の問題を超越して廣く隣人を愛しなければならぬ。この事は眞理であり、吾々はこの眞理に従はねばならない。併し、距離を超越して愛せよとは、近くを捨て、先づ遠くを愛せよと云ふことではないのであります。この點誤解のないやうに願ひたいのであります。「近くを捨てる」と云ふ事ならば、最早や「近く」とか「遠く」とか云ふ距離に捉へられてゐると云ふことになるのであります。本當に距離を超越したことになるのであります。吾々が眞に距離を超越し得たときには、近くに拘らず遠くに拘らず、攝理によつて自分に與へられた者

を愛することが出来るのであります。さうすると結局、距離を超越して愛するとは先づ手の届く所にある近き者を「本當」に愛すると云ふことになるのであります。眞理に隨ふとは、最も自然な生活の出来る人が、最も眞理に近い歪みのない生活をしてゐる譯であります。ところで、この「本當」に愛すると云ふ其の「本當」がなかく、難かしいのであります。自分自身を愛することだとして、本當に自分を愛すると云ふことは中々むつかしい。無暗に御馳走をたべさせたとして、無暗に自分の懐ろにお金を掻き集めたからとて本當に自分を愛したと云ふことにはならない。此のやうに本當に自分を愛すると云ふことは中々むつかしい。それが出来る人なら、本當に隣人をも愛することが出来るのであります。必ずしも自分が御馳走を食べたからとてお金を懐ろにつめ込んだからとて自分を愛する所以にならないとしますと、此の眞理を他人に推し及ぼしまして他人に御馳走を食べさせたからとて、お金を與へたからとて、必ずしも他人を愛する所以にならないのであります。新約聖書を見ますと「富める者が天國へ行くことは駱駝が針の孔を通るのよりも難かしい、富める者が天國へ行かうと思ふならば其の持ち物を全部賣つて貧民に分けてやれ」とキリストは云つてゐます。このやうな點を言葉通り解釋しますと、まだキリストは眞理に到達してゐないのであります。富と云ふもの、持ち物と云ふものを實在として見てゐる點があるのであ

ります。キリストは「病氣は實在しない、薬と云ふ物質には力がない」と云ふ立場から無薬で病氣を治した點では、薬と云ふ物質を病人に與へて物質の權威を認めた釋迦よりも眞理に到達してゐたのでありますが、富は是非とも捨てねば天國へ這入れないと本氣になつてキリストが云つたとすれば、富の有無に捉はれ過ぎてゐるので現世の富貴貧賤の状態を過去の善業惡業の影とした釋迦に劣つてゐるのであります。キリストは多分そんなに富の有無に捉はれてはゐなかつたのであつて、あの場合は特に質問者たる富める青年に對し富(物質)に頼るだけそれだけ生命の實相(天國)に遠ざかるものであることを警句的に力強く云つたのでありませう。果してキリストが、「富」を心の反影だとみとめず、確固たる實在であると認めてゐたならば、五つのパンを五千人に分つと云ふやうな奇蹟は出来なかつたでありませう。キリストは「富は心の影である」と認めてゐたが故に五つのパンを五千人に分ち與へて尙籠に一杯のパンが残つたと云ふ奇蹟をも生ぜしめることが出来たのであります。此の奇蹟に於てキリストは富は心の影であるから、心次第で富は無限に産み出すことが出来るものであると云ふ眞理を示されたのであります。別に彼は五千人にパンを與へるために富豪からして富を奪つて貧乏人に與へてはゐないのであります。

十善の天子と云ふ言葉がありますが釋迦は過去世に十善の徳を積めば今世に王として生れると

云つたのであります。これは過去世の善業悪業の影として今世にあらはれたものが此の世の貧富貴賤等の境遇であると云ふ眞理を道破されたものであります。故なくして此の世の貧富は生ずるものではない。貧しい人はその貧しさが起るだけの内的原因がある。その内的な原動力を「生長の家」では「念」と云ひ「念」の力が潜在的に蓄積されたものを「集積」(佛教で云ふ善業悪業等の業)と云ひ、その「集積」の投影として現在にあらはれてゐるものが、吾らの現在の貧富等の境遇、健康病氣等の肉體的状態であると認めるのであります。

佛教では過去世における一切の善業悪業が、現世に於て善悪の果報を齎らし、現世に於ける善業悪業は來世に於てまた善悪の果報を齎らすと申すやうであります。現世に起る禍福は吾らの過去世の集積の結果ばかりであるとしますと、現世は全然過去に規定せられて了つて動きのとならないものとなりますし、また現世に作爲した集積は來世にならなると結果があらはれないと云ふことであります。申々待ち遠しいことであり、來世が果して存在するやらどうか判らない人にとつては、随分頼りない話であります。併し「生長の家」では斯くの如き過去世、現世、及び未來世の間の因果關係をも一たん認めると同時に、眞理を知ることによつて因果を超越する方法があり、従つて現在が自由であり過去に規定されてゐないのであります。今、悟つて即座に又は數

日中に其の悟りの結果が實現する例もあります。併し、眞理を悟つた心の反映として因縁を超越する以外には因果の大法を避けることは出来ない。即ち暴力によつて富むべき因縁のある人の富を奪つて貧しかるべき因縁をもつた人々換言すれば、その貧しきによつて靈魂の鍛へらるべき人に他の富を與へて見ましても、それは因果の大法を破る事になりますので本書人生相談篇にある通り靈力によつて強制的に他人の病氣を治療した心靈治療家の末路が面白くないと云ふのと同じやうな結果を來すのであります。因果の大法それ自身が強制力として働き、不自然の順序を自然の順序に直すのは、これは當然のことでありますが、キリストが「劍をとる者は劍によつて滅びる」と申されましたのは、強制力によつて因果の自然的結果を破るものはみづからも又因果の大法を破つた報いによつて滅びを受けねばならぬことを指摘せられたのであります。だから因果によつて不幸に落ちてゐる者を救ふ道は、因果の法則を横合から行つて破るのではなく、その人に、眞理を知らしめ、自己の生命の實相が神の子、佛子、佛性であることを知らしめ、その悟りによつて過去の因果を超越せしめ、その悟りの影として、その人の運命に幸福なる世界、境遇、健康が展開して出て來るやうに仕向けるべきであります。これこそ本當の救ひでありまして内からその人の運命を改善して來ることになるのであります。

病人に對つて物質的藥劑を與へようとするのと同じ行き方が、貧しき人に、富める者の富を奪つてそれを與へようとする運動者たちの行き方であります。富を與へたら人間は幸福になると思つてゐるかも知れませんが、その反對の話があります。私の宅の近所に感心な派出看護婦があつて、自分で働いて貯蓄した五十圓の金を持つて新川の貧民窟を訪れて貧民たちにその五十圓の金を手づから分ち與へようとした。ところが、貧民たちはその五十圓を争ひ奪つた揚句その人を袋叩きにして了つたのであります。此らの貧民たちはその金で二三日は牛肉でも食べられたかも知れませんが愛の心を有つて行つた恩人を袋叩きにした彼らは、眞の意味に於て幸福を得たのでありませうか。彼らは自身にまた一つの惡業(集積)を加へ、更に次の運命を惡に導く一動因を加へたことになるのであります。

智慧なき愛は人を害ふ

人間に物質を與へねば幸福になれないと思つてゐる人間は、此のやうに人を幸福にしようと思ひながら常に一層不幸に突落して行くことになるのであります。何故なら人間は物質的存在ではなく靈的存在であるからであります。物質に頼ることを教へれば教へるほど人間の實相は隠され、その人間は本當の意味に於ては不幸になるからであります。その上、物質を與へて一時を救

ふ方法はその物質の影響がなくなると同時に、元の不幸に逆もどりするので根本的救ひとはならないのであります。ところが心に眞理を知らして救つて置けば、物質は心の影でありますから一時その人が物質を失ふことがあつても、蟹の抜けた足がまたく生えてくるやうに又物質が生えて來るのですから永遠にその人は不自由しないことになるのであります。

こんな實話があります。松本市に醫師から結核の診断をされて、それ以來すつかり病床にたつて了つてゐた若奥様がありました。結核の初期で常に微熱がつゞく、ところが或る人に紹介されて「生長の家」を読み、聖典「生命の實相」をお読みになつた結果「病氣は無い」と云ふ眞理を知られた。醫藥を廢し、急に熱が下がつて、病床から起きて家事などを手傳ひ得るやうになられた。その變り方、快くなり方があまりに急激であるために家人は心配し出して、「いくら信仰で病氣はないと云つても、現在醫師が診て悪いと云つてゐたものが、そんなに急に病ひのなくなつてゐる筈がない。神經でよくなつたと思つてゐるだけで本當は悪いのであるから醫者にも頼らなければ不可ぬし、藥も飲まなければならぬ」と云つて家人が八方から「病氣がそんなに早く無くなつてゐる筈はない」と云ふ思想をつぎ込んだのであります。その方はまだ「生長の家」に入つて間もない方でありまして、一方聖典を読みながらも、八方から「病氣がそんなに早く無く

なる筈はない」と言葉の力で、病氣が存在してゐると云ふ思想をつぎ込まれたために、再び病氣が重くなつて「此の五六日来、夜も不安で眠れない、神想觀をしても病氣のことやら種々の雑念にとらはれて本當に心が苦しくなつたから、私を安心させる神の言葉を聞かして頂きたい」と私に救ひを求めて來られたのであります。これなどは家人は別に此の病氣の方を不安や不幸に陥れたいと思つてゐられた譯ではないが、藥と云ふ物質に頼らなければ治らないだらうと云ふ迷ひがあるために、その迷ひの當然の結果として深切めかしく物質に頼ることを八方から教へたのであります。そのために此の若奥様は次第々々に心は不安となり、夜も寝付けず、病氣も又、もり返して來たのであります。斯う云ふ環境にある人は自宅や病院にゐては眞理の反對の念を八方から注ぎ込まれるために治りにくい、一ヶ月ぐらゐ見眞道場で教を聴くとよろしい。考へて見ますに、「罪」とは實相を「包み」隠すと云ふことでありますから、世の中に何が「罪」であると云つても「物質」に頼ることを教へて「實相」たる生命の威力を發揮せしめないことほどの「罪」はないのであります。しかも、それは深切の意りで罪を犯すのですから、中々とめ度がないのであります。釋迦が知らずに犯す罪は、知つて犯す罪よりも重いと云つたのは此の意味でありまして、「生長の家」でも、愛は尊いことだけれども、智慧の伴はない愛は本當の神の愛ではないと教

へられてゐるのです。結核豫防宣傳にしても、社會改造運動にしても善だとか、人類愛だとか云つて一とかどその看板は立派なやうに見えましても、人間に、その神の子たる實相を見失はしめ、結局物質に頼る心のみを増進せしめるやうな運動は、すべて吾々「生長の家」から見れば、人類光明化運動ではなく、人類暗黒化運動なのであります。現に以上の例でも人間を暗黒化してゐます。それでは「生長の家」では肉體も境遇もどうでも好いと輕んずるのかと云ふと、さうではない。肉體も境遇も心の影であることを知れば、肉體や境遇に執着しなくなる。その結果却つて生命それ自身の創化作用が伸び伸びと發現されて却つて肉體も境遇もよくなる——病氣もなくなり境遇も改善されて來るのであります。それには唯、肉體や境遇に無頓着になると云ふことだけでは足りないのであります。たゞ無頓着なだけでは思慮分別が足りないことと云ふことになつて不幸に陥るのであります。だから幸福な生活、健康な生活には自己の「生命の實相」が靈なる神の子である」と云ふ眞理をさとることが肝腎でありまして、此の眞理を覺つた上での無頓着であります。ますならば、實は人間のヘカラヒの上では無頓着に見えてゐませうとも、神の智慧、神の思慮分別と云ふものが吾々の生活に這入つて來て導いてくれるのでありますから、人間として計らはず、取越し苦勞せず、一見無頓着に見えてゐながら、用意周到以上の用意が出來てゐることに

なるのであります。別項掲載の上海日本郵船の雁金君が好い例でありまして、同君は別に、彈丸の當らない部屋を探し求めて、人間の計らひでその部屋へ移つたのではなく、人間としては無頓着に室を變つた、所がその部屋が、結局、數理學上彈丸の當らぬ部屋になつてゐた。此のやうなもので、眞理を覺つた人、即ち眞理(神)と結ばれた人の上には神の智慧、神の思慮分別と云ふものが導いてくれるのであります。だから、ただの無頓着では何にもならないので眞理即ち自己の生命の實相を知つた上での無頓着でなければならぬのであります。執着を斷つと云ふことも、ただ捨て、了ふのでは何にもならない。愛するのにも眞理を知らなければならぬし、捨てるのにも眞理を知らなければならぬ。眞理に隨つて捨て、眞理に隨つて愛する、これが「生長の家」の生活であります。

○野心とは「我」を通す事であつて、愛とは「我」を殺すことにある。我を殺したときに一層大きな我が生きて來る。ナポレオンの偉業が滅びたのはそれは「我」を通す偉大さであつたからである。キリストが死んで却つて限りなく生きたのは、神意に従ふ偉大さをもつてゐたからである。人間すべからず神に従ふ偉大さを有たねばならぬ。「智慧の言葉」より

第九章

愛の神による運命の修正

フランスの某町にアンヂエラ・ロバンと云ふ美しい娘がゐた。彼女はパン屋の娘であつたが、非常な繚綴好しであつたから、身分のある人々が屢々結婚を申込んで來た。両親は多數の求婚者の中で、その町きつての金満家の悴を娘の聲に擇んだ。アンヂエラはどうしてもその男と結婚する氣になれなかつたので斷つたが、両親から無理に勧められるので、救ひを求めするために教會へ行つて聖母マリヤに祈願をこめた。

すると其晩彼女の夢に、旅行服を着て眼鏡をかけた凛々しい青年の姿が現れた。アンヂエラは心ひそかに、此の人を未來の夫と定めて斷然両親の言葉を斥けた。

ところが翌年の夏、アンヂエラは町の舞踏會へ行くと、思ひ掛けずも夢で見たと寸分たがはぬ青年に出遇つて胸を跳らせた。青年は暑中休暇を利用してこの方面を旅行した途次、初めて此町へ立寄つたのであつたが、彼女を見た其日から、深く心を動かされて遂に結婚を申込んだ。無論、彼女は喜んで彼と結婚し幸福な家庭を造つたのであつた。

皆さん此の話を偶然だと思ひになるでせうか。偶然に一年前に於て一年後に結婚する良人と

寸分違はぬ顔を見ることが出来るものでせうか。若し偶然でないとしたら、此の少女が此の青年に出遇ふと云ふことは既に一年前から定まつてゐたのではなかつたでせうか。では此れはどうしても變更出来ない運命であつたでせうか。結論を急がずに他の實例に移りませう。

千八百六十九年の或る夜、アール・ギエー氏は怖い夢を見た。氏はいつの間にか軍人になつて戦線に立ち、極度の疲労と飢餓とを忍んで戦鬪に従事してゐた。頭上には雨のやうに彈丸が降り注いで來て、忽ちのうちに氏の周圍には死傷者の山を築くほどになつた。と、夢は一轉して氏は村の教會堂の中に立つてゐた。その村は優秀な敵軍に包圍されてゐる。氏は生れて始めてプロシヤ兵の軍服を見た。氏は一隊を指揮してゐた士官の一人が青空に高く聳えてゐる教會の塔に登つて行き、望遠鏡をとり出して敵の陣地を偵察してゐたが、下へ降りて來て、敵の右翼に突貫の命令を下した。氏らの一隊は銃劍を構へて敵陣へ突進した。氏は敵兵と入り亂れて格闘してゐるうちに、頭部をグサと刺されてその場に斃れて了つた。そこで氏の夢は覺めた。氏は寢臺から床に轉げ落ちて煖爐に頭を打ちつけてゐた。その頃氏は普佛戰爭が始まるなどとは思ひもめなかつたが、翌る年突如としてフランスとプロシヤの國交が斷絶し、氏はつひに戦ひに参加したのであつた。氏が参加した戦場の光景は悉く氏が前年見た夢のとほりであつた。夢に見たと同じ村

落の教會堂の前に來たとき、味方の少佐は高い塔に登つて敵軍を看渡してゐたが、やがて降りて來て、夢と寸分違はず敵の右翼に突貫命令を發した。そして氏は夢と同じやうにその戰で頭部に負傷したのだとみづから書いてゐる。

これで見ると普佛戰爭中の詳細な出來事も實際は現實界で開戦されるまでに、どこかにその原型が存在してゐたからこそ見えたのであつて、その原型がそのまま現實界にあらはれて來たと説明するほかはない。ではその原型はどこにあるのだらうか。結論よりも又別の一例を挙げよう。

アー・コメラ氏は斯う書いてゐる。「私は千八百四十七年、ボルドウに薬口店を經營してゐた。或る夜、出納帳を見ると、明日の賣上金を記入すべき欄に、三十六圓五十錢と記してあつた夢を見た。翌日もはつきりと、此の數字が記憶に残つてゐたので、番頭にそのことを話して笑つた。その頃の店の賣上金額は一日平均十八圓位であつたから、これは二日分の賣上高の事であらうなど、云つてゐた。その日は午後まで大抵いつもと同じ位の賣行であつたが、夕刻になつてから、いつになく店が立込んで、非常な忙しさであつた。そして十時半になつたので最後の顧客を送り出して、店を閉めやうと思つて帳簿を見ると、不思議にも總賣上高は夢に見たとほり三十六圓五十錢になつてゐた。番頭はそれを見て、これはきつと數字の精がこんなにお客を

招び込んだのかもしれないと云つた。全くその日はいつになく多く客が来た。勤くも九十人は店先に立つた。殊に此日はふだんからのお得意の婦人が見えて、澤山の買物をして行つた。そして、この婦人はいつも拂ひをきちんとしないで、月末に延したり、翌月の勘定に廻したりする癖があるにも拘らず、此日に限つて綺麗に勘定を拂つて行つた。

これで見ると、店が繁昌するも、しないもその日の賣上高が何圓何十何錢あるかと云ふ事も金拂ひの悪い婦人が拂つて行くか行かぬかと云ふやうなことまでも、豫め定つてゐるらしい。豫め定まつてゐなければ前日から見得る筈がない。では何によつて豫めそんなことは定まるのであらうか。誰かが定めるのであるならば、その誰かの處へ豫め相談に往つて、自分にとつて最も幸福な數字が現はれるやうに頼み込んで置いたら都合が好いかも知れない。なほ一例——

一八九四年六月二十七日朝九時頃、當時リオンの醫學生であつたガルレー博士は學友(今のヴァレー博士)と室内で勉強してゐた。其の日、ガルレーは學位を取る試験準備に忙はしく、他の事は何も考へて居らなかつた。特に彼は政治には全く興味を有してゐなかつた。たゞ新聞を忙しく一瞥したばかりであつた。そして數日前偶然にも漫然と大統領の選舉に就て議論した。その選舉は此の日正午にヴェルサイユで發表される筈であつた。勉強に吸込まれてゐたガルレーは俄か

に思ひもよらぬ文句が心に浮んで来た。そしてそれをどうしても書かずにゐられなかつたので、ノートブックにペンで書きつけた——「カシミュ・ペリエー氏が四五一票で共和国で大統領に選舉される」——ガルレー博士はかう書き終つてから自ら驚いて學友ヴァレーを呼び、今書いた計りの紙を見せた。ヴァレーは讀んだが肩を聳かして「勉強の邪魔をして呉れるな」と云つた。晝飯後ガルレーは教室へ出かけて行つて、二人の學友に、カシミュ・ペリエーが四五一票で選舉される事を話した。學友は皆なそれを嘲笑したがガルレーは幾回も「屹度さうなる」と固執した。教室から出ると、此の四人は又出會つたので、近いカフェーへ入つた。此の折、新聞賣子が選舉の號外を持つて来た。たしかにカシミュ・ペリエー氏は四百五十一票で當選したのであつた。これは正午の開票される得票數が、その日の午前九時には既に決定してゐたことをあらはしてゐるのである。

不動貯金銀行頭取牧野元次郎氏は明治四十三年九月二十七日の晩に一室に端坐瞑目精神統一して、來月即ち十月の三日銀行で行ふ福引會の第一等には誰が當るだらうかと云ふことを知りたいとそのことを専念専思してゐると、氏の眼前には雲のやうなものゝ往來が烈しく見えて、暫くすると、ピカ／＼と光つた光りを有つたものが左の方から現はれ、瞑つてゐる眼前に見える。と、

その時、不思議にも青木と云ふ社員の顔の半分が左の方から現れてピカ／＼光る閃きの中にハツキリ見える。と、また右の方からピカ／＼輝くかと思ふとまた青木の顔の右半分が現れて、その半分づゝの顔が兩方から集つて来て完全な青木氏の顔になつて了つた。それで牧野氏は「ハ、アこれは青木が一等に當ると云ふ知らせだな」と思つて、翌朝銀行へ行くと「來月三日青木が一等に當る」と豫言書を書いてそれを密封して自分のテーブルの抽斗の奥の方へ入れて鍵をかけて置いたのである。此の福引會に列し得る者は毎月の成績の平均點以上に擧つた行員だけであつたら、誰が其の福引會に入る資格が出来るか月末にならぬと分らぬのであつた。九月二十七日の晩、静座中青木の顔が見えた翌朝牧野氏は一同の成績表を見ると青木は平均點以下でまだ福引會へ出る資格がなかつた。丁度その二十八日の晩、社員の大野氏が地方へ赴任するので牧野頭取は四五人の人を自宅へ招いて送別の宴を催した。その席で牧野氏は「來月の三日には青木が一等に當ると云ふことを僕は豫言する」と明言した。ところが、月末になると青木氏は成績が急に上つて福引に加はるべき資格が出来、翌月即ち十月三日に同社の支配人や課長が寄つて福引をしたところが、果して青木氏が一等に當選したのであつた。牧野氏はその時機の中に入れてあつた豫言書を鏡をあけて取出して、支配人に渡して開封させた。支配人も不可思議な顔をして開いて見たが、

それには「來月の三日青木が一等に當る」と書いてあるのに一同奇異の思ひをして當時立會つた者が、この事實を書きとつて一同調印して不動貯金銀行の金庫の中に、今でもそれが納めてある。此の事實は何を語るか、兎も角九月廿七日の晩には來月三日に起るべき出來事が既に決定済であつたことを物語るのではあるまいか。

かう云ふやうに、吾々の現在起る事件は、過去に於て既に定められてゐる。では、それは實際避けることの出來ぬものであらうか。それをまた實例を擧げて考へて見たい。

フラマリオン氏の著書の中で、アメデ・パツセー氏はかう云つてゐる。「私は自轉車に乗つて田舎道を行つて行くと、大きな赤犬が跳びかゝつて來たので、自轉車から落ちペタルを破壊した夢を見た。朝この事を一同に話すと、母は私の外出を禁じた。私も氣になつたから温順しく家にゐた。十一時頃田舎に住んでゐる姉が、急病に罹つたと云ふ知らせが來たので、私は夢の事など忘れて了ひ、直ぐ自轉車を走らせて姉の家に向つた。するともう少して姉の家へ着くといふ處で、突然大きな赤犬が飛び出して來て、私の足に喰ひついたので、それを拂ひのけやうとした拍子に、身體の中心を失つて私は眞逆さまに溝の中へ落ち込んで自轉車のペタルを折つて了つた。私はこの道を幾回となく往復したがそれまで一回もそのやうなことはなかつた。

このアメデ・パツセー氏が自轉車から落ちると云ふことは既に前夜から定まつてゐた。そして赤犬が跳び出してくると云ふことさへも、いくら外出を止めようと決心してゐても、外出しなければならぬ事情の突發することさへも既に前夜から豫めプログラムが定まつてゐて、變更し得ないものであつたのである。

同じ本でポール・ルルー氏は書いてゐる。「X氏は或る時易者に「あなたは將來毒蛇に噛まれて死ぬ」と云はれた。X氏は司法省の官吏であつたが、マルチニツクへは決して行かなかつた。其の理由は同地には毒蛇が多いからである。然し遂にX氏はガアデロクに赴任する事になつた。ガアデロクはマルチニツクの近くであつたが、そこには毒蛇が居ないと云ふ事が確かめられたので氏は安心して旅立つたのである。氏は三ヶ年の満期を終へて無事フランスへ歸る途中、船はマルチニツクに寄港したが、易者の言葉があるので、氏は一人船に残つて上陸しなかつた。するとそこへ土人が果物を籠に入れて來た。氏は咽喉が乾いてゐたので、勧められる儘に籠に手を入れて一番甘さうなのを選び取らうとする刹那、悲鳴をあげて倒れた。人々は驚いて、籠の中を檢めると、果物の下敷にしてある緑色の木の葉の下から、恐るべき毒蛇が頭を擡げてゐた。X氏は指先を毒蛇に咬まれたので、あらゆる手當を盡したが遂に絶命してしまつた。

かう云ふやうに、あらかじめ豫知された運命をのがれようとして逃れることの出来なかつた實例は澤山ある。有名な獨逸の天文學者デヴィド・ファブリシアスは千六百十七年五月七日に死ぬと云ふ豫感をもつてゐたが、彼はどうかしてその運命から免れようと思つて、その日は終日室に閉籠つて一步も外へ出なかつた。がその日も無事に暮れたので、夜の十時に門の前まで出て爽かな空氣を楽しんでゐると、突然農夫が出て來て鶴吻でファブリシアスを撲殺した。

また死の最も奇妙な豫告はレザル・ヘルレンバツハ男爵の自叙傳の中にある。「自分は、結晶學の或る研究に就いてウインナの地質協會化學部長で鑛山の監督者であるハウエル氏の助力を乞ふつもりであつた。自分は何かの折にそれをハウエル氏に話して置いた。實驗室は自分の邸の近くにあり、氏は學界(歐洲全部と言つて宜い)に於て其の専門大家として有名であつたのである。自分は訪問の日を暫く延期してゐたが、終に、次の朝さうすることに決心してゐると、その夜、自分は一人の男が色蒼ざめ、わななく慄へて二人の男に腕を取られてゐる夢を見た。自分は此の夢を氣にも留めずに、翌朝地質協會へ行つて見た。ところが實驗室は前年とは場所が變つてゐて入口を間違へた。そして其處へ行つて見ると戸に錠が下してあつた。窓から覗くと、夢そつくりの光景が目に入つた。二人の男がハウエル氏を支へてゐた。氏はボタシウムで自殺を計つたばかり

であつて、夢に見たその極の姿で二人の男が氏を支へて廊下へ連出してゐるのであつた。

この出来事に就て夢と事實との符合を自撃したヘルレンバツハ男爵はかう云つてゐる。「若し自分が數分間早く到着したならば、自分は確かに彼をして此の自殺を遂行せしめはしなかつたであらう。何故ならハウエル氏の自殺の原因は家庭と金錢問題であつて、自分は彼に新しい仕事を與へ金錢上の援助を與へる事になつてゐたからである。」併しまたハウエル氏の側から考へれば、數分間自殺を思ひとどまつてゐたならば、自殺をする必要はなくなつてゐたのである。その數分間を何故彼は待ち得なかつたであらうか、外の力が彼を其處へ追ひつめたとも觀察出来るけれども、別に其の數分間を外の力は規定してゐない、たとひ自殺を強要するやうな外的事情の強制はあつたとしても自殺をするのにその特定の時間を選ぶと云ふことは彼の自由意志であるから、彼がその救ひが間近に来つゝあるのに、ただ數分間で救ひの得られない特定の時間に自殺することを選んだのは、彼の潜在意識の底からポカリと浮び出して來た導きによるのであるから、彼の潜在意識は、間近に來てゐる自身の救ひを自から進んで拒絶したのでと云ひ得るのである。

上に述べたやうに未來の出来事を吾々があらかじめ豫知し得ると云ふ事實は吾々の潜在意識が未來の出来事を知る力をもつてゐるものであると云ふ證據になるのである。と同時に吾々がさう

云ふ未來を豫知し得る結構な潜在意識と云ふものをもちながら、その豫知し得る不幸から逃れ出さうとしないで寧ろその不幸にこちらから飛込んで行かうとするのは何故であるか。その人の潜在意識そのものが、その不幸から逃れることを欲しない——換言すれば、彼自身の潜在意識が自己所罰を欲してゐるのである。此の不幸な心が不幸を招ぶのを「生長の家」では「類は類を招ぶ」心の法則と云ふのである。

先日、次のやうな興味深き手紙が来たから諸君の御参考にお目にかけてませう。

謹啓秋冷の候。谷口先生閣下。拙者は貴家御發行の「生命の實相」の豫約を昨年暮に致し、今年春製本出来に付送金せよとの通知を受けて居りました。其の當時は右住所より八里程離れて居る××町〇〇にて新築工事の爲め出張致して居りましたが、舊住地は不在勝故收入もなく出張してゐる所も關東震災にて倒れ候のみならず、耕地整理の爲め負債を生じ貧を致して居り候。従つてふところ合充分でありません故遂に昨年豫約を致した「生命の實相」の豫約金も思ひながら送金もせず、遂に不義の漢となりました。私如き不義の漢は充分のいましめを頂くべきは勿論であります。然し衷心懺悔の實が擧りましたら其罪を御許しく下さるといふも先生の御慈慮であると拜察致して居ります。私は先生に對し衷心より懺悔して居ります。此度は

翻然正義者となりました。今日只今より正しき心を持ち、正しき行ひをする淨行者となりまし
 た。何卒貴家に對して爲せし不義の罪は御許し下さるやう偏へに御願致し豫約金參圓外に郵税
 十二錢貴家の振替口座にて十四日拂込送金 仕り候間何卒憐愍の情を垂れ豫約「生命の實相」
 一部御送附被下候様偏へに御願申上候。實は是れについて申上るも恐るしき奇しき因縁有之申
 候。私の出張して居りました××町○○には鎮守として白山様が御祭りしてあります。近
 頃私は健康に勝れませんが白山様へ罪障消滅當病平癒の祈誓をかけましたら、白山様は
 私をして懺悔せしむること頗る急にして、九月四日より十日夜迄一週間衷心懺悔しました。十
 日即ち一週間目の夕方、貴家に對して豫約拂込違約不義の念に責められて白山様へ罪障の御伺
 ひを致しました。白山様は「其の罪が障りである」との御告げでありましたから早速生長の家
 の神様へ白山様から御詫をして貰ひたいと御願ひしました。白山様は御許になりました生長の
 家の神様に御詫びをしてくれました。私と致しましても生長の家の神様へお詫を致しお許しを
 願ひました。生長の家の神様はやさしい御方で私の衷心よりの私の懺悔があらはれましたから
 御許し下さいました。私の鎮守白山様は中々御許し下さいませんでした。衷心よりの私の懺
 悔があらはれましたから御許を受けました。左様の因縁に有之候間谷口先生にも御立腹の爲重

々忍入候次第に有之候へ共何卒御寛容被度候私罪、不義の罪を御許しくださいされ「生命の實相」豫約一部御送附被下度候様懇願仕候。

私も目下白山様の靈感を頂き居候次第故生長の家が如何に参考になることやら實に珍本であるやう感じ居り申候
敬具

右は千葉縣小森弘近氏(假名)の手紙であります。これは氏の病氣の原因は生長の家の聖典「生命の實相」の豫約申越をして置きながら、豫約を履行しなかつた罪障に基くのであるとは氏の鎮守たる白山神の神誥であると云ふのであります。氏の手紙にある「生長の家の神様はやさしい御方で私の衷心懺悔をあはれまれ御許し下さいました。私の鎮守白山様は中々御許し下さりませんでした」と云ふ言葉は實に興味深きものです。「生長の家の神様」と假りに申上げるところの本當の神、唯一本元の神には神罰はない。唯一本元の神は至善至慈至愛であり唯一本元の神は罪人を造り給はぬから神の方から見て罪人はひとりもない。従つてまた神罰と云ふことも決してないのであります。さうすると此の小森弘近氏の云はれる神罰と云ふものは何處から來るか云ふと自分の心と、その心に感應して働く白山神の如き靈界の諸靈の處置であります。神の子たる實相に相應はしくない念を起したるとき、その念は本來「虚」の念、非實在の念、不自然の念であるか

ら自然に消えて自然に平かになり、本然に復歸しようとする運動が彼自身のうちに起らねばならぬ。この運動が罪の自淨作用であつて一見神罰のやうな形をとるのであります。罪の自淨作用は高まれる波の平かならんとする運動に似てゐます。「悪さかんなるときは天に勝つ」と云ふ諺もある通り、波は高まる時節には高まるのであつて、波の高まる側の半面ばかりを見てゐますと、悪でも順風に帆をあげて榮えて行くやうに見えます。しかし、それは「虚の榮え」でありますから必ず自然の水平に復歸するために高まつただけの水量が下る時が来るのです。悪を犯してゐる最中は幸運であつたものが、幾年か経るうちに其の悪の報いを刈りとるべき不幸になるのもそのためであります。だから「積徳の者に餘殃あり、積悪の者に餘殃あり」と云ふことは眞實であります。何者が餘殃を與へたり、餘殃を與へたりするかと云ふと、これは内から本人の心(潜在意識)が餘殃を與へるのであつて、本人の心の中に平かならざるものが起つてゐる、その平かならざるものを平らかならしめる自然の働きが起つて來るとき、それが餘殃と云ふ働きを起すのであります。だから吾々が神の子たる正しさにふさはしくない念を起したり、又は行爲を行つたりしますと、そこに曲れるものが直くなり、驗しきものが平かになる働きとして、不幸と云ふものに吸ひ寄せられて行くのであります。かう云ふやうに不幸と云ふものは神の子たらざるニセ物の働きを

帳消しする働きとして起るのでありますから罪の帳消しをせんがためにとて、かの印度のパラメ
ン行者の様に種々の難行苦行を自ら求めてする人さへもあります。また本人の難行苦行を求めな
くとも各人には自己を指導してゐる守護の靈(多くは祖先又は産土の神)が導いてゐまして小森弘
近氏の通信にあるやうに罪の償ひを求め、時には種々の苦難をその人に導き起してゐる場合もあ
ります。守護靈も一個の靈であり、人間も一個の靈でありますが、此の罪(即ち、神の子たる實
相の本然を包み顯はさざること)が一旦犯されるとその罪が許されるためには、病氣にかゝると
か、貧乏するとか、家族に不幸が起るとか何事か自分が苦しまなければならぬと云ふ潜在意識
的觀念は守護靈の心の中にも人間自身の心の中にも随分牢乎として抜き難く潜んでゐるのであり
まして、此の人類全體の信念は「人間は刀で斬れば血が出る」と云ふ人類全體の信念にも劣らぬ
程の強さで、各人の潜在意識の底に潜んでゐるのでありますから表面の心は罪の意識もなく、臆
ひの考へもなくとも、自己の潜在意識及び守護靈の方で、苦しみによつて罪を贖ひたいとは必ず
考へてゐるもので、従つて時期來れば潜在意識の底から種々の苦しみや不幸な境遇を肉體の上に
實現するやうな考へがフト思ひ上つて來るのであります。吾々の運命は「フト思ひつく」と云
ふことによつて殆どその不幸が決するが此のフト思ひつくと云ふ事は業の流轉によつて生ず

る。商賣シヤウバイをするにしても、何商賣ナニシヤウバイをするか、どの邊へんにある家いへを借りてどう云いふ風ふうな店構みせがまへにするかと云いふことは此この「フト思おもひ付つく」と云いふことによつて決きまるのであります。其その時に繁昌マンジャウしないやうな商賣シヤウバイをフト思おもひつき、繁昌マンジャウしないやうな位置ちゐの家いへを借りて、客きやくの這入はいりにくいやうな店構みせがまへを思おもひつき、さうして開店カイテンでもしますと、お客オヤクは薩張サツバりやつて來こず、食くひ込こむ一方ほうで散々さんさんの失敗シツバイを演えんずることにもなります。店みせの賣上ウリアゲ額がくでも、どんなにその日ひにじたばた闘はんで見みても、前記ぜんきの實例じつれいにもある通りとほその日ひにあることは數日オウジツ前ぜんには豫知よちし得うる程ほどに決きつてゐる。就職シウシヤクをするにしましても、新聞シンブンを見みてゐるときに「求人キウジン」の廣告クワウコクがフト目に付つく、そしてそれに心こころを引ひかれて履歷書リレキショを送おくつて見みたがためにその人ひとの就職難シウシヤクナンが解決かいけつする場合ばあひもあれば、生憎あひにく自分の適業テキギョクの廣告クワウコクを眼まへの前に擴ひろげながらも、ふとそれに氣きづかず、又またとひそれに氣きづいても、何故なにゆゑか心こころを引ひきつけれない爲ために、履歷書リレキショも差出さしださず、折角せつかくの適業テキギョクも見みのがしてしまつて、いつまでも就職難シウシヤクナンに苦しむと云いふこともありませう。また或ある機會きくわいに出遇いであつた男女だんなちよが、互たがひに顔かほを見みた刹那せつなにフト心こころが動うく、さうして互たがひに引ひきつけられる、その戀愛れんあいが終生しゅうせいその人ひとの不幸ふかうの原因げんいんとなつて次第しだいに悲劇カゲキ的テリチ最後に導みちびかれて行ゆく場合ばあひもありませうし、それがまた非常ひじょうに圓滿まんまんなる家庭かていを造つくつて生涯しやうがいを幸福かうふくにくらす基もとになることもありませう。いづれにせよ、吾々われらの運命うんめいの幸不幸かうふかうの出發點しゅつぱつてんはこの「フト

思ひ付く。」と云ふことによつて決まつてくるのであります。そしてこの「フト思ひ付く」と云ふ事は何處から來るかと言ひますと、吾々の心の底——潜在意識の奥底から考へとか感じとかど、本當にフト浮び上つて來るのであります。どう云ふ風にして「考へ」とか「感じ」とか云ふものが心の底からフト浮びあがつてくるかと云へば、それはラヂオの受信機が鳴り出すやうに外から來る怨みの靈や守護の靈等からの精神波動に感應して吾々の心の喇叭が鳴り出す場合と、蓄音器のレコードが回轉するに従つて鳴り出すと同じやうに、吾々の潜在意識の中に集積されてゐた罪の蓄念盤が回轉するに従つて自己みづから鳴り出す場合とがあります。外から來る精神波動のラヂオ的放送に吾々が何故感應するかと云ひますと、吾々自身の内にある心の波長が外から來る精神波動に合ふからであります。自分の心と同じ波長をもつた精神波動でないと、外からいくら放送されて來ても素通りしてしまふのです。それはJOBKのラヂオの放送に波長を合はせて置いたラヂオ受信機にはJOAKのラヂオ放送がいくらあつても素通りしてしまふのと同じであります。さうすると外から來る精神波動に感じて何かをフト思ひ付くと云ふけれども、それも、元はさう云ふ精神波動と自分の心の内にある想念の波長とが合つてゐたからでありますから色々なことをフト思ひ付くと云ふのも、元は自分の心にある。自分の潜在意識にさう云ふ精神波動と同種

類のものがあるのでその精神波動を感じてフト思ひつくのであります。さうすると吾々の潜在意識の蓄念盤が自動的に動き出して何かを思ひ出すにしましても、外からの精神波動の放送に感じて何かを思ひ浮かべるにしましても、結局は自分の心の奥底の問題に歸つて來るのであります。それで自分の運命は自分が作ることになるのです。外から神が吾々に罰を當てるのではない、自分の心が「心の奥底」から操つてゐて、わざと損になるやうな商賣を思ひつかせたり、悲劇的な最後にならねばならない相手に戀させたり丁度汽車と衝突するやうな時間に自動車を出發させたりするのであります。自動車が汽車と衝突するのだつて、その自動車が踏切を横切るのが一分間早くとも一分間遅くとも衝突するものではない、なか／＼そんなに正確に衝突する時間を見計らつて出發することは難かしい。それは無限の「時間」と云ふ富籤中からたつた一本の貧乏籤を引き當てるほどにむつかしい。その難かしさの中から衝突するのに丁度適當な時間を選んで出發したいと云ふことを思ひつかす微妙な働きをするのが、吾々の潜在意識なのであります。吾々の潜在意識は地下水のやうに、眼に見えない、氣づかれないところにあつて、これから色々起つて來ようと云ふ出來事の豫兆を感じ、その出來事のうちに、自分で選んだ出來事の方へゲン／＼其の人身を引きずつて行くのであります。「熟慮斷行」と云ふ言葉がありますが、熟慮さへすれば人

間が幸福になれ、幸運を掴み得ると思つたら大間違ひであります。嘗て政友會幹事長久原房之助氏の令息と貴族院議員野村徳七氏の令息とが、自動車で外出して、阪急電車に衝突して二人とも重傷を負うて死んで了つた。この二人は一分間早くとも遅くとも死ぬ事を免れたのだつた。熱慮と云ふものが人間の運命の上に殆ど何らの權利もないことはこれでも判るのであります。吾々は自動車の出發時間と云ふやうなものをもう一分間早めるか遅めるかと云ふことを熱慮して極めることは出来ない。だから人間の運命は熱慮の圏外にあると云はねばならない。全ての人の運命は熱慮の圏外にあるところの漠然とした力によつて左右せられる、この漠然とした力は吾々の外にあつて吾々の運命を左右してゐるとすれば、それはどうにもならない宿命論になつて了ふ。しかし、此の吾々の運命を決定する力は、先刻も云つたやうに吾々が自己内部から「フト思ひつく」と云ふ自分の内から催して來る潜在意識でまゐる。吾々自身の潜在意識と云ふものは吾々の識域下にあつて、知らず識らずのうちに吾々の罪の自淨作用を起してゐる。此の自淨作用は五の罪があれば五だけの償ひによつて淨まつて行く、十の罪があれば十だけの償ひによつて淨まつて行く。「眼にて眼を償ひ、齒にて齒をつぐなふ」舊約の贖ひなのであります。潜在意識の自己審判は「二二ンガ四」「二引クニハ零」の數理的發展でありますから何等の假借もないのであります。併し

これは潜在意識の自己審判による罪の自力的淨化作用でありまして神の審判ではないのであります。吾々が罪の自力的淨化作用のみにて淨まらうとするときは、過去の集積の一點一割に對しても、それだけの償ひをしなければならぬとしたら中々人間は一代や二代では淨まりさうもないのであります。

潜在意識の自己審判による罪の自淨作用として實生活に自然の運りとして苦難が這入つて來るほかに、世の中にはみづから進んで苦しみを受けて自分の罪を神の前に贖はうとする人があります。併しながら贖罪を以て神の怒を宥め、神にあやまり、神の御機嫌をよくするために、人間自身が自己を罰し自己を苦めることだと思ふのは大變な間違ひです。贖罪と云ふことは、神に對して「自己斷罪」と「自己所刑」とを見せびらかして、神の怒を和げることではないのであります。創造主なる神は愛の神でありますから何人の苦しむことをも欲せられてゐないのであります。小森弘近氏の手紙にも「生長の家の神はやさしい方で許して下さいました」とあります。これを知らなければ本當の神を知るものではないのであります。基督教ではイエスが萬人の罪にかはりて磔けにかゝり給うた、と申しますし、佛教では法藏菩薩が吾々の罪に代つて無慮無數の長年月の間苦しみ給うたと申しますが、それは何のために？ と申しますと、それは吾々の罪を贖ふため

だと申されてあるのであります。併し罪を贖ふと云ふことは神の怒りを和げ神をして人間に和解せしめるためにするのではないのであります。

宇宙の造り主なる神は、至慈至愛の神でありますから、怒りとか憎みとか云ふやうな感情には決して捉はれ給ふことはないのであります。だから神の怒りを和げ、神をして人間を和解せしめるためにみづから十字架にかゝつて罪を贖ふと云ふことはその意味をなさない不合理のことであります。

それならば、何故イエス・キリストや法藏菩薩の如き方が吾々の罪の身代りとして此の世に送られ代贖者として吾々に代つて十字架にかゝつたり無慮無量の長年月間幾多の苦勞を重ねられたかと云へば、それは、神自身が人間の身代りとなつて苦しむことによつて神の怒りを和げ、神をして人間に和解せしめるやうにしたのではなく、人間の潜在意識の自己審判觀念をなだめて、神の愛と許しを人間自身に受入れ易くしたのであります。なだめる相手方は神ではなく、人間の潜在意識の自己審判觀念であります。神はすべての場合に於て許して給ふが「潜在意識の自己審判觀念」は何も賤ひなしには罪を許さない。それ故に代贖者となつて罪を引受け給ふ方が要るのであります。其の人の「潜在意識の自己審判觀念」は其の人の代贖者となつて所罰を受けた者がある。

つたと知つたとき其の人を無罪だと宣言して、罪の流轉から解放してくれるのであります。

その吾々の代贖者となり給うた方が神から遣はされたのであり、神御自身の御化現であると云ふことがわかりますと、その神の方向に心が翻然振向きますと罪が赦され罪は消えると云ふ所以も明かになりませう。此れは所詮は罪が實在の世界のものではなく、假相の世界のものであつて光の方向を向けば暗は自然に消えるからであります。本當の光の方向さへ向けば、罪なる實體は最早ない。罪の實體がないと云ふことが判れば潜在意識の自己所罰も不必要になる。それで潜在意識の自己所罰による罪の自淨にまかせておけば病氣や不幸や貧乏や色々の苦難を経て始めて罪の集積が淨められる筈のものが、神に心に向け神に祈り神に結ばれることになればそれ程の苦難もなしに罪の集積が消えて了ふ。それで苦難を受くべき運命のものも、その苦難が全然なくなるか、餘程少くなるのであります。これは光の方向に向けば影が消えると同様であります。

牧師プール・エフ・ホートン博士の「祈りはきかれる」と云ふ實話は興味深きものがあります。氏は嘗て一行と共にノルウエーを旅してゐた。一行中の婦人の一人が沼地の原野を探險中、護謨の上靴を片足落してそれがどうしても見つからなかつた。此の旅行の目的地たるベルゲンに着くまでは新規に上靴を買ひ整へると云ふことは出来なかつた。しかも此の沼地の探險は上靴

なしには到底不可能であつた。だから、この上靴をどうかして見付け出すか、旅程を變更するか、そのほかに採るべき手段はなかつたのである。

で、一行は此の失つた靴を見出すために手分けをして、もと來し道を引き返した。何處で落したものであらうか。林の中、山の側路、多分通つたであらうところの山間林間の道を數時間さがして歩いたけれども、その上靴は見つからなかつた。つひに一行は斷念してホテルに歸つた。ところが、其の日の午後になつてから、一行中のホートン博士の頭に閃いたのは「何故私はあの上靴を見付かりますやうにと、神に對して、祈りを捧げなかつただらう」と云ふことだつた。で、博士は祈つた。祈りのうちに、祈りは聞かれたと云ふ確信が博士の胸に來たのでした。博士は一行を促がして朝上陸した地點まで峽谷を漕ぎ上つた。そこで船を上がると博士はスタスタと一直線に歩み出した。と、其處に見よ！博士の眼の前に、失くした上靴が轉がつてゐるではないか。そして其處は不思議なことには幾度も幾度も祈りなしに血まなこになつて探した地點であつたのだつたのです。

マサツセツツ州の心靈研究家エリザベス・タウン女史も此れと同じやうな經驗を書いてゐるのである。或る日タウン女史たち一行四臺の自轉車は市街から可成隔つた郊外の坂道を縦列を作つ

て馳せ下つてゐた。坂道は乾き切つて灰のやうになつてゐた。一行のうちの一臺の自轉車の鎖の留め鍔が何時の間にか飛んだと見えてチエーンが外れた。既に此の坂道を下りること四分の一哩、チエーンが外れたときは丘にさしかゝつて速力が緩やかになつてゐたので、乗り手は怪我もせずに無事におりることが出来た。

さてチエーンの留鍔は何處で落ちて、どれだけ走つてから、チエーンが外れたか判らなかつた。一行はいづれも今まで自轉車で来た道を徒歩で引返しつゝ血まなこになつて留鍔を探してゐた。灰色の砂深い坂路に灰色の留鍔——誰もそれを見つける者がなかつた。その時エリザベス・タウン女史は「何故今まで神にそれを祈らなかつたのであらう。」と氣がついた。彼女は祈つた。「神よ、あなたは留鍔が何處にあるかを知り給ふ。あなたは愛の法則で宇宙をお造りになりました。求めるものと求められるものが相會ふのが愛の法則です。どうぞ神よ、私の眼と私の求むる留鍔とが相會ひますやうに。」エリザベス・タウン女史が斯う云つて祈つてゐる間に他の三人は留鍔を丹念に探しながら、大分遠ざかつて往つた、女史は神にまかせて後からノロノロと歩いた。と、他の三人の者が今探して見出さなかつた其のあとに、其處に灰色の砂の間から求めてゐた留鍔が覗き出してゐたではないか。

此れと同じやうな出来事で、錠を落してどうしても見付からなかつたのが、神に祈つたところが、今迄、其處を探しても決してなかつた同じ場所にポツカリと其の錠が載つてゐたと云ふ實談が嘗て和歌山の「生長の家」誌友井内章二君が誌友會で話されたことがある。また大阪の誌友北村勉氏は一行數名と共に大和の龍門山に登られたとき頂上の邊りで行が渴を覺えて水を探したがどうしても見つからなかつた。そこで北村氏は心のうちで神に祈つた。と、氏は急に自分だけが一行に分れて、少し下へ下りて行きたくなつた。と、「其處に水がある」と云ふ言葉がどこからともなく聞えて來た。見れば草叢に隠れて、滴々と清水が湧き出してゐるではないか。ほんの少量それは滴々として湧き出てるので、眼のよい人でも殆ど發見し得ない程の分量であつたが、それを近視三度と云ふ北村氏が神に導かれたればこそ先づ發見したのであつた。

私は本稿の始めに「今日展開する人間の運命」と云ふものは過去の其の人の念の集積の現實化として既に前日以前に決定してゐると云ふ多數の事實を擧げた。そしてそれに續いて今日の運命が今日の祈りによつて改善されたと認むべき四つの實例を擧げたのであります。(一)吾々の今日の運命は既に決定してゐる。(二)併し今日の運命は今日の祈りによつて改善される。この二つの一見相反するが如き事實は如何に解釋すべきものであらうか。どちらも正しい。吾々の「今日の

運命」は既に吾々自身の過去の念の自然的展開、自然的自敎作用、自然的自淨作用として高まる波が平かに復する自然の作用として決定してゐるのであります。それは眼には眼を報い、齒には齒を報いる峻厳にして假借なき「迷ひの念の自壞法則」としてさうなるのであります。此の「迷ひの自壞法則」はそのやうに峻厳なものでありまして、因果は迷ひの世界では破ることが出来ぬ。十の罪には十の苦しみ、五つの罪には五つの艱みがあつて始めて帳消しになるのであります。併しながら吾々が一たび神に祈りますときには、神は光でありますから、光の前に闇の世界の法則は消え、その迷界の法則は超越されて了ふのであります。そこに十の罪にも必ず十の苦しみが要らない、二十の罪にも必ずしも二十の苦しみが要らない。心が完全に百パーセント神に向くか、八十パーセント神に向くかによつて苦しきも全然不必要になるか、半分で済むか、色々に變つて來るのであります。罪の自淨作用に委しておいたなら幾年も肉體的痛苦を受け、千金を醫者に拂つて家産を蕩盡した後でないと治らないやうな病氣でもその半分の苦しき、半分の費用、惱みで赦され救はれることになる。「生長の家」誌友で、神に祈り、神に結ばれて、病氣其の他色々の苦難が——それが當然あるべき苦のものよりも——非常に軽くされた實例が報告されて來るのもそのためであります。では誌友よ、運命の神癒治療をなすには先づ神に祈れ。今日の運命は吾らにとつては既に決定したものであります。神の前には尙修正の餘地のあるものであ

ります。況んや吾ら自身にとつても未決定なる吾々の將來の運命が、吾々の祈りによる神への結び付きによつて如何に改善良化されるかは論を俟たないのであります。そして吾らの祈る對象たる神は、すべての闇を照らす光なる神、すべての罪を許し給ふ無限絶對の愛の神でなければなりません。生長の家の神様はさう云ふ愛の神の一顯現としてお現はれになつたのであります。

○昭和八年一月九日、東京目白の友の家會館で生長の家東京誌友會があつた翌日、誌友陸軍科學研究所長久村種樹中將の令夫人きみ子女史は次のやうな尊い體験を下落合の松本肇氏宅で發表せられた——或る日女史は何か紛失物をしたが、それが是非要るので、あちらの抽斗、こちらの戸棚と探し廻り、上の物を下へおろしたり、下の物を引出したり、色々苦心したが見つからない。その時女史は始めて氣がついた——「神観で紛失物を探して見よう。」さて女史は靜座「神観」をすること十數分間、やおら起つと眼の前の戸棚の小襖を開きたくなつた。小襖を開いて見ると、果して開いた直ぐ其處に「探し物」が載つかつてゐることが見出された。其處は先刻度々小襖を開いて搜した所で、其處に紙袋があり、その紙袋を度々あちらへやり、こちらへやりして搜したのに見付からなかつたのに、神観後は不思議に其の紙袋の前に求むる「探し物」が載つてゐたのであつた。心が調べばどんな探し物も見付かるのである。

第十章 生命磁氣を語る

話 題——昭和七年十月二十三日の誌友座談會を中心にその前後に來訪せられたる方の對話中より、手のひら治療、遠隔治療、治療能力發現の注意に關したるものを纂む。

談話者——牧村氏(齒科醫師)大崎夫人(東京、友の會リーダーの一人)坂下夫人(阪神、友の會リーダーの一人)兒島氏(高商卒業生)

谷口——兒島さん、貴方が顔面神經痛でお苦しみになつたときにその顔面神經痛を透視して頸推

骨の脱臼によると云つた透視家は何と被仰る靈能者でしたか。

兒島——その方は山本精一郎と云つて、東京にゐる方です。

谷口——東京から岐阜まで遠隔透視をして貰つたのですか。

兒島——いゝえ、東京へ出掛けて視て貰ひました。實は私は尺八が好きでありまして、私の知人

に吉田晴風と云つて尺八の名人があるのですが、その吉田晴風氏が豫言者として非常に信頼し

てゐる人が山本精一郎氏なのです。山本氏は可成り靈能のある人らしく、吉田晴風氏が、まだ

金がなくて自分の家など建築出來ないと思つてゐる時代に「來年は君は家を建てて」などと云

はれて、そんな事はないと思つてゐると、丁度親戚にあたる某氏が家を建てゝゝゝの折悪しく轉任になつたゝめに吉田晴風氏にその家の後を引繼いでくれと云はれてたうとう其の建てた家が自分の建てた家になり、しかも其家のある處が山本氏の豫言した地名だつたりしたこともあります。また或る時山本氏が吉田氏に「五十歳位の人が君の所へ訪ねて来て、この人は將來大いに貴方の經濟上の力になつて呉れる」と云つたところが、その通り五十歳位の人が訪ねて來まして、それがピクター蓄音器會社の人であつて吉田晴風氏にピクター專屬になつてくれとの申込があり、その豫言がぴつたり實現したりしたこともあるのです。そのほか色々山本氏の指示通りに行つたら難問題が解決してゐるのです。それで私も、自分の顔面神經痛は凡ゆる醫療凡ゆる民間療法をやつてもどうしても治らないので透視して貰つたのですが、「それは頸推骨の脱臼だから、その専門醫によつて頸推骨の脱臼を矯正して貰はないと、その神經痛は治らない」と云はれました。當時私は事情があつて三日間しか東京に滞在出来ませんでしたので、東京にさう云ふ推骨矯正醫もあるとのことでしたが、それに係らずに岐阜に歸りました。そして谷口先生に神戸の方面にさう云ふ醫者がいないかとお尋ね致しましたところ、神樂觀の遠隔指導を受けて、心が正しく自己の神性を自覺すれば推骨も眞直になるからとの御返事でありましたので

神思想の遠隔指導をして頂きましたところ、五年間凡ゆる治療法で治らなかつた神經痛が一二週間のうちに全治してもう二年以上になります。近來愈々健康になる許りです。

谷口——山本氏は可成り正しい透視家であり、豫言が的中することや、その人の指導の通りに行つたら難問題が解決したと云ふ吉田晴風氏の話も本當でありませう。が、また山本氏の指導通りにしなくとも神思想で難治の病氣が治つたと云ふことも事實でせう。そこで斯う云ふことが解るので。運命は豫言し得る、それは過去の念で決定したものだから。と同時に其の運命も固定したのではない。神と繋がるるとき既に決定した運命も修正されると云ふことです。山本氏は在來の念によつて機械的に發展する貴方の前途を豫言したのですが、我れ神の子の自覺によつて、因縁を超越して治ることは突發的運命の變化であるから、それは豫言し得る範圍外だつたのですよ。

牧村——唯今私の取扱つてゐます病人に、齶齒から顎に蜂窩織炎を起して口も開かない者があります。斯う云ふのは齒醫者として手當のしやうもないのです。已むを得ず、これは大變よくきく薬だと云ひまして、炎症を去る或る注射をしてやりましたが、さう云ふ病人にはどうしてやつたら好いでせうか。

谷口——手當のしやうもないと被仰いますが、手を當て、念じてあげたら好いぢやありませんか。

牧村——齒を直しに来て、何か醫者として治療をして貰はうと思つてゐるのに、「まあ坐んなさい手を當て、あげませう」とも云へないものでしてね。

谷口——醫學博士でも手を當て、病氣をお治しになる鹽谷博士のやうな方もあります。

牧村——その方はどこにゐられますか。

谷口——東京澁谷美竹町に開業してゐられました佐藤順子さんの紹介で誌友になりました。

牧村——先日私のところへ風采おのづから威嚴のある身の丈拔群な老いて益々鏗鏘たる八十歳

位の老人が來まして、如何にも自信に充ちた口調で自分が此の机に對して「動きて彼方に行け」と云つたら机でもひとりでに動いて彼方へ行くなどと廣言を吐いてゐましたが、斯う云ふ風に年輩も相應いつてをり威嚴も相當備はつてゐる人でありますと、その言葉は權威があり自分が手を觸れたら治るぞと云つたら本當に治ると云ふことにもなりませんやうが、私のやうに若輩では相手が信用しないものです。

大崎夫人——ところがその鹽谷先生は決して老人ではないのです。大正十五年東京の醫大を御卒業になつたのださうですから、さあ幾歳位でせうか谷口先生と非常によく似た感じのなさる方

で、いつもニコニコと笑顔をしてゐられる、それが少しも不自然なつくつた笑ひではなく、魂の底から朗らかであるやうな微笑なのです。病氣をちつとも重いやうにお云ひにならない。「すぐ治りますよ」と自信に充ちたやうに云つて掌を一回二十分程あてゝ下さる。すると不思議に治るのです。先日私の家の隣の子供が齒のために口内炎を起して四十度ほど熱が出て四日も引かない。齒科醫に見せたらこんな高熱では切開出来ないから、熱がひいたら切開すると云つてゐる。それで鹽谷先生を御紹介してあげて来て頂いて一回掌をあてゝ頂いた。翌日はもう元氣にその子は學校へ通つてゐられますので、「醫者へお出でになつたのですか」と訊きますと、鹽谷先生に一回掌をあてゝ頂いたらそれ切り熱も下がり痛みもとれ、もう齒醫者で切開して貰ふ必要がなくなつたと云つてをられました。

坂下夫人——私はそのお話を大崎さんに伺つてゐましたから私の長男が林間學校から歸つて熱を出しましたときにも鹽谷先生に来て頂いたのです。鹽谷先生は今迄色々の心靈治療家と云ふ凡ゆる心靈治療家を御訪問になつたり、民間療法と云ふ凡ゆる民間療法を御研究になつたのださうでありまして諸方を靈力者に知り合ひがある。これはあとで聞いたことですが、私の長男の病氣の時にも病氣が醫學上非常に重態であるから快方に向ふかどうかと云ふことを熊本縣の長

洲の生神こと松下松藏翁に電報で書いて下さつたのでございます。松下さんからの返事では
 「因縁によつてむつかしい」と云ふ返事だつたさうです。長洲の生神さんと云ふのは大變因縁と
 云ふことをやかましく云ふのださうでございます。鹽谷先生が云はれるには「松下翁がむつか
 しい」と云はれる時には大抵は危いのですが、因縁は正しい信仰によつて超越することの出来
 るものである。貴方は信仰深い方であるから私も一心になるから貴方も一心におやんなさい。
 二人の一心で因縁を超越しませう、と云つて下さいまして、毎晩通つて來て掌を當てゝ下さつ
 た。心から子供の回復を願つて下さるのでその掌を當てゝ下さる時の態度は「祈り」そのも
 のであつて實に崇高な感じに打たれました。子供の病氣は長い間四十度以上の熱がつゞいて最
 初は腎盂炎だと診断されましたがあまり熱が下がらないので、どうも腎臓核らしいと首を傾
 げてをられました。が斯う云ふ症状が起れば脳脊髄膜炎の徴候だから後頭部に掌をあてゝ祈
 れと教へられてゐましたが、其時には私も一生懸命で終日掌を子供の後頭部にあてゝゐまし
 た。すると不思議に熱が下がつて快方に赴いたのでございます。鹽谷先生が來られて被仰るに
 は「脳脊髄膜炎も徴候だけですんでよかつた。貴方の信念のおかげだ」と云つて喜んで下さい
 ましたが、これは私の信念と云ふよりも鹽谷先生が遠隔治療をして下さつたおかげだと存じて

ゐます。

四月に私が蘆屋へ引越して来るに就ても鹽谷先生はそれでは是非早速住吉の「生長の家」へ行つて人間無病の眞理を聴くやうにと被仰つて下さいましたけれども、一つには引越し匆々で忙しかつたのと、一つには私の在來の信仰と衝突するところがあるかも知れぬと云ふ不安とでその儘になつてゐましたのですが、此の夏羽仁さんの「生活學校」へ子供を入学させるために上京しまして、弟の方の子供があまり疲れますので鹽谷先生にみて頂きますと肺炎が悪いと被仰いましたので、半月でも鹽谷先生の御治療を願つて大體快方に赴きましてから當地へ歸ること致したいと申しましたら、いやそれよりも直ぐ蘆屋へ歸つて住吉の「生長の家」へ行くが好いと被仰つて名刺に紹介状を書いて下さいましたのです。

谷口——もう坊ちゃんはお元気でせう。

坂下夫人——おかげ様で此頃は元気で暴れて仕方がない位でございます。

谷口——そして在來の御信仰とは衝突しはしなかつたでせう。どうも今迄の宗教の信仰家と云はれるかたは、名前に捉はれてゐて、キリスト教信者ならキリスト教と云ふ名前のついたものでないと、承知が出来ない。他の名前が附いたものではどうも感情的に毛嫌ひされると云ふやう

な傾向があつたのですが、キリスト教にも幾派もあり、皆それ／＼教義や聖書の解釋が異つてゐて、名前は同じでも殆ど別物だと思はれるのがあります。ところが佛教にも幾派もあり、名前は佛教でも眞正のキリストの教へに一致するものもあるかも知れぬ。かう云ふ場合、名前によつて佛教を排斥し、キリスト教に附いてゐると云ふやうになると、教への實質に於て却つて眞のキリストの教を排斥して、他教に附いてゐると云ふことになるのです。だからキリスト教でなければならぬと宗教の名前にばかり固執することは、却つてキリスト教に遠ざかるかも知れませぬ。本當を云へばキリスト教の眞髓も佛教の眞髓も同じことである。眞理は一つでなければならぬ。何教々々と云つて争つてゐるやうなことでは、その争つてゐる氣持そのものが、神の愛のみ心になふものではない。神は一切を包容し給ふものであるから一切の宗教をも排斥せず包容しなければならぬ。それでは何々教と云つてゐては争ひの元になるから教と云はないで、「家」と云ふことにしよう。「家」と云ふと皆なが其處へ歸つて打ちくつるいで落付くところである。それで總ての宗教が「生長の家」へ來ると、元の巢へ歸つたことになる。「生長の家」へ歸つて來たならば凡ゆる宗教は此の「家」から生長して兄弟だと云ふことが判る。そこでは宗教争ひがなくなつて、始めて本當の偏狭でない、伸びくした愛の心が甦生つて來るのです。

坂下夫人——私はキリスト教の家に生まれ、生れつきのクリスチャンでございましたが、先年嵯峨の大覺寺の斷食道場へ往つて斷食修行したことがございます。其處では斷食中修行者が毎日佛教のお經をあげに行くところがある。ところが私はクリスチャンでありますから佛教のお經をあげると云ふことを、どうしても自分の心の中に許さないものがあるのです。それで、たうとうその御經をあげる御堂まで私だけ行かないことにしましたが、そのために周囲と自分とが調和しない。同じ人間でありながら、兄弟のやうな感じがしない、敵意と云ふほどではなくとも、水と油との混つたやうな疎隔の感じに苦しめられたものです。さう云ふ譯で心が亂れた結果でありますか、その斷食修行はあまり私には効果がありませんでした。

谷口——宗教が異なるために、その宗教の名によつて人間が互ひに敵意を感じなくてはならないと云ふのでは、その宗教が本物ではなく、偏つたところに執着してゐる教へだと云ふことになるのです。それではすべての人間を和解させることが出来ない。すべての人間を和解するのが本當の宗教の目的ではありませんか。

坂下夫人——私どもは羽仁もと子さんを主宰とする「友の會」の會員なのでございますが、羽仁さんがキリスト教であるがために「友の會」の集りは、キリスト教の祈りで始めると云ふこと

になつてゐたのでありますが、佛教の方はキリスト教の祈りに附いて行くことは出来ないと言はれる方もありますし、そのため常に問題が起つて、阪神の友の會ではキリスト教の祈りは止めにして、吾々は宗教團體ではない、家庭改善と社會事業の團體であると云ふので、何教の方も入つて頂いてゐるのではあります。私自身願ひましても私が嵯峨で斷食しました時には他宗の祈りにはどうしても附いて行けない苦しみをしみじみ味つたのでございますから、佛教の方がキリスト教の祈りに附いて行けないのも無理はないと思つたのでございます。だんく「生長の家」で判らせて頂きまして、佛教と云つても名前は異つてもキリスト教とちがふものではないと云ふことが悟れて來まして、他宗の方に對しましても少しづつ廣い氣持にならせて頂きまして難有いと思つてゐるのであります。

谷口——「友の會」の指導精神が「生長の家」の萬教包容的な信仰になられますと全體の調和がとれて最も好いと思ふのであります。ところで鹽谷博士は本來何宗の方であらうしやるのですか。

大崎夫人——御自分は神道でせうかと思ひますが看護婦には毎日曜、キリスト教會へ通はせてゐられるやうでございます。「生長の家」と同じで非常に廣い包容的な信仰を有つてゐられるの

です。いつか鹽谷先生が主人に手をあて、何か念じてをられますので、何を念じてみられるのかとお尋ねしますと「教へてあげませうか」と被仰つて「大祓祝詞」を教へて下さいました。

谷口——大祓祝詞は言葉の力で病念を祓ふことになるのです。

大崎夫人——鹽谷博士が時に不思議な靈力をお現しになつた話を一つお話し致します。鹽谷博士の奥さんの姉婿の友人が名古屋にゐられるのですが、血尿で随分以前から眞赤な血の小便が出て色々醫療を受けたけれども治らない。遙かに聞けば鹽谷博士は不思議な靈的治療をなさるとの事ですから一度御治療を受けるやうに頼んで欲しいと博士の姉婿に頼んで來ましたの。それでは東京へ出て來なさいとの許しを受けていざ名古屋を出發すると云ふ事になり、その血尿の患者が思はれますのに「さう云ふ靈的な尊い治療を受けるのであるから上京するまでに三日間静座して心を清めて行きたい」と三日間夜になると静座して心を調べてみられましたので。すると第一日にも第二日にも何者とも知れぬ者が後ろから其患者の腎臟部に指壓を加へるものがございますの。さう云ふ血尿の患者ですから腎臟部が重く感ずるのださうですが、指壓毎に實に好い氣持なんです。第三日には、その指壓を加へてくれる人の顔が患者の靈眼に髣髴と視え出したのださうです。それは三十數歳のまだ若い人だつたさうです。それ切り數年來機

んだ血尿がスツカリ治つて了つたさうです。その患者が上京しまして鹽谷博士を訪ねると博士は往診中で不在だったので暫く待つて歸つて來られた博士を見ると、その患者は驚いた。名古屋で靜座してゐる時に自分の背後から指壓を加へてくれた人その儘である。博士にその話をすると「それは私でない、貴方の御先祖の靈でせう」と謙遜せられて「兎も角貴方はもう御自分でお治しになる力がお出來になつてゐるのでありますから、私が治療するには及びません」と被仰つてその人をお歸しになつたさうです。

谷口——その話は香川支部の阿野さんが嘗て自分の義兄の精神病を治して貰ひたいといつてお越しになつたが、私が忙がしさうにしてゐる有様を目のあたりに見て直接治療をして貰ふことを斷念して郷里へお歸りになつたが、歸つて見ると、私に會つた日から急に義兄の精神病がよくなつてゐたと云ふのと好一對の話でありますなあ。かう云ふことは生長の家では往々あることです。私に宛て、遠隔治療して頂きたいと書いて手紙を出すと、その手紙を投函するかしなにかにもう病氣が治つて了つてゐるので、病氣になれば私にさへ宛て、手紙を書けば好い、書きさへすれば病氣が治るんだからと云ふ人があります。

大崎夫人——それはどう云ふ原理でそんな事が起るのでございますか。

谷口——治して貰ひたい念願をもつてゐる人自身の靈魂が、こちらの靈魂を呼ぶのですねえ。肉體の口では頼んではゐないけれども、靈魂では頼んでゐる。例へば鹽谷博士にしても本人から遠隔治療をして呉れと頼まれた譯ではない。本人が鹽谷博士の治療を受けたいと云ふ念願をもつて、治療を受けるまでに心を清めたいと思つて静座してゐる。それで精神が統一して治して貰ひたいと云ふ念願が鹽谷博士の靈魂に通じたので、鹽谷博士の分靈がその患者のところへ云つて治療を施したと云ふ譯でありませう。斯う云ふ靈力が出来るのは「聖書には祈りと斷食とによらなければ出来ない」と書いてあります。斯う云ふのは、食物を食べないと云ふことだけではない。すべてに於て食らない無慾の心にならなければ得られないのです。

大崎夫人——ほんたうに鹽谷博士は少しも患者を食らない方でありまして、吾々の家族が病氣になりましても掌から生命線を出す方法を教へて下さつて、茲に掌を當てなさいと云はれまして、治す方法を教へて下さると云ふ風なので、普通の病なら唯一回診て貰つたら好いと云ふ譯なのです。無論重い病氣ならば毎日往診して掌を當て、下さるのですが、主人の病氣のときには二ヶ月も通つて頂きましたが、往診の自動車賃を御辭退なさつてどうしても受けて下さらない。主人の病氣は随分長びきまして二ヶ月間全く動けなかつたのであります。鹽谷先生が

いつか往診下さった時に「生命の實相」を持って来て下さいまして、これを読んだら早く治るからと云つて御自分で御本に署名までして下さったのであります。恰度、折悪しく政友會の森恪さんが重患に罹られましたして鹽谷先生はその方に付き切りと云ふことになりましたので、もう往診も宅診もして頂けない。それでも治る緒をつけて置いて下さいましたので身體を動かせるやうになつて來ましたのを幸ひ一層のこと「生長の家」をおたづねしようと云つて鹽谷先生に電話でお聞きしますと、大賛成だと被仰つて下さいましたので思ひ切つて主人と一緒に出て來たのでございます。おかげ様で今迄少しも眞正面に坐ることが出来ませんでした主人が最初の神想觀で坐れました。

坂下夫人——鹽谷先生は私にも「生命の實相」を読めと云つて持つて來て下さったのでございませよ。そして其時にも「いつまでも醫者にかゝつて治してゐるやうなことではならぬ、自分自身で治すやうにならないと不可ない」と被仰いましたのでございます。

大崎夫人——鹽谷博士は何でございませよ。奥様にも看護婦にも女中にも御家族全體に「生命の實相」を一冊づゝ當てがつて讀ませるやうにしてゐらつしやるのでございまして、御自分も常に携帶してゐらつしやるさうです。何でもその看護婦の方は前には剛情な意地の悪い性質があ

つたけれども「生命の實相」を讀ませて以來性質が一變して温順な好い方になつたと被仰つてゐました。

谷口——兎も角「生命の實相」は自分が書きながら自分が書いたのではない不思議な書物です。あれをお讀みになるだけで胃痛が治つたり、子宮癌が其のおりものを止めたり、肺結核が治つたりしてゐる事實が續々報告されて來るのですから。貴女は「生命の實相」を幾回お讀みなさいましたか。

大崎夫人——一度ずつと讀ませて頂きまして、又折にふれて所々讀まして頂いてをります。

谷口——聖典を讀むと云ふことは、覺えて了つたらもう讀まなくとも好いと云ふ風なものではないのです。これは佛教のお經でも、神道の祝詞でも、基督教の讚美歌でも此の「生命の實相」でも同じことです。お經でも祝詞でも讚美歌でも、言葉に出して唱へるところに、其處に言葉の力で、自分の心の中と、この大宇宙の中に善き精神的リズムを生出す——それが肝腎なのであります。「言葉」に出すと申しましても必ずしも「音讀」しなればならぬと云ふ譯ではなく、默讀もまた言葉です。兎も角、讀んでゐる其の時に起る心のリズム「精神波動」が大切であります。眞理を讀めば眞理の精神リズムが發生し、それに従つて迷へる靈魂に悟りを開かせ、

神及び高き靈魂を招き寄せ病的念靈を退散せしめて病氣が治ることになります。だから、もう原理を知つたなら、記憶したなら、讀まなくても好いと云ふ譯のものではありません。

兒島——手を當てると云ふのは所謂「手のひら療治」ではありませんか。

谷口——さうです。世間で色々の名稱を附して傳授料をとつて教へてゐるのは名稱は違つても大抵「手のひら療治」です。人間の手のひらからは正體がまだ科學的に不明な一種の放射が出るのです。その放射に患部を照せば病氣を治すことが出来ると云ふので、古來から此の手のひら療治は用ひられて來たものです。キリストも病人に手を當てゝ治した。佛教、殊に密教では指で色々の印を結んで靈顯をあらはす。九字を切るなどと云つて、こんなことをして氣合をかけ病氣を治すのなどがある。この手のひらから出来る神秘な力を鹽谷博士は「生命線」と命名せられて、鹽谷博士の自宅には「生命線研究所」と云ふ看板がかゝつてゐたさうです。

坂下夫人——鹽谷先生の被仰るのには、坊間の靈術家は此の手のひらの靈氣と云ふものを微菌を殺す力があるやうに云つてゐるけれども、此の靈氣は「生命線」であるから一切の生きとし生けるものゝ活力を増進するハタラキがある。だから培養した微菌を生命線にさらして顕微鏡

で検査して御實驗になつたさうですが、細菌は生命線に曝す前よりも非常に活力を増して旺盛に繁殖してゐる。どんな生物でも生命線の放射を受けると活力を増すんださうでございます。それでは、細菌性の病氣に此の生命線を照射すると、どうなるかと申しますと、人間の白血球その他の抗菌細胞の活力が増加すると共に、細菌の活力を増加し、其處に眞の戦ひが始まり、大なる生命が小なる生命に打ち勝つと云ふ正しい結果を得て、終に細菌は死滅して病氣が治るのさうでございます。また、鹽谷先生の御實驗によりますと、レントゲン光線でもラヂウムの放射線でも、鉛のやうな重い金屬は透過することが出来ないけれども、この手のひらから出る放射線は鉛でも何でも透過して作用するさうです。是も細菌の上に鉛板を置いて其の上から手のひらを駈して實驗されたさうです。

谷ロ——私の考へでは此の指掌から出る放射は放射物と云ふよりも一種の磁力線に近いものであらうと思ひます。それは放射物は放射するに従つて減るけれども、これは放射を練習するに従つて殖ゑて来るからです。磁石鐵より生ずる磁氣と云ふものは、他の鐵片に磁氣を傳へても自分自身の磁氣は減らない、たゞ磁氣を傳へるためにする操作運動にエネルギーを要するだけださうです。吾々が人の病氣を治療するために手のひらをあてゝゐるのもそれと同じで、唯手を

かざしたりさすつたり、無理な姿勢をする爲に肉體のエネルギーを消耗するだけで、そのためにお腹がすいたり一定の姿勢をつづけるために疲れて來たりすることはありますが、手のひらの力が出てゐるから、自分の活力が減ると云ふことはないのです。それから今迄發見された放射能は鉛のやうな重い金屬を透過し得ない性質のものでありましたが、この手のひらから出る力はそれ等をも透過する。するとこれは放射能類似作用と云ふよりは一種の磁力線類似作用ではあるまいかと思はれるのです。磁力線と云ふものには「磁界」と云ふものがあつて、その周圍の或る距離まで中間に鉛があらうとなからうとその能力が及ぶけれども、それよりも遠距離のところへは及ばない。どうも手のひらの力にはそれに似たところがある。棒鐵片を南北へ地球の北極南極の方向へ長期間むけて置くと、自然に、その鐵片が磁化して磁石になつてゐることがある。それと同じやうに、吾々も指先を正しく上方へ向けて合掌を長期間直立させて置くと、手掌が磁化して自然に磁氣的能力を發生してゐる。勿論、生命の磁氣力と、鐵の磁氣力とは別の力でありまして、無機物の磁氣力は、地球が一個の大磁石である」と云ふ譯で、その磁氣力は地球の南北の方向に流れてゐる。ところが此の「生命磁氣」の流れは天地の方向に豎に流れてゐる。だから、天地の方向に正しく豎に向けて置くと「生命磁

「氣」は速やかに發生する。それで姿勢の正しい人々は健康であり、姿勢の正しい樹木は健康であり、掌の力を發現するのには正しく手を堅い方向に合掌するのであります。

兎島——何故合掌しなければならぬのですか、私は合掌する形式が氣にかゝるのです。「何も神の生命を此の合掌をアンテナとして流れ入る」と観じなくとも神の生命はどこからでも流れ込むではありませんか。

谷口——手掌の磁氣的流れは合掌しなくても手掌を天地の方向へ長時間向けて置くだけでも發生しますが、人體は一種の電池であつて、右手と左手陰極と陽極とを繋ぎ合せれば其處に一種の生命的電氣が流れ、磁氣作用を速かに發生せしめるのです。それは丁度、棒鐵片を南北の方向に向けて置いてもその鐵は磁化するが、その鐵片をコイルで捲いて電流を通ずれば一層速かにその鐵片が磁化するやうなものです。合掌がその掌の發する磁氣作用を濃厚ならしめることは、靈媒が招靈する場合多く合掌しますし、招靈した靈がなかく去らない時には合掌を強ひて解けば大抵は其の靈が去るので判ります。これで合掌は人體の磁氣的流を強め、靈界の諸靈はその磁氣的流を利用して感應するものであることが判ります。これは人體の磁氣的流れ發生の生理的物理的方面の説明ですが宗教的に解しますと神の生命はどこからでも吾々の内に流

れ込む。吾々は神の生命の内に入り、神の生命はまた吾々の内にもあり、不斷に吾々は神の生命を注ぎ込まれて杜絶えることはないのです。併し、この世界は吾々の心の投影の世界でありますから吾々の形式は吾々の心がどう云ふ状態にあるかと云ふことを天にあらはしたものでありますから、心が神を拜すると云ふやうな敬虔な氣持になれば自然に掌を合はさずにゐられなくなるのです。凡ゆる宗教では神を拜じるときには手を合はす。基督教では手を合はさないで祈る宗派もありますが、それでも、西洋人の書いたキリスト自身の祈りの繪像を見ると、其のキリストは手を合はして祈つてゐる。此のやうに手を合はすと云ふことは吾々が敬虔な氣持を起したときに人類一樣に起る本能なのであります。人類共通の正しい本能は自然の働き即ち神の賦與した働きであつて、それに従ふとき最も良きものが得られるのであります。手を合はして敬虔な氣的になり神を拜すると云ふ自然の習慣を實行してゐる者には、自然に病氣を治す力が手掌に與へられてゐる。神は人間を癒やすのに普通人の手の届かない處にある日本アルプスの高山植物とか、ヒマラヤ山上の稀金屬とか云ふさう云ふ不便なところに自然の藥物を置いてゐないで、吾々の極々近いところに、否、吾々の身體の一部分に、もつと徹底的にいへば、吾々自身の心の内に置いて下さつてゐるのです。だから心によつて病氣が癒る。心を自然に持て

ばひとりでに病氣が消える。又心を自然に有てばそれが「形」になつてあらはれては自然に癒
 さねばならぬ所へ掌が當るやうになつてゐる。吾々が腹が痛い時には腹に思はず手を當てて
 みる。頭が痛いときには頭に思はず手を當てる。斯う云ふ本能を人間が有つてゐるのは、癒す
 力が、自然本具に手に與へられてゐた習慣のつゞきである。ところが、吾々が斯うして痛いと
 ころへ手を當てた場合、癒す力を有つてゐる手と、癒す力を有つてゐない手とがある。常に神
 を拜し、合掌し、敬虔な心持になる生活習慣を有つてゐる人ならば、その人の手は治す力を
 もつてゐる。さうでない人は、癒す力が少い。吾々は本来、この手掌の治す力を與へられてゐ
 るけれども、この力を發現さず練習をせず、實際それを使ふことによつて鍛へないと、この力
 も萎縮してゐて實用に耐へない。此の吾々の足でも、假りに十年間じつと坐つてゐて少しも歩
 く力を實用に使はないでほつて置いたなら十年目に起つて歩かうとしても歩けるものではな
 い。手のひらの「生命磁氣」の力も矢張り同様であつて發生する練習をすればするだけ使へば
 使ふだけ鍛へられて強烈になつて來るのです。そして鐵片を強烈な磁界へ置くと自然に磁化す
 るやうに、既に強く生命磁氣の發現した人の側へ來て一定の形式をとれば速かに其の人に潜在
 してゐる生命磁氣の流れが發現するのです。これを靈力の直接指導と云ふのです。併し、この

「生命磁氣」の力は強いだけが能だと云ふ譯には行かないのであります。此の「生命磁氣」が吾々の手掌に發現したと云ふことはラヂオの受信機の電池に充電したと同じことになります。エリミネーター式のラヂオセツトなら、電燈線につないで電流を貰つたと同じことです。斯うして吾々は手掌に發した「生命磁氣」を媒體としての色々の靈波を受受する準備が整うたのであります。例へばラヂオに充電して電波を受受する準備が出来た後には、吾々は何處の放送局から來る放送の電波を感じるやうにするか、その電波を選ぶやうにパソコンを廻して調節する必要があります。それと同じやうに、吾々の手掌から「生命磁氣」が發するやうになつたら、次に吾々はその「生命磁氣」を媒體として如何なる「神」又は「靈」から來る靈波を受受すべきか、自分の心のパソコンを廻して心のリズムを調節しなければならぬのであります。

心のリズムを完全に調節しないで、徒らに「生命磁氣」が發現したことをもつて、自分は大變な力でも發現したやうに思ひ慢心して有頂天になつてゐますと、惡靈または邪靈の靈波が感應して來て、吾々を健康にしてくれるどころか、肉體的病氣にしたり、精神病にしたりすることが往々あります。

兒島——成る程それで判りました。私の友人に太靈道の靈子術に熱申してゐる男がありました

が、その男は精神病になりました。近頃幾分軽快してゐますが、矢張り狂つてゐます。
 谷ロ——田中守平氏が靈子作用と云つたのも此の手のひらの磁氣作用でありますが、此の手のひ
 らの磁氣作用は、その磁界内に入る生物の活力を増進するだけではなく、其の磁氣作用を媒體
 として感應する靈波の影響を受けますから、その感應する「靈」が何者であるかによつ
 て、治療力に甲乙を生じ、時には治療力どころか、精神病にもなつたりするのです。さて此の
 作用に感應して來る「靈」が何者であるかと云ふことには其の人の「心」のリズムと云ふもの
 が大切な役割を演ずるのです。「心」のリズムが正しいものでないと、幾ら生命磁氣が發現し
 ても、却つて惡靈に感應することになります。聖フランシスは「惡魔は主が懲らしめのために
 遣はしめたまへる獄吏である」と云つてゐましたが、晝間心に悪い事を思ふと夜間にはフラン
 シスの所來て彼を惱ます惡靈の姿が見えたのと其の傳記にあります。聖フランシスは靈眼が開
 けてゐましたから惡靈の姿が見えたから反省する事が出來ましたのですが、これが見えない人
 は生命磁氣が發現して合掌がピリ／＼顫へて來ますと、其處へどんな靈波が感應してゐるか知
 ることが來出ないで、好い氣になつて慢心してこれは面白いなどと思つて合掌修行してゐる
 と唯今兒島さんの被仰つたやうに精神病などになる實例が往々あります。だから、合掌修行

をするときには必ず招心歌をとなへて正しき神の來臨を願つてその守護のもとに惡靈の感憑を避け、同時に自分の心は、完全圓滿なる存在の實相、神の子たる自己の實相を觀じ、心のリズムを高めて、低い靈波と波長を合はせないやうにすることが必要なのであります。心のリズムが清まつてゐると神又は比較的高級靈魂の靈波を感受することが出来ますから、その人が手のひらを當てゝ下さると効果が多い。また手を當てなくとも、高級靈は神通力がありますから遠隔治療も出来るのです。だから靈的治療家は人格の高潔な人ほどその治病能力が高いのが一般の原則であつて、術者の愛の心が深く、何物をも求めないで、唯相手を癒やしてあげたい云ふ慈念の權化であるやうな場合にはその治病能力は高いのであります。遠隔治療は手のひらの力が直接放射して届くと考へてゐるのは間違ひです。手のひらの磁力そのものは一定の距離なる境界内しか届かないがその磁氣的流れを一種のマイクロフオンとして遠くへ波及する念波と、その念波に感應して共働する神又は靈の力によつて遠隔治療は出来るのです。

大崎夫人——鹽谷博士は人に手を當てゝ治すときには「どうぞ癒りますやうに」と一心に心に念しながら手を當てゝゐると効果が多いと被仰いました。

谷口——愛の心は神の心、神の心は生かす心ですから、愛は必ず相手の苦痛を柔らげ病ひを癒や

すのであります。併し、愛の心も恐怖を伴うた愛の心では駄目です。抑も恐怖と云ふものは神の全能の愛を信じないために起るものですから、それは不信仰の表白でしかない、さう云ふ愛が癒やす力がないと云ふことは當然なことです。一昨晚、幼児の胃腸炎で此處へこられた奥さんの話であります、昨日は幼児が苦悶のあまり自分で自分の脚を引掻きむしる程苦しんでゐましたが、何だか便を催した様子なので、見るとタラ／＼と血便をした。その血便を見ると幼児自身よりも母親の方が吃驚してしまつて唇が紫色になつてガタ／＼身體がふるへ出したさうです。母親が恐怖してゐると、恐怖のために血液中に毒素を生じてそれが乳汁に混つて出て来る。だから斯う云ふ場合には、子供だけ治療しても駄目で、母親の心を治療しなければならぬ。「薬がないと心配ですか。」とお尋ねすると「心配と云ふことはありませんけど……。」と口では答へられるけれども、どうも矢張り心配らしいのです。それでその奥さんに幼児を抱かせて横臥させて額に手を當て、平和の思念をしてあげると十分ばかりすると母親も幼児も殆んど同時にスヤ／＼眠つて了つた。尙十分ばかり治療してあげたのでありますが、その時から目立つて幼児の容態がよくなり、吐乳は止み、大便も普通便に歸つて來たのであります。これを醫者にみせたらどう云ふか知りませんが、血便が出るのですから大抵の醫者なら逆も大袈裟に

重病者扱ひをして益々母親の恐怖心をそつて病氣を悪化したでありませう。ところが子供が血便が出ると云ふのに、子供に何の薬も飲ませないで健康な母親を精神治療してゐて、その子供の病氣が治るのでから面白いぢやありませんか。子供の病氣は母親の心の病氣、母親の心の病氣はその良人の心の病氣です。その奥さんの云はれるには良人が會社の仕事が多忙しくて、心がイラ／＼して來る時にはきまつて赤ん坊が病氣になるんださうです。これによつても子供の病氣は親の心の病氣だと云ふ事が判りませう。その赤ちゃんも血便までしたのですから普通ならば非常に衰弱してゐる筈なんです、少しも衰弱しないで、大便もすぐ硬まつて來ました、がまだ胃腸に幾分爛れたところがあるかして、私が手を着物の上から腹部に翳すとむづかつて泣き出し、手を除けるとその瞬間にこゝ元氣よく愛嬌笑ひをするんです。病氣の状態によつて、手を翳して却つて苦しくなる場合と、何ともない場合と、快感を覺える場合とあるやうです。

大崎夫人——鹽谷博士も部屋の一隅から手を翳すだけでも苦しむ病人もあると云つてられました。

谷口——大崎さんは神樂觀をするために精神を統一すると却つて咳が出ますが、それは反應です。

一つの治す働きです。西式觸手療法では指掌から發する此の神祕な力を「酵素」と云つてゐますが、酵素と名付けると、酵素と云ふ在來の通念に當て餘らないことになりまゝ。酵素と云ふものは在來の通念では接觸することによつて或る作用を起すものです。例へばデアスターゼは酵素ですが、澱粉はその酵素に觸れることによつて糖化する。併し觸れなければ糖化しない。デアスターゼを着物の上から胃袋にあてがつて置いても澱粉を糖化することは出来ない。ところが此の、手掌から出る神祕力は或る距離まで離れてゐても作用する。だから手のひらから出る神祕な力に酵素と云ふ名稱を付けることは當て餘らないことです。矢張り一種の放射線とか磁力線とか云ふ名稱の方が類似性が強いやうです。そして酵素と云ふものは自分にも他人にも一様に作用するものですが、此れを磁力線と見る時は磁石の尖端の位置に従つて磁力線の分布に變化を起しますから手のひらの力で自分を癒すのは難く他人を治し易い理由を説明し得るのです。先日、横濱のある誌友が來られました。此の誌友の御子息は唯今千葉の醫大へ入學してゐられる。入學試験の前々日頃になつて急性の盲腸炎の症状を呈して來た。醫者は切開しなければ危険であると云ふ。明後日に入學試験が迫つてゐる。切開などしてゐては受験に出席することが出来ないのどう處置したら好いかと云つて遠隔治療を頼んで來られた。そこで

「痛んでゐても恐るゝ勿れ。此の返事のハガキには驚波を移してあるから、この葉書を懐中して受験に出席しなさい。必ず癒るから」とハガキに書いてそのハガキを暫く兩手に挟んで神を念じて、そして其のハガキを送つてあげた。すると船に乗つて千葉へ行く道ではシクシク、盲腸が痛んでゐたが、受験してゐるうちに痛みがとれて了つた。そして受験の翌々日、醫大にゐる知人から受験にパス出来たと電話で知らしてくれたが、それ以來スツカリ病氣を忘れて盲腸炎が治つて了つたと云ふ話があります。今その御子息は千葉の醫大に通つてゐられますが、この暑中休暇に郷里へ歸つて來て「お父さん。現代の醫學は駄目なものだね。何故心臓が動くかも判らないんだつてね」と云つてゐた。それで、そのお父さんは「さうだらう。其の筈だ。併し、よく勉強して置いて現代の醫學の蘊奥を研めるんだよ。そして卒業したら「生長の家」の醫者になるんだよ。「生長の家」はすべての醫學を完成するところだ。此の「生命の實相」を読めばそれがよく判るが、お前が醫大を卒業して了ふ迄はこの本を見せる譯に行かない。今は之を見せる譯に行かないのはこの本を読めば現代醫學が馬鹿らしくなつて勉強しなくなるから」と云つたと、そのお父さんなる誌友が來て話して行かれました。此のやうに心臓がどうして動くか判らないのが、現代の唯物的醫學なんです。拳ほどの大いさしかな心臓がどうして此の無數の

毛細血管の狭い道を血管壁の抵抗に打克ちながら血液を壓送することが出来るか、唯一本の毛のやうに細いパイプからスポイトで水を押し出すのでも中々力が要るのですが、無数の髪の毛のやうに細い、而も長いパイプなる血管を通してその血管壁の摩擦に抵抗しながら多量の血液を壓送するには實に驚くべき力を要するのですが、心臓の筋肉の收縮力だけを考へては到底それは出来る筈がない。そこに着眼して西式では血液が循環するのは心臓の壓迫力によるのではなく、毛細血管の引力だと物理的に説明してゐるのです。一寸考へると面白い観察であります。

すが、動脈の毛細血管の引力によつて心臓の方から血液を誘導する方はこれで解釋されますが、静脈の毛細血管を考へますと、静脈の毛細血管もその毛細管の引力によつて心臓から血液を細い血管の方へ吸引する事になりますので、毛細管作用と云ふものは静脈の方では、血液を逆流させる力となり、動脈毛細管の血液の順流作用を打消して了ふのであります。だから物理的に血液の循環作用は末梢血管の毛細管作用によると解釋することは結局自己撞着に陥つて了ふのです。すると吾々の血管に血液が循環する原動力を物理的に解釋しようとする試みは美事に失敗に歸して了ふのです。死の一分間前と死の一分後との毛細血管の毛細管引力は變らなくとも、死の一分間前は血液が循環してゐるのに死の一分間後は血液が止つて了ふ。

どうしても吾々の血液循環には單なる物理作用ではない。神祕な力が加はつてゐる事を認めねばならないのです、此の神祕な力を生命と吾々は呼ぶ。吾々は此の生命力によつて生きてゐる。西式では人間は毛細管引力と云ふ物理作用で生きてゐると云ひますが「生長の家」では人間は生命力によつて生きてゐると云ふのです。否一層進んでは此の生命力こそ、自分であつて、肉體は此の生命力の痕跡だと云ふのです。西式は著書で見ればどうも無神論らしいのでありませんが「生長の家」は有神論であります。手のひらの治病力でも、西式では所謂四十分行で、肘から上へかけての手の部分を心臓部よりも高所に置いて合掌すれば末梢血管の毛細管作用で、指の末端にあるマイスネル氏小體から酵素が出る。誰でも四十分間肘を張つて合掌し、肘を心臓部よりも高く保つてゐれば毛管現象により指先の血流が盛んになり、つひにマイスネル氏小體から酵素が出て耳の鋭い者にはパチ／＼云ふ音が聞えて来る。パチ／＼と云ふ聲は両手を拍たずとも片手でも指先から出る音であるから、禪宗の「隻手の聲」と云ふのは此の音のことであると一とかど物識り顔に書いてゐるが、禪宗の公案の「隻手の聲」と云ふのはそんな五官に聞える聲のことではない。西氏の素養の深淺がこれで知れると云つて、私のところへ來て笑つて歸つた人もあります。此の「隻手の聲」といふのはそのやうな肉の耳に聞えるやう

な物理的の音ではない。「無指にして堅つ指」と同じで、「片手でも聞える拍手の音」であつて、その眞實義は「生命」の實相は五官を超越したコトバであること、即ち聖書に所謂「太始にコトバあり」のそのコトバこそ此の隻手の聲なのであります。

A——西式では指掌から出る酵素はあまり出してばかりあると自分自身に酵素が缺乏して來て身體が衰弱するから、不要のときはその酵素を放出しないやうにしなければならぬ、それには此の酵素は、指を堅にして心臓部よりも高く捧げて毛管現象によつて發現したものであるから、その逆に指先を下にして心臓部よりも下の位置で指先を打ち振つて置けば酵素の出るのが止まると云つてゐますが、本當でせうか。

大崎夫人——鹽谷醫學博士は朝から晩まで患者に手を當て、治療してゐられるから、「先生、それでよくお疲れになりませんね」とお尋ねしますと、「私自身の力を出すのなら疲れるかも知れませんが、神から無限の力を供給されるのだから少しも疲れません」と云つてをられました。

谷口——さうでせう。さうあるべき筈です。西式の説明のやうに、手のひらからの治す力を物質的な酵素の力と致しますならば、物質は使へば使ふほど減るのですから、酵素を使ふ度に、指先を下向けて打ち揮つて酵素の出口に栓をして置かねばならぬでせうが、手のひらから出る

力をさう云ふ物質的な力でない致しますと手のひらの治す力は使つても使つても減りはしないと云ふことになりません。そして實際鹽谷博士のやうに毎日毎時間連続して手のひらの力を出してゐても體力が消耗しないと云ふ實證があがつてゐる以上は手掌から出る力を物質的な酵素の作用だとは受取れないのであります。それに、指先を下に向けて打ち揮れば其の力の發生が止まると云ふのも受取りがたい妄説です。印度にはプラナ療法と云つて指先を下へ向けて濡れ手の水を切る時のやうに手首からさきを打ち揮ることによつて、手のひらの治す力を發揮する療法があります。これは西式とは反對に指先を下へ向けて打ち揮つても治す力が止るものではないと云ふ實例であります。氣合術ではエイツと氣合を掛けながら印契を結んだ手を上から下方へ揮り下げます。袂會の振魂の修行と云ふのも兩手の指を組んで合掌してその肘を下へ下げたまゝ、間斷なく打ち揮ると、手のひらに病を治す力が出來て參りましたり、靈能靈覺が生じて來ます。だから此の生命磁氣(生命線靈氣)が手掌に發生するのを、手掌を心臟部より高く擧げて合掌するために起る、單なる毛管現象によるのだと説明することは適當ではないのであります。寧ろそれらは兩手即ち人體と云ふ電池の陰陽兩極を結び合はす所の合掌と云ふ自然本能によつて發生するのであります。指が上を向く向かぬと云ふことは位置を天地陰陽の方向に合せしめてその發生を助ける助因となるに過ぎないのであります。

第十一章 現代醫學を語る

内容——昭和七年九月十八日の座談會の話材を中心とし、その前後の日に來訪

されたる方の談話を系統だてたるもの。

談話者——上田源三郎氏(大阪證券)、中島忠英氏(大朝飛行士)、山口眞康氏(茂

世路鐵業)、A氏、永田恭助氏、原義一氏(齒醫科師)、船橋作二氏(醫

師)、谷口雅春氏夫妻、松原太郎氏(生長の家大分支部)、兒島富治氏

(高商卒業生)、中畑忠二氏、その他。

中畑——私は唯今結核で妊娠してゐる人が醫者から妊娠を中絶せよと勧められ私にも相談されたので、どう教へたら好いかと思ひ惑つてゐるのです。醫者は懷妊中の婦人が結核である場合、妊娠を中絶せよと勧める権利があるのですか。

舟橋——母體の生命がその妊娠によつて危険だと認められるやうな場合には、二名の醫師から妊娠中絶を要すと認むと云ふ證明書を得て、妊娠中絶の施術を受けて好いことになつてゐます。

谷口——私の經驗では結核患者に妊娠を中絶さす必要はないと思ひますね。脊髄カリエスで今後五年間に妊娠したら妊娠を中絶しなければ母體が危いと云はれてゐた人で妊娠し、妊娠中却つて妊娠前よりも榮養が良くなり、立派な胎兒をお産みになつた實例があります。その方はお産

に歸郷してゐて、二三日前こちらへお歸りになりましたが、實に立派な赤ちやんである。風呂へ入つても、他の赤ちやんにくらべると發育がよくて、段が違ふ。手首や足首が斯う括れる程に丸々と肥つてゐるのです。「生長の家」家族にお入りになつて生まれた子は皆發育が好いやうです。一昨日も呉市の誌友から、結核で妊娠された方で此の十五日の朝、男兒を無事安産して母子共に健全である。この兒は妊娠中醫師にまかせて置いては地上に出生しなかつた子供であるから、云はゞ「生長の家」が生みの親であるから名前をつけてくれと頼んで寄越されたのです。名前を光生とつけてあげましたが、光から生れた子と云ふ意味です。今後、私は斯う云ふ子供を此の世に澤山生み出したいと思つてゐます。だから中畑さんの御相談をお受けになつた方も斷然妊娠を中絶しては可けないとお答へになると好いと思ひます。

中畑——醫師なら自分の勸告の結果が悪くても責任はありませんが、吾々は素人ですから、醫師が妊娠を中絶させなければならぬと云ふのに私が、妊娠を中絶する必要がないとお答へして、醫師の勸告を退け若しその婦人が今後経過が悪かつたときには、私は責任を負はねばなりません。

谷口——醫師の勸告に従つて妊娠中絶の手術をしたのち、其の豫后が必ず佳いとは云へないでせ

う。先日も私のところへ尋ねて来た婦人があつた。貴方もあの時此處へ来てゐらしたぢやありませんか。肋膜炎を患つてもう殆んど全く治つてゐた。それに一寸ばかり脚氣の氣があるので内臓はどこも悪くないが、このまゝ妊娠を繼續させたら母體が危険だと云ふ大阪庶民病院と某醫師との診斷で妊娠中絶手術を行つた。手術中脈搏もたしかであり経過も非常によかつたのに、突然三日目から非常な發熱をして脈が殆んどなくなり危険状態に陥つた。危険状態は過ぎたがそれから暫く患者は視力を失つて何も見えない。そして「私の子供はどうしたの」「皆なして、私を一體どうするつもりなの」などと云ひ出して、一時すつかり精神病になつて了つた。今ではその精神病も殆ど治つてはゐるけれども、まあ痴呆と云はうか、低能と云はうか、先日ラヂオでエスペ란トの講義のあつたときなども、そのエスペ란トの講義ばかりに嚙りついて一日中ラヂオのテキストの「一頁半位をいつまでも繰返し繰返し復習してゐて、家事一切を見ず、良人の云ふことも母の云ふことも何もきかない一個の廢人が出來上つたのであります。醫者にかゝつても此のやうに手術後の経過は必ずしも好いとは云へない。そこで、中畑さん、貴方がその相談を受けなすつた婦人に「それぢや醫師の云ふ通りに手術しなさい」とお答へになつて、その結果がよくなかつたら貴方はその結果に責任は有てますか。どちらにせ

よ、一旦相談を受けて右すべきか左すべきかを委された以上は、どちらを答へても一半の責任は分たねばならないでせう。

中畑——醫者はさう云ふ妊娠を中絶しても好いと云ふ權利をもつてゐるのを、非醫者である吾々が妨げると云ふことは……。

舟橋——權利と云つても、それは法律上の權利であつて道德上の權利ぢやありません。また醫者には、手術した後の結果が悪くても責任はないと云ふのも法律上の責任だけであつて、道德上の責任はないと云ふ譯には行きません。神に對する責任は醫者にも素人にも同様だと思ひます。

谷口——醫者のうちには法律上の權利を濫用して随分好い加減な治療をして金儲けをはかり手術の必要がなくとも施術をすゝめて施術料をとると云ふのがあるさうですし、治らなくても、豫后が却つて悪くても、それには責任を負はないのですから無責任と云へば無責任な話です。

山口——そこで醫療費の徴收制度に改革を加へねばならぬと云ふ議論も出て來るのです。餘り早く治つたら金が儲からないから、病氣をながびかせる方針をとる醫者もないとは限らない。その弊害を防ぐためには治つたら百圓。治らなかつたら五圓と云ふやうに日數にかゝはらず成功料を支拂ふと云ふやうにすると好い。

谷口——それでは醫者は儲けすぎる。ほとんどあらゆる病氣は治るのにきまつてゐるのだから、

百圓づゝ拂つてゐたのでは大變だ。

山口——百圓と云ふ金額は假りに言つたのであります。

谷口——話が元に歸りまして、吾々が非醫者として、醫者が妊娠中絶を勧めてゐる患者から相談を受けてどう答へたら好いかと云ふ問題に就ては、吾々は神に對する責任をもつて、神の思召しに最も近いと思はれる方向にお答へしなければならぬと思ひます。神が何故に母親の胎内に赤ん坊を宿したかと云ふ問題から出發してどうすねえ。何ですか、その患者の病氣は餘程進行してゐるのですか。

中畑——私のところへ最初たづねて來られた時には非常に衰弱して腹ばかり妊娠で膨れて、ほかは唯、骨と皮とのやうに瘦せてゐられて、見るから氣の毒な姿でありましたが、暫く私が治療してあげてゐるうちに結核の方は次第に快く段々元氣になられ、身體も少し肉がついて四五百目は體量も殖えられたやうです。だから此の分なら結核そのものは此れ以上進行の虞れはないと思ひます。

谷口——その位なら妊娠中絶の必要は斷じてないぢやありませんか。私が相談された患者は血を

吐きながら妊娠してゐる。悪阻の悪い癖があつて一粒の食物も咽喉を通らない。これは人間は物質で出来てゐる、「二足す二は四」「四引く二は二」であると云ふやうな數學的勘定の現代醫學では、此の問題の結果は明瞭である。結核は消耗性の疾患であつて栄養が充分でなければ治らない。ところが食物が一粒も咽喉を通らないのであれば栄養は零である。栄養は零であつて、内部から胎兒が發育して母體の栄養を吸ひとると云ふのだから、現代の「二ニンガ四」の醫學では妊娠中絶さすよりほかに母體の助けやうがない。ところが「生命」と云ふものは「二ニンガ四」と云ふやうに數學で行くものではない。零からでも、どれだけでも信仰によつて生きる力が出て來ると云ふのが「生長の家」の醫學であります。キリストは五つのパンで五千人を食へさせて、まだ籠に一杯パンが餘つたと聖書にも書いてある。數理的に云へば、そんな馬鹿なことが起る筈はない。けれども數理を超越して結核患者が食物を食はないでゐて、胎兒を生長させて自分も肥えると云ふのが「生長の家」の醫學なのであります。私は、だから、この患者からどうしようかと質問されたとき「妊娠を中絶する必要はない。食物が咽喉を通らないのは心に不安があるから、胸に痞へて戻して來るのであるから、心を神に委せて不安をいやうにすれば御飯は食へられ腹の中に落付くやうになるのである。だいたい神が一個の生命を

胎内に宿されたのは必ず神が其處で其の胎兒を生かさうとの御意志の發現であるから、神を信じ、神にまかせて心が平和になりさへしたならば、食物は必ずたべられ、妊娠したことが却つて母親を健康ならしめるものである」と實例を引いて手紙を差上げましたところが、尤も、こちらからも祈つてあげたからでもありますが、その手紙を讀んだ日から、食物をとつても吐かぬやうになられ次第に健康になられた。この話は先日講演會の席でも一寸話したのでありますが、これは「二二ンガ四」を超越した醫學である。此の結果此の奥さんは非常な信仰を得られた。妊娠八ヶ月目の頃に風邪でも引かれたのか、肋膜炎であるのか、熱が出て痰が増し、寝返りするのさへ胸部が痛くて耐へられない状態になられた。家人が醫療を受けねばならぬと勧めても頑としてきかれない。醫療に委せておいたら自分の健康は勿論、自分の胎兒も現在まで生きてゐないのである。今更醫療でもあるまいと云ふお心であつたのでせう。私のところへ遠隔治療を頼んで來られた。私は一枚の白紙に神の靈波を移して手紙に封じて送つてあげて、「これを胸部の痛むところへ當てなさい。一週間したら大體治るから」と返事してあげた。ところがその後よくなるどころか段々痛む六日目の晩になると、四十度二分の高熱が出て苦しくて意識を失ひさうになられた。併し絶対に服藥をしりぞけて唯、神の名のみを呼んでゐられた、す

るとその夜のうちに發熱がさがつて翌日眼がさめて見ると胸部の痛みがスツカリとれてゐる。起きて見ると起きられる。それが丁度一週間目である。すぐ喜んで手紙を寄越されたのであります。それが、それ以後一向その方から便りが無い。一昨日、その方のことを思ひ出して今頃は出産する時分であらう、どうせられたか知ら安産するやうに祈つてあげねばならぬと考へてゐた、すると昨日、その良人の方から「男子出生、母子共健康」のお知らせを頂いたのであります。その時は、本人からの手紙ではない、良人の名前であるから、氣遣つてゐた家内などは悪い知らせではないかと不安さうでありましたが「屹度生れたんだよ」と私が云ひますと、その通り生れたのであります。男の子のない家で男の子が生れたのですから、その喜びは察するに餘りあります。私も斯う云ふことのある度毎に自分のことのやうに嬉しいのであります。

舟橋——さう云ふ喜びは私も時々味ふところであります。その四十度二分まで熱が出たのに心の平和を失はないで解熱劑も何も用ひられなかつた。その「熱」が尊いのでありますなあ。その「熱」は一體どこから出たのでありませう。

谷口——「生命」から出たのです。生きる力から出たのです。普通「熱」が出ると病氣で、「熱」が出たやうに思つて悲觀するのでありますが、「熱」と云ふものは「生命」から出る。死んだ人

からは「熱」は出ない。「熱」が出ると云ふことは其の人の生きる力が旺盛である、害物と戦ふ力があると云ふことです。それを解熱剤などを用ひて横合から「熱」を下げるから病菌に對する抵抗力を弱くする。高熱を出してその儘置いて恢復しますと、熱がさがると同時に、殆ど健康状態に歸つてゐて疲勞が少い。解熱剤を用ひて、發熱を低くすると病氣に對する抵抗力を少くし、病氣を長びかせ、治つてからでも疲勞の回復が遅いものです。三日で治る所ならば七日かゝる。それで患者は大抵、藥を飲んだから一週間で治つたと思つてゐるのですけれども、藥を飲まなかつたらもつと早く治つたと云ふことを知らないのです。病氣の治療を長びかせてお金を澤山使つて、こんな馬鹿らしいことはいないのであります。

山ロ——大阪北濱の水口耕治と云ふ醫者も熱性病に於ける身體の障害は熱そのものゝために起るのではなく病氣の中毒作用で起るものであつて、熱そのものは却つて病毒を破壊するために起る對抗機能であるから、熱性病のときには適宜に患者を温包して發熱の放散しないやうにするのが好いと云つてゐます。アンチピリンなどを服用して下熱するのは病毒によつて興奮し、病毒を破壊すべく體温を高めつゝある中樞を更に痲痺して多少その標準を低下せしめ、其後に至つて病苦を増加せしめるものだと、「生長の家」と同様のことを云つてゐます。此の醫者は氷や

水で冷やすことすら間違ひであると云つてゐます。熱病者は往々冷やすのでありますが、身體の一部を冷却して溫度が下がるのは、その局所の表層だけである。例へば頭を冷やすにしても頭蓋骨の内面には多量の血流があり、頭を冷やしても冷えるのは毛髪、皮膚、及び頭蓋骨だけであつて決して内部の腦實質の溫度は低下するものではない。まして全身の熱はなかく冷めるものでないから、亢熱を恐れて冷却するのは矛盾であつて、無暗に冷却したならば虚脱死を招くに至る。それは何故であるかと云ふと、體溫と云ふものは體溫を司る中樞機能の興奮状態に相應するだけに昇つて持續するやうになつてゐるから、冷却しても冷却しても體溫は體內からカロリーを補充して一定の高度に持續するやうになつてゐる、このカロリーの補充が急に體內から間に合はない時に外部の熱放散を妨げるために皮膚を收縮するこれが悪感戰慄である。そのカロリーの補充が冷却のために足りなくなつたのが即ち虚脱状態であつて、冷却して下熱したらそれこそ却つて死の直前である。熱病の人を久しく冷却して終に下熱したと喜んでゐると、それは束の間の喜びで翌朝は死亡してゐると云ふ例が往々あるのは、この外部的冷却のためにカロリーを補ふを得ず虚脱状態に陥つたのだと云つてゐます。

谷ロ——不自然なことをして解熱するとそのやうに衰弱の度が加はり往々危険なのに反し、自然

の生命力によつて解熱するときは、解熱後ずん／＼目だつてよくなるのであります。吾々が熱性病のときに寒けを感じる、これは寒いから温く包めと云ふ自然の命令であつて、さう云ふ場合には温く身體を包んで置いて風に當らないやうにするのが生命自然の命令に従ふのでありますから、水口氏の御説の「熱性病は却つて温包せよ」と云ふのは正しいのであります。

A——皇漢醫方を以て一家をなしてゐられる渡邊ドクトルの如きも決して熱病に解熱劑を使ふと云ふことをしないで、その人の體力を内部から補うて病氣をなほすと云ふやうな調劑の仕方をなさるのです。

谷口——いつか「主婦の友」誌上に紹介された渡邊ドクトルの病氣一元論を読みましたが、あの人の説によると殆どあらゆる病氣は梅毒に還元すると云ふのでしたねえ。

A——えゝ、そのやうでございます。

谷口——當時私が渡邊ドクトルの所説を読んで思つたことは、何人が診断しても何ら梅毒の症状も反應も呈しない病氣でも、悉く潜伏梅毒であると渡邊さんは云はれるのであるから、それが潜伏梅毒だと云ふ證據は一つもない。證據のない無形のものに梅毒だと云ふ名稱をつける

と云ふことになる、「梅毒」とつけなくとも「結核」と名稱をつけても可いことになる「電氣」

と名付けても好ければラチオと名付けても好い。あらゆる病氣は電氣作用であるともラチオ作用であるとも云へる。併しかう云ふと、今迄の結核とか電氣とかラチオとかの通念に衝突することになる。それよりも一層適當なのは凡ゆる病氣は「生長の家」の云ふやうに「心」の作用によつて起るとすることである。これなれば「心」と云ふ在來の通念とも衝突しないし、心を治すことによつて病氣の治る事實で此の眞理を證明することが出来ます。

A——あらゆる病氣が潜伏梅毒であると云ふことに證據はないと云はれましたが、それは梅毒に處方する薬で治ると云ふ事實によつて證據だてられませう。

谷口——渡邊さんが處方になる薬が實際梅毒を癒す力があるかどうかと云ふことも證據はない。實際それが細菌を癒す力のある薬であり、實際すべての病氣が全部潜伏梅毒であるとすれば、あらゆる病氣は渡邊さんの細菌薬で治らなければならぬけれども、治る病氣と治らない病氣とがあるでせう。

A——無論治る病氣と治らない病氣とはあるやうです。

谷口——何故治る病氣と治らない病氣とがあるか考へて見たことがありますか。

A——私には判りませぬ。

谷ロ——薬と云ふものが物質の化學的作用で効くものであり、人間が一個の物質の塊であるとするならば、一定の藥劑で一定の結果を生じなければならぬけれども、人間は外見は一個の肉塊であつても、その本質は「心」ですから心の相違に従つて同じ藥でも別々の効果を生ずるのです。だから「生長の家」では「病氣の相異」は「心の相異」にほかならぬと云ふのです。私に云はせれば同じ病名の病氣でも、百人の病氣は百人ながら、心の相異なるやうに百通りに別々の病氣である。だから、同じ藥を同名の病氣に投じても治つたり治らなかつたりするのは病名は同じでも病氣そのものは別々だからです。

A——判つたやうでもあり、判らぬやうでもあります。

谷ロ——渡邊ドクトルと被仰る方は非常に自信に充ちた物言ひ方で患者に接する人でせう。

A——それは本當に自信のある方で、無藥で病氣が治るものかと斷乎として信じてゐます。患者なども自信に満ちた態度で叱りとばしたりなさるやうに聞いてゐます。

谷ロ——その斷乎たる自信をもつて患者に臨むと云ふところが渡邊ドクトルの名醫たる所以なのです。キリストは信仰さへあれば、「此の山に彼方に移りて海に入れと云へば山でさへも動き出して海に這入る」と云つてゐます。山でさへ動くのだから病氣の動き出す位は何でもありません。

ん。渡邊ドクトルのやうに自信の強い病氣一元論者のゐることは非常に人類にとつて力強い事
 です。私はあゝ云ふ醫者は天下の至寶だと思つてゐるのです。諸方の名醫へ往つて色々診察
 して貰つて、レントゲンで覗いて貰つたりして、これは斯う云ふ位置にある斯うした固定した
 病氣であつて治らないと、病氣の觀念が固定してゐる病人が、どの治療法でも治らない揚句の
 果てに、渡邊ドクトルのやうな名醫のところへ行くと、今迄の診断とすつかり變つてゐる。「こ
 れは君、さう云ふ病氣ではない、先天梅毒だよ」と自信に充ちた口調で云はれると、今迄固定
 してゐた病氣の觀念がグラリと覆る。今迄の病氣の觀念が覆ると、もうその病氣は半分は
 治つたも同様である。そこへ「その先天梅毒を治す薬は餘所にはないが、此處にはある。この
 薬さへ飲めば大丈夫だ」と云はれると、今迄或る一定の治り難い病氣だと思つてゐたのに、さ
 うではなかつたのだ。今迄の治療法で治らなかつたのは無理もない、診断を誤つてゐたんだか
 ら。今度は診断が正しいし、こゝの薬のみこの病氣を治し得るのだと云ふ暗示を受ける。それ
 でその薬を飲むと癒る。だからその薬を飲んで治つたと云ふことは必ずしも薬の物質的効力だ
 と云ふ譯に行かない。純粹に物質的効力ならば、誰にでも一樣に効かねばならぬが、患者の心
 が醫者の與へる暗示をどの程度に受け入れるかと云ふことによつて其の患者に對する薬の効力

が決まるのだから、醫者の言葉、態度及びその言葉を信ずる人ほどよく治る。治らない人もあり治る人もある。萬病一元論者は渡邊ドクトルのほかにも眼科の西村美龜太郎博士の萬病はたゞ一つ角膜表層炎と云ふ眼病から來ると云ふ説なども面白い。この醫博などはどんな患者に對しても皆これは眼病だと云つて了ふ。「心臟が悪いのです」と患者が云つて來ると、眼を眼鏡でのぞいて見て「イヤ、これは心臟病ではない、眼病だ、眼病が治れば、自然にその症状が消滅して了ふ」と強い自信に充ちた口調で云ひながらキツイ眼薬を差して、眼に温濕布をあて、それが冷えないやうに、十數回も繃帯をグル／＼巻きにして三十分間も放置する。ほかの病氣の患者でも皆同様である。患者は眼を閉ぢて温く滲みてくる藥の感じを眼の中に味ひつゝ、「今迄自分の病氣は心臟病だと思つてゐたのに眼病だつたんだなあ、その眼病は今斯うして治されつゝある」と云ふ感じを受ける。その暗示を毎日繰返してうちに病氣が治る。九州から來た學校の先生で、書癢と云つて字を書くとき手が震へる病氣の患者などたゞ一回の眼球温器法で治つた實例もある。西村博士は「癌だけは治して呉れと頼まれないからまだ治したことはないが、他の病氣なら凡ゆる病氣を治した」と公言してゐる。かう云ふ萬病一元論者の治療法の特徴は「君は××病だと思つてゐるが、實はさうではないぞ。梅毒だぞ。或は眼病だぞ。」と斷言

して病名を轉換して「その病氣を治す方法は自分だけが持つてゐる、その治療法を今施してあげる」と確信に満ちて云ふところにある。此の醫者自身の確信と云ふことが大切であつて「本當はさう信じないけれども、患者にさう暗示してやれば治るから、さうワザと確信に満ちた口調で云つて暗示を施すのだ」などと思へば、その醫者の言葉に確信が伴はないから、信じて云ふところの「山をも動かす言葉」にならないから効力が薄い。此の山をも動かす確信ある言葉が病氣を治すのである。だから、渡邊ドクトルは萬病梅毒論以外何物をも信じない程確信があるのが好いし、西村博士は自分の「萬病眼病論」以外何物をも信じない程確信がある方が好いのです。萬病眼病論者に近いものに前田珍男子と云ふ醫學博士がありました。

河村——前田珍男子は名古屋で開業してゐました頃に私は知つてゐますが、藪醫者で高いばかりだと云ふので一寸も流行りませんでした。ところが東京へ出て名をあげました。

由井——私も一度神經衰弱にかゝつて前田珍男子に診て貰つたことがあります。随分高價な診察料に、眼鏡の處方料をとるのです。最初にいつたとき五十圓ばかり取られました。あの人の診断によりますと、私は先天的の遠視眼と云ふので、老眼鏡のやうな凸レンズの眼鏡をかけさせられたものです。凸レンズだから遠いところがハッキリしない。人に道で出遇つてもどうも見

損なつて相手が會釋しても知らずに失禮することがある。それはまだ好いとしても一日中眼の前がボンヤリ曇つてゐるやうで、人生が暗く悲しく見えて仕方がなかつた。たうとう決心して眼鏡をかなぐり捨て、徐々に物を近寄せて見る練習をしてゐると、眼も普通になり、健康も回復して來ました。前田博士のやり方では眼鏡の度は最初の一回の處方ではきまらないので、最初は眼球の度を矯正するための眼鏡をかけ、最後の決定的眼鏡をかけるまでには眼鏡の處方箋が三四回も要りますので、どうしても一つの眼鏡の決定的處方を得るまでには百圓はかゝるのです。

中島——私も兵役前に前田さんの診察を受けて眼鏡をかけたことがあります。前田さんは殆どすべての日本人は先天的に遠視眼だと云ふ學説を有つてゐるので私も遠視眼にせられたのです。徴兵検査のとき、軍醫が診て、「この眼は少しも悪くないぢやないか。こんな眼を悪いと云ふ眼醫者の眼の方が餘程悪いのだ」と云はれました。今では私は飛行機に乗る時でさへ、飛行眼鏡さへ殆どかけたことがない位です。

谷口——さう云ふやうに眼鏡をかけて却つて失敗してゐる人がある。併し前田珍男子は眼鏡をかけさせて病氣を治した研究によつて醫學博士になつたのです。私に云はせれば、これも眼鏡が

病氣を治したのではない。ほかの病氣だと思つて惱んでゐた人が、「君の病氣は眼病であつて、決してほかの病氣でない」と云はれて眼鏡をかけたために、今迄他の病氣だと思つてゐた固定觀念が眼の方へ向いて、不便な眼鏡をかけてゐるうちに、眼と云ふものは神経の鋭いところであるから、この不便のために治るのだと始終思つてゐる。その心の働きて、神経衰弱でも胃病でも治つて來るのです。まだこのほかに、萬病一元論には岸本獸醫博士の「萬病は心臓擴張から來る」と云ふ學說もある。カイロプラクターの説く萬病脊椎副脱臼論もある。近頃アルスが旺んに絶對健康法と稱して宣傳してゐる「ザニタース療法」と云ふのも云はゞ萬病一元論に近い。多くの病氣の遠因、老衰、及び虚弱は潜伏結核の病毒から來ると云ふのです。それで此のザニタース療法を創始した川副綱吉と云ふ醫者は、どんな病人でも潜伏結核にして丁ふ。肺尖のところを打診して見せて「君の肺尖峽の清音部の廣さは普通よりも狭いから、この淋巴腺が結核菌のために腫れて、空氣が這入るのを邪魔してゐる證據である」と云ふ。そしてザニタースを注射して翌日打診して見せて「清音部の廣さが何ミリメートル殖えたから結核菌がそれだけとれた證據である」と云ふ。患者にして見れば、素人だから肺尖の打診の音が清音だか濁音だかわからない。わかるにしても何ミリメートル肺尖の清音部の幅が殖えたか、それほど

詳しいことは醫者に打診をして貰ひながら患者自身わかる筈はない。だから醫者の云ふがまゝに肺炎の清音の幅が殖えたと信ずるよりほかに道はない。それを醫者が確信に満ちた口調で云つてくれる、そこで「今迄自分が虚弱であつたのは他の病氣であると思つてゐたが、潜伏結核であつたのだ。それが今この通り結核菌がとれた」とハツキリ信ずる。信じた通り肺炎部の清音部は廣くなり、その人の病氣は治り、元氣になる。醫者自身が信じてゐるからその精神波及も手傳つて効果が強い。しかし、このザニタース療法とて全ての患者に一樣に効果がある譯ではない。こゝに物質の力以外に人間の心が手傳ふものであると云ふことを認めねばならない。創始者の川副氏も正直に「この清音部の擴がるのも、直ぐ擴がる方となくく擴がらぬ方とがある。また折角清音部のひろがつたのでも、元に戻ることもあり、本人の菌に對する抵抗力が弱つた時、身體を餘計に使つたとき、眠れない時には其の戻り方が強い」と云つてゐられる。こゝに患者自身の抵抗力が問題になつてゐるので、この患者自身の抵抗力と云ふものは、心の力でどうにでもなる。「生長の家」を讀んで今迄眠れなかつたのが安眠がとれる人、夏やせしなくなつた人、何晝夜も不眠で働いても疲勞を感じなくなつた人などがある。これは、患者自身の抵抗力が増したからであつて、このやうに心さへ人間無病の眞理を體得すればザニタース

の注射も服薬もしないでも患者自身の抵抗力、殺菌力、抗病力が増加するから病氣はなくなつて了ふ。病氣は心で治ると云ふのは此處からも云ひ得るのであります。

舟橋——私の取扱つた患者に母親が脚氣で、子供が乳兒脚氣になつては可けないと云ふので、牛乳で育てゝゝゝゝゝゝ二人も子供を死なした人がある、その人が今度の子供が出来たときに、私はその母親から自分は脚氣であるから自分のお乳を子供に飲まして悪いだらうかと云ふ相談を受けた。まあお乳を見せて御覽なさいと、見ると立派な乳房を有つてゐる、乳もよく出る、それで私はかう云つたことです。「こんな立派な乳が出るのに、わざわざケダモノの乳を人間の子供に飲ませる必要はない。人間の子供は人間の乳で育てるべきものである。ケダモノの子ならケダモノの乳で育てるが好い」このケダモノと云ふ言葉が患者の心を打つたらしいのです。牛乳などど云ふと何だか貴重な栄養料と云ふ感じがするのですがケダモノの乳と云はれると下等なものゝやうな感じがする。「先生、それでは本當に私の乳を飲ませてもいゝのですか。」と云ふ譯です。「飲ませても宜しいとも。人間の子には人間の乳を飲ませるのが最も好いのです。ケダモノの乳で育てゝゝ人間の乳兒が安全だと云ふ譯はない。今迄貴女は牛乳で哺育して二人まで子供を殺してゐるんぢやありませんか」「先生、食べ物は何を食べたらよろしいですか」「何なと好

きなものをおあがりなさい。何がおすきですか。」「野菜にお魚がすきです。」「その通りに貴女自身じしんのすきな野菜やさいにお魚まなこで結構けつこうです。それが脚氣かっけいの一番薬ばんやくですよ」さあ斯うして患者くわんじやに大安だいちん心を與あたへてから、脚氣患者かっけいわんじやの母親ははおやの乳ちちを乳兒にうじに飲のませた。子供こどもは丸々と肥まるくえて來くる、母親ははおやもその儘まじ脚氣かっけいが治なほつて了しまつた。一石二鳥いっせきにふたどりと云いふ言葉ことばがあります、母親ははおやも助たすかり子供こどもも助たすかることになつたのです。これを思おもひ出だすと私わたしも常に善よいことをしたと云いふ良心りやうしんに何なんとも云いへぬ歡よろこびを感かんずるのです。

谷口——貴方あなたが眞理しんりを話はなしておあげになつて患者くわんじやの心こころに大安だいちん心を與あたへたときに毒どくの乳ちちが平和へいわの心こころの働はたらきで薬くすりの乳ちちに變かはつたのでありませう。

舟橋——私わたしは神しん想さう觀くわんを實じつ修しゆするやうになりましてから、指頭しゆとうの感かん覺かくが非ひ常じやうに銳えい敏びんになりまして診しん斷だん上じやう大だいいに助たすけられてゐます。それに大變たいへん自じ信しんが強つよくなりまして、今迄いままでそんななに雄辯ゆうべんでなかつたのに、確かく信しんに滿みちた文句もんくがひとりでに勝手かつてに浮うび上あつて來きて話はなしてから我われながら實じつに旨うまい文句もんくが思おもひ浮うんだと思おもふことがあります。

谷口——キリストが弟子でしたちに「汝なんぢら傳道でんどうに往いつても何なにを語かたり何なにを話はなさうと思おもひ煩わづらふな。心こころのうちに自然しぜんに思おもひ浮うぶのが神かみのみ聲こゑである」と教をしへてゐるがそれです。神しん想さう觀くわんをして心こころが神かみに一

致して來るとき、ひとりでにその語ることを爲すことが、内面から導かれて來るやうになるのです。

原——私は今迄随分腹も立ちイラ／＼して家内などにも氣むづかしい性質だと思はれてみました。が、この頃だん／＼腹が立たなくなりました。私は省線の神崎驛の郊外小田村にゐるのです。が、外出のときには發車時間表を一々見てその時間までの間が落つかないイラ／＼した氣分であつたのですが、この頃は此處へ來ますので發車の時刻が何時であるか見ないで落付いて出て來る。それで二度とも丁度よい時間に停車場へ來てゐる。萬事斯う云ふ風にお導きがあれば有難いと思つてゐるのです。

谷口——さう云ふ風に停車場で丁度時間に間に合ふのも有難いのでありますが、一分間の違ひで汽車に乗り遅れても、それで有がたいと云ふことになれば一層落ちつくのであります。上海の誌友森本宏君でもあの三月一日の未明に上海増援軍の運送船に乗り込んで水先案内として暗夜疾風中の楊子江を遡り、靈覺によつて増援陣の上陸地點にピタリと船をつけて三月二日の停戦協定時刻までに支那軍を實力で租界外十五キロの所まで退却させるだけの偉功を立てることが出來たのは、森本君がそれまでに乗船する約束になつてゐた船に、僅かの時間の相違で乗り遅

れたからなんです。だから乗り遅れると云ふことも結構である。丁度發車時刻に間に合つても結構である、それはどちらでも結構であり、有難い。「生長の家」家族には悪いことは何事も起らないことになつてゐる。悪いと見えるやうなことでもそれは結構になるための準備であり地固めになつてゐる。どれも皆有りがたい事なんです。どれも皆有難いと云ふことが判ると心が自然に落付いて平和でゐられるやむになるのです。

中島——私も「生長の家」を読むやうになりましたからだんく腹が立たなくなつた一人です。先日岡山の上空を飛行してゐるとエンジンが變な音をたて始めた。妙だなと思ふと油を供給するパイプの栓が誰がしめたのか閉まつてゐる。その時は濠の上に墜落して機體は大破し人間は助かつたのですが、普通ならば私は平常から肝癪持ですから「誰がコックを閉めた」と云つて腹を立てるところでしたが、あまり腹も立てないで、あるべきものが現はれたのだと云ふやうな平氣な落つた氣持がしてゐて自分ながら不思議でした。これも「生長の家」のおカゲだと思つてゐます。

谷口——病氣は不幸だと思ふのが一般の風習になつてゐますが、病氣も非常に結構なものです。多くの人は病氣があるので、心が神の方へ向いて來て、神を知り、自分の生命の實相

を知り、始めて、人間として生れて来て有りがたいと云ふことが判る、中島さんでも病氣に導かれて神の道へ入つて來られた。今度酒井機が荒天の日に飛行する順番になつてゐたために遭難して行衛不明になつてゐる。中島さんでも、例の持病が出てゐなかつたら、酒井機の代りに、貴方があの天候の悪い日に飛ぶことになつてゐたかも知れない。すべて神に導かれてゐるときは眞に悪いことには出遇はないやうになつてゐるのです。汽車に乗り遅れたので、脱線の災害からのがれる人もあるし、病氣で寝てゐたので、飛行機の遭難に出會はさない人もあるのです。

中島——豫感と云ふものはあるものでせうか。

谷口——豫感と云ふものはあるものです。現在意識は災厄の起ることを知らなくとも、潜在意識は明かに豫知してゐる。豫知しながらでも其の不幸に引きつけられる運命のある人はチリ／＼その不幸に引きつけられて行くのです。

中島——今度遭難した大阪朝日の酒井飛行士は私の同期生であります、非常にサツパリした執着のない男なので、今頃はその魂が天上にゐながら地上で色々搜索してゐる吾々の努力を見ながら、そんなにまでして捜して呉れないでも今自分は天上にあつて救はれてゐると、その魂が呼びかけてゐるかとも思ふ位ですが、この執着のない男がこんど飛行に出かける時には友人

に「あとを頼むよ」と二度も云つて往つたと云ひます。何となく別れの豫感がしたのでせうね。また同乗の片桐機關士も奉天へ着いてから、殆ど全ての知人に手紙を出してゐるので、さう云ふこともこれまで此の人にないことなのでそれとなき豫感があつたのだと思はれます。

谷ロ——現在起りつゝある事件は過去の吾々の心で既に其ファイルが描がれてゐるので、豫感は潜在意識に當然ありながらもそのファイルにある通りの事柄を實現するためにその舞臺へ吾々は出かけて行くのです。この點で現在は既に決定した宿命と云へば云へますが、その宿命は吾々の過去の心が定めた宿命である。未來の宿命は吾々の現在の心がこれから決定するので、自由である。これが判ると、現在にあせらず、未來に希望をもつて實に愉快な生活が出来るのです。

上田——話が變りますが、御提唱の「生長の家經濟聯盟」には非常に共鳴させられました。現在の産業界を見てみますと、統制經濟、統制經濟と一點張りになつて行くより仕方がないと云ふ事によつて益々産業を合理化すると云ふことに行きますと、この上益々従業員を節約して無駄の勞力を省くと云ふことにならねばならない。さうすると今後益々失業者は殖えると云ふ傾向をたどるので、この失業者を如何にすれば匡救し得るかは御提唱の案よりほかにないと

思ひます。一つ大急ぎで此の提唱の宣傳を徹底させるやうに骨を折つて頂きたいものです。

谷ロ——私は貴方のやうな財界の有力者に賛成者を得たことを非常に心強く思ふのであります。吾々のやうに貧しい者が考へた案は兎もすれば、貧しい者のみを匡救する案になり易いものですが、貴方のやうな方から御賛同を頂くと云ふことは、あの經濟理論の正しさに大きな裏書を與へられたことになるので非常に嬉しく思ひます。

上田——ヘンリー・フォードなどが土曜日全休の一週間五日勤務、就業時間六時間などを實行してゐるのは、この生長の家經濟聯盟の行き方と外見は似てゐるやうでありますけれども、それは外見であつて、フォードの精神は資本家の儲けとなることを目指してあの方法をやつてゐるので、資本家の儲けにならないと見たら解雇でも減首でも平氣でやつてゐる。「生長の家經濟聯盟」の心はこれとは異つて日本の古代精神に還れと云ふことであると思ひます。日本の古代に於ては、豐作滿作で作物が出來過ぎるときには、現代のやうに自己の收益のみを追求するに急であつて自分だけ働きますと云ふやうなことはしない、隣保相寄つて働きを休み互ひに團樂して神樂舞ひとか何とか藝術の遊びをして、神の恵みを讚美して、その恵みを、共に俱に享け楽しむ。そして凶作とか飢饉とかの場合には近隣相寄つて、餘れるは足らざるを補ひ、仲よく

隣保相扶け相補つて行く。この古代日本の心を心として、足らざるを補ひ餘れるを與へる慾ばらない心が「生長の家經濟聯盟」の心をなしてゐる點に私は非常に共鳴するものであります。

原——私は「生長の家經濟聯盟」の記事を読みまして非常に参考になりました。私は小田村で齒科醫をしてゐるのでありますが、人は同業者が殖えれば自分の収入が減るやうに思ひ勝ちであります。現在七人の同業者がこの村にあるのですが、私一人開業してゐたときと同じだけの數はお客さまが來て下さるのであります。それであの經濟聯盟を讀まして頂いてから私のところへ來るお客さまでも仕事而立込んでゐるときには近隣の同業者を紹介して其處へお客さまを送るやうにしてゐます。此の餘つてゐる仕事を暇な隣人に喜んで譲ると云ふことが出来るやうになりましたので、非常に氣持がラクになつてきました。在來からも仕事があまり多い場合にはさう云ふ事も致してはゐましたが、唯忙がしいから己むを得ず仕事を同業者へ送るのであります。今度はすつかり氣持が違ふ、愛の心で自分の収益を譲ることが出来るのであります。この話を吾々の同業者の會(小田の齒科醫)と云ふのをモジつて「御樂し會」と申してゐます。が、此の「御樂し會」で友達に話しますと、「君は商賣がハヤるし、しつかりした地盤があるから、さう云ふことが出来るのだが、吾々のやうに地盤がないものには出来るだけ人の地盤に食

ひ入つて収益を増さうとするほかはない」など、友達は云ふのですが、必ずしもさうではないと思ふのです。

谷口——地盤と云ふのは「生命の實相」と云ふ地盤、「神」と云ふ地盤のことです。此の地盤の上に立つてゐるものは、どんな時が來ても狼狽へると云ふことはないのです。早速經濟聯盟の主旨を實生活の上に實行して下さる人が出來たので嬉しく思ひます。今後斯う云ふ實行をして下さる方が出來ますと世の中に心的に内面の世界から經濟革命が成就することになるのです。

原——それ程のしつかりした地盤に立つてゐる譯でもないのですが、私は從來からお客様本位で、こちらからは入齒をなさいと云ふことも決して勧めないと云ふことにしてゐます。それでもお客様の方からの御註文は可成りあるのです。此迄、齒を抜くと血が出るのが中々とまらない人がありました。「生長の家」を讀まして頂いてから、「血がとまらないのは恐怖心のためだ」と云ふことが判りましたから、「血が出るほど血液が滲まつて好いのだから出るだけ出しなさい。必要だけ血が出たら血は止まるから」と云つて、放つて置くか、あまり血の出るのでも脱脂綿を嚙ませて置く位の簡単な處置だけで直ぐ血が止るやうになりました。

谷口——さうでせう。犬などは恐怖心が少いから片足を汽車でひかれたりして大動脈を切斷され

ても血は自然にとまつて治つて行きます。大自然はそれだけの防禦機能を人間に與へてゐるのです。に、その機能を充分作用させないのは人間の恐怖心によるのです。

原——無論大動脈でも自然の止血の機能はあるべきが本當だと思ひます。

山口——私は自分の身體も健康でないし、家内が常に病弱なものですから、色々の健康法や宗教方面を漁りまして漸く「生長の家」へたどりついた者ですから色々の事を知つてゐますが「生命の實相」を讀んで見ますと、實に驚いたことには、凡ゆる宗教とか經典とかの最も眞髓になるところが引用してある。これだけ眞髓になるところばかりを引きぬいて整然たる體系を與へ得る人なら餘程勉強した人に違ひないと思つてゐましたが、更にこれが長時間先生の會社勤務の片手間に出來上つたものだと思つて驚いたのであります。屹度餘程勉強をなすつたのでございませうね。

谷口——ところが私は本當は無學で何も知らないものなのです。色々の宗教で苦勞なすつた方が「生長の家」なり「生命の實相」を讀んで、此れを讀んではじめて、「法華經」の眞義がわかつた。禪宗の悟りがわかつた。キリストの聖書の正解はこれであるなどと云はれるので、本當にさうか知らと自分で不思議がる位ですが、一方、さうでなければならぬ、さうあるべき管であ

る、眞理と云ふものは天地を貫いて一貫したものであるからとも思ふのであります。どうしてさう云ふやうに諸經の眞髓になる要點が引用出來たかと云ひますと、これは私の力ではない。私の内に宿る神の内面からの導きがあるのであります。ふと佛典をひらいて見るとその開いた箇所が、今丁度書きたい眞理に引用するのに丁度都合のよいその經典の眞髓である様になつてゐる。だから人は私がどれほど博學な人かと思ふかも知れませぬが、さう云ふやうに聖書でも佛典でもすべて披き放題の飛び読みであつて少しも一貫して學究的に讀んだことはない、讀む様な暇はないのであります。併し普通の人が學究的に讀んだところが言葉多く議論益々多くして中々眞理は悟れるものではない。だから隨分博學の坊さんでもお經はお經、生活は生活で、それは一緒にならぬと云つて、經典の眞理を生活に有つて來る者は少いのであります。

永田——「生長の家」では無藥で治ると云ふことを主張されるのですが、マラリヤにキニーネ、梅毒にサルバルサン、チフテリアにチフテリア血清と云ふやうな特效藥は實際に藥効がある、此の藥効も否定なさるのですか。この點が明瞭になれば私には「生長の家」が解ると思ふのです。谷口——要するに、藥は信念に従つて効くのですから人類一般が「これは効く」と信じてゐる藥は、全人類の信念がその藥をバックしてゐますから、さう云ふ藥を使用することは全人類的信

念ねんを利用りようすることになるから、さう云いふ薬くすりは用もちひると効果かうかがあります。薬くすりを用もちひて治なほるとすれば物質ぶつしつが生命せいめいを生いかしたと考かんがへるかも知しれませんが、全ぜん人類じんるいの合あ計けいした信しん念ねんが生命せいめいを生いかすのであつて、物質ぶつしつそのものが生命せいめいを生いかすのではありませぬ。

永なが田た——信しんじて飲のんでも効きく薬くすりもあるし、信しんぜずに飲のまされても効きく薬くすりもありますが、それはどうしてですか。

谷たに口くち——本ほん人にんの現げん在ざい意い識しきと云いふ小ちひさい範はん圍ゐの心こゝろだけが信しんじてゐても、大たい多た數すうの人類じんるいの潜せん在ざい意い識しきがその反はん對たいであれば何なんにもなりません。だから本ほん人にんは毒どく薬やくだと知しらないで飲のんでも、毒どく薬やくを飲のめば中ちゆう毒どくすることがあるのは本ほん人にんの現げん在ざい意い識しきよりも大たい多た數すうの人類じんるいの潜せん在ざい意い識しきの方が強つよいからです。どんな薬くすりでも醫い者しゃの信しん念ねん及び患者くわいじやの心こゝろの素そ質しつでその薬やく効かうを異ことにすることは先せん刻こくお話はなし致いたしました通りとほりです。これに更さらに全ぜん人類じんるいの信しん念ねん又は大たい多た數すう者しゃの信しん念ねんと云いふ環くわん境けいが加くははつて薬やく効かう否いなその薬くすりの背せい後ごにある信しん念ねんの効かう果くわいの程ていどが定きまつて來くるのです。大たい抵たいどんな薬くすりでも最さい初しよから人じん間けんに用もちひるのは少すくないので、色いろ々く動どう物ぶつ試し験けんをやつて見みて偶ぐう然ぜん効かう果くわいのあがつた薬くすりでも餘よ程ほど自じ信しんが出來でないと人じん間けんに實じつ験けんして見みない。人じん間けんに實じつ験けんして見みたときには可か成なり信しん念ねんがあるから、その信しん念ねんがきいて病びやう氣きが治なほる。治なほると更さらに信しん念ねんを増まして次つぎの患くわん者じやにそれを應おう用ようすると又またその信しん念ねんできく。

かうして運の好い薬は、本來は詰らない薬でもトン／＼拍子で好成绩をあげて立派な治験例をあげて行く。その治験例を見て信念を喚起された醫者がまたその薬を用ひる。すると、既に信念を以つて用ひるのであるからよく効く。かうして全人類の信念を博した薬が特効薬の王座につくのであります。これはツマラナイ人間でも運の好い人は全人類から尊敬されて好い地位につくのと同じであります。中には最初は立派な治験例を擧げてゐるけれども、中途で不運にも反對觀念の強い患者に出遇つて効力をあげ得ないことが幾たびも重なると其の薬はきかない事になつてその薬は特効薬の王座につくことが出来ないで葬り去られて了ふのであります。此れは天才のある人でも轢軛不遇で世の中から葬り去られる人があるやうなものです。かう云ふやうにして薬は効力を得、又は効力を失ひ、好評を博し又は信用を失つて了ふのでありますから、特効薬以外の薬を用ひる場合には宣傳力の強い常に新聞一頁大の廣告をしてゐるやうな薬を用ひる場合の方が効力が強いのであります。これは人類の信念——少くともその一地方の人の信念を利用する事になるからです。併し私に云はせると、どんな特効薬も用ひる必要はない。本當の特効薬は人間自身のうちにある生命力だからです。外的薬は一時きゝまして、これに頼る習慣をつけますと、人間生命が物質に左右せられるものだと迷信を増長さし、自

分の生命力が充分發揮出來ないのは丁度いつも杖をついて歩く習慣をつけると、その人は一人歩きの出來ない人間になるやうなものです。

B——神は萬物を造り給うたのですから、薬もまた神が造り給うたものではありませんか。

谷口——神は病氣を造り給はないから、病氣に對應する藥物も造り給ふ筈はない。藥物は此の世にあるにしても病氣を治すために利用すべく造つてはない。利用のしどころが間違つてゐるのです。だから藥愈々旺んにして病氣愈々増加するのです。病氣も「迷ひ」、藥に對する信頼も迷ひですから、迷ひによつて迷ひの氣安めをすることによつて一時病氣がなくなるにしても、根本が癒やされてゐないから病氣が幾度でも姿をかへ數をかへて出て來るのです。

歌川——私は河野さんから「生命の實相」を貸して讀まして頂いてから、今迄始終子供が弱くて毎月醫者に支拂ひが可成りあつたのが少しも支拂ひがなくなつて非常に感謝してゐます。今迄は始終弱い子供だ弱い子供だと云ふ風に子供を育てゝゐましたから子供の方でもさう思つて少し風でも吹くと、風邪を引きやしないかなど、云つて親の顔色を覗ふのですが、そんな時には、こゝだと思つて「貴方のやうに強い子供はないぢやありませんか。どうして風邪を引いたりするもんですか」とこちらから積極的せききよくてきに子供の強健きやうけんなことを注つぎこむやうにし始めましてから、風

邪を引き勝の子供でありましたのが近來スツカリ風邪を引かなくなりました。子供たちはさう云ふ風にして健康にすることが出来ましたが、私自身はまだ本當に健康になり切れないのです。先日も××炎で激しく痛むものですか、「生命の實相」の一部分を一生懸命に讀んで、肉體は物質だから痛む筈がないと云ふ念を強く心に思ふやうにしましたが、痛みが依然として止まないので、諸方の洋裁の講習に出ますのには差支へるものですから、到頭醫者にかゝつて治しました。

谷ロ——貴女はその痛さを病氣だと肯定して、その痛さからののがれようとしてゐられるから痛みが去らないのです。貴女はその痛いことと云ふことを病氣だと思ひますか。一局部が痛むと云ふことは全身の血液をその一局部へ集中する動員命令が下つてゐると云ふことです。胃痙攣などで激痛があつたり、手足に激しい痛みを感じる時には、往々腦貧血を起すことがあるものですが、これは腦髓の血液にも動員命令が下つて故障のある一局部へ血液軍を集中する結果一時的腦貧血を起すのです。痛みは激しいほどよく、熱は高い方が好い。痛みも熱も病氣ではない。却つて病氣を治す生命力が強く働いてゐる結果です。物質なる肉體そのものは痛んでゐるのではない。肉體は物質であるから本來痛覺はないと云ふのはさう云ふ意味です。肉體が痛んでゐるのでは

ない、心が血液に動員令を下してゐるのです。痛むと云ふことは、吾々に對する何か害物の襲
 來に防禦戰が展開してゐる證據で、その防禦軍の指揮官が吾々の心なのです。痛いときに
 これは大變、大病だと思つて心が萎縮すると、敵に恐怖して全防禦軍の指揮官が退却命令を下
 したのと同じである。溶菌細胞、抗毒細胞、自療修復細胞などの兵卒どもが萎縮して了つて、
 敵の蹂躪にまかせて了ふことになる。そのために病氣の経過が永びき、却つて痛みの期間が永
 びいて治らない。これに反してこの痛みは結構なことである。痛みは病氣になつたのではない、
 病氣を治してゐるのである。盛んに防禦戰を行つて敵を早く撃破して呉れと思つてゐると、全
 身の細胞の總帥たる吾々の心が少しも恐怖しないので、全防禦細胞軍の士氣が揮ひたち、敵が
 速かに剿滅されるから、血液の召集命令たる痛みも速かに解除されて、痛みが間もなく治るの
 です。痛みを恐れて逃げようとする、痛みは却つて永びく。痛みを喜び迎へるほどになると
 痛みは却つて早く去る。「恐るゝものは皆來る」と云ふのが心の法則なんです。貴女の××炎の
 痛みが永びいたのは痛みを逃げようと思つたからです。併しその痛みの頂上が來たから醫者
 にかゝつて治つたと云はれるが醫者にかゝらなくとも痛みの頂上は防禦戰の頂上だから、
 その次には放置しても治るのです。此の内體の痛みと云ふことは、一つの自分の身に近い實例

であります、人生の痛み——人生では痛みと云はず、悩み苦しみと云ふのですが、この人生の悩みでも苦しいと思つて逃げまどへば、一層苦しくなる。此の苦しいのは治す働きである。云ひ換へれば、自分の神の子たる眞性を鍛へ顯す働きであると思つて敢然と受けることにすると、苦しみがそんなに苦しみにでなく難なく人生の苦しみをくぐり抜けることになるのです。

給橋——患者はどうも自分の病苦を訴へ過ぎ、言葉の力で病氣を誇張するために病苦を實際それがある筈よりも誇大に感ずるのです。だから私は「生長の家」の家族にならして頂いて以來、患者に接するやり方を變へました。常に病苦を訴へる患者のところへ往診した場合には、「どうぢやな、今日の小言は？」と、此方から云ふやうにすると、却つて患者の方から苦痛を訴へなくなりました。どうも其の方が治る成績が好いやうです。

谷口——病人は何や彼やと、發熱とか、疼痛とか、喀痰とか、血痰とかをまるで惡魔の使ひであるかのやうに小言を云ひ勝でありますけれども、本當はこの發熱とか疼痛とか喀痰とか云ふものは吾々を病氣から救ひ出す爲の天の使ひなんです。先達て東京落合の國際聖母病院に腎臓炎で五ヶ月ばかり入院してゐて治らない人があつた。其處へ出入りする方で坪内さんと云つて非常に眞理を悟つた老人がある。深切なお方で、この腎臓炎のお方に「生長の家」を一冊おあげ

になつた。お顧みになると非常に感動せられて、もう數個月入院してゐても治らないのであるから此の腎臓炎のお方も醫者を見限つて、眞理の力、神の力、生命の力にひたすらお頼りになる氣持になられ、聖典「生命の實相」をお求めになつて精讀せられる一方生長の家本部に遠隔治療を求めておいでになつた。水分を排泄しない種類の腎臓炎で身體が角力取りのやうに水腫れになつてゐる。病院では今迄肉類は悪いとか水分をとつては悪いとか云つて嚴重な食養法攻めになつてゐられたが、退院すると今迄の嚴重な食養法を全廢して好きなものを何でも飲食すると云ふことに決心せられた。そこに大きな神の力への信頼があらはれてゐるのです。恰度眞夏の暑いさかりでしたので口渴を覺えて水を飲みたくて仕方がないものだから、もう食養法の制限はない、飲みたいものは飲めと決心せられて、水を無制限にのまれた。併し尿の排泄がない。水は遣入つたが出場所がないので、身體中が益々腫れて身體が重くて自分の力では少しも動かすことが出来ない、こちらから遠隔治療をする時間には仰向けに寝たまゝ合掌して頂くことにしてゐたのですが、あまりに身體がふくれたので、手のひらが胸の前で兩方から届かないので合掌出来ませんと云つて奥さんから手紙を寄越された程になつてゐた。併し此のかたの神に對する信頼は益々加はつて來た。それから數日すると、腎臓部が錐で揉むやうにキリ／＼痛

んで来た。それと共に四十度以上の熱が出て来た。心臓も苦しくなる、息も苦しくなる。「今は死にさうで息も出来ぬやうです」と、その時その方の奥さんから知らせて来てゐる。こちらからも祈りましたが東京準支部の掘静子さんに見舞ひに往つて頂きました。この四十度の發熱、腎臓部の激痛——しかも解熱劑も腎臓の藥も用ひないで此の方はその發熱と激痛とに喜んで耐へられたのであります。ところがこの發熱と激痛とを峠として次第に尿量が殖えて来た。最初の頃の通信で一日五千二百瓦の排尿がありはじめたとのことでありましたが、次第にそれが殖えて一日に七千五百瓦も排尿があつたと云ふやうな通信が来ました。七千五百瓦と云ひますと、バケツに一パイも尿が出るんだなと思つて不思議な位でしたが神の力と云ふものは偉大なもので、今迄梅ヶ谷よりも大きく膨れてゐたその人の身體が一週間ほどのうちに「痩せ細つた私である」と云ふ手紙が来ました。さう云ふ風にして此の方の病氣は治つて了つたのであります。が、考へて見ますに、腎臓病に排尿が少くなると云ふことは、排尿が少いと云ふそのことが病氣のやうに普通考へますが、これは病氣ではなく、病氣を治す働きなのであります。腎臓病と云ふものは腎臓が疲勞してゐる、だから腎臓の疲勞を休息させるために自然の働きとして腎臓をあまり使はないで休ませてゐる。腎臓を休ませてゐるために尿量が少いのであります。

ら、それを不自然に尿量を増加するやうな薬剤を若し用ひますならば自然が起してゐる働きを横合から往つてかき亂すことになるので、自然療能がかき亂されて、腎臓の疲労を回復する機会がないので、病氣が長びくことになるのであります。ところが、此の尿量の少い期間、言ひ換へますと、腎臓を休息させてゐる期間が経過しますと、腎臓部がキリ／＼錐で揉むやうな期間が初つた。腎臓の休息期間が済んだために大自然の働きは愈々腎臓の修繕工事はじめたのであります。此の痛むと云ふのはさきに申しましたやうに血液を微發してその痛む箇所に集めて來る召集令でありまして、この爲め血球とか血漿とか云ふ色々の修繕工がその召集令に應じて腎臓部へ集つて來たのであります。恰度それは故障の起つた船がドツク入りをするやうなもので、船を修繕するには、水の中を航行させてゐながらでは充分根本的修繕が出来ないから一たん水の中から引き上げてドツクへ入れなければならぬ。此の腎臓のドツク入りが腎臓に於ける水分取扱ひ量の減少、即ち尿量の減少となつたのであります。愈々ドツクへ入れたらば、修繕工事はじまる。さうすると錐で揉む役もあれば鋏を叩く役もある、火造り作業も必要である、摩擦熱も起る。こんな譯でその方は腎臓の根本的修繕工事が始まつたのであります。愈々修繕工事が終ると進水しても好いと云ふ譯で、腎臓は多量の水分を取扱ふことにな

り、今迄腎臓の休息及び修繕期間中溜めてゐた水分を流通することになつたのですから尿量
 が一時に殖えたのであります。すると尿量の少いと云ふことも、疼痛發熱したと云ふことも
 決して病氣ではない。病氣はそれより以前にあつて、その病氣を治すためにドツクへ入れたり
 修繕したりする働きが却つて尿量減少發熱疼痛と云ふやうな現象となつて來るので、世間の
 病人には、病氣の治る自然療能を却つて病氣が増悪したと思つて恐怖し、その心の影響で病氣
 を實際に増悪する結果になつて、われと吾が心で苦しんでゐる人が多いやうです。

中島——私なども以前には病氣の疼痛が激しくなつて來ますと、病氣の疼痛と一緒になつて腕き
 苦しんで夜も眠れないで衰弱したものでしたが、近頃は痛みはやがて過ぎ行くものだと云ふこ
 とを判らせて頂きましたから、疼痛は疼痛で痛ましめながら、安心して眠つて了ふ。眠つてゐ
 ると痛みはない。だからたとひ週期的に病氣の發作が起りましたが、少しも瘦せも衰弱もしな
 くなりしました。これはたしかに「生長の家」の信仰に這入つた一徳です。

谷口——今、中島さんの被仰つた痛みはやがて過ぎ行くものと云ふ悟りが肝腎なのです。これが
 悟られれば痛みと一緒に苦しむ必要はない。數日前、〇〇から來られた蠶糸會社の社長さんの
 お話によりますと、その方が一年志願兵として軍隊に勤務してゐられた頃、或る日強行軍と云

ひますか、一日中、十數時間を少しの休息もせず、六、七貫もある背囊を背負つて行軍する演習をさせられたことがあつた。その朝、その方は「今日は一つ、自分の精神と云ふものを一段高所にあげて、その高所から肉體を見てみよう」と云ふお氣持になられた。肉體と云ふものが苦しんでもその肉體と云ふものと一緒になつて苦しまないで、自分と云ふものが別にあつてその肉體がどんなに耐へるか見てみよう」と云ふ心持ですなあ。随分長時間の行軍だつたので、隊中で最も健脚家だと認められてゐた程の剛の者でさへも、目的地の宿舎に着いたときには脚がフラフラになつて了つて、一度坐り込んだら、再び起き上る勇氣が出ない。ところが、その方だけは「自分」と云ふものが肉體よりも一段高所にあがつて肉體を見下してゐて肉體と一緒に苦しまなかつた。そのためにその方の「自分」と云ふものがそれ程疲労してゐない。流石に肉體の足は痛い、しかしその足が痛い」と云ふこと、「自分が疲れた」と云ふこと、は分離してゐた。「肉體の奴め、少し痛がつてゐるな」と離れた氣持で觀てゐる。肉體の痛みの中へ「自分」と云ふものを持つて行つて、「自分」も一緒になつて苦しむと云ふことがないから、痛いは痛いながら、その痛みから超越してゐる。こんな譯で「みんな弱つてゐるな。俺はちつとも疲れないよ。錢湯まで駈歩をして往つて見せよう」と云つてその方だけは錢湯へ勢よく駈歩で行くことが出来

たと云つてゐられました。この痛んでゐる儘で苦しまない生き方と云ふのが「生長の家」の生き方の全體を貫いてゐます生活態度で、痛みが治つて初めて苦しまないと云ふのではない。痛んでゐる儘で苦しまない。その結果、痛みそのものも速かに過ぎ去つて了ふのです。「智慧の言葉」には「縛られてゐて自由自在」と書いてある。人間は「肉體」ではない、人間は生命であつて「肉體」は生命の痕跡である。痕跡を縛つても人間を縛ることが出来ない。痕跡は生命を支配出来ない。だから「肉體」を縛つても人間は依然として自由自在である。肉體の右の頬を叩かれても、人間そのものはちつとも叩かれてはゐない。人間と云ふものは實に不思議な存在である。だからキリストのやうに右の頬を叩かれても更に左の頬を差しのべ得る餘裕がある。終日の行軍に足が痛んでゐても、痛みは痛みとして更に錢湯まで徒歩出来る餘裕がある。實に人間は縛られてゐても縛られてゐない、叩かれてゐても叩かれてはゐない。痛んでゐても痛まない不可思議な存在である。これが判るとすべての束縛と苦痛とを乗り越えて了ふことが出来る。そして結局はその束縛そのもの、苦痛そのものも形の世界に於ても消えて了ふ。束縛とか苦痛とか一切の存在は結局は實在ではないから、移り變り過ぎ行き、やがて消滅すべき運命をもつてをり、人間は本來神の子であるから、結局はその圓滿完全さが發揮されるほかに道はないのです。

かうして凡ゆる人間は救はれることになつてゐるのです。

山口——たしかに凡ゆる人間は救はれることになつてゐるのですか。

谷口——たしかに凡ゆる人間は救はれるのであり、凡ゆる苦しみは過ぎ行き消滅するほかはない。

實在は顯はれるほかはない。そして假相は消え去るほかはないのです。

山口——「救つて要らぬ」と頑張る人でも救はれるのですか。

谷口——「救つて要らぬ」と頑張る人でも救はれるほかはない。たゞ機縁が熟してをらぬので暇

がかゝるだけのことです。

山口——「縁なき衆生は度し難し」と申す言葉がありますが……

谷口——縁のない衆生はひとりもない。たゞ機縁が熟してゐるかゝるかです。釋迦に弓を引い

た提婆達多も成佛する。キリストを賣つたユダも成佛する。地獄も餓鬼も修羅道も成佛する。

地獄も餓鬼も修羅道も一切の不完全なものは實在ではないから、やがて消え去るべき運命をも

つてゐるのです。そのほかにありやうはないのです。罪でも病氣でも悪癖でも結局は消えて了

つてその人は結局救はれるほかはないのですけれども、相手が反抗してゐるのを此方から強制

的に救ふことは出来ない。それは人間は本來自由を與へられてゐるから、強制することが出来

ないやうに造られてゐるからです。強制して救つて好い位なら、神さまは吾々の努力を俟たないでも、その無限力をもつて強制的に罪を消し迷ひを消し、此の世には光明世界が實現してゐなければならぬ筈なのです。

河村——「生長の家」を讀まないために救はれない人がある。その人をどうぞして救つてあげたい。讀め、是非とも讀めと、その人を強制することは可くないですか。

谷口——讀めと強制しても心が向かなければ讀まないでせう。讀めと強制して心が向いて讀むと云ふことになる、それは相手の心を強制したのではない。こちらの勧誘に向ふの心が賛成したのだと云ふことになるでせう。さうなると「讀め」と形では強制したやうでも、心のうでは強制したのではなく、事實上は賛成を求めたのですから甚だ結構です。

河村——「讀め」と強制しても相手の心が向かないので讀まない。それでも相手を救ひたうて仕方がない。何とか眞理を知らしてやりたいと思つて、大聲で耳元で讀んで強制的に眞理を知らせる。かう云ふ強制は可いませんか。

谷口——さう云ふのは強制と云ふべきではありません。相手が聞きたいと思つてゐないときに聲を出す。物音を立てる。さう云ふことが悪いと云ふことになる、吾々は下駄で歩くことも歌

を歌ふことも出来ないと言ふことになり。本當に悪い強制と云ふものは、さう云ふ形の上の事を云ふのではありません。吾々は形を強制しても心を強制することが出来ないのです。心は無限の自由を與へられてゐるから、悟りたくないものを無理に悟るやうに強制すると云ふ事は出来ないのです。だから心を悟らせる上では、形の上で「ソレ悟れ」と云はんばかりに色々の苦しみが来る。欲しないのに苦しみが来る、謂はゞ強制的に來るのです。病氣なども其の一つです。病氣は念の影であるから、病氣が起つたのは成る程自分の心持にそれぞれの病氣にふさはしい心持があつたからだと云ふことに氣付いて、それを治せば治るのです。關東大震災前に私が淺野さんから頼まれて翻譯した本に英國の心靈大學々長であつたマツケンジーと云ふ人の「幽明交通」と云ふ本があります。その翻譯の原稿は不幸にして大震災で焼けて了ひましたが、その梗概の一部を私の著述「信仰革命」中に引用しておいたことがあります。その中にマツケンジー氏が心靈研究による、靈界の状態が書いてありましたが、その靈界の状態を観ますに人間を悟らせるのに強制力を用ひてはない。迷ひが自然に行き詰ることによつて、次の一層高い心境に到達し得るやうになつてゐるのです。例へば「類は類を呼ぶ」心の法則によつておめかし好きの婦人ばかりが集まつてゐる靈界の一區劃がある。その大ホールには大

きな化粧鏡が幾十となく列んでゐて其處に棲む靈界人は數十分間毎に新流行の衣服と着換へるべく間斷なくその大ホールに入りかはり立ち替り這入つて來る。そして最新流行の美しい衣裳をつけては大通りへ出掛けたりオペラの見物に出掛けたりする。すべて其處に棲んでゐる靈界人は一つの衝動に支配されてゐるのです。それは如何に自分の衣裳と化粧がよく似合ふかを他に見て貰ひたいと云ふことなんです。道で婦人に出遇ふ毎に「どうです私の衣裳はよく似合ふでせう」と兩方から同じ意味の言葉を呼びかける。どちらの婦人も相手の衣裳などを賞めるほどの愛他的な心境にはなつてゐないで、自分ばかりが賞められたいばかりなんです。だから賞められたいと思ふものばかりで賞めてやらうと云ふ者は一人もゐないのですから、賞められたいと思へば思ふほど淋しいばかりである。つひに其の靈界にゐる人々は物質的な装ひも結局心の愛と云ふものがなければ何の幸福をも得られないとの眞理を悟つて、その世界から遠離したいと云ふ考へが起る。すると、一層高い靈界から導きの靈魂がおりて來てその悟り始めた靈魂を一層高い靈界へ移行せしめると云ふことが書いてありましたが、此のやうに、吾々の靈魂の進歩と云ふことは、迷ひと云ふものが結局行き詰まり自壞して、それによつて一段深く悟りを開くと云ふやうになつてゐるやうです。此の人間の靈魂の進歩と云ふことは仲々一足跳びに

は行かないのでありまして、一度カラリと晴れたやうな心境に達したと思つてゐると、又何となく暗い不快な信仰を失つたやうな心的状態になることがあります。こんな時に自分はまだ悟つてゐないのだ、駄目なものであると思ふ事がありますが、「生長の家」ではさう云ふ風に自分は駄目なものだとは思はないのであります。「駄目なやうな自分は無い」と観するのであります。「駄目な自分は、あれは本當の自分ではない。業即ち過去の集積が自働しておのづから展開した相である。その展開して行くのはおのづから過去の集積の巻きもどけ消えて行く相である」と観じて心を亂さない。先刻、痛んでゐながら苦しめない自分、縛られてゐながら縛られてゐない自分、叩かれてゐながら叩かれてゐない自分と云ふものが「本當の自分」である、それを知ることが悟りであると云ふ話を致しましたが、此處にもそれが通用するのでありまして、業の流轉に色々と苦しめられ心も亂れ悩むことがあるけれども、心が亂れ悩みながらも亂れ悩まない「本當の自分」と云ふものがあることが判ると、心は亂れ悩みながらも、その亂れ悩みから「自分」と云ふものが遊離された状態になつてゐる。恰度、精神を一層高い所へあげて、今度の行軍には肉體はどれだけ苦しむか見てゐてやらうと云ふやうな、苦痛と自分とが遊離したやうな状態になる、するとその苦痛が却つて少くて済んだと同じやうに、吾々の心の悩みでも、その

憫みの奥底に憫みのない「本當の自分」と云ふものが存在するのだと云ふことが判りますと、
 新たに憫みの業因を造らずその憫みと云ふものが軽く過ぎ去つて了ふことになるのでありま
 す。これが即ち吾々自身の神性を悟る功德でありまして、吾々自身の神性を悟りまして迷の
 根の深淺により必ずしも直ぐ一切の病氣が現實世界になくなる譯ではなく、一切の心の憫みや
 生活上の憫みがスツカリ影を消す譯でもない。病氣、苦痛、憫みの早く無くなるか無くなら
 ぬかはその病氣なり苦痛なり憫みなりの業因がどれだけ深いものであるかによつて定まるので
 す。いつも云ふことですが地上に光線が達するのに數年もかゝる程の遠距離にある星は、その
 星は實際消えてゐても吾々の眼にその光を見て、その星が實際存在するかのやうに見える。そ
 れと同じやうに根の深い業因から發した病氣、苦痛、憫みと云ふやうなもの、その業因が實
 際消えてゐてもやはり病氣、苦痛、憫みなどをあらはしてゐる。しかし、實際消えてゐる星は、
 その星の光が見えてゐても、實際其星は存在しないのであると悟るのが、本當の智慧であるや
 うに病氣や苦痛や、憫みなどがあらはれてゐても、一旦自分が神の子であると云ふ神性を悟つ
 た以上は、病氣も苦痛も憫みも、もう存在しないものであると悟るのが本當の智慧なのです。
 さうすると、憫みの中にあつて憫みならず苦しみの中にあつて苦しまず、苦しみと一緒になつて自

分もキリ／＼舞ひするやうなことが無くなる。丁度業と云ふものは、過去に池の中へ人間が跳び込んだやうなものである。その跳び込んだと云ふ過去の行爲によつて波紋が出来て周囲にひろがつてゐる。その波紋の高いところが、病氣とか苦痛とかの表面にあらはれたところである。波紋と云ふものが擴がるのは必ず高い處と低い處とがあつて、上部へ出たところの次には低い處と云ふものが出来る。病氣とか心の悩みでも表面へそれが出たかと思ふと又ひつ込む。また時々出ると云ふ風になつてゐる。それは業と云ふものは一つの波動でありますから波形に展開して行くのであります。一つの波紋を起したならばその次に出来る波動は必ずもつと低い波紋である。その次に出来る波紋は一層低い波紋である、かう云ふやうに段々低い波紋が周圍にひろがつて、つひには感じられない程の波紋になつて消えて了ふのであります。波紋は斯う云ふやうに起るたび毎に小さくなつて消えて行くのが極つた運命である。それなのに波紋の眞ん中にある人間はこれは大變だと思つて眺くことになる。又新たな波紋の業因が出来来る。そして人間の苦惱の波紋は永遠に消えて了はないと云ふことになつて了ふのであります。此の業の波紋と云ふものは悟れば直ぐ消えるだらうと信じてゐますと、又苦痛や悩みがやつて來ますと、自分はまだ悟つてゐないと思つて悩み眺くことになりまして新たな波紋の業因を造ることに

なつて來ますから、惱みの波紋と云ふものは、必ず消えつゝあるものであつて、必ずしも一度に速かに消えるとは決つてゐないと云ふことを知ることが肝要であります。この心境に於きましては病氣も恐れなくなる。痛みも苦しみも吾々の心を亂すことが無くなる。痛みは痛みまゝ、苦しいは苦しいまゝで其の儘に救はれてゐる自分があることが判るのです。

松原——(襲ひ來る蚊を叩きながら) 痛い痛い、苦しいは苦しい儘でそれは迷ひの自壊作用であると云つても、抛つて置けないことがありましてね。私はまだ岩手支部の佐藤勝身さんのやうに蚊に調和してゐないで蚊に食はれるのであります。此の蚊に喰はれると云ふことでも蚊に食はれて痒ゆいと云ふことも自分に何か罪があつてその罪が消えるために苦しみを受けてゐるのであるから、それを逃れようとしなくて甘んじてその苦しみを受けようと云ふ氣になつて放つて置いて、蚊に血を吸はせればそれで好いのでありませうが、それもなかく出來かねるのであります。矢張り蚊がとまれば叩きたくなります。

谷口夫人——良寛和尚は澤山の虱を相撲とらせて遊んだのも、また自分の肌衣の中へしまひ込んだと云ひますが。

谷口——良寛和尚のやうに出來る人はしたらよろしいが、出來ない人はそれでまた調和してゐ

る。恐らく良寛和尚は、佐藤勝身さんが虱や蚤と調和して螫されることがなかつたと同じやうに、虱と調和してゐて、虱は良寛を害せず、良寛は虱を害せずと云ふやうになつてゐたのでありませうね。この虱や蚤に螫されると云ふことも、必ずしも螫されるから調和してゐないとは云へないのであります。無論「實相の世界」に於ては吾々は血液や肉體ではないから虱や蚤に螫されると云ふこともありませんが、現象世界に於ては螫されると云ふことそれ自體が其の人にとつては調和してをり救はれることにもなつてゐるのです。救ひは眞近にあつて、凡ゆる苦しみは「迷ひ」の自壞作用なのです。丁度、吾々の肉體に疼痛や發熱が病氣の人にとつては病氣の治る救ひの一過程になつてゐるやうなものです。最近蚤の身體の中に腸チブスの豫防液があつて、それを抽出して身體に注射すれば或る期間その人は腸チブスに對して免疫性になると云ふことを發見した醫學者があつたと云ふことが新聞に出てゐましたが、吾々は蚤にさゝれ蚊にさゝれて或る液體を蚤や蚊から注射されると云ふことも、一つの吾々自身を救ふ働きとして攝理の手で運つて來てゐるのだとも考へられないこともないのです。私は此の頃此の世の中はすべて調和してゐると考へるやうになつてゐます。發熱もよい、疼痛もよい、蚊に螫されるのもよい。盲人はその眼が盲目なことがその人の本當の救ひになつてゐる。今は關西學

院の教授をしてゐる岩橋武夫氏は盲目になつた。ゆゑに心の眼が開いた。さうかと云つて吾々は故意に盲目になる必要はない。盲目になることによつて救はれる人は大自然が彼を盲目にしてくれる。盲人は盲人で救はれてをり眼あきは眼あきで救はれてゐる。蚊にさされるのも好いが、さうかと云つて吾々は故意に竹藪の中へ裸で這入つて蚊群に全身の血を吸はせる必要もない。蚊を拂ふ働きも蚊を拂ふ働きとしてそれ自身で調和したものである。蚊を拂ふ働きがあり、蚊帳を吊る働きがあるので無闇に全身の血液を吸ひとられないで吾々は生活が安全に出来るのであると同時に、時々その防禦線をくゞつて吾々の血を吸つてくれる蚊があるので、各人は各人にとつて丁度適當な分量だけ蚊に注射されてゐることになつてゐる。強ひて何をせねばならぬと云ふことはないのであつて、何を食ひ何を飲まんと思ひ煩ふことなかれ、何を注射し、何を灌腸しようと思ひ煩ふことなかれです。宇宙全體が一つの調和した全體として本能的に動いてゐる。螫される必要のない人は螫されないのでせうし、螫される必要のある人は螫されるでせうし、今螫されないと云はれる佐藤さんでも今後又螫されるのが好都合になつて來れば、螫されなさるでありませう。何が起きて來ても、斯う云ふことだけは云へる——各人にとつて救ひとならないことは一つも起ない、躓く人は躓くことによつて悟り、苦しむ人は苦しむことによ

つて救はれ、憫んでゐる人はその憫んでゐることが光明を拜する一過程になつてゐるのです。皆な神の子であつて救はれないものはない。あらゆる苦しみも結局その人が神の子である實相を悟るために必要な與材であります。それには廻り道と近か道とがある。近か道とは眞理を悟ること、廻り道とは迷ふことであつて、近道を行くほどその苦しみが少なくて済むので、「生長の家」を讀んで病氣が治つたり、人生が樂になるのは、その人が神の子である實相を悟る近道を行くことになるからであります。

兒島——話が全然別になります。現代經濟生活の苦難が地球全土を包み、失業者が郡を成して簇生し、今日ほどその根本の解決策としての産兒調節問題が眞面目に考へられてゐる時代はなからうと思ひます。賀川さんのやうにベースコントロールに賛成してゐる宗教家もありますが大抵の宗教家は子供の生れると云ふ事は自分の意志ではない、神の授かりものである、これを人爲を以て「私」のはからひをもつて調節すると云ふことは、神意に反する大罪であると云ふ風に稱して産兒調節問題には反對意見を發表するやうであります。これが「生長の家」の教へによりますと、どうなりませうか。「生命の實相」全集第一卷の實相篇の第十章神人論には「神の子である吾等が靈性でありながら靈性でないと思ふ、この思ひが影の世界に反映して生じたのが

人間の胎生であつて、人間が物質的胎内から生れると云ふ事は一個の自己欺瞞である」と云ふ風に書いてあります。これを私の考へで解釋しますと、我々の後に來る「迷へる靈」を一つでも影の世界に來ないですむやうにしてあげたいと云ふやうな愛の意味から、「生長の家」の教へは、普通の經濟的理由とは全然別箇の意味から、産兒制限と云ふことは一つの美德として許しても好いと云ふことになりはしないでせうか。

谷ロ——人間は「神の子」である、靈性であり、神性である、これが吾々人間の實相であるから、人間が物質的胎内から生れると云ふことは一個の假相であり、虚妄であり、夢幻を見てゐるのです。先日「涅槃經」を讀んでみますと、「解脱を名付けて不生と云ふ。譬へば醍醐の其性清淨なるが如し。如來も亦しかなり。父母の和合によりて生ずるに非ず其性清淨なり、父母あるを示現する所以は諸々の衆生を化度せんと欲するが爲の故なり。」と書いてありました。その夢を見なくする、迷妄にとらはれなくする。心が悟りを開いて、その人が自然に假相の世界へあらはれて來なくなるは結構ですが、悟りを開かないまゝで、たゞ影の映つて來る道をふさいでおくのでは、その迷ひの靈が悟りを聞く機會が却つて得られないのです。迷へる靈は、影の世界へ影を映じながら、それによつて淨められて行くのです。吾々の迷ひの集積、業の集積は、

蓄音器のレコードに印象された聲のやうなもので、そのレコードを蓄音器にかけて廻すと、本物の聲ではない複製の聲が出る。複製の聲は反影の聲、影の世界である。しかし、度々、そのレコードをかけて廻してをれば、そのレコードは次第に擦れ禿びて聲が出なくなる。つまり一旦蓄音盤に吹き込まれてある聲の集積が消滅して聲が出なくなつたのです。これと同じやうに、吾々は現世と云ふ蓄音器に出て来て、色々の複製の聲を出す（つまり假相の世界で色々の修行をする）その間に宇宙と云ふ蓄音盤に吹き込まれてゐた吾々の迷ひの「集積」、業の「集積」は次第に擦れ禿びて来て、本當に生命の淨化が出来るのです。吾々が現世に出て来ないやうにその妨げをすることは此の生命の淨化の妨げをすることになるのです。だから「生長の家」では人工的なペースコントロールと云ふやうなものには賛成しないので有ります。

○黒住教祖が「活物をとらへよ」と云つたのは、「生命の實相」を悟れと云つたのである。生命の實相は「光明無限の生命」であるから「陽氣になれ」と云ふ宗忠の教へは生命の實相を捉へたものゝ必然の教へである。自己の生命の實相を知つたならば人間必ず陽氣にならずにはゐない。天理教祖も「世界には此の眞實を知らんから皆どこまでも陰氣ばかりで」と八十二歳十四號二六の筆先で嘆いてゐる。此の眞實とは生命の實相のことである。

第十章 死線を超えた實話

内容——十一月廿日の座談中より婦人の社會進出と家庭生活——家庭生活を殺すのでなく家庭生活が社會に伸びて手をつなぐ生活——普通の生活に神の子の生活がある——感謝の心と苦勞の味——食べないで生きられる人——肺臓がなくとも生きられる人——一回の話を胃病がよくなり三分間の神想觀で心臓が治つた話等を纂む。

談話者——河野久子氏(某私塾主)、新野かの子氏(藥劑師)、安藤しづ氏(將校未亡人)、中畑忠二氏、永田恭助氏、谷口雅春氏、その他。

河野——上村先生は今日の例會を大變待ち兼ねてゐられましたのでございますが、今電話で斷りがありましてお差支へがあるとのことでございました。あの方は先達てから、良人様との間に問題がありまして離縁話まで持ち上つたのでございます。その問題については是非先生に御指示を頂きたいと被仰つてもゐましたのですが、お忙がしい先生の御時間の御邪魔をしてはならないと御遠慮なさいまして、たうとう御自分で御解決になりました。上村先生は夫人として家庭ばかりに生活を閉鎖させてゐるのでは、どうしても自分の心が満足出来ない。人間として生き甲斐ある生活をする爲には他を愛しなければならぬと云ふ譯で、後藤靜香さんの希望社の

幹部として奔走せられてゐるのですが、良人様の御言ひ分では、婦人が家庭の世話をしないで社会的に奔走するのは間違つてゐる。自分は妻に世話女房となつてくれることを要求すると被仰るのでございます。元來あの方の御結婚なされた動機が今の良人様が先妻にお別れになつて非常に苦しみになつてゐられた。それを上村先生が御氣の毒にお思ひになつて、一人一人を救ふと思つて御結婚になり御夫妻になられたのださうでございます。

谷口——此の「救ふ々々」と云ひますけれども、「救つてやる」と云ふ心では本當は人を救ふことは出来ないのです。「救つてやる」と云ふ心の中には、自分は彼より偉いところにある、高いところにあると云ふ慢心がある。そして相手に對しては「お前は私に救つて貰はなければ生きられない憐れな奴だ」と云ふ輕蔑がある。此の自己慢心と相手輕蔑とがある以上は本當は相手を救ふことが出来ないのです。本當は相手を救ふと云ふことは、相手を輕蔑して何かを與へると云ふことであつてはならないのです。相手の神性を見る、相手を尊敬して相手の内に隠れてゐる神性を拜み出し、本當に強い立派な相手を内から目覺めさせてあげるのが本當に救ふのです。先日、岩手支部の佐藤勝身さんから頂いた御手紙によりますと、先達つ十月の廿九日に東京の佐藤順子さんの所で、東京支部の春木さん、熊本支部の澤田さん、上海支部の鈴木さんを始め

として十八名、生長の家の家族がお集りになつた。その席上で上海の鈴木さんが「自分は快き普通の人間でありたいと思ふ」と云ふことを云はれた。鈴木さんのその一言に岩手の佐藤勝身さんは自分の目を蔽うてゐた鱗が一枚落ちた、非常に感心したと云ふお手紙を寄越された。此の「快き普通の人間でありたい」と云ふお言葉に何故佐藤さんが感心されたかと云ふと、普通の人間以外の生活をしてゐなければ、人間に價値がないやうに思ふのは、人間の神性の自覺が足りないからなのです。自分と云ふものは、どうしなくとも、人と變つた異常なことや、自立つことをしなくとも、其儘で神の子であるから尊い——此の「其儘で尊い」と云ふ自覺がないから其儘では落付けないのです。其儘では落付けないのではまだ「自分が其儘で神の子である、どう云ふ外面的な小細工をしないででも其儘で尊い」と云ふ自覺が足りないのです。落付けないから何とかせねばならないと思つてあせる。目の前にある自分の家族を愛することをしないで、何とかなみ以上の愛をあらはさなければ價値がないやうに思ふ。そして近くにある人々を皆な輕蔑して、遠くにある人々に何か義捐金を送つたり、震災見舞を送つたりすることに大きな自己満足を味ふ。そしてそれが出来なかつたら、自分の價値が減つたやうに思ふ。併し、人間は何が出来なくとも自分の價値は不減不耗の神性である事實が第一なのです。それがわかれば

何もしなくとも好い、人を救はなくとも好いと云ふのではないのです。それが判らなければ第一自分が救はれてゐないので。「生長の家」の「智慧の言葉」に「自分に深切であれ」と云ふ言葉がある。自分が救はれなければ、他を救ふことが判らないのです。救はれたと云ふ状態はどんな状態だと云ふことがわからなければ、本當に人を救はれた状態に導くことが出来ないのです。盲目の手引では救ひに導いてゐるつもりで、却つて河の中へ引摺り落すかも知れないのです。人を救ふ事を、金を義捐したり、救恤品を集めて送ることやら、結核療養所と云ふ建

物設備をつくることのやうに思つてゐられる人もありますが、それも一つの救ひ方で時には尊いのでありますが、本物の救ひではないのです。物品や金を貰つて人の愛に感じて救はれる人もありますが、物品や金を貰つたために懶け心や依頼心を増長させて却て墮落する人もある。結核療養所と云ふ龐大な建築物をたて、それに不快な恐怖すべき名稱をつけたために、病氣の心的觀念を周圍に撒布して一方には結核を治さうと努力しながら一方ではその治す力の何十倍も病人を殖やしてゐるとしたら、救つてゐるつもりで一體何をしてゐるのか判らないのです。物に依つて人を救はうとする企ては必ず一利一害であつて、利益の方を見る人はその利益を誇張して大變世の中を救つてゐるやうに考へますけれども、物によつて救ふその救ひは永久性の

救ひになつてゐない、物は永遠性のものでないから、物だけで救はれた救ひならば、その救ひは必ず壊れる時が来るのです。物がなくとも救はれる救ひ、何物がなくとも自分が神である——その儘で救はれてゐると云ふ自覺上の救ひに預からなければ本當に救はれたと云へないのです。

それでは、人間にはさう云ふ自覺上の救ひだけを與へたら好いので、食べる物がなくて困つてゐる人を放つておいても好いかと云ふやうな、質問が出るかも知れませぬが、何物がなくとも自分が神である、その儘で救はれてゐると云ふことが解ると、「何物」にも執着しない自由自在な境地になれますから、他へ對して物の施しでも却つて吝しみなく出来るやうになる、自由に水が高きより低きに流れる如く、自然に與へるべき處へ與へることが出来るやうになるので、生命は愛であり活かす力ですから、自然に愛の働き、全體を生かす働きが出来るので、物に縛られないで物を生み出して救ふことが出来るやうになるのです。物を與へるのでも、或る教化團體がやつてゐるやうな結核療養所のやうなものを建て、却つて病的精神を撒布して人に恐怖心を唆ると云ふやうなことをしないで本當に救ふ機關を作るやうになれるのです。物がなければ、物がなければなどと思つてゐる心を捨てると却つて物が豊富に出来る。物がく

と思つてゐるものだから國際的にも個人的にも鎖國主義になり、有無相通する働きが出来ないで現在のやうに物が有り餘りながら人間は貧乏してゐるのです。此の「物々」と云ふ心を捨て、「生命々々」と思ふやうになり、神らしく生きること、神らしく働くこと、自己に宿つてゐる生命、他に宿つてゐる生命を生かすやうに生かすやうにと云ふ心になれば、却つて物が生きてくるのです。物を忘れたとき物が生きて来る、机でも「机々」と思つて机を見詰めてゐる間は机の働きは出来ないで、机を忘れてその上で本を讀んだり字を書いたりしてゐると却つて机の働きが出来てゐると同じことです。所謂利害の經濟を忘れたとき本當に經濟が立つやうになつてくる。生かす働きを忘れた、愛の働きを忘れた無鐵砲な不經濟や經濟無視は無論可けません、生命の自然の流露——愛と働き——を妨げないで經濟とか利益とか云ふことを超越してゐると却つて物そのものも豊富に生きて來るのです。肉體でも、肉體其ものを忘れたときに却つて健康にもなり精力も増進して來るもので、物がなくとも救はれる救ひと云ふものがハツキリ判つて來たら執着なしに捉はれない生産分配が出来て來ますから、却つて物の救済も完成するのです。

人には色々の立場もあり、細かい事情、その事情の色合ひと云ふやうなものも伺つて見ません

と、上村さん個人の立場を批評することは出来ないのではありませんが、概括して云へば多勢を救はなければ生き甲斐が感じられないとか、社会的に活動しなければ満足出来ないとか云ふのも捉はれた考へだと思はれるのです。無論多勢を救ひ、社会的に救済の手をのべるのは尊いことでありますが、多勢を救ふのも一人を救ふのも尊い仕事である。それも「自分が相手を救ふ」と云ふやうに何事にも「自分が々々」と云ふやうにその「自分」と云ふものに引つかると、先刻申しましたやうに相手を輕蔑し引落すことになるので、そんなに恩に着せるのなら救つて貰はなくとも好いと云ふことにもなるのです。自分がと思ふその自分が相手を救ふのではない、神の大きな救ひの手が自分と云ふものに這入つて來てその役割をつとめさせて頂くのである、有難いことであると云ふやうにならなければ、相手を濟ふどころか自分も救はれてゐないで、相手の態度がよくないとか、こちらがこんなにまでしてゐるのに相手がさう思つてくれないとか思つて腹が立つて、自分の心が亂れて、自分自身が却つて救はれなくなるのです。だから「自分が相手を救ふ。」と云ふその「自分」が大きな救ひの手の中へ溶け込んで無くならなければ人を救ひながらも自分が救はれなくて煩悶しなければならなくなるのです。だから無我の愛でなければ本當の救ひは來ない。執着の愛では本當の救ひではない、一人に執着するのだけが「執

着の愛」ではなく、多勢に執着し社會に執着するの。「執着の愛」でありますから、無我になつて、大きな神の救ひの中に溶け込んで少しの無理もなしに動き出す、そこで自分も救はれることになり、同時に自分が多勢を救ひ得ることになります。自分が多勢をすくふと云ふ「力み」があるから、色々煩悶が起るのですが、神が救ふのだと云ふことが判ると、神の力が自分を推し流して社會へ出して呉れるときには社會へ出て社會を救ふ。何かの聖旨で社會へ自分が出られないときには神は自分の手だけを使つてゐられるのではない。神のみ手は幾らでも多數あるのですから、そのみ手が必ず社會を救つてゐると云ふ安心があれば、自分は事情によつて社會へ進出しないでも家庭のうちで家庭を光明化することも喜びとなり感謝となつて来る筈です。多數の救済も結構でありますが一人を救ふことも大きな仕事である、佛典にも聖書にも一人の放蕩息子が救はれることは既に救はれてゐる多數の孝行息子よりも神の喜びであるを書いてあります。一つの家庭が光明化され、そこに眞に光明化された家庭の見本が出来ることは夫婦喧嘩をしながら社會へ社會へ進出するよりも一層大なる仕事である場合があるものです。とに角、社會へ進出することは結構ですが、そのためには脚下をしつかり踏みしめて家庭を生かしつゝ社會をも生かして行くやうにしなければならぬと思ひます。先日、

東京の「友の會」のリーダーの一人が此處へ見えられ色々話を承つたことでありますが、「友の會」の羽仁もと子さんは在來の日本女性性が家庭の中にばかり生活を踞踏させて惰眠を貪つてゐると云ふ舊慣に對して革命の叫びを擧げられた。色々日本の家庭婦人には無駄な時間の浪費がある、講談を讀んだり小説をよむほかは何一つしないでポカンと暮す有閑婦人もある。さう云ふ無駄な時間の浪費を有用に合理化して、自己修養と社會奉仕に轉換して行きたいと云ふ運動のやうであります、その主張には「生長の家」も至極賛成であります。が、世の中にはギリギリ迄家庭内の仕事に追ひつめられて無駄な時間が全然ない生活もあります。どんなに家庭生活を合理化しても社會へ進出する餘裕のない生活者もあります。そこに奥むめをさんなどが評して「友の會」の仕事の有閑階級の仕事で一般大衆の救済とならないと云はれるのださうですが、兎も角さう云ふ全然無閑階級の家庭生活に追はれる婦人が社會事業だ社會事業だと云つて社會へ進出するために家庭生活が餘りにお留守になると云ふやうな場合に、その良人たる人が「婦人よ先づ家庭に歸れ」と叫ぶのも無理はないと思ひます。私の知つてゐる或るクリスチヤンの婦人は毎日教會や、婦人會や、慈善會などを追ひまはしてゐて子供の世話など少しもされない。子供が學校から歸つて來ても、家には錠が掛つてゐて這入る事が出来ないので何時間

でも門に佇んでゐると云ふやうな事があるのです。これなどは極端な例ですが、社會事業でないと生き甲斐が感じられないとか、家庭の縁の下の方力持ちではつまらない、何か目立つ花々しい生活でなければ生甲斐が感じられないと云ふのでは、外面の華々しさを追つてゐる生活であつて本當の自覺——人間はそのまゝで神の子であるから尊いと云ふ自覺——を得て自然に動き出してゐる生活だとは云はれないと思ひます。夜中においてひそかに萬づの植物を露ほし目立つべき晝の時が來たら自然に消えてしまふやうな生活さへも、華々しい社會事業に劣らない貴い生活だと云ふことを悟ることもまた必要です。要は、人間は内にゐても外にゐても深く、切に生き抜くことが必要です。好い加減にゴマカス生活が一番いけないのです。内で情けてゐる生活もまた悪いし、外の仕事の方が派手で面白くて、安價に愛他的精神を満足させるからとて、内の仕事をなほざりにして浮き足たつて外へ出ると云ふやうな生活もまた本物ではないでせう。

人間は外へ進出して生活しても、内に沈潜して生活しても、ともかくも浮き足立たずに、一歩々々足元を踏みしめて深く切に生きて行くのでなければならぬのです。それが「生長の家」の生き方であつて「生長の家」の生活は、形に捉はれない、萬人一様な型をきめると云ふこと

がない自由自在な生活なのです。一つの型をきめておいて、その型に自身の生活を箝め込まなければ苦痛を感じると云ふやうな不自由な生活ではないのです。婦人は家庭のみを守らなければならぬと云ふ舊い型も間違ひでありますし、家庭以外に是非とも社會へ進出しなければ生き甲斐がないと云ふのも間違ひであります。生命は生かさねばならない、今迄の家庭婦人と云ふ舊い型は破らねばならないし、所謂社會婦人と云ふ新しい型の中へさへも箝まつて往つてはならないのです。型へはまつた時、生命は必ず窒息しかけるから苦しむのです。生命は自由創造のものであるから、その人の持ち場に應じて深く切に生きて行けば好いのです。その自由創造の生活のあらはれが、或る時は行き届いた家庭婦人になつてもそれはもう型に箝つた家庭婦人ではない。或る時は社會的に進出してもそれはもう所謂社會婦人ではない。家庭婦人でも社會婦人でもどちらでもない、たゞ普通の人間が深く切に生き、家庭を切實に生き、社會を切實に生きてゐるのです。そして此の普通の人間がそのまゝで尊い生活を實現するのが「生長の家」の生活なのです。此の「生長の家」の生活になるとき、もう決して社會的進出は家庭生活とは矛盾しないものとなるのです。

今迄の家庭生活と云ふものは自己の二つの家庭と云ふものにあまりに引つかゝりすぎてゐまし

た。そのために社會へ進出するのには家庭から離れねばならなかつた。家庭を守るには社會から離れねばなりません。併し新時代の家庭は社會的生活の中へ一つの細胞として溶け込んで、一つの家庭が善くなることは同時に社會全體が善くなることであり、社會的事業を進めることが家庭を犠牲にせず、却つて家庭の重荷を軽くするやうに進められねばならないと思ひます。先達で「友の會」の東京落合組のリーダーをしてゐられた松本恒子さんと被仰る方が來られて話して下さいましたがその方は「友の會」の事業として托兒所兼幼稚園のやうなものを計劃してゐられる。そして幼兒から小學校へ行くまでの子供をあづかつて「友の會」の精神に「生長の家」の精神を採入れて子供たちを保育して行きたい、既に仕事を始めるなら敷地も建物も無料で譲つて下さらうと云ふ人もあると云ふことを話されました。何でもその方の計畫によりますと今迄の家庭では一人の子供や二人の子供に一人の母親が付き切りで終日の時間を奪はれる、家事を充分するにも、自分が修養するにも、良人の内助をするにも、少數の子供があるために時間が無い、好い加減に粗漏にして置かなければならない。ところが、さう云ふ子供を此の幼稚園へ集めて、數人の母親が順番を定めて保姆の役目をして、一つの尊き精神を中心として子供を幼い芽生えの期間から教育し保護し指導して行くことにすると、當番以外の

奥さん達は毎日少數の幼児の世話に奪はれてゐた大部分の時間が助かる。その時間に充分丁寧に家事を果すことが出来るし、自分の修養勉強も出来、育児法などの研究も出来、良人の内助も出来ること云ふことになる。今迄盲目的に子供に没頭してゐて子供の教育でも時間こそ澤山かけてはゐるが出鱈目なものであつたのが、時間を勞すること少くして子供が一層合理的に育てられるやうになる。子供は幼いときから團體的に育てられるために自然に團體的訓練が出来て、協同の精神、全體の一員たる精神が養はれ、個人的な利己的な精神が少くなり、全體を生かす精神が養成せられることになる。かう云ふ計畫を話して下さいましたが、かう云ふ社會事業は御婦人が家庭を抛擲して社會々々と外部へ進出する運動ではなくて、今迄孤立してゐた家庭が擴がつて社會的に連絡がとれ、婦人が社會的に進出したゞめ家庭の生活の中からその樂しさを奪つてしまふと云ふやうにはならず、却つて家庭生活の時間と負擔とを少くして本當に家庭として樂しみ生きる時間を増してくれることになる。かうなると、良人がたの方でも婦人の社會的進出を無闇に排斥なさらないと思ひますね。家庭婦人團體の公共的事業としては社會的の職業へ進出して社會の人の職業を奪ふと云ふやうなものよりも社會的につながることによつて、家庭の仕事が量の上に軽減され質の上に向上し、更に家庭の仕事が量の上に軽減された結

果、社會の方へも手助けをすることが自然出来ること云ふやうになるのが理想的です。婦人が時
間を最も無駄につぶすのは子供をつれて醫者通ひをすることです。から、「生長の家」の眞理を知
つて家族ぢゆう醫者にかゝる必要をなくすることが家庭婦人の時間を合理化する最も重要な要
素だと思ひます。

河野——誠に結構なお話を伺はして頂きました。

新野——これは別の話でございますが、私の知人が自分の後嗣にすると云つて女學校出の秀才を
お貰ひになり女子醫專へ入れてをられました。が、その方が非常に好い方でありまして純な氣持
から實の父母に對するやうに暢氣に自由に窮屈でなしに當り前に振舞つてをられました。め
に、その義父母の方では、彼女は恩を恩とも思つてゐない、感謝の心がなから、折角世話を
してやつても將來どう云ふ事になるか頼りないことであると、始終口癖に云つてをられました
が、私はさう云ふことを始終云つてゐらつしやると、言葉の力でそれが實現するから、そんな
ことを成るべく言はないやうになさいと其の義父母の方に常々云ふのでありましたが、なかな
かお聞き入れになりません。たうとうだん／＼親子のなかが不仲になりその方は御離縁と云ふ
ことになりました。その娘さんは純で、媚びると云ふことなく實の親に對するやうに自由に振

舞つてをられたゝめに、それが理由でさう云ふ御離縁になると云ふのは誰が間違ひなのでございませうか。

谷口——それは貴女の被仰るやうに言葉の力が實現したのであります、さう云ふ言葉が出るやうになつたのは、他の世話をして、自分が世話をしたのであると云ふやうに兎角自分が自分ごと云ふ氣持があり、其自分に「恩に着よ」と云ふやうに恩に着せがましく常に思つてゐるか、娘さんの方でも何となしに壓迫を感じるので、最初は何の氣なく自由に振舞うてゐたのも次第々々に離れた氣持になり、つひに互ひに不仲になつたのではありますまいか。だから恩を施しながらでも報いを求める氣持になると往々却つて恩を仇に返される。報いを求めないでゐると却つて人はその恩をいつまでも忘れない。また若しその人が恩を忘れてゐても、それはその一人の人に恩を施したのではなく、全體の一員に對して盡したのでありますから、必要があれば全體中の他のひとから廻り廻つて恩返しがあるものです。福田、即ち天の倉に貯へておけば、供給は必要に應じて天の倉から來るものなのです。自分が彼に盡したと云ふよりも全體の一員が全體に對して盡したと云ふ氣持を失はないことが肝腎であつて、自分と彼とをあまりハツキリさせすぎ、全體と云ふ觀念を失つて了ふと人間はいつでも不幸になりがちです。

新野——その義父母がたはその娘さんを貰つて學問させるのは老後に力になつて欲しいからだの
に、こんな薄情な義理知らずの娘では教育をつけて貰つたあとで逃げて了ふかも知れないなど
と被仰るのでございますの。

谷口——さう云ふ風に、娘に學資を入れるのを貯蓄銀行へでも預金して置くやうなつもりでしな
がら、恩を知れとか義務を知れとか云はれるのでは耐つたものぢやないじやありませんか。貯
蓄銀行へ預けて置いたら一定の利子しかつかないのだけれども人間に投資して置けば義理とか
恩とか無形無限の利子がついて來るから一層利益だと云ふやうな功利的な考へで養女を育てる
と云ふやうになると、養女の方でも、其の功利的な考へが感應して却つて恩に着なくなるもの
です。これが心の法則です。無論恩を受けて恩に着ないのは善くないのでありますが、恩に感
ずるのは、恩を受けた人が自發的に恩を感じるのであつてこそ尊いのです。最初から功利的な
目的で恩を着せて、恩に着よと云ふのでは恩を與へる事が却つて精神的に相手を縛ることにな
るのです。

新野——先日もその義父母が風邪のために臥床されてゐました。それなのにその娘さんが眞實の
子のやうにしんみりと看病しようとしないと云つて義父母は大變不足を云つていらつしやいま

した。

谷口——その娘さんの方も、あまり世間の苦勞と云ふものを知られないために、恩を思だと感じられないのでありませう。兎も角、その方がその娘さんを後嗣と云ふことにして、今迄人生で勞苦して得たすべての財産を譲らうとせられる、その譲られる財物を得るために本来その義父母たちがどれだけ人生の戦場で勞苦されたか、その勞苦の結果得られた貴いものを譲らうとされるのであるから有難いことであると感じれば感謝の念が自然に湧いて來るべき筈でありますのに、さう云ふ感謝の念が湧いて來ないのは、財物を得るにはどれだけ人生の戦場で苦しまなければならぬか、その苦勞の體驗がないからです。つまり苦勞が足りない、苦勞が足りないから、もつと苦勞するやうに神さまが、元の貧しい家庭にお戻しになり人生に於て、財物を得るにはどれだけの苦勞が要るか。その苦勞しなければ得られない財物を譲るにはどれだけの思切りと愛とが要るかと云ふことを體驗させられるのでありませう。つまり今度のやうな結果になるのはその義父母になる方の心の反映と、娘さん自身の心の反映との最も自然の結果でありますなあ。

新野——さう被仰いますとその娘さんは本當に苦勞が足りないのでございます。それに心がお強

いのでありますか、さう云ふやうな結果になつても平然としてゐられるやうな處があるのです。私ならば養女に往つて半年もたゝないうちに「誠がない」などと云ふことを理由にして戻されたりすると世間に顔向けの出来ない恥かしい氣持がすると思ふのでございませうけれども。

谷口——その娘さんは本能的に郷里の實家へ歸りたい希望があるのでちやありませんか。戻されて歸つたところが別に生家の方でいぢめられると云ふことはないのでせう。

新野——その生みの母親と云ふのが、公然「母より」と書いて常に長々しい手紙をその娘さんに寄越すんださうです。これなども義父母の氣に入らない所なんです。

谷口——一旦養女にやつたならばその母親として、さう云ふことは常識から見ても速慮すべきものです。さう云ふ常識から見ても當然出来がたきことが平氣で出来るのはその母親がその娘さんを取戻したい欲望があるのです。表面の心では餘所へやつて勉強させたいと思つてゐる。しかし奥底の心では餘所の娘にはしてしまひたくない。潜在意識では寧ろその約束が破談になつて娘さんを自分のところへ取戻したいのです。潜在意識は往々その人の表面の心の希望を裏切つて、自分の欲するところをその人に強制することがあるものです。常識では出来難いやうな不合理なことを、その不合理さに氣付かないで平然やれるやうな場合、その人の潜在意識を知らべて

見ると、潜在意識の奥底に、表面の心に反逆するものがあるのです。

安藤——私はこちらへ修行に來させて頂く途中、汽車を途中下車致しまして××の養子と嫁とに

會つて來たのでござんすが、おかげ様で嫁の心が大變折れて優しくなつて來てゐました。郷里

から女中をつけて勤務地へ出してあつたのでございすが、その女中が心のきつい女で何の氣

なしに云ふ言葉でもとても鋭い語調を用ふので、使ふ方の嫁自身が壓倒されて大變苦勞したさ

うでござんす。さう云ふ女中にてくはして見て嫁は始めて自分自身と云ふものをその女中に映

し出して見て、自分自身の眞相が判つたと申します。今迄、自分が正しい正しいとばかり思つ

てゐたけれども、自分が正しいと思ふばかりに相手が悪い悪いと思はれてひとこと物を言つて

も相手を刺すやうな語調になる、そして自分ではどうしてもそれが悪いと思へなかつたのでご

ざんす。自分が少しも悪くないのに他が自分に悪く當るとばかり思つてゐたのでござんすが、

その女中が丁度それと同じやうな性格であつて、自分の缺點を實演して見せてくれたゝめに、

はじめて自分が悪かつたのだとわかりました。かう云つて大變心が折れて來たのでございす。

谷口——それは大變結構なことですなあ。人間は心が廣くなり一切を包容するやうになれないで、

唯正しいばかりでは自分も苦しく他をも苦しめることになるのです。何でも、物事に對して一

つ。の。観。方。よ。り。な。い。と。思。ふ。自。分。の。観。察。の。仕。方。よ。り。他。に。正。し。い。観。方。は。な。い。と。思。ふ。さ。う。云。ふ。狭。い。心。を。捨。て。た。と。き。始。め。て。人。間。は。自。由。な。廣。々。と。し。た。立。場。に。出。ら。れ。る。の。で。す。自。分。と。云。ふ。眼。鏡。ば。か。り。を。通。さ。な。い。で。他。の。眼。鏡。も。通。し。て。見。る。他。の。世。界。も。理。解。で。き。自。分。の。世。界。も。理。解。で。き。皆。な。そ。れ。で。善。い。許。さ。れ。て。ゐ。る。と。解。る。キ。リ。ス。ト。が。貢。取。り。や。酒。飲。み。と。一。緒。に。飲。み。食。ひ。さ。れ。た。の。も。さ。う。云。ふ。廣。い。御。心。か。ら。で。あ。つ。た。に。違。ひ。あ。り。ま。せ。ん。

吾々が自分自身の観方よりほかにどんな正しい観方もな、と観ずるとき、世界のすべてが自分に敵對してゐるやうで、此の世界が狭くなり、生きてゐる場所がないやうな氣がし、つひには死にたくなるやうなことになるのは自然です。よく世間で自殺するやうな人たちは斯う云ふ人たちに多いのです。色々の観方があると氣がつくとき、何事もまた許さるべきことであり、調和したことであり感謝せずにもられないことになるのです。自分では自覺しないであつて人を刺すやうな語調をする人は常に此の包容性の足りない人でありまして、包容性が足りないために自然自分が刺すやうな語調になり、刺すやうな語調で言葉をかけられた相手は自然語調強く答へるために、相手は自分を憎んでゐるのであるなどと思つて夫婦仲が悪くなることのあるものです。

安藤——私のところの嫁も一度結婚前に自殺しかけたことがあるのです。眠られないと申しまして、醫者から睡眠劑を貰ひまして、それを貯めて置いて一度に飲んだのでございます。そして幾日も覺めないで大騒ぎをさせたことが御ざいました。

谷口——自殺すると云ふやうな人は心が狭くて主我的で自分の一つの考へに執着しすぎて、世界を自分の考へ方に強制するか、でなければ世界から自分が逃げて行かうとしますのです。自分考へばかりを通さうとして、他の考へを生かさうとしないものは却つて自分自身が生きなくなるのです。「自分」と云ふ殻から一生出ない雛子は死んで了ふほかはないのです。「自分」と云ふ殻を破つて出たときに人間も始めて生長出来るのです。人間は一度は自分の小さい世界を捨てる修行をしなければならぬのです。其方は今その修行を神さまから課せられてゐるのでせう。

安藤——此處へ來ます途中、悴に逢つて來たのですが、時間もありませんでしたし、皆の前でさう云ふ話も出来ないものですから、汽車の中へ送つて來た時、一寸其事は話したゞけでしたが、悴が申しますのに、自分の缺點は判つてゐる、それは自分の心が弱いことです。時々死にたく思ふが、それも出来ない。何とかしなければならぬけれども、もう暫く待つてくれと云つてゐたのでござんす。今の女と別れなさいと強ひましては悴の心はまだ耐へられないところが

あるらしいのでござんす。「お母さん、私のことで生長の家へ行かれるのでしたら今暫く待つてくれ」と申しました。「いや、お前の事ばかりではない今度は私の悟りのために行くのだから」と云つて別れたのでござんしたが、皆な可哀想な人たちばかりでござんす。

谷口——お嫁さんの心が段々變つて來られた、それが愈々變つて正しい正しいとばかり思ひつめてゐた自分の正體がわかつて、悪い悪いと思つてゐた周圍は、自分の「周圍を刺す心」の反映であつた。良人の行ひも自分の心の影であつた。悪い悪いと思つてゐたのは周圍ではなく、自分であつたのだと判つて、人を責めると云ふやうな心が全然なくなり、自殺するなど、云ふ卑怯なことが出来るものでない、自分が作つた罪はどれだけでも自分が生きてゐて忍びつぐなはうと云ふ氣になつたとき、その良人さんは必ずお嫁さんの所へお歸りになりませう。自殺して苦しみをのがれようとか、自殺して目にも見せてやらうとか云ふ心はまだ本當に懺悔のない心です。人を責める心、人を刺す心は人を逐ひ出す心です。さう云ふ心のある人の側にゐるのは常に責められてゐるやうで苦しいものですから、良人でも誰でも離れて行きますけれども、心が人を刺さないで何となく引つける心になるとその心が磁石となつて、人は必ず引よせられて來るものです。また假令其の良人が自分の許へ歸つて來ませんでも、もう人を責める

心がなくなつて、良人がさう云ふやうに自分を離れたのは自分が悪いのだ、當然のことだと思へるやうになつたならば、却つて心の肩の荷がおりてもうそのお嫁さんの心は苦しくなくなるのです。安藤さん、貴方の病氣も心の苦しみ、心の滞りから起つたのでありますが、それを皆さまの御参考に話してあげて下さい。

安藤——私の此の病氣の始まりは何から話したら好いでせうか。良人が軍人でございましたが精神病になりました。九年間患ひまして到頭なくなりました。發作のたび毎に實に心痛いたしました。胸の中に塊が出来る思ひがいたしました。時には自分も一緒に氣狂ひになつて了つた方が好いと思ふことがあつた位でございました。その頃私は東京にゐまして池袋の至誠殿へ出入りしてゐました。至誠殿の教祖と云ふのは女の方で信者から「お母さん」と呼ばれてゐりました方でしたが、平常はポカンとした常識のない、何を話されても返事の出来ない人でしたが、神様の話になると滔々として別人のやうに雄辯にお話しなさいました。毎日、至誠殿へ通つてゐましたが、しまひに飽きて、良人の亡くなる頃には滅多に行かないやうになつてゐました。良人は精神病のために生きてゐる間は實に物凄い表情をしてゐましたから、どうぞせめて死に顔だけは静かな顔になつて欲しいと一心に祈つてゐましたら、死に顔は生前の物凄い顔に引きかへ

て、實に平和な静かな救はれた顔になつてゐましたので、病氣と云ふものは生きてゐる間にだけあるもので、死んで了つたら病氣はないものだと思ひました。

谷口——その頃はまだ食事をとるのに肉體的に障りはありませんでしたか。

安藤——私はその頃は別に肉體的には故障はありませんでしたが、それから後、次第に、食事をする度に食道の奥の方でゴクリと痞へるところが出来まして、食物が其處を通るときに外から人が聞いてゐてもゴクリと音がする程になりました。一週間に一度位は全然食物が通らないこともありました。其の頃私は××市の息子の所にをりましたが、醫者に診て貰ひましても病名がハツキリ判らず、胃のアトニーだなどと申してをりましたが、次第に病氣が重くなり、食べものを吐くやうになつたのでございます。岩手に歸りまして仁科博士の盛岡病院で診察を受けましたが、病名は少しも云はれず、治るか治らぬか入院して見なければ判らぬとのことでした。が入院して讀書などをしてゐますと、氣分が轉換したせいか、一時は輕快致しましたが、また次第に悪くなりました。丁度私の入院してゐる病室は佐藤勝身さんの勤めてゐらっしゃる盛岡貯蓄銀行の建物と向ひ合せになつてゐましたが、佐藤さんとは數年間疎遠になつてゐまして、其處に佐藤さんが被居るとは少しも氣がつかかなかつたものでございます。所がその

病院勤務の御醫者さまの一人が盲腸炎になられまして、私の隣の病室へ入院なさいましたが、それが佐藤さんの御知令で、或る日佐藤さんが其の御醫者さんを鬼舞に來られて、ふと御覽になると、「安藤しづ」と私の名前が病室に書いてあるものですから、つと扉を開いて私の病室へ這入つて來られたのです。佐藤勝身さんの妹さんは當時は亡くなられておりましたが私と殊に仲の好い同窓で従つて佐藤さんとは極懇親の間柄だったのでござんす。その時私は街へ散歩に出てゐましたが、歸つて見ると佐藤さんが待つてゐらつしつて、「まあ貴女はこんな所に入院してゐられたのですか」と云ふ譯で、それ以來たび／＼私の病室へ見舞ひに來て下さいました。私が再び佐藤勝身さんと親密にして頂くことになり「生長の家」へ導かれるやうになりましたのは、佐藤さんの其の亡くなられた妹さんの靈界からの活動があるやうに思はれるのでござんす。或る日佐藤さんがいらして、「此の病室を換つて下さい。私の妹が夢のうちに毎夜のやうに現れて、安藤の今ある病室はよくないから換れと云ふ。」と被仰るのです。それで私は靈媒の小林壽子さんのところへ附添人に往つて貰ひまして、佐藤さんの妹さんの靈魂を呼び出して聞いて頂いたのでござんす。「この佛さんは妙な佛さんだなあ。なか／＼出て來ない」など云つて随分長時間出て來られなかつたさうですが、たうとう出ていらして「佐藤さんに夢を

見せたのは私です。あの病室には性質の悪い靈魂があるから室を換へなさい」と云つたさうでござんす。それで病室をかはり養生しましたが、病氣は入院當時は一時よかつただけで、その後段々悪くなつて行きました。佐藤さん御自身が「手のひら療治」をなさつて下さり、私にもそれを教へて頂きました。一度などは江口鎮白先生が「手のひら療治」の講習に盛岡に來られたのを幸ひ、わざわざ私一人のために江口先生を病院まで連れて來て下さいまして、手のひらの治療力を啓いて頂いたのでありました。身體が弱つてゐるので合掌して啓いて頂くのがなかく疲れて苦しいござんした。それからも病氣は一向はかばかしく良くなりませす、御飯を頂いて一口食べては水を飲んで流し込むのでしたが、そのたび毎に皆な吐き出してしまひまして、バケツに三杯位吐き出しまして、やつと胃袋に遣入ります分量は一日一膳位のものでござんした。十一月には、病院に入院してゐてもよくなる方法もないから退院して家へ歸つて好きなやうな生活をしたらよからうと云はれるので退院して、大更村の自宅へかへり、バケツに食べ物吐き出し吐き出しして、生きてゐると云ふことに何の喜びも希望も有てず、時々幽霊のやうに街をフラック歩いて歸つては横になつてゐましたが、その時、佐藤勝身さんがまた見舞ひに來て下さいました時、淺野和三郎先生の雑誌「心靈と人生」を偶然置き忘れて歸らうとなさい

ましたが、私が氣がついて申上げると、「これは汽車の中で皆讀んで了つたから、讀んで見なさい」と云はれました。此の淺野先生の雜誌がなかつたら、「生長の家」を私は永久に知らされなかつたでありませう。「生長の家」を知らなかつたら私は今頃生きてゐないでせうから、此の淺野先生が「生長の家」を紹介して下さつたことを今でも感謝してゐるのであります。

谷口——佐藤さんからの御手紙では、もう貴女は醫者から死の宣告を受けてゐるのだから、せめて死後の靈界生活のことに就て知らしてあげたいと云ふので、それとなく「心靈と人生」を持つてお出でになつたのださうです。

安藤——アラ左様でござんしたか。あとから私も「此の寒中は保つまい」と醫者から宣告されてゐたと云ふことをきかされましたが、其の當時はそんなことは全く知らなかつたのでござんす。で、佐藤さんが貸して下さつた「心靈と人生」を始めから終ひまで讀まして頂いて最後の頁に來ますと「生長の家」の廣告が出てゐたのでござんす。第二輯の三號四號ですか「慢性病撲滅號」と題して廣告してありましたが、急に私の心はその廣告に引きつけられて了つたのでござんす。「これでなければ救はれない」と云ふ氣が頻りに動いて來ましたので、それを早速注文致しまして送つて頂き、その二冊を幾度繰返し讀んだことでせうか。毎日々々讀んでゐました。

それを読んでゐるうちに人間は肉體ではないから食べ物を食べなくとも生きられると云ふ感じが天來の聲のやうに私の心へ這入つて來たのです。その頃私は逢ふ人毎に「私は食べ物を食べなくとも生きられる方法を知つたから死なない」と口癖のやうに話してゐました。それから一ヶ月後に××からまた悴が見舞ひに來てくれましたが、掘炬燵を隔て、向ひ合つてゐますと、不思議さうに私の顔を見詰めてゐるのでござんす。「何故そんなに私の顔を見るのだ」と云ひますと、「お母さんはよくこんなに健康になつたな、一月前と比べるとまるで雲泥の相違だ」と云ひました。さう云はれまして始めて自分にも氣付いたことでござんしたが、一ヶ月前にはバケツに二杯位吐き出し吐き出しゝてゐるうちに、時の拍子に幾粒か胃袋に入る御飯がやつと一膳位になるかならぬ位でしたが、一ヶ月間、「生長の家」慢性病撲滅號二冊を毎日繰返し讀んでゐますうちに、水では流し込むのですが、食物を吐き出さずに二膳は食べられるやうになつてゐたのです。(編者註、この「慢性病撲滅號」中の記事はすべて聖典「生命の實相第一卷」に収録されてゐます。)

永田——一日に二膳ですか、一食に二膳ですか。

安藤——一食に二膳づつ食べられるやうになつたのです。

永田——癌ではなかつたのでせう。

安藤——レントゲンで數回診て頂きましたが、私には當時は被仰いませんでした。立派な癌だつたさうです。食道と胃袋との境目に癌があつて、肋骨の下になつてゐる部分で、手術にも縫合にも大變不便な箇所だつたさうでござんす。今も私が此處に快方に赴いてゐると云ふ事をきいて醫者が不思議だ一度見せて欲しいと被仰るさうでござんす。楮てかうして一食に二膳まではたつた一ヶ月で目だつて快方に赴いたのですが、それから先きは私の信仰が進まないものですか、却々進歩しないのです。やはり水で流し込まなければ食事が通らないのです。昨年の夏には、自分の信仰はこれだけより進まないのかと悲しい暗い氣持になりましたが、又願ひますと、かう云ふ病氣があることは結構でござんして、目に見える信仰の尺度が斯うして肉體についてゐて呉れるので、自分の心持を常に反省して段々神に近づいて行くことが出来るのだと思ひますと、またこれも難有いおかげだと思つたりもして見ました。

谷口——此の方の病氣は不思議な病氣でして、さうして吐き出さずに御飯をたべられるやうになりました。一度は胃袋の入口でギツンと固へて、あとから冷水をコップで二杯も三杯も飲まなければ胃袋の方へ還入つて行かないのでした。

安藤——それで去年の冬などは寒い寒中にも冷水を一口の食事毎にグングン飲んで慄へてゐたものでござんした。

谷口——液体なら何でも這入るかと思ふとさうでないので、茶をのんでも、やはり胃袋の入口で聞へてゐて、冷水をあとかから飲まねば這入らなかつたのださうです。

安藤——それがこちらへ参りまして半月程しますと茶で樂に御飯が食べられるやうになつたのでござんす。お菓子もお茶で頂けるやうになりましたので、お客様に往つても差支へがなくなりまして。數日前神戸の親戚の方につれられて大丸の食堂で御馳走になりましたが、公開の食堂で人様の前で例のやうにギツンギツン食道で聞へて戻つて來やしないかと内心ビク／＼ものでしたが非常に樂に通りましたして大變有難く存じました。

谷口——此の安藤さんの醫學上の不治症がどうして癒つたかと申しますと、人間は食物を食べないでも生きられるものであると云ふ天來の眞理が、「生長の家」唯二冊を繰返し讀んでゐられるうちに悟られた——これが根本なのであります。「食物がなければ生きられないから、どうしても食物を通さねばならぬ」と食物に執着してゐる間は却つて食物が食道を通過しないで食べても食べてもパケツに二杯も吐き出されたのであります。「食物がなくても人間は死なゝいもの

だ」との眞理が分つて来たときに、食物が通らないと困ると云ふ恐怖心がなくなつて、却つてスラ／＼食物が食道を通るやうになつたのであります。一燈園などでは無一物中無盡藏と申しまして、「何も財産がなくとも人間は生きられるものだ」と知つたときに、却つて経済的にスラ／＼と必要なものが與へられて来る生活を實證してゐられますが、それは經濟問題であります。人間は同じ眞理が此處に生理的に實證されたのであります。人間は何がなくともそれ自身で生きられるものである。此の自覺が「生長の家」で説く「人間、神の子」の眞理であります。て此の眞理が解れば、その他のものはその自覺に伴ふ反映として自然に備はるものなのです。食物がなくとも生きられるとの自覺の反映として食べ物却つて食道を通るやうになつたのは當然であります。唯今此席をお立ちになつた若い御婦人は××農林學校の教授の奥様で榮野さんと云はれますが、今度安藤さんと一緒に「生長の家」へ修行に來られたのであります。肺病を患つて、一時身體がむくんで、足の甲までむくんでゐて、顔なども所々紫黑色の斑點が出て、醫者はもう一週間もつまいと家族の人に話したさうであります。そこへ紹介されて御越しになつたのが、佐藤勝身さんでした。銀行の行務にお忙がしいのに、毎夜、六十日間降つても照つても一日も缺かさずにお通ひになつて「生命の實相」を讀んでおきかせになつたのださ

うです。

森川——私はその時以來ずっと榮野さんに附添つてゐたのですが、榮野さんは最初の頃ずる分佐藤さんに素氣なくせられました。佐藤さんが十五日間位お通ひになつた頃「どうです、人間は神の子だと云ふことが悟られましたか」と被仰ると、「悟れません。」と云つてツンとして澄ましてゐらつしやいました。それが佐藤さんに毎日「生命の實相」を讀んで頂いてゐるうちに、嬉しくなられて笑顔を見せられるやうになられメキ／＼健康を回復されたのであります。

澤田——佐藤さんに東京の誌友會で會つた時話をきいたのはあの方の事でしたか。何でも醫者がもうあの方の肺臓は大分空洞になつてゐると云つたとかで、非常に悲觀してをられたとき、佐藤さんは突然「肺臓なんか無くつても好いぢやないか」と語調鋭く云つて了つたが、氣がついて「オヤ／＼これは大變なことを口走つてしまつた。其のあとをどう拾收したものだらう」と思つたが、その言葉が病人に大變力を添へたやうだつた、それは神さまから言はされた言葉だつたやうですと云つてをられました。

谷口——「肺臓なんか無くとも生きられる」と佐藤さんが斷乎として云はれた。それは實に尊いお言葉です。そのために肺臓が却つてよくなつて、今迄腐つてゐた肺臓が再生して來たと云ふ

のは大變面白い事實ぢやありませんか。「肺臓が無いと困る、肺病が傳染つては困る」など、生
まじつか生理學や衛生思想に捉はれてさう思つてゐると、却つていつの間にか肺臓が腐つてゐ
たのに「肺臓なんか無くとも生きられる」と心の思ひ煩ひが肺臓から全然なくなつたときに肺
臓が却つて復活してくる。食物がなくなると、肺臓がなくなると、何がなくなると人間は生きられる。
人間は食物でもなく肺臓でもなく、人間は「心」であると云ふ眞理が解つて「心」が調うて來
たら、その心の反映として食物もたべられ、肺臓も再生すると云ふ事實に立脚して始めて吾々
は肉體は心の影であると云ふことが會得されるのです。永田さん、貴方は「生長の家」へお越
しになつてから急に尿量が殖えたとか被仰つてゐましたが、どうなさいました。詳しくお話し
下さいませんか。

永田——實は實母が此の春急になくなりまして以來、私は非常に心を傷めたと見えまして、神經
衰弱のやうになりました、一寸電車に乗りましても心臓がドキ／＼する。心臓がこれで麻痺し
て死んで了ひはしないかと思ふほどなのです。ウイスキーを懷中してゐて、それを少し嘗め
ると幾分心臓の胸騒ぎがをさまるのです。心臓そのものが悪ければアルコールを飲んで却つて
をさまると云ふ筈がない、これは心臓そのものが悪いのではない。かう心で否定するのですが、

否定してもなか／＼病氣そのものはよくなるたのです。こゝから一寸神戸へ電車に乗つてすらも、もう直ぐ心臓がドキ／＼と来るのです。その頃腎臓をも傷めてゐるらしく尿量が馬鹿に減つて氣分がすぐれずにゐたのでした。先達て始めて上田源三郎君に紹介されて此處へ來ましたときには、家内の病氣の話ばかりしまして、私の病氣のことは先生に少しも話していませんでしたが、先生と對談して歸りますと、精神の感應と申しますか、その日から急に、何と形容しませうか、堤を決したとでも言ひますやうに排尿が盛んにあるのです。最初にお目にかゝつたとき「先づ現世利益を頂いてからでない」となど、申してをりましたが、正にその現世利益を頂いた譯ですなあ。それ以來、非常に身體の具合がようございまして元氣になりました。心臓の方も次第によくになりました。先日東京へ行かねばならぬ用事が出來ましたが大阪驛の待合室で汽車を待合はしてゐますと、また急に心臓がドキ／＼始まつて來たのです。これから長距離の東海道線路を汽車に揺られながら、旅をせねばならぬかと思ふと大變な氣がするのです。上心を得ず人なかをも顧ず、合掌をして神想觀を二三分間してゐますと、不思議やスーツと心臓の動悸が止まつて了りました。それ以來心臓の發作は一度も起りません。その神想觀の間はホンの三分間位でした。ほんとに助かつて有難うございました。

第十三章 「無」の經濟と「無」の醫學

前節に「何を食べなくとも人間は生きられる」と云ふことを悟つて胃痛が快方に赴いた方や、肺臓がなくとも人間は生きられる」と悟つて肺臓が甦つた人の話を掲げましたから、それに聯關して、先日「一燈園」の西田保太郎さんより生長の家發行の小冊子をあげて讀ませたい人があるからとて數部を求められた際に、いつその事一燈園の光誌に「生命無病の眞理」をかゝせに頂いたら多くの人の救ひになると思ひ書かせて頂いたものを茲に補筆して輯録することに致しました

一燈園の經濟は無一物の經濟であります。無一物から無盡藏が出て來る經濟だと云はれます。

全てを捨てたときに全てが得られると云ふ眞理を一燈園は經濟的にそれを實證してゐるのであります。「物」があつて生きられる——それでは「生命」と云ふものが、自由な獨立自存的な存在だとは云はれないのであります、覺者は別として常人は一度「物」を捨て、見る必要がある、捨て、見なければ、捨て、見ても生きられる「生命」と云ふものが果して存在するものやら、存在しないものやら確信が出來ないのであります。物を捨て、物に頼らなくなつて、天爾自然に「生命」が動き出す——さうすると「生命」と云ふものは、それ自身「動」でありますから、天爾自然になれば必ず動き出すものであります。「生命」と云ふものは本來宇宙全體が一つで、自他一體のものでありますから、天爾自然の生命の動き出し方は必ず自他一體の愛の働きとならざるを得

ないのであります。自分も他人もない、たゞ天地一體の生命で動いてゐる、さうすると無邊天地の生かす力が其の生命を生かす——その生命も、此の生命もない譯であります。『生命』は動であり、愛であり、無限無邊であり、生かす無限の力でありますから、生きるほかに道はないのであります。

此の點に於て、一燈園は生命の本當に生きる仕方——『物』に頼らないでも經濟的に生きられる生活の範例を創始したことによつて獨自の行き方をせられたのであります。私も嘗つて一燈園の門をくゞつたことがあります、深切に天香さんの教をぢかに頂いたのであります。一燈園と云ふものに幾分この頃遠々しくしてゐますが、遠々しくしてゐるうちに私は『生長の家』と云ふものを創めたのであります。此の『生長の家』と云ふのは、名前からして一燈園の『棄恩入無爲』と云ふ標語とは大分かけ離れてゐるやうにも思へ、家を棄てないで、家を生長させる働きをするのであります。どちらも生命の自由無礙なる實相を自覺するために『物質』を捨てると云ふ點に於て全く同一なのであります。

一燈園では『物』に頼らないでも生きる自己の『生命』の實相を自覺するために、すべての財を棄て、無一物に一たんなるのであります。——私も自身で托鉢をした經驗もあり、一燈園の生

活の基礎となつてゐる根本的原理と云ふものも哲學的又は宗教的に相當わかつてゐたつもりでありましたが、本當に一燈園と云ふものがハッキリ判つて來ましたのは、私が「生長の家」の生活を創開するやうになつてからであります。

一燈園では「無一物になつたら、お光が生かしてくれる」と云ふのでありますが——その意味が本當に判つたのはつい近頃でありまして、それは「人間は物質ではない」と云ふ眞理を知つてからであります。以前には無一物になりましても、一枚の衣に繩の帶をしてフランスのやうな眞似をしたこともありましたが、それでも人間自身を少くとも半面は物質的存在だと思つてゐたのであります。だから財を捨てゝも捨てゝも肉體と云ふ物質はある、本當に無一物にはなれないと云ふ氣がしてゐましたし、無一物中無盡藏と云ふことも、財をすつかり捨てたら此の肉體を養つてくれる物質はお光から必ず與へられると云ふ風に解釋してゐたので、今から考へて見れば當時は他愛もない考へ方をしてゐたのであります。その當時の私にはこれだけしか解らなかつたのであります。現に一燈園の無一物生活を當時の私と等しくさう云ふやうに考へてゐられる方があれば、當時の私程度の悟りを彷彿してをられる方と存じ、さう云ふ方のために參考に書いて見たいと思ひます。

私は最初「天地に自分の物はない、無一物だ」と云ふ意味をば、神がこの物質世界を造つたのであるから、吾々はそれをたゞ預つてゐるに過ぎないから、自分のものとしては唯の一物もないと考へてゐたのであります。さう云ふ考へ方を一層明かにするために次に圖解的に書かせて頂きますと、

自分(自分と云ふものは靈的存在だと云ふ氣もするが又何となく自分を物質だと思つてゐる)は——神から物質を供給して養はれる——神の物質的供給を受くるには一旦我の所有を捨てよ。

で、捨てるると云ふ「我の所有」も、神から供給され吾々に預けられると云ふ所有も共に物質だと云ふ感じがしてゐたのであります。それは無理もない話で、「自分」と云ふ存在を曖昧に物質的存在のやうな氣がしてゐたのでありますから、神が吾々に物質と云ふものを與へて養ひ給ふと考へられてゐたのは無理もない話であります。だから、「一旦物を捨てる」と云ふことも、神からの無盡藏の物質的供給を受けるための手段方法だ位に考へられてゐたのであります。

實際、吾々の生活の體驗によりますと、一切を捨て、奉仕してゐますと、「必要な物」はどこからともなく與へられて來るのであります。「光」誌にも度々其實例が書かれてあり、吾々にもその體驗があります。それで兎もすれば「神が吾々に物を與へて吾々を養ひ給ふのだ」と感じ、それ

を逆さかに考かんがへますと、「神かみが物ものを吾われ々に與あへなければ吾われ々は生いきられない」と云いふことになり、「吾われ々は結局物ものによつて生いかされる」たゞ一方はうは神かみから惠あままれた「物もの」によつて生いきる、他方たはうは執しやく着ちやくによつて奪うばつて來た「物もの」によつて生いきる——の相違さうゐで、それは「物もの」が何處どこから來るの「出所しゅつ所」の相違さうゐに過ぎないので、「物もの」の出所しゅつ所は如何いかにともあれ、人間にんげんは「物もの」がなければ生いきられない——かう考かんがへてゐたのであります。

ところが眞まことの無な一物いちぶつの生活せいふくと云いふものが、そんな淺あはいものでないと云いふことを私わたしが判わかつたのは、生長せいちょうの家神いえしんの「物質ぶつしつは無なの別名べつめいである」との崇嚴極かうげんきくまる神誥かみつげを受けてからであります。「物質ぶつしつは存在そんざいしない。それは無なの別名べつめいである。人間にんげんは神かみの子こであつて靈的存在れいていそんざいであるから、物質ぶつしつによつて生いきるのではない、物質ぶつしつはたゞ念ねんの影かげに過ぎない。」この神誥かみつげによりまして、無な一物生活いちぶつせいふくの眞髓しんずいがピタリと私わたしの魂たましひの奥底おくそこに體得たいとくされて來たのであります。「物質ぶつしつは無ない!」人間にんげんは物質ぶつしつに養やしなはれるのではない。「人間にんげんは靈的存在れいていそんざいであつて神かみの言葉ことばによつて養やしなはれる」此この根本的眞理こんぽんてきしんりが把握はあくされなければ、一旦物質ぶつしつを捨て、いも、神かみから來る物質ぶつしつに頼たよつてゐる事ことになり、實際じつさいの無な一物生活いちぶつせいふくではない、物質ぶつしつに頼たよる生活せいふくと云いふ事ことになり、人間生命にんげんせいめいの神かみの子こたる自由自じゆじ在ざいな眞性しんせいを自覺じかく出來きないのなあります。

一燈園の方々のうちにも既に此の悟りに到達してゐられる方も澤山あらうと存じますが、無一物と云つても、神から來る物質を豫想し、物質がなくては生きられぬ、たゞその出所が、神から來る物質であれば頼つても好いと思つてゐられる方もあるかも知れませぬ。併し、人間が物質がなくては生きられないと云ふのでは、人間自身を物質的存在だとか心の底で思つてゐる所があるので本當に云へば其人は救はれてゐないのであります。私が考へますのに一燈園で一旦無一物になれと云ふのは、物質を一旦全部捨てることによつて、もう一度物質が得られるためではなく、人間自身が物質的存在ではないことを悟る爲の機縁を提供するにあると思ふのであります。そんなことを云つても「一燈園」の同人でも「生長の家」の家族でも物質であるところの食物をたべて生きてゐると思ふ人もありませんが、佛教で云へば色即是空の眞理即ち物質と云ふものは「無」である、物質と云ふものは念の影であると云ふことが判りますと、吾々は食物を食べても物質をたべてゐるのでないことが判るのであります。「維摩經」の方便品には、「この肉體は顛倒より起る」と書いてある。物質は念の影であり、肉體も亦念の影であります。吾々の本當の自分には肉體ではないのであります。自分の肉體が物質でないと解る——これが解つたとき私は本當に無一物になれたのであります。物質と云ふもの肉體と云ふものを實在でないと如實にさとつたと

き、其人にのみもう一切の物質は無い。今迄は財は捨て、も肉體は捨てやうがない——本當にはどうしても無一物になれなかつた——それが今度は愈々本當に無一物になれるのであります。

まだ光泉林へ私は行つて見たことがあります、廣大な土地に立派な殿堂が建つてゐると聞きました。「天香は無一物と云ふけれども立派な殿堂を有つてゐる」と批評する人がある。する

と天香さんは「私は殿堂を有つてゐるのではない、私の本地は路頭にある、いつでも私は路頭に『出る』と答へられてゐる。この天香さんの路頭と云ふことを、たゞ往來の『道ばた』に立つこと

だと私は以前に思つてゐたのであります、その本當の意味はこの頃私に「物質は無い」と云ふ眞理が判つてから、ハッキリと判つたのであります。「物質を有る」と思つてゐられる人には「お

前は有つてゐるぢやないか」と云はれ、ば「有つてゐるのでない、いつでも路頭へ出て困らない」と云ふほかはない、「物質は無い」と云ふことが解つた人にとつては、光泉林の立派な殿堂も

一個の化城に過ぎない。それは幻術師が現はした蜃氣樓のやうなものである。私の眼には天香さんは「物質は無」の眞理を握つてゐられるから、天香さんはどんな立派な殿堂に坐つてゐられて

も無一物に見える。これに反して「物質は無」の眞理を握つてゐない人にとつては、一切の財を捨て、さへも尙、その人が肉體を有つてゐる以上は無一物ではなく有物質なのであります。

吾々自身が神の子なる靈的存在であつて物質ではないと解る、肉體ではないと解る——一燈園の無一物の經濟は其處から始まり、無一物の醫學も其處から始まらねばならないのであります。一燈園では「物質の無」と「人間は神の子であつて自己の内に無限を藏する」眞理を立證するために、先づ財産を捨て、無一物になつて見る。「生長の家」では「物質の無」と「人間は神の子であつて自己の内に無限を藏する」と云ふ眞理を立證するために先づ一切の藥物と一切の物質的治療法を捨て、物質に頼らないでもひとりて立つ生命が自分であること、ひとりて生きる力のあつて「生命」が自分自身であることを立證するのであります。現代の醫學は無一物の醫學ではないのであります。「何を食ひ何を飲まんと思ひ煩ふ」蛇の智慧の醫學であります。特に此の物質を食ふなければならぬ、此の物質を飲まなければならぬと云ふ。そのために其の物質即ち藥物の得られない貧しい人は一つの板夾に陥る。一燈園の同人の方のやうに、何一つ財産を有つてゐられない人、薬を買はうにも金を有つてゐられない人にとつては、「何を食ひ何を飲まんと思ひ煩ふ醫學」を信賴してゐられる限りは、經濟の點では無一物生活が可能であることを立證してゐられながらも、健康の點では無一薬で生きられる、無一薬の方が病氣が治ると云ふ自信がないために、一たび病氣にかゝられますと、神から來たところの自分の生命は其自身で無限に治る力があ

りますのに、自分自身の「薬がなければ治らない」と云ふ迷信の爲に、天賦の生命力(自然療能力)を押し隠して引込ませ、病氣の治るのを遅らせ、天命でない時期に夭折することにもなり、結局は「私がこんなに早く死ぬのはお光が、私の早く死ぬのを命じ給ふのである、何事もお光まかせだ」など、云ふ諦めに到達することになるかも知れぬ。すると周囲の人たちも、あの人の臨終は立派なものであつた。まことに従容として歸光せられたなど、賞める——實際また立派に従容として天壽によつて歸光せられる人もありませうが「お光まかせて死ぬのだ」と云はれる人中にも本當は「お光まかせ」ではなく、「藥物迷信まかせ」——「迷ひまかせ」であつて、「自分は托鉢生活 中既に長い以前から病氣であつたのに、醫者にもかゝらず、薬を服まないで無理な働きをした、その無理が悪かつたのだ、併し一燈園の同人が托鉢生活で斃れるのは軍人が戰場で斃れるのと同じことである」など、考へてゐられる人もあるかも知れぬ。かう云ふ考へ方は一寸觀ると悲壯なやうな立派なやうに見えますけれども、その實迷ひにとらはれてゐる。その迷ひは何處にあるかと云ひますと、「薬を服まないで、無理な働きをした」と云ふ點にあるのであります。人間の生命は「神性」即ち「お光」の子でありますから、薬を服まなければ病氣が治らないとか、働過ぎたので無理をした、と云ふことはないのであります。人間は神性でありますから無理をし

よ。う。に。も。仕。様。が。な。い。、ど。れ。だ。け。働。い。て。も。無。理。で。は。な。い。、「疲。れ。が。出。て。歸。園。し。て。寝。て。ゐ。ら。れ。る。」な。ど。云。ふ。一。燈。園。同。人。の。消。息。が。雜。誌。に。出。て。ゐ。る。こ。と。が。あ。り。ま。す。が、人。間。は。神。性。で。あ。る。か。ら。疲。れ。る。筈。が。な。い。——か。う。云。ひ。ま。す。と、谷。口。と。云。ふ。奴。は。隨。分。亂。暴。な。こ。と。を。云。ふ。奴。だ。と。お。思。ひ。に。な。る。か。も。知。れ。ま。せ。ぬ。が、こ。れ。は。眞。理。で。あ。つ。て、そ。の。こ。と。は「生。長。の。家」誌。を。讀。ん。で。眞。理。を。さ。と。つ。た。人。が。實。生。活。の。上。に。實。證。し。て、迷。ひ。を。去。れ。ば。病。氣。が。治。つ。た。と。て。澤。山。の。禮。狀。を。頂。い。て。ゐ。る。の。で。判。る。の。で。あ。り。ま。す。

本。當。の。一。燈。園。生。活。——無。一。物。の。生。活。に、無。一。物。の。醫。學。が。な。い。と。云。ふ。事。を。私。が。淋。し。く。思。つ。て。ゐ。た。の。で。あ。り。ま。す。が。そ。れ。を。私。は。創。始。し。て、無。一。物。の。經。濟。生。活。の。創。始。者。た。る。天。香。さ。ん。に。差。上。げ。る。事。が。出。來。る。の。を。嬉。し。く。思。ふ。の。で。あ。り。ま。す。天。香。さ。ん。は「生。活。難。は。無。い。も。の。だ」と。云。ふ。事。を。實。證。し。て。下。さ。つ。た。私。は「病。氣。は。無。い。も。の。だ」と。云。ふ。事。を。實。證。し。た。の。で。あ。り。ま。す。「病。氣。は。無。い。等。と。云。つ。て。も。現。に。自。分。は。病。氣。で。は。な。い。か」と。云。は。れ。る。人。も。あ。り。ま。せ。う。が、そ。れ。は。自。分。の。心。が。迷。う。て。病。氣。を。假。作。し。て。ゐ。る。の。で。あ。り。ま。し。て、天。香。さ。ん。が「生。活。難。は。無。い。も。の。だ」と。云。は。れ。る。と「現。に。自。分。は。生。活。難。だ」と。反。駁。す。る。の。と。同。様。で。あ。り。ま。す。生。活。難。も、病。氣。も、神。の。造。り。給。う。た。こ。の。世。界。に。は。無。い。の。で。あ。り。ま。す。只。吾。々。が。迷。う。て、そ。の。迷。ひ。の。心。が。生。活。難。や。病。氣。を。造。つ。て。ゐ。る。の。で。あ。り。ま。す。迷。ひ。を。去。れ。ば。生。活。難。も。病。氣。も。治。る。の。で。あ。り。ま。す。

物を捨て、一燈園生活に這入られましたも、自己の生命が「光」である「神」であると云ふことをお悟りになれないと蹟くのであります。物を捨てることとは自己の生活が自性「神」なるそのまゝで無盡藏である(單に經濟的ではなく、生命として生きる力としても無盡藏である)ことを悟るための方便であります。だから、方便だけで終つて了つては何にもならないのであります。「經濟的の無盡藏」は既に實證してゐられる。「生命力の無盡藏」を實證せられて愈々一燈園生活も揃ふのであります。經濟的の無盡藏だけで、生命力の無盡藏を悟ることが出来なければ、奉仕戰場で病氣にかゝつたりして斃れるのであります。

一燈園の醫學として今迄推奨されたものに平田内藏吉氏の心療法があります。平田式心療法では鉄鉞の尖端で皮膚の一部を刺戟すれば色々の病氣が治るのでありますが、何故治るのか皆さんには判つてをられませんか。病氣は本來無いからであります。その事が解れば病氣は自然に消えるのであります。兵庫縣立病院の眼科醫長をしてをられた醫學博士西村美龜太郎氏は、一切の病氣は眼病から來ると云ふ独自の見解から、心臟病でも神經痛でも胃病でも一切、眼球を温罨法で刺戟して治してゐられる。それで實際治る。何故治るか云ふと、病氣は本來無いからであります。本來無い病氣を有ると思つてゐる、その思ひ(迷ひ)が肉體に映つて病氣を顯はしてゐるのですか

ら、どこでも好い刺戟して、病氣はこれで癒ると思はせることに成功すれば、癒ると云ふ思ひが肉體にあらはれて、病氣が治るのであります。先日有名な廣島の力田鍼灸療院にゐられた方が「生長の家」へ修行に來られての話に、「力田院長の話では、本當にその神經の中樞まで觸れるほど鍼を深く入れると、氣持が悪いので患者がきらふから、好い加減に浅く鍼を入れて神經の刺戟點に觸れないやうにして置くのだけれども、俺に鍼をして貰つたら治ると思ふものだから、好い加減に浅く鍼をして置いても其れでも患者は治るのだと云つてゐました」とのことです。このやうに眼球でも何處でも刺戟して、これで治ると思はせれば治るのは、病氣は本來無いから、自分の迷ひの假作したものが病氣であるからであります。その眞理をざと、「病氣はない、人間は神の子であるからいくら働かすぎても疲れない、どんなにしても無理にはならぬ」と云ふことをわからせるだけで、病氣の治る實證を挙げ、こゝに無一物の醫學を完成することになつたのが「生長の家」なのであります。こゝに無一物でも經濟的に生きられる一燈園生活は更に無一物で醫學的、否、生理的にも生きられることの實證を得て、始めて眞の無一物中無盡藏の生活が完成されることになつたのであります。この眞理が判りますと、自己の「無明」の結果、自分を病氣にして自分の天壽を縮めながら、「み旨のまにまに歸光する」などと思ふ増上慢が無くなるの

であります。

先日(せんじつ)も身體(からだ)の達者(たつしや)な方で「生長(せいちやう)の家(いへ)」の家族(かぞゑ)がありました(が)、誌友(しいう)を家族(かぞゑ)と申(まを)してゐます(す)此(こ)のやうに本來(ほんらい)身體(からだ)の達者(たつしや)な方は「生長(せいちやう)の家(いへ)」を讀(よ)んでも身體(からだ)の上(うへ)ではおかげは得(え)られる必要(ひつたう)はないだらうと思(おも)ひまして尋(たづ)ねますと、その人(ひと)は鐵道省(てつどうせう)の工事(こうじ)の監督(かんとく)をする人(ひと)で、工事(こうじ)の都合(つがふ)上(じやう)二晝(じゅう)夜(や)位(くらい)不眠(みん)で働(はたら)かねばならぬことがある、四十八時間(じゅうはちじかん)づつ通(とほ)して働(はたら)いて歸(かへ)つてくると、疲(つか)れてしまつて、翌日(よくじつ)は頭(あたま)がボンヤリし食慾(しょくよく)もなく、一日(いちにち)不快(くわい)な氣分(きぶん)がするのでありましたが、「生長(せいちやう)の家(いへ)」所説(じよせつ)の眞理(しんり)を知る(し)に及(およ)んで、四十八時間(じゅうはちじかん)不眠(みん)後(ご)も少しも疲(つか)れてゐないで美味(おい)しく御飯(ごはん)が食(た)べられるやうになつたと云(い)つてゐられました。これは「自然(しぜん)の道理(だうり)」で疲(つか)れてゐたのでなく、「人間(にんげん)は不眠(みん)では疲(つか)れる」と云(い)ふ迷(まよ)ひで疲(つか)れてゐた證據(しじょうこ)であります。此(こ)の自(じ)分(ぶん)の迷(まよ)ひで造(つく)つた疲勞(ひろう)と云(い)ふものを重(かさ)ねて行(い)き、疲(つか)れが重(かさ)なれば疲(つか)れが出(で)て病氣(びやうき)になると云(い)ふ迷(まよ)ひを、積重(つみかさ)ねて行(い)けば、病氣(びやうき)になるのでありまして、これは迷(まよ)ひが病氣(びやうき)にしたのでありまして、お光(ひかり)が、病氣(びやうき)にしたのではないのであります。お光(ひかり)と云(い)ふものは、神(かみ)でありますから難有(ありがた)いものでありまして、決(きつ)して人間(にんげん)を病氣(びやうき)にしないのであります。

一燈園(とうえん)ではヨリ多く、經濟的方面(けいざいてきほうめん)から「迷我(めいが)」の離脱(りだつ)を行(おこな)ひ、つひに「眞我(しんが)」を發揮(はつき)しますと、

嘗て天香さんが、京大醫學部の島蘭内科でビタミンBのない食物をたべて實驗せられても脚氣になられなかつたやうな、超醫學的な、生命の方の無盡藏も實證出来るのですが、天香さんほどの境地に達してゐる人は少いためですか、ともすれば疲れるなどと思ふ。疲れが重つて病氣になると云ひますが、疲れると云ふことは人間を物質的機械と思つて、使へばスリ減ると云ふ迷信があるためであります。人間は物質でないから使つてもスリ減らないのであります。人間はともすれば肉體ばかりを見て有限のエネルギーしかないと思つてゐますが、皆眞理ではありません。「生長の家」では「物質無」の立場から「肉體は存在しない」と申します。肉體は念の影でありますから、治ると思へば治り、疲れると思へば疲れ、有限であると思へば有限になり、無限だと思へば無限のエネルギーが出るのであります。

肉體に無限のエネルギーが出ると申しますと、「何を不合理なことを云ふ」と思はれるかも知れませんが、肉體を本来無いと悟れば（即ち眞に「無一物」になれば）そして自己の眞性が、無限力なる神と同體とさすれば、肉體は念の影ですから、その念の影から無限の力が出て来るのであります。先日一人の若夫人がお産をせられた。瘦せた方で乳房が小さい。それで産湯をつかはせにくる産婆が、二週間ばかり来る間に、毎日のやうに「こんなに小さい乳房ではやがて乳が足り

なくなり「ますよ」と話してかへつた。その産婆も、産婦も、乳と云ふものは物質の乳房から出るものであつて、乳房の大きさだけしか出ぬやうに思つてゐられた。その念が肉體に影をうつして、つひにその若夫人の乳が足りなくなつたのであります。それで私に頼みに來られましたので、「人間の乳と云ふものは神から幼兒を養ふために與へられるものであつて、それは無限生命の神から來るのであつて、物質的乳房から來るのではない、神の無限生命の供給を自覺すれば、ひとりでにその自覺が肉體に念の影としてあらはれて乳は充分出る」と云ふ意味のことを論じますと、數日の中に乳が澤山出るやうになつたのであります。かう云ふやうに神の無限供給と云ふことが生理的に實證され、それがひいては經濟的にもさう成ると云ふことがさとれてくるのが「生長の家」であります。一燈園は經濟的方面から生理的方面へも生命の無盡藏が實證され、生長の家では、生理的方面から延いては經濟的にも生命の無盡藏が實證されるので、私は一燈園生活と生長の家生活とは車の兩輪のやうに思つてゐるのであります。最後に「生命は神より來る無盡藏のものである」との自覺からは、不眠の疲れや乳不足位のもは治るが、癌や結核や肉腫やその他幾多の不治症は治るまいと思はれる人があるかも知れませんが、病氣は本來ないので、眞にその眞理をさとれば治らない筈はない譯で、現に「生長の家」誌友からは眞理を讀むだけで癌や結核

生命の實相(第二卷完)

や肋膜炎やカリエスや不妊症などが續々無藥で治つたと云ふ禮狀が澤山來てゐるのであります。現在病氣である方も此の原稿を讀んで共鳴されましたならば、既に自覺症狀が輕快して來たことゝ存じます。先日私が大阪堂ビルの清交社で講演をした。その講演を雜誌「心靈と人生」が載せましたところが、或る人が讀んで見て感心して五度程繰返し讀んでその睨眠られましたところが、翌朝便所へ行つて見ると、今迄西式強健術などをやつて見たけれどもなほらなかつた脱肛痔が突然治つて了つてゐたので驚いたと云つて禮に來られた人もあります。無一物で生命はその儘治つてゐると云ふ眞理——それが實際にあらはれる、こんな有りがたい眞理はないのであります。

昭和十年二月二十日印刷納本
昭和十年二月二十五日發行

生命の實相(全集豫約)

第二卷(定價二圓送料内地十錢)

著者

東京市澁谷區礪田三丁目七十六番地

谷口雅春

發行者

東京市澁谷區礪田三丁目七十六番地

佐藤勝身

印刷人

東京市澁谷區礪田三丁目七十六番地

小川新藏

印刷所

東京市澁谷區礪田三丁目七十六番地

生長の家印刷部

版權登錄

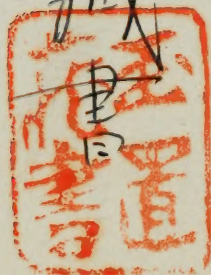
發行所

東京市澁谷區礪田三丁目七十六番地

光明思想普及會

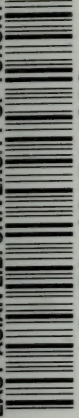
電話青山(36)四四三一
振替東京五五一九番

玉置房松藏





EAST-ASIAN LIB. UNIVERSITY OF TORONTO



3 1761 03171 4058

